

TFD, NETFD, Stochastic NETFD

中嶋 慧

平成 25 年 1 月 20 日

目次

1	はじめに	3
2	TFD	4
2.1	チルダ粒子の導入	4
2.2	熱的 Bogoliubov 変換	8
2.3	ユニタリー表現	11
2.4	時間に依存する場合	14
3	NETFD	16
3.1	NETFD の導入	16
3.2	超演算子形式	18
3.2.1	対応関係	21
3.3	ハイゼンベルグ描像	23
4	量子 Langevin 方程式の導出	24
4.1	S-L Langevin 方程式	24
4.1.1	微視的モデル	24
4.1.2	量子 Langevin 方程式への移行	26
4.1.3	$R^I(t)$ の性質	27
4.1.4	Boltzmann 方程式の導出	28
4.2	柴田・橋爪による S-H Langevin 方程式の導出	30
4.2.1	TC 型の運動方程式	30
4.2.2	TCL 型の運動方程式	37
4.2.3	ボソン系の場合	39
4.3	$\hat{\Pi}$ の導出	42
5	Stochastic NETFD	46
5.1	量子 Brown 運動	46
5.1.1	量子 Brown 運動と確率積分	46
5.1.2	伊藤積と Stratonovich 積	47
5.1.3	量子 Brown 運動への移行	48
5.1.4	熱的量子 Brown 運動	50
5.2	量子確率微分方程式	52

5.2.1	伊藤型	52
5.2.2	Stratonovich 型	55
5.3	ボソン系の確率微分方程式	57
5.3.1	注目系だけで確率が保存する場合	57
5.3.2	微視的導出とつながるマルチンゲール	59
5.3.3	係数 h の決定	60
5.3.4	一般的なマルチンゲール	62
5.3.5	量子 Langevin 方程式	62
5.3.6	量子 Brown 運動の演算子のハイゼンベルク描写	65
6	半自由粒子	70
6.1	$\hat{\Pi}$ の公理的導出	70
6.2	散逸の自発的発現	72
6.3	覚え書き	75
6.4	$su(1, 1)$ の公式	79
6.5	状態の時間発展	84
7	超演算子法による再考	88
7.1	§ 4.2 の再考	88
7.1.1	式変形の一般的手法	88
7.1.2	確率化の処方	93
7.1.3	ボソン系の場合	96
7.2	§ 4.3 の再考	97
7.3	NETFD との対応	102
7.4	§ 5.3 の再考	103
7.5	Adjoint Equation	104
7.6	Gardiner の方法	109
8	非同値真空	110
8.1	量子力学と場の量子論との相違	110
8.1.1	量子力学と場の量子論との相違	110
8.1.2	場の量子論と非同値真空	112
8.2	ダイナミカル・マップ	113
8.2.1	波束の導入と Fock 空間の連続集合	113
8.2.2	準粒子とダイナミカルマップ	115
A	不確定性関係	116
B	森公式	118
C	c 数空間へのマップ	122
C.1	コヒーレント状態	122
C.2	対応関係	123
C.3	諸公式	128

D Bogoliubov 変換	132
D.1 (8.6),(8.27) の導出	132
D.2 (2.130), (8.12) の導出	134
E Campbell-Hausdorff の公式 (C.10) の導出	136

1 はじめに

このノートでは、まず TFD(Thermo Field Dynamics) について解説し (第 2 章)、次に NETFD(Non-Equilibrium TFD) の原理について解説する (第 3 章)。さらに、量子 Langevin 方程式の微視的導出を議論 (第 4 章) した後、NETFD による量子確率微分方程式の解説を行う (第 5 章)。第 6 章では、半自由粒子について考え、第 7 章では、§ 4.2 や § 5.3 を超演算子形式で再考する。第 8 章では、§ 2.3 との関係がある、非同値真空について述べる。付録では、本文で扱わなかった話題と、本文で証明なく使った式の導出を行う。

TFD は、もともと有限温度の場の理論の手法として導入された。第 2 章で示すように、この体系では、有限温度の統計平均が (倍加したヒルベルト空間の) 真空平均でかける。これにより、一般の (絶対零度での) 場の理論の手法の多くが、有限温度の場合にも使えるという利点がある。また、この見方をすることによって、チルダ粒子が熱自由度を司っているかのような視点が生まれ、熱・統計についての深遠な何かを捉えられるような気がする。しかし、このノートでは、場の理論については扱わない。

なお、このノートは主に

柴田文明・有光敏彦・番雅司・北島佐知子『量子と非平衡系の物理』, 東京大学出版 (2009 年) を参考にしている。また、

H.Umezawa(著), 有光敏彦・有光直子 (訳)『場の量子論
—ミクロ, マクロ, そして熱物理学の最前線』, 培風館 (1995 年)

を第 2 章, 第 8 章で参考にし、

鈴木増雄『統計力学』, 岩波書店 (1994 年)

を第 2 章で参考にした。また、§ 3.2 は、鈴木増雄先生の

Prog.Theor.Phys. **77**, 32 (1987)

をもとにした。

2 TFD

2.1 チルダ粒子の導入

演算子 A に対して、そのチルダ共役演算子 $\tilde{A} (\equiv A^\sim)$ を

$$(AB)^\sim = \tilde{A}\tilde{B}, \quad (2.1)$$

$$c^\sim = c^* \quad (c \text{ は } c \text{ 数}), \quad (2.2)$$

$$(A+B)^\sim = \tilde{A} + \tilde{B}, \quad (2.3)$$

$$(\tilde{A})^\sim = A, \quad (2.4)$$

$$[\tilde{A}, B] = 0 \quad (2.5)$$

の関係によって導入する¹⁾。また、ベクトル $|n\rangle$ に対してそのチルダ共役 $|n\rangle^\sim$ を導入する。このとき、任意の演算子 A に対して、

$$(A|n\rangle)^\sim = \tilde{A}|n\rangle^\sim \quad (2.8)$$

とする。

$\{|n\rangle\}$ を任意の規格直交完全系とし、

$$|n, m\rangle \stackrel{\text{def}}{=} |n\rangle \otimes |m\rangle^\sim \quad (2.9)$$

とする。さらに、

$$|I\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \sum_n |n, n\rangle \quad (2.10)$$

を定義する。この $|I\rangle$ は規格直交完全系の選び方によらないことが、次のように示される。 $\{|\mu\rangle\}$ を別の任意の規格直交完全系とすると、 $|n\rangle$ は $\{|\mu\rangle\}$ で

$$|n\rangle = \sum_\mu U_{n\mu} |\mu\rangle \quad (2.11)$$

と展開できる。 $U_{n\mu}$ はユニタリ行列である：

$$\sum_n U_{n\mu}^* U_{n\nu} = \delta_{\mu\nu}, \quad (2.12)$$

$$\sum_\mu U_{n\mu} U_{m\mu}^* = \delta_{nm}. \quad (2.13)$$

(2.11) のチルダ共役を取ると、

$$|n\rangle^\sim = \sum_\mu U_{n\mu}^* |\mu\rangle^\sim \quad (2.14)$$

¹⁾(2.4) は A がボソンのときに正しい。 A がフェルミオンのときは、

$$(\tilde{A})^\sim = -A \quad (2.6)$$

とする。また、 A, B がともにフェルミオンのときは、(2.5) は、

$$\{\tilde{A}, B\} = 0 \quad (2.7)$$

となる。

を得る。(2.11),(2.14) を (2.10) に代入して

$$\begin{aligned}
|I\rangle &= \sum_n \sum_{\mu\nu} U_{n\mu} U_{n\nu}^* |\mu, \nu\rangle \\
&= \sum_{\mu\nu} \delta_{\mu\nu} |\mu, \nu\rangle \\
&= \sum_{\mu} |\mu, \mu\rangle
\end{aligned} \tag{2.15}$$

を得る。第2等号で (2.12) を用いた。

ρ を考えている系の密度演算子とし、ケット真空 $|0\rangle$ とブラ真空 $\langle 1|$ を

$$|0\rangle \stackrel{\text{def}}{=} c_0 \rho^\alpha |I\rangle, \tag{2.16}$$

$$\langle 1| \stackrel{\text{def}}{=} c_1 \langle I| \rho^{1-\alpha}, \tag{2.17}$$

$$c_0 c_1 = 1 \tag{2.18}$$

で導入する。 α は、

$$0 \leq \alpha \leq 1 \tag{2.19}$$

なる実数とする。任意の演算子 A に対して、

$$\begin{aligned}
\langle 1|A|0\rangle &= c_0 c_1 \langle I| \rho^{1-\alpha} A \rho^\alpha |I\rangle \\
&= \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} \langle m, m| \rho^{1-\alpha} A \rho^\alpha |n, n\rangle \\
&= \sum_{n=0}^{\infty} \langle n| \rho^{1-\alpha} A \rho^\alpha |n\rangle \\
&= \text{Tr}(\rho^{1-\alpha} A \rho^\alpha) \\
&= \text{Tr}(\rho A) \equiv \langle A \rangle
\end{aligned} \tag{2.20}$$

である²⁾³⁾。

²⁾ 重要なのは、

$$\langle I|A|I\rangle = \text{Tr}(A) \tag{2.21}$$

である。

³⁾ $|\alpha\rangle$ をコヒーレント状態とすると、 $\int \frac{d^2\alpha}{\pi} |\alpha\rangle\langle\alpha| = 1$ であり、

$$|I\rangle = \int \frac{d^2\alpha}{\pi} |\alpha, \alpha\rangle \tag{2.22}$$

である。実際、 $|\alpha\rangle = \sum_n \langle n|\alpha\rangle |n\rangle$, $|\alpha, \alpha\rangle = \sum_{n,m} \langle n|\alpha\rangle \langle\alpha|m|n, m\rangle$ なので、 $\int \frac{d^2\alpha}{\pi} \langle n|\alpha\rangle \langle\alpha|m\rangle = \delta_{nm}$ より上式を得る。また、

$$\begin{aligned}
\langle I|A|I\rangle &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \int \frac{d^2\alpha'}{\pi} \langle\alpha, \alpha|A|\alpha', \alpha'\rangle \\
&= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \int \frac{d^2\alpha'}{\pi} \langle\alpha|A|\alpha'\rangle \langle\alpha'|\alpha\rangle \\
&= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \langle\alpha|A|\alpha\rangle = \text{Tr}(A).
\end{aligned} \tag{2.23}$$

逆温度 β の熱平衡状態の密度演算子は

$$\rho_{eq}(\beta) = \frac{e^{-\beta H}}{\text{Tr}(e^{-\beta H})} \quad (2.24)$$

である。平衡状態のケット真空、ブラ真空は

$$|0(\beta)\rangle \stackrel{\text{def}}{=} c_0 \rho_{eq}^\alpha(\beta) |I\rangle, \quad (2.25)$$

$$\langle 1(\beta) | \stackrel{\text{def}}{=}} c_1 \langle I | \rho_{eq}^{1-\alpha}(\beta), \quad (2.26)$$

$$c_0 c_1 = 1 \quad (2.27)$$

である。

ハミルトニアン H が

$$H = \sum_l \hbar \omega_l a_l^\dagger a_l \quad (2.28)$$

である系を考える。ただし、

$$[a_l, a_k^\dagger] = \delta_{lk} \quad (2.29)$$

であり、 a_l と a_k とは可換である。上式のチルダ共役より

$$[\tilde{a}_l, \tilde{a}_k^\dagger] = \delta_{lk} \quad (2.30)$$

を得る。今

$$a_l^{\mu=1} = a_l, \quad a_l^{\mu=2} = \tilde{a}_l^\dagger, \quad (2.31)$$

$$\bar{a}_l^{\mu=1} = a_l^\dagger, \quad \bar{a}_l^{\mu=2} = -\tilde{a}_l \quad (2.32)$$

というダブレットを導入する。(2.29),(2.30),(2.5) より

$$[a_l^\mu, \bar{a}_l^\nu] = \delta^{\mu\nu} \quad (2.33)$$

を得る。この系の平衡状態は、

$$\rho_{eq}(\beta) = \prod_l f_l^{a_l^\dagger a_l}(\beta) [1 - f_l(\beta)], \quad (2.34)$$

$$f_l(\beta) \equiv e^{-\beta \hbar \omega_l} \quad (2.35)$$

である。この状態での平均を

$$\langle A \rangle_\beta \stackrel{\text{def}}{=} \text{Tr}(\rho_{eq}(\beta) A) \quad (2.36)$$

と書くと

$$n_l(\beta) \stackrel{\text{def}}{=} \langle a_l^\dagger a_l \rangle_\beta \quad (2.37)$$

$$= \frac{1}{e^{\beta \hbar \omega_l} - 1} \quad (2.38)$$

である。

今、ある i に対して、真空 $|0\rangle_i$ を

$$a_i|0\rangle_i = 0 \quad (2.39)$$

で導入する。 i 番目の個数状態 $|n_i\rangle_i$ は

$$|n_i\rangle_i = \frac{1}{\sqrt{n_i!}} (a_i^\dagger)^{n_i} |0\rangle_i \quad (2.40)$$

で与えられる。 $\{|n_i\rangle_i\}$ は規格直交性

$${}_i\langle n_i | n'_i \rangle_i = \delta_{n_i n'_i} \quad (2.41)$$

を満たす。また $\{|n_i\rangle_i\}$ は完全性

$$\sum_{n_i=0}^{\infty} |n_i\rangle_i \langle n_i| = 1_i \quad (2.42)$$

も満たしているものとする。ここで、 1_i は a_i , a_i^\dagger が作用するベクトル空間における恒等演算子である。今、個数状態

$$|\{n_i\}\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \bigotimes_i |n_i\rangle_i \quad (2.43)$$

を定義すると、全ての i に対して

$$a_i^\dagger a_i |\{n_i\}\rangle = n_i |\{n_i\}\rangle \quad (2.44)$$

となる。(2.41), (2.42) より、基底 $\{|\{n_i\}\rangle\}$ は規格直交完全系をなしていることが分かる。すなわち、

$$\begin{aligned} \langle \{n_i\} | \{n'_i\} \rangle &= \prod_i \langle n_i | n'_i \rangle_i \\ &= \prod_i \delta_{n_i, n'_i} \end{aligned} \quad (2.45)$$

$$\left(\prod_i \sum_{n_i} \right) |\{n_i\}\rangle \langle \{n_i\}| = 1 \quad (2.46)$$

である。ただし、 $1 = \bigotimes_i 1_i$ である。以下、 \bigotimes_i を \prod_i とかく。

今、規格直交完全系 $\{|n\rangle\}$ として、 $\{|\{n_i\}\rangle\}$ を取る。

$$|\{n_i\}, \{m_i\}\rangle \stackrel{\text{def}}{=} |\{n_i\}\rangle \otimes |\{m_i\}\rangle \sim \quad (2.47)$$

すると、 $|I\rangle$ は

$$|I\rangle = \left(\prod_i \sum_{n_i=0}^{\infty} \right) |\{n_i\}, \{n_i\}\rangle \quad (2.48)$$

とかける。この表式を用いると (2.25), (2.26) が

$$|0(\beta)\rangle = c_0 \prod_l |0(\beta)\rangle_l, \quad (2.49)$$

$$\langle 1(\beta)| = c_1 \prod_l \langle 1(\beta)|_l, \quad (2.50)$$

$$|0(\beta)\rangle_l \stackrel{\text{def}}{=} [1 - f_l(\beta)]^\alpha \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{\alpha n_l}(\beta) |n_l, n_l\rangle_l, \quad (2.51)$$

$${}_l\langle 1(\beta)| \stackrel{\text{def}}{=} [1 - f_l(\beta)]^{1-\alpha} \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{(1-\alpha)n_l}(\beta) \langle n_l, n_l| \quad (2.52)$$

とかけることがわかる。また上式より、 $|0(\beta)\rangle$ と $\langle 1(\beta)|$ のチルダ不変性

$$|0(\beta)\rangle \sim |0(\beta)\rangle, \quad \langle 1(\beta)| \sim \langle 1(\beta)| \quad (2.53)$$

がわかる。

2.2 熱的 Bogoliubov 変換

今、 ξ_l, ξ_l^\dagger およびそのチルダ共役 $\tilde{\xi}_l, \tilde{\xi}_l^\dagger$ を

$$\xi_l(\beta)|0(\beta)\rangle = \tilde{\xi}_l(\beta)|0(\beta)\rangle = 0, \quad (2.54)$$

$$\langle 1(\beta)|\xi_l^\dagger(\beta) = \langle 1(\beta)|\tilde{\xi}_l^\dagger(\beta) = 0 \quad (2.55)$$

を満たし、交換関係が

$$[\xi_l^\mu, \bar{\xi}_l^\nu] = \delta^{\mu\nu} \quad (2.56)$$

となるものとして導入する。ただし、ダブルレット表記

$$\xi_l^{\mu=1} = \xi_l, \quad \xi_l^{\mu=2} = \tilde{\xi}_l^\dagger, \quad (2.57)$$

$$\bar{\xi}_l^{\mu=1} = \xi_l^\dagger, \quad \bar{\xi}_l^{\mu=2} = -\tilde{\xi}_l \quad (2.58)$$

を用いた。 a_l^μ, \bar{a}_l^μ は交換関係 (2.33) を満たすので、(2.56) を満たすためには、

$$\xi^\mu(\beta) = B_l(\beta)^{\mu\nu} a_l^\nu, \quad (2.59)$$

$$\bar{\xi}^\mu(\beta) = \bar{a}_l^\nu B_l^{-1}(\beta)^{\nu\mu}, \quad (2.60)$$

$$(2.61)$$

でなくてはならない。 $B_l(\beta)$ を、

$$B_l(\beta) = \begin{pmatrix} b_{11} & b_{12} \\ b_{21} & b_{22} \end{pmatrix} \quad (2.62)$$

と書くと、(2.59) は

$$\xi_l = b_{11}a_l + b_{12}\tilde{a}_l^\dagger, \quad (2.63)$$

$$\tilde{\xi}_l^\dagger = b_{21}a_l + b_{22}\tilde{a}_l^\dagger \quad (2.64)$$

となる。 $B_l^{-1}(\beta)$

$$B_l^{-1}(\beta) = \frac{1}{b_{11}b_{22} - b_{21}b_{12}} \begin{pmatrix} b_{22} & -b_{12} \\ -b_{21} & b_{11} \end{pmatrix} \quad (2.65)$$

となり、(2.60) は

$$\xi_l^\dagger = \frac{b_{22}a_l^\dagger + b_{21}\tilde{a}_l}{b_{11}b_{22} - b_{21}b_{12}}, \quad (2.66)$$

$$\tilde{\xi}_l = \frac{b_{12}a_l^\dagger + b_{11}\tilde{a}_l}{b_{11}b_{22} - b_{21}b_{12}} \quad (2.67)$$

となる。上2式のチルダ共役を取ると、

$$\tilde{\xi}_l^\dagger = \frac{b_{22}^* \tilde{a}_l^\dagger + b_{21}^* a_l}{(b_{11} b_{22} - b_{21} b_{12})^*}, \quad (2.68)$$

$$\xi_l = \frac{b_{12}^* \tilde{a}_l^\dagger + b_{11}^* a_l}{(b_{11} b_{22} - b_{21} b_{12})^*} \quad (2.69)$$

となる。この2式を(2.66),(2.67)と比べて

$$\frac{b_{ij}^*}{(b_{11} b_{22} - b_{21} b_{12})^*} = b_{ij} \quad (i, j = 1, 2) \quad (2.70)$$

を得る。この式の絶対値を取ると

$$|b_{11} b_{22} - b_{21} b_{12}| = 1 \quad (2.71)$$

がわかる。今、

$$b_{11} b_{22} - b_{21} b_{12} = e^{i\theta} \quad (2.72)$$

とおき、

$$b_{ij} = |b_{ij}| e^{i\theta_{ij}} \quad (2.73)$$

と書くと、(2.70)より

$$e^{i2\theta_{ij}} = e^{-i\theta} \quad (2.74)$$

を得る。よって、 $\theta = 0$ と選ぶと、

$$b_{11} b_{22} - b_{21} b_{12} = 1, \quad (2.75)$$

$$b_{ij}^* = b_{ij} \quad (2.76)$$

となる。

(2.51)より

$$\begin{aligned} a_l |0(\beta)\rangle_l &= [1 - f_l(\beta)]^\alpha \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{\alpha n_l}(\beta) \sqrt{n_l} |n_l - 1, n_l\rangle_l \\ &= [1 - f_l(\beta)]^\alpha \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{\alpha(n_l+1)}(\beta) \sqrt{n_l + 1} |n_l, n_l + 1\rangle_l, \end{aligned} \quad (2.77)$$

$$\tilde{a}_l^\dagger |0(\beta)\rangle_l = [1 - f_l(\beta)]^\alpha \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{\alpha n_l}(\beta) \sqrt{n_l + 1} |n_l, n_l + 1\rangle_l \quad (2.78)$$

を得る。この2式と(2.63)より

$$\xi_l |0(\beta)\rangle_l = (b_{11} f_l^\alpha(\beta) + b_{12}) [1 - f_l(\beta)]^\alpha \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{\alpha n_l}(\beta) \sqrt{n_l + 1} |n_l, n_l + 1\rangle_l \quad (2.79)$$

となる。これと、(2.54)から

$$b_{11} f_l^\alpha(\beta) + b_{12} = 0 \quad (2.80)$$

を得る。

また、(2.52) より

$${}_l\langle 1(\beta)|a_l = [1 - f_l(\beta)]^{1-\alpha} \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{(1-\alpha)n_l}(\beta) \sqrt{n_l + 1} {}_l\langle n_l + 1, n_l|, \quad (2.81)$$

$$\begin{aligned} {}_l\langle 1(\beta)|\tilde{a}_l^\dagger &= [1 - f_l(\beta)]^{1-\alpha} \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{(1-\alpha)n_l}(\beta) \sqrt{n_l} {}_l\langle n_l, n_l - 1| \\ &= [1 - f_l(\beta)]^{1-\alpha} \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{(1-\alpha)(n_l+1)}(\beta) \sqrt{n_l + 1} {}_l\langle n_l + 1, n_l| \end{aligned} \quad (2.82)$$

を得る。この2式と(2.64)より

$${}_l\langle 1(\beta)|\tilde{\xi}_l^\ddagger = [b_{21} + b_{22}f_l^{1-\alpha}(\beta)][1 - f_l(\beta)]^{1-\alpha} \sum_{n_l=0}^{\infty} f_l^{(1-\alpha)(n_l+1)}(\beta) \sqrt{n_l + 1} {}_l\langle n_l + 1, n_l| \quad (2.83)$$

となる。これと、(2.55)から

$$b_{21} + b_{22}f_l^{1-\alpha}(\beta) = 0 \quad (2.84)$$

を得る。

(2.75)に(2.80),(2.84)から得られる式を代入して

$$[1 - f_l(\beta)]b_{11}b_{22} = 1 \quad (2.85)$$

を得る。

(2.75)を(2.66)に代入すると、

$$\xi_l^\ddagger = b_{22}a_l^\dagger + b_{21}\tilde{a}_l \quad (2.86)$$

となる。ところで、 ξ のダガー共役 ξ^\dagger は(2.63),(2.76)から

$$\xi^\dagger = b_{11}a^\dagger + b_{12}\tilde{a}_l \quad (2.87)$$

である。 ξ_l^\ddagger と ξ^\dagger と a^\dagger の係数を一致するように

$$b_{11} = b_{22} \quad (2.88)$$

と選ぶ。

(2.80),(2.84),(2.85)より

$$B_l(\beta) = \frac{1}{\sqrt{1 - f_l(\beta)}} \begin{pmatrix} 1 & -f_l^\alpha(\beta) \\ -f_l^{1-\alpha}(\beta) & 1 \end{pmatrix} \quad (f_l(\beta) \equiv e^{-\beta\hbar\omega_l}) \quad (2.89)$$

$$= \sqrt{1 + n_l(\beta)} \begin{pmatrix} 1 & -f_l^\alpha(\beta) \\ -f_l^{1-\alpha}(\beta) & 1 \end{pmatrix} \quad (2.90)$$

を得る。これを (2.59),(2.60) に代入すると、

$$\xi_l(\beta) = \frac{1}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} a_l - \frac{f_l^\alpha(\beta)}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} \tilde{a}_l^\dagger, \quad (2.91)$$

$$\xi_l^\ddagger(\beta) = \frac{1}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} a_l^\dagger - \frac{f_l^{1-\alpha}(\beta)}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} \tilde{a}_l, \quad (2.92)$$

$$\tilde{\xi}_l(\beta) = \frac{1}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} \tilde{a}_l - \frac{f_l^\alpha(\beta)}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} a_l^\dagger, \quad (2.93)$$

$$\tilde{\xi}_l^\ddagger(\beta) = \frac{1}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} \tilde{a}_l^\dagger - \frac{f_l^{1-\alpha}(\beta)}{\sqrt{1-f_l(\beta)}} a_l \quad (2.94)$$

となる。この4式を (2.54),(2.55) に代入して、

$$(a_l - f_l^\alpha(\beta) \tilde{a}_l^\dagger) |0(\beta)\rangle = 0, \quad (2.95)$$

$$(\tilde{a}_l - f_l^\alpha(\beta) a_l^\dagger) |0(\beta)\rangle = 0, \quad (2.96)$$

$$\langle 1(\beta) | (a_l^\dagger - f_l^{1-\alpha}(\beta) \tilde{a}_l) = 0, \quad (2.97)$$

$$\langle 1(\beta) | (\tilde{a}_l^\dagger - f_l^{1-\alpha}(\beta) a_l) = 0 \quad (2.98)$$

を得る。これを熱状態条件という。

なお、(2.95),(2.96),(2.97),(2.98) は

$$\xi_l^\mu(\beta) = \hat{V}(\theta) a_l^\mu \hat{V}^{-1}(\theta), \quad \bar{\xi}_l^\mu(\beta) = \hat{V}(\theta) \tilde{a}_l^\mu \hat{V}^{-1}(\theta) \quad (2.99)$$

の形で書けることが知られている。ここで $\hat{V}(\theta)$ は、

$$\hat{V}(\theta) = e^{i\hat{G}(\theta)}, \quad (2.100)$$

$$i\hat{G}(\theta) = \sum_l \sum_{a=1}^3 \theta_{l,a} i\hat{G}_{l,a}, \quad (2.101)$$

$$i\hat{G}_{l,1} = a_l \tilde{a}_l - a_l^\dagger \tilde{a}_l^\dagger, \quad (2.102)$$

$$i\hat{G}_{l,2} = a_l \tilde{a}_l + a_l^\dagger \tilde{a}_l^\dagger, \quad (2.103)$$

$$i\hat{G}_{l,3} = a_l^\dagger \tilde{a}_l + \tilde{a}_l^\dagger a_l \quad (2.104)$$

で $\theta_{l,a}$ を適当に選んだものである。 $\hat{G}_{l,2}, \hat{G}_{l,3}$ は反エルミートである。§ 2.3 で議論するように、ユニタリー表現 ($\alpha = \frac{1}{2}$) では $\theta_{l,2} = \theta_{l,3} = 0$ である。

2.3 ユニタリー表現

(2.16),(2.17) で

$$c_1 = c_0^*, \quad \alpha = \frac{1}{2} \quad (2.105)$$

としたものをユニタリー表現という。ユニタリー表現では、

$$\langle 1 | = |0\rangle^\dagger \quad (2.106)$$

である。以下ではさらに

$$c_0 = c_1 = 1 \quad (2.107)$$

と選ぶ。このとき、(2.25),(2.26) は

$$|0(\beta)\rangle = \rho_{eq}^{1/2}(\beta)|I\rangle, \quad (2.108)$$

$$\langle 1(\beta)| = \langle I|\rho_{eq}^{1/2}(\beta), \quad (2.109)$$

$$= |0(\beta)\rangle^\dagger \quad (2.110)$$

となる。

ハミルトニアンが (2.28) で与えられる系を考える。真空 $|0\rangle$ を

$$a_i|0\rangle = 0, \quad \tilde{a}_i|0\rangle = 0 \quad \text{for all } i \quad (2.111)$$

によって導入すると、 $|0\rangle$ は (2.47) の記号を用いて

$$|0\rangle = |\{0\}, \{0\}\rangle \quad (2.112)$$

とかける。

(2.95),(2.96),(2.97),(2.98) で

$$f_i(\beta) = \tanh^2 \theta_i \quad (2.113)$$

と置き、 $\alpha = \frac{1}{2}$ を代入すると、

$$\xi_i(\beta) = \cosh \theta_i a_i - \sinh \theta_i \tilde{a}_i^\dagger \equiv a_i(\theta), \quad (2.114)$$

$$\xi_i^\dagger(\beta) = \cosh \theta_i a_i^\dagger - \sinh \theta_i \tilde{a}_i \equiv a_i^\dagger(\theta), \quad (2.115)$$

$$\tilde{\xi}_i(\beta) = \cosh \theta_i \tilde{a}_i - \sinh \theta_i a_i^\dagger \equiv \tilde{a}_i(\theta), \quad (2.116)$$

$$\tilde{\xi}_i^\dagger(\beta) = \cosh \theta_i \tilde{a}_i^\dagger - \sinh \theta_i a_i \equiv \tilde{a}_i^\dagger(\theta) \quad (2.117)$$

となる。ユニタリー表現では、

$$\xi_i^\dagger(\beta) = [\xi_i(\beta)]^\dagger \quad (2.118)$$

となっている。

a から $a(\theta)$ への変換はユニタリー変換

$$a_i(\theta) = \hat{U}(\theta)a_i\hat{U}^\dagger(\theta), \quad \tilde{a}_i(\theta) = \hat{U}(\theta)\tilde{a}_i\hat{U}^\dagger(\theta) \quad (2.119)$$

である。ただし、

$$\hat{U}(\theta) = \exp\left(\sum_i \theta_i (\tilde{a}_i^\dagger a_i^\dagger - a_i \tilde{a}_i)\right) \quad (2.120)$$

はユニタリー演算子である。これは (2.100) で

$$\theta_{i,1} = -\theta_i, \quad \theta_{i,2} = \theta_{i,3} = 0 \quad (2.121)$$

としたものである。

交換関係 (2.33) と性質

$$\hat{U}[A, B]\hat{U}^\dagger = [\hat{U}A\hat{U}^\dagger, \hat{U}B\hat{U}^\dagger] \quad (2.122)$$

より, $\{a_i(\theta), a_i^\dagger(\theta), \tilde{a}_i(\theta), \tilde{a}_i^\dagger(\theta)\}_{i=1}^N$ も正準交換関係

$$\left[a_i(\theta), a_j^\dagger(\theta) \right] = \delta_{ij}, \quad \left[\tilde{a}_i(\theta), \tilde{a}_j^\dagger(\theta) \right] = \delta_{ij} \quad (2.123)$$

を満たす。これ以外の交換関係は0である。

(2.119) より得られる

$$a_i = \hat{U}^\dagger(\theta) a_i(\theta) \hat{U}(\theta), \quad \tilde{a}_i = \hat{U}^\dagger(\theta) \tilde{a}_i(\theta) \hat{U}(\theta) \quad (2.124)$$

を (2.111) に代入すると,

$$\hat{U}^\dagger(\theta) a_i(\theta) \hat{U}(\theta) |0\rangle = 0, \quad \hat{U}^\dagger(\theta) \tilde{a}_i(\theta) \hat{U}(\theta) |0\rangle = 0 \quad (2.125)$$

となる。ここで、状態

$$|0(\theta)\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \hat{U}(\theta) |0\rangle \quad (2.126)$$

を導入すると (2.125) は

$$a_i(\theta) |0(\theta)\rangle = 0, \quad \tilde{a}_i(\theta) |0(\theta)\rangle = 0 \quad (2.127)$$

となる。 $|0(\theta)\rangle$ は

$$|0(\theta)\rangle = |0(\beta)\rangle \quad \text{where} \quad \tanh^2 \theta_i = f_i(\beta) \quad (2.128)$$

を満たす。

$|0(\theta)\rangle$ を計算すると、

$$\begin{aligned} |0(\theta)\rangle &= \exp\left(\sum_i a_i^\dagger \tilde{a}_i^\dagger \tanh \theta_i\right) \exp\left(-\sum_i [a_i a_i^\dagger + \tilde{a}_i^\dagger \tilde{a}_i] \ln \cosh \theta_i\right) |0\rangle \\ &= \exp\left(-\sum_i \ln \cosh \theta_i\right) \exp\left(\sum_i \tanh \theta_i a_i^\dagger \tilde{a}_i^\dagger\right) |0\rangle \\ &= \exp\left(-\sum_i \ln \cosh \theta_i\right) \prod_i \sum_{n_i=0}^{\infty} (\tanh \theta_i)^{n_i} |n_i, n_i\rangle_i \\ &= \exp\left(-\sum_i \ln \cosh \theta_i\right) \left(\prod_i \sum_{n_i=0}^{\infty}\right) \left(\prod_i (\tanh \theta_j)^{n_j}\right) |\{n_i\}, \{n_i\}\rangle \end{aligned} \quad (2.129)$$

となる。ただし、第1等号では (D.33) を利用して $\hat{U}(\theta)$ を a_i, a_i^\dagger および $\tilde{a}_i, \tilde{a}_i^\dagger$ の正規積に近い形に書き直し, (2.111) を用いた。第2等号では正準交換関係 (2.33) を, 第3等号では (2.47) を, 第4等号では (2.40) を用いた。

(2.129), (2.128) より

$$|0(\beta)\rangle = \exp\left(-\frac{1}{2} \sum_i \ln[1 + n_i(\beta)]\right) \exp\left(\sum_i \sqrt{\frac{n_i(\beta)}{1 + n_i(\beta)}} a_i^\dagger \tilde{a}_i^\dagger\right) |0\rangle \quad (2.131)$$

を得る。この式から、有限温度の熱的真空 $|0(\beta)\rangle$ は、サーマル・ペア $a_i^\dagger \tilde{a}_i^\dagger$ が真空 $|0\rangle$ の上に凝縮した状態であることがわかる。

2.4 時間に依存する場合

Liouville-von Neumann 方程式は

$$i\hbar \frac{\partial \rho(t)}{\partial t} = [H(t), \rho(t)] \quad (2.132)$$

である。ただし、ハミルトニアンが時間に陽に依存するとした。今、

$$|0(t)\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \rho^\alpha(t)|I\rangle, \quad (2.133)$$

$$\langle 1(t)| \stackrel{\text{def}}{=} \langle I|\rho^{1-\alpha}(t) \quad (2.134)$$

とする。 $|0(t)\rangle$ の従う微分方程式を求める。

今、 $A(t)$ を時間に陽に依存するエルミート演算子とし、その固有値方程式を

$$A(t)|n\rangle_t = A_n(t)|n\rangle_t \quad (2.135)$$

とする。 $A(t)$ はエルミートなので、

$$A_n^*(t) = A_n(t) \quad (2.136)$$

であり、 $\{|n\rangle_t\}$ は規格完全直交系をなす。すると、 $|I\rangle$ は、任意の時刻で

$$|I\rangle = \sum_n |n\rangle_t \otimes |n\rangle_{\tilde{t}} \quad (2.137)$$

とかける。 $|I\rangle$ は時間によらない。

(2.135) のチルダ共役は、(2.2),(2.8),(2.136) より

$$\tilde{A}(t)|n\rangle_{\tilde{t}} = A_n(t)|n\rangle_{\tilde{t}} \quad (2.138)$$

となる。(2.135),(2.138) より、

$$\begin{aligned} A(t)|I\rangle &= \sum_n A_n(t)|n\rangle_t \otimes |n\rangle_{\tilde{t}} \\ &= \sum_n \tilde{A}(t)|n\rangle_t \otimes |n\rangle_{\tilde{t}} \\ &= \tilde{A}(t)|I\rangle \end{aligned} \quad (2.139)$$

を得る。

(2.132) は、

$$i\hbar \frac{\partial U(t)}{\partial t} = H(t)U(t) \quad (2.140)$$

を満たす $U(t)$ を用いて、

$$\rho(t) = U(t)\rho(0)U^\dagger(t) \quad (2.141)$$

と形式的に解ける。また、この式より、

$$\rho^\alpha(t) = U(t)\rho^\alpha(0)U^\dagger(t) \quad (2.142)$$

を得る。上式を微分すると、

$$\begin{aligned}
i\hbar \frac{\partial \rho^\alpha(t)}{\partial t} &= i\hbar \frac{\partial U(t)}{\partial t} \rho^\alpha(0) U^\dagger(t) + i\hbar U(t) \rho^\alpha(0) \frac{\partial U^\dagger(t)}{\partial t} \\
&= H(t) U(t) \rho^\alpha(0) U^\dagger(t) - U(t) \rho^\alpha(0) U^\dagger(t) H(t) \\
&= [H(t), \rho^\alpha(t)]
\end{aligned} \tag{2.143}$$

となる。第2等号で(2.140)と(2.140)の \dagger を取った式を用いた。よって、(2.133)の $|0(t)\rangle$ の時間微分は、

$$\begin{aligned}
i\hbar \frac{\partial}{\partial t} |0(t)\rangle &= [H(t), \rho^\alpha(t)] |I\rangle \\
&= H(t) \rho^\alpha(t) |I\rangle - \rho^\alpha(t) H(t) |I\rangle \\
&= H(t) \rho^\alpha(t) |I\rangle - \rho^\alpha(t) \tilde{H}(t) |I\rangle \\
&= H(t) |0(t)\rangle - \tilde{H}(t) \rho^\alpha(t) |I\rangle \\
&= [H(t) - \tilde{H}(t)] |0(t)\rangle \\
&\equiv \hat{H}(t) |0(t)\rangle
\end{aligned} \tag{2.144}$$

となる。ただし、第1等号で(2.143)を、第3等号で(2.139)で $A(t) = H(t)$ としたものを、第4等号で(2.5)を用いた。なお、

$$\hat{H}(t) \stackrel{\text{def}}{=} H(t) - \tilde{H}(t) \tag{2.145}$$

をハット・ハミルトニアンと言う。

$\rho(t)$ の固有方程式

$$\rho(t) |n\rangle_t = p_n(t) |n\rangle_t \tag{2.146}$$

を考える。 $\rho(t)$ はエルミート演算子なので、 $p_n(t)$ は実数であり、 $\{|n\rangle_t\}$ は規格直交完全系をなす。 $\rho^\alpha(t)$ は

$$\rho^\alpha(t) = \sum_n p_n^\alpha(t) |n\rangle_t \langle n| \tag{2.147}$$

と書ける。 $\{|n\rangle_t\}$ を用いて、 $|I\rangle$ を(2.137)とかくと、上式と(2.133)から、

$$|0(t)\rangle = \sum_n p_n^\alpha(t) |n\rangle_t |n\rangle_t^\sim \tag{2.148}$$

$$= |0(t)\rangle^\sim \tag{2.149}$$

を得る。同様にして、

$$\langle 1(t)| = \langle 1(t)|^\sim \tag{2.150}$$

を得る。真空のチルダ不変性は、 $\rho(t)$ のユニタリー性の反映である。

3 NETFD

3.1 NETFD の導入

NETFD は TFD で $\alpha = 1$ とした場合に、散逸のある Liouville-von Neumann 方程式を扱う方法である。

(2.133),(2.134) で $\alpha = 1$ とすると、

$$|0(t)\rangle = \rho(t)|1\rangle, \quad (3.1)$$

$$\langle 1(t)| = \langle I| \equiv \langle 1| \quad (3.2)$$

となり、ブラ真空 $\langle 1(t)|$ は時間によらない。(2.144) は、ハミルトニアンが時間によらないとき

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} |0(t)\rangle = \hat{H}|0(t)\rangle, \quad (3.3)$$

$$\hat{H} = H - \tilde{H} \quad (3.4)$$

$$= -\hat{H}^\sim \quad (3.5)$$

となる。また、(2.149),(2.150) は

$$|0(t)\rangle^\sim = |0(t)\rangle, \quad \langle 1|^\sim = \langle 1| \quad (3.6)$$

となる。

(2.139) の \dagger から

$$\langle 1|A = \langle 1|\tilde{A} \quad \text{for } A^\dagger = A \quad (3.7)$$

を得る。特に、 $A = H$ とすると、

$$\langle 1|\hat{H} = \langle 1|H - \langle 1|\tilde{H} = 0 \quad (3.8)$$

を得る。

(2.95),(2.96),(2.97),(2.98) に $\alpha = 1$ を代入すると、

$$a_l|0(\beta)\rangle - f_l(\beta)\tilde{a}_l^\dagger|0(\beta)\rangle = 0, \quad (3.9)$$

$$\tilde{a}_l|0(\beta)\rangle - f_l(\beta)a_l^\dagger|0(\beta)\rangle = 0, \quad (3.10)$$

$$\langle 1|a_l^\dagger - \langle 1|\tilde{a}_l = 0, \quad (3.11)$$

$$\langle 1|\tilde{a}_l^\dagger - \langle 1|a_l = 0 \quad (3.12)$$

を得る。(3.11),(3.12) の \dagger より

$$a_l|I\rangle = \tilde{a}_l^\dagger|I\rangle, \quad a_l^\dagger|I\rangle = \tilde{a}_l|I\rangle \quad (3.13)$$

を得る。ただし、(3.2) を用いた。

散逸のある Liouville-von Neumann 方程式は、

$$i\hbar \frac{\partial \rho(t)}{\partial t} = [H, \rho(t)] + i\Pi\rho(t) \quad (3.14)$$

である。ここで、 Π は $\rho(t)$ に作用する超演算子で、例えば

$$\frac{1}{\hbar}\Pi\bullet = \kappa([a\bullet, a^\dagger] + [a, \bullet a^\dagger]) + 2\kappa\bar{n}[a, [\bullet, a^\dagger]] \quad (3.15)$$

である⁴⁾。 Π は散逸の効果を表す。このとき、 $|0(t)\rangle$ は散逸シュレーディンガー方程式

$$i\hbar\frac{\partial}{\partial t}|0(t)\rangle = \hat{H}|0(t)\rangle \quad (3.16)$$

に従う。 \hat{H} は

$$\hat{H} = H - \tilde{H} + i\hat{\Pi} \quad (3.17)$$

と書ける。 $\hat{\Pi}$ は Π の対応物である。ハット・ハミルトニアン \hat{H} の i 倍はチルディアン⁵⁾である：

$$(i\hat{H})\sim = i\hat{H}. \quad (3.18)$$

\hat{H} はエルミートとは限らない。(3.16)のチルダ共役は(3.6),(3.18)より(3.16)自身になる⁶⁾。また、ハット・ハミルトニアンは

$$\langle 1|\hat{H} = 0 \quad (3.19)$$

を満たす⁷⁾。(3.16),(3.17)は(3.3),(3.4)の、(3.18)は(3.5)の、(3.19)は(3.8)の拡張である。(3.19)は確率の保存を意味する。実際、(3.16)に $\langle 1|$ を作用させると、

$$i\hbar\frac{\partial}{\partial t}\langle 1|0(t)\rangle = \langle 1|\hat{H}|0(t)\rangle$$

であり、(3.19)より、

$$i\hbar\frac{\partial}{\partial t}\langle 1|0(t)\rangle = 0 \quad (3.21)$$

を得る。

(3.16)を解くと、

$$|0(t)\rangle = e^{-i\hat{H}t/\hbar}|0\rangle, \quad |0\rangle \equiv |0(0)\rangle \quad (3.22)$$

となる。(3.17)の H として(2.28)を取る。初期条件として、

$$a_l|0\rangle = f_l\tilde{a}_l^\dagger|0\rangle \quad (3.23)$$

が仮定される⁸⁾。特に、

$$f_l = f_l(\beta) = e^{-\beta\hbar\omega_l} \quad (3.24)$$

が $|0\rangle$ が熱平衡の場合である。(3.23)は(3.9)の拡張である。

今まで、 \hat{H} は時間によらないとしてきたが、時間に依存する場合への拡張は容易である。

⁴⁾この式の導出は§ 4.3で行う。

⁵⁾ $\hat{X}\sim = \hat{X}$ となる演算子 \hat{X} をチルディアンという。

⁶⁾§ 2.4の議論から分かるように、ケット真空のチルダ不変性は、 $\rho(t)$ のエルミート性に由来する。(3.18)は、(3.14)の右辺が反エルミートであることを意味する。

⁷⁾これは、

$$\langle 1|\hat{\Pi} = 0 \quad (3.20)$$

を意味する。

⁸⁾ただし、§ 6.2以外でこの初期条件を使わない。

Π から $\hat{\Pi}$ は、(3.13) を用いて一意的に得られる。例えば、 Π が (3.15) のとき、(3.14) の右辺の $\kappa[a\rho(t), a^\dagger]$ の項は、

$$\begin{aligned}\kappa[a\rho(t), a^\dagger]|I\rangle &= \kappa a\rho(t)a^\dagger|I\rangle - \kappa a^\dagger a\rho(t)|I\rangle \\ &= \kappa a\rho(t)\tilde{a}|I\rangle - \kappa a^\dagger a|0(t)\rangle \\ &= \kappa a\tilde{a}\rho(t)|I\rangle - \kappa a^\dagger a|0(t)\rangle \\ &= \kappa(a\tilde{a} - a^\dagger a)|0(t)\rangle\end{aligned}\quad (3.25)$$

となる。ただし、(3.1) と (2.5) も用いた。同様に、

$$\begin{aligned}\kappa[a, \rho(t)a^\dagger]|I\rangle &= \kappa a\rho(t)a^\dagger|I\rangle - \kappa\rho(t)a^\dagger a|I\rangle \\ &= \kappa a\tilde{a}\rho(t)|I\rangle - \kappa\tilde{a}^\dagger\rho(t)a^\dagger|I\rangle \\ &= \kappa a\tilde{a}|0(t)\rangle - \kappa\tilde{a}^\dagger\tilde{a}\rho(t)|I\rangle \\ &= \kappa(a\tilde{a} - \tilde{a}^\dagger\tilde{a})|0(t)\rangle,\end{aligned}\quad (3.26)$$

$$\begin{aligned}2\kappa\bar{n}[a, [\rho(t), a^\dagger]]|I\rangle &= 2\kappa\bar{n}\left\{a\rho(t)a^\dagger|I\rangle - aa^\dagger\rho(t)|I\rangle - \rho(t)a^\dagger a|I\rangle + a^\dagger\rho(t)a|I\rangle\right\} \\ &= 2\kappa\bar{n}\left\{a\tilde{a}\rho(t)|I\rangle - aa^\dagger\rho(t)|I\rangle - \tilde{a}^\dagger\tilde{a}\rho(t)|I\rangle + a^\dagger\tilde{a}^\dagger\rho(t)|I\rangle\right\} \\ &= 2\kappa\bar{n}(a\tilde{a} - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger\tilde{a} + a^\dagger\tilde{a}^\dagger)|0(t)\rangle\end{aligned}\quad (3.27)$$

となる。よって、(3.15) の対応物は、

$$\begin{aligned}\frac{1}{\hbar}\hat{\Pi} &= \kappa(a\tilde{a} - a^\dagger a) + \kappa(a\tilde{a} - \tilde{a}^\dagger\tilde{a}) + 2\kappa\bar{n}(a\tilde{a} - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger\tilde{a} + a^\dagger\tilde{a}^\dagger) \\ &= -\kappa[(1 + 2\bar{n})(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger\tilde{a}) - 2(1 + \bar{n})a\tilde{a} - 2\bar{n}a^\dagger\tilde{a}^\dagger] - 2\kappa\bar{n}\end{aligned}\quad (3.28)$$

である。

3.2 超演算子形式

超演算子とは演算子に作用する演算子である。例えば、(3.15) の Π のようなものである。以下に示すように、 a_l, a_l^\dagger を

$$A\bullet = A \cdot \bullet, \quad \tilde{A}\bullet = \bullet \cdot A^\dagger \quad (\bullet \text{ は任意の演算子。 } A = a_l, a_l^\dagger) \quad (3.29)$$

という超演算子と考えると、今までの公式が適当な読み替えをすれば成り立つ。

ヒルベルト空間 \mathcal{H} に作用する演算子の集合を \mathcal{O} とする。 \mathcal{O} の元 \bullet は、任意の規格直交完全系 $|n\rangle$ を用いて、

$$\bullet = \sum_{n,m} \langle n | \bullet | m \rangle | n \rangle \langle m | \quad (3.30)$$

と書ける。 \mathcal{O} に対して、Liouville 空間 \mathcal{L} が考えられる。 \mathcal{L} の元 $|\bullet\rangle\rangle$ は、

$$|\bullet\rangle\rangle = \sum_{n,m} \langle n | \bullet | m \rangle | nm \rangle\rangle \quad (3.31)$$

と書かれる。特に、

$$||n\rangle\rangle \langle m| = |nm\rangle\rangle \quad (3.32)$$

である。 $|nm\rangle$ に対して、その双対 $\langle\langle nm|$ を

$$\langle\langle nm| = ||n\rangle\langle m||^\dagger = \langle\langle (|n\rangle\langle m|)^\dagger, \quad (3.33)$$

$$\langle\langle nm|n'm'\rangle\rangle = \delta_{nn'}\delta_{mm'} \quad (3.34)$$

で定義する。対応、

$$|nm\rangle \longleftrightarrow |n\rangle\langle m|, \quad (3.35)$$

$$\langle\langle nm|\cdots \longleftrightarrow \text{Tr}(|m\rangle\langle n|\cdots) \quad (3.36)$$

を考えると⁹⁾、(3.34) は、

$$\begin{aligned} \langle\langle nm|n'm'\rangle\rangle &\longleftrightarrow \text{Tr}(|m\rangle\langle n| \cdot |n'\rangle\langle m'|) \\ &= \delta_{nn'}\text{Tr}(|m\rangle\langle m'|) \\ &= \delta_{nn'}\langle m'|m\rangle \\ &= \delta_{nn'}\delta_{mm'} \end{aligned} \quad (3.38)$$

となる。ただし、公式

$$\text{Tr}(|\phi\rangle\langle\phi'|) = \langle\phi'|\phi\rangle \quad (3.39)$$

を用いた。

$\langle\langle\bullet|$ を、

$$\langle\langle\bullet| = \sum_{n,m} \langle m|\bullet|n\rangle\langle\langle nm| \quad (3.40)$$

とする。従って、

$$\begin{aligned} |\bullet\rangle\rangle^\dagger &= \sum_{n,m} \langle n|\bullet|m\rangle^* \langle\langle nm| \\ &= \sum_{n,m} \langle m|\bullet^\dagger|n\rangle\langle\langle nm| \\ &= \langle\langle\bullet^\dagger| \end{aligned} \quad (3.41)$$

となる。また、

$$\begin{aligned} \langle\langle A|B\rangle\rangle &= \sum_{n,m} \sum_{n',m'} \langle m|A|n\rangle\langle n'|B|m'\rangle\langle\langle nm|n'm'\rangle\rangle \\ &= \sum_{n,m} \langle m|A|n\rangle\langle n|B|m\rangle \\ &= \sum_m \langle m|AB|m\rangle \\ &= \text{Tr}(AB) \end{aligned} \quad (3.42)$$

である。第2等号で、(3.34) を、第3, 第4等号で $\{|n\rangle\}$ の完全性を用いた。

⁹⁾(3.35) は、

$$|\bullet\rangle\rangle \longleftrightarrow \bullet \quad (3.37)$$

を意味する。

• $= 1 = \sum_n |n\rangle\langle n|$ のときは、(3.31),(3.40) は、

$$|1\rangle\rangle = \sum_n |nn\rangle\rangle, \quad (3.43)$$

$$\langle\langle 1| = \sum_n \langle\langle nn| \quad (3.44)$$

となる。対応 (3.35),(3.36) によると、

$$|1\rangle\rangle \longleftrightarrow \sum_n |n\rangle\langle n| = 1, \quad (3.45)$$

$$\langle\langle 1|\cdots \longleftrightarrow \text{Tr}\left(\sum_n |n\rangle\langle n|\cdots\right) = \text{Tr}(\cdots) \quad (3.46)$$

を得る。

超演算子 $a_l, a_l, \tilde{a}_l, \tilde{a}_l^\dagger$ を Liouville 空間 \mathcal{L} の元に、

$$a_l |nm\rangle\rangle = |a_l n\rangle\langle m|, \quad (3.47)$$

$$\tilde{a}_l |nm\rangle\rangle = |n\rangle\langle m| a_l^\dagger \quad (3.48)$$

および、

$$a_l^\dagger |nm\rangle\rangle = |a_l^\dagger n\rangle\langle m|, \quad (3.49)$$

$$\tilde{a}_l^\dagger |nm\rangle\rangle = |n\rangle\langle m| a_l \quad (3.50)$$

として作用するものとして定義する。対応 (3.35)、即ち (3.37) により、 $a_l, a_l, \tilde{a}_l, \tilde{a}_l^\dagger$ は演算子に (3.29) のように作用する超演算子に対応する。上の 4 式より、超演算子に対する交換関係

$$[a_l, a_m^\dagger] = \delta_{lm}, \quad [\tilde{a}_l, \tilde{a}_m^\dagger] = \delta_{lm} \quad (3.51)$$

を得る。このほかの交換関係はゼロである。

今、規格直交完全系 $\{|n\rangle\rangle$ として、(2.43) の $\{|\{n_i\}\rangle\rangle$ を取る。このとき、

$$a_l a_l^\dagger |nm\rangle\rangle = n_i |nm\rangle\rangle, \quad (3.52)$$

$$\tilde{a}_l \tilde{a}_l^\dagger |nm\rangle\rangle = m_i |nm\rangle\rangle \quad (3.53)$$

が成り立つ。また、

$$a_l |00\rangle\rangle = \tilde{a}_l |00\rangle\rangle = 0 \quad (3.54)$$

となる。

対応 (3.37),(3.45) および (3.47),(3.49) より、 a_l, a_m^\dagger から構成される任意の演算子 A に対して、

$$|A\rangle\rangle = A|1\rangle\rangle \quad (3.55)$$

を得る。ただし、左辺の A は \mathcal{O} の元であり、右辺の A は対応する超演算子である。(3.14) を満たす $\rho(t)$ を考える。ただし、 H として (2.28) を考える。このとき、 $\rho(t)$ は a_l, a_m^\dagger から構成されるはずなので、(3.55) が使えて、

$$|\rho(t)\rangle\rangle = \rho(t)|1\rangle\rangle \quad (3.56)$$

を得る。また、(3.33) と (3.47)-(3.50) より、

$$\langle\langle nm|a_l^\dagger = \langle\langle |n\rangle\langle m|a_l^\dagger|, \quad (3.57)$$

$$\langle\langle nm|\tilde{a}_l^\dagger = \langle\langle a_l|n\rangle\langle m||, \quad (3.58)$$

$$\langle\langle nm|a_l = \langle\langle |n\rangle\langle m|a_l|, \quad (3.59)$$

$$\langle\langle nm|\tilde{a}_l = \langle\langle a_l^\dagger|n\rangle\langle m|| \quad (3.60)$$

である。(3.55) と同様に、

$$\langle\langle A| = \langle\langle 1|A \quad (3.61)$$

を得る。(3.55),(3.61),(3.42) より、

$$\langle\langle A|B\rangle\rangle = \langle\langle 1|A|B\rangle\rangle = \langle\langle 1|AB|1\rangle\rangle = \text{Tr}(AB) = \text{Tr}(BA) \quad (3.62)$$

となる。時に、 $B = \rho(t)$ として、

$$\langle\langle A|\rho(t)\rangle\rangle = \langle\langle 1|A|\rho(t)\rangle\rangle = \text{Tr}(\rho(t)A) \quad (3.63)$$

を得る。

3.2.1 対応関係

明らかに、

$$|nm\rangle\rangle \longleftrightarrow |n\rangle \otimes |m\rangle \sim, \quad (3.64)$$

$$|1\rangle\rangle \longleftrightarrow |I\rangle, \quad (3.65)$$

$$\langle\langle 1| \longleftrightarrow \langle I| = \langle 1|, \quad (3.66)$$

$$|\rho(t)\rangle\rangle = \rho(t)|1\rangle\rangle \longleftrightarrow |0(t)\rangle \quad (3.67)$$

の対応がある。また、対応 (3.35),(3.45),(3.46) は、

$$|nm\rangle\rangle \longleftrightarrow |n\rangle\langle m|, \quad (3.68)$$

$$|1\rangle\rangle \longleftrightarrow \sum_n |n\rangle\langle n| = 1, \quad (3.69)$$

$$\langle\langle 1|\dots \longleftrightarrow \text{Tr}\left(\sum_n |n\rangle\langle n|\dots\right) = \text{Tr}(\dots) \quad (3.70)$$

であった。この対応により、 $a_l, a_l, \tilde{a}_l, \tilde{a}_l^\dagger$ は、

$$a_l \bullet = a_l \cdot \bullet, \quad \tilde{a}_l \bullet = \bullet \cdot a_l^\dagger, \quad (3.71)$$

$$a_l^\dagger \bullet = a_l^\dagger \cdot \bullet, \quad \tilde{a}_l^\dagger \bullet = \bullet \cdot a_l \quad (3.72)$$

という超演算子にかわる。このとき、(3.14) は、

$$i\hbar \frac{\partial}{\partial t} \rho(t) = \hat{H} \rho(t) \quad (3.73)$$

となる。これは (3.16) に相当する。§ 3.1 までは、チルダ粒子は何か神秘的な、実在するのかわからないのか分からない代物に見えたが、超演算子の見方をすると、ただの道具に見える。

(3.19) の意味は、(3.70) によると、

$$\text{Tr}(\hat{H}\bullet) = 0 \quad (3.74)$$

である。ここで、

$$\hat{H}\bullet = [H, \bullet] + i\Pi\bullet \quad (3.75)$$

であり、 Π が (3.15) のときは、

$$\hat{H}\bullet = [H, \bullet] + i\hbar\kappa([a\bullet, a^\dagger] + [a, \bullet a^\dagger]) + 2i\hbar\kappa\bar{n}[a, [\bullet, a^\dagger]] \quad (3.76)$$

である。一般に、

$$\text{Tr}([A, B]) = 0 \quad (3.77)$$

であるから、 $\Pi\bullet$ が $[A, B]$ の形でかける¹⁰⁾ なら、(3.74) が成り立つ。 Π から $\hat{\Pi}$ は次のように一意的に得られる：

$$\begin{aligned} \frac{1}{\hbar}\Pi\bullet &= \kappa([a\bullet, a^\dagger] + [a, \bullet a^\dagger]) + 2\kappa\bar{n}[a, [\bullet, a^\dagger]] \\ &= \kappa(a\bullet a^\dagger - a^\dagger a\bullet + a\bullet a^\dagger - \bullet a^\dagger a) + 2\kappa\bar{n}(a\bullet a^\dagger - a a^\dagger\bullet - \bullet a^\dagger a + a^\dagger\bullet a) \\ &= \kappa(a\tilde{a}\bullet - a^\dagger a\bullet + a\tilde{a}\bullet - \tilde{a}\bullet a) + 2\kappa\bar{n}(a\tilde{a}\bullet - a a^\dagger\bullet - \tilde{a}\bullet a + a^\dagger\tilde{a}^\dagger\bullet) \\ &= \kappa(a\tilde{a} - a^\dagger a + a\tilde{a} - \tilde{a}\tilde{a}^\dagger)\bullet + 2\kappa\bar{n}(a\tilde{a} - a a^\dagger - \tilde{a}\tilde{a}^\dagger + a^\dagger\tilde{a}^\dagger)\bullet \\ &= \left(-\kappa[(1 + 2\bar{n})(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger\tilde{a}) - 2(1 + \bar{n})a\tilde{a} - 2\bar{n}a^\dagger\tilde{a}^\dagger] - 2\kappa\bar{n} \right)\bullet \equiv \frac{1}{\hbar}\hat{\Pi}\bullet \end{aligned} \quad (3.78)$$

このように、(3.68),(3.69),(3.70) により、Liouville 空間 \mathcal{L} を持ち出さないことも可能であるが、 \mathcal{L} で考えた方が都合がよい。特に、熱状態条件

$$\langle\langle 1|a_l = \langle\langle 1|\tilde{a}_l^\dagger, \quad (3.79)$$

$$\langle\langle 1|a_l^\dagger = \langle\langle 1|\tilde{a}_l \quad (3.80)$$

が使えるのが利点である。(3.79) は、規格直交完全系 $\{|n\rangle\}$ として、(2.43) の $\{|\{n_i\}\rangle\}$ を取り、

$$\begin{aligned} \sum_{n_l=0}^{\infty} |n_l\rangle_l \langle n_l| a_l &= \sum_{n_l=0}^{\infty} \sqrt{n_l+1} |n_l\rangle_l \langle n_l+1| \\ &= \sum_{n_l=1}^{\infty} \sqrt{n_l} |n_l-1\rangle_l \langle n_l| \\ &= a_l \sum_{n_l=0}^{\infty} |n_l\rangle_l \langle n_l| \end{aligned} \quad (3.81)$$

を用いばいられる。(3.80) も同様である。(3.79),(3.80) より、 a_l, a_m^\dagger から構成される任意の演算子 A に対して、

$$\langle\langle 1|A^\dagger = \langle\langle 1|\tilde{A} \quad (3.82)$$

を得る¹¹⁾。

以下で、 $|0(t)\rangle, \langle 1|$ と書いたとき、§ 3.1 の意味と思ってもよいし、 $|\rho(t)\rangle, \langle\langle 1|$ の意味と思ってもよい。

¹⁰⁾ A, B が $[C, D]$ や、 $\{C, D\}, \{C, \{D, E\}\}$ などの形でも良い。

¹¹⁾ 同様に、(3.11),(3.12) から

$$\langle 1|A^\dagger = \langle 1|\tilde{A}. \quad (3.83)$$

3.3 ハイゼンベルグ描像

(3.16) はシュレーディンガー描像である。ハイゼンベルグ描像では、ケット真空は時間発展せず、演算子のほうが

$$A(t) = e^{i\hat{H}t/\hbar} A e^{-i\hat{H}t/\hbar}, \quad (3.84)$$

$$i\hbar \frac{d}{dt} A(t) = [A(t), \hat{H}(t)] \quad (3.85)$$

に従って時間発展する。期待は、どちらの描像でも同じである：

$$\begin{aligned} \langle 1|A(t)|0\rangle &= \langle 1|e^{i\hat{H}t/\hbar} A e^{-i\hat{H}t/\hbar}|0\rangle \\ &= \langle 1|A e^{-i\hat{H}t/\hbar}|0\rangle \\ &= \langle 1|A|0(t)\rangle. \end{aligned} \quad (3.86)$$

ただし、第2等号で(3.19)を用いた。ハット・ハミルトニアンが

$$\hat{H} = H - \tilde{H} \quad (3.87)$$

のときは、 A が非チルダ演算子なら $A(t)$ も非チルダ演算子であり、 A がチルダ演算子なら $A(t)$ もチルダ演算子である。散逸を表す $\hat{\Pi}$ があると、 $A(t)$ に非チルダとチルダとが混ざる。また、 $\hat{\Pi}$ があると \hat{H} は一般にエルミートでないので、 $e^{-i\hat{H}t/\hbar}$ はユニタリーでない。よって、

$$a^\dagger(t) \equiv e^{i\hat{H}t/\hbar} a^\dagger e^{-i\hat{H}t/\hbar} \neq [e^{i\hat{H}t/\hbar} a e^{-i\hat{H}t/\hbar}]^\dagger \equiv [a(t)]^\dagger \quad (3.88)$$

である。

4 量子 Langevin 方程式の導出

以下では、 $\hbar = 1$ とする。

4.1 S-L Langevin 方程式

4.1.1 微視的モデル

角振動数 ω_0 の量子調和振動子系（注目系）が、角振動数 $\omega_l (l = 1, 2, \dots)$ の無数の量子調和振動子系（熱浴）と相互作用している系を考える。全系のハミルトニアン H は、

$$H = H_S + H_R + H_1, \quad (4.1)$$

$$H_S = \omega_0 a^\dagger a, \quad (4.2)$$

$$H_R = \sum_l \omega_l b_l^\dagger b_l \quad (4.3)$$

であり、相互作用 H_1 は、

$$H_1 = a^\dagger R + R^\dagger a, \quad R \stackrel{\text{def}}{=} \sum_l g_l b_l \quad (4.4)$$

とする。 g_l は結合定数である。各演算子は、正準交換関係

$$[a, a^\dagger] = 1, \quad [b_l, b_m^\dagger] = \delta_{lm} \quad (4.5)$$

を満たしている。このほかの交換関係は 0 である。

初期時刻 $t = 0$ で、全系の状態 $\rho_{tot}(t)$ は、

$$\rho_{tot}(0) = \rho(0) \otimes \rho_R, \quad (4.6)$$

$$\rho_R = \frac{e^{-H/T}}{\text{Tr}_R(e^{-H/T})} \quad (4.7)$$

であったとする¹²⁾。今、

$$\langle \dots \rangle_R \equiv \text{Tr}_R(\rho_R \dots) \quad (\dots \text{は } b_l, b_l^\dagger \text{ でかける}) \quad (4.8)$$

とかくと、

$$\langle b_l \rangle_R = \langle b_l^\dagger \rangle_R = 0, \quad (4.9)$$

$$\langle b_l^\dagger b_m \rangle_R = \delta_{lm} \bar{n}_l, \quad \bar{n}_l = \frac{1}{e^{\omega_l/T} - 1} \quad (4.10)$$

となる。

ハイゼンベルグ描像、相互作用描像の演算子 $X(t)$, $X^I(t)$ は、シュレーディンガー描像での演算子を X とすると、

$$X(t) = e^{iHt} X e^{-iHt}, \quad (4.11)$$

$$X^I(t) = e^{i(H_S+H_R)t} X e^{-i(H_S+H_R)t} \quad (4.12)$$

¹²⁾この章と次の章で、この仮定が本質的に重要な役割を果たす。この仮定を外すと、導出できないのものが多く存在する。

で与えられる。それぞれ、次の微分方程式に従う：

$$\frac{d}{dt}X(t) = i[H(t), X(t)], \quad (4.13)$$

$$\frac{d}{dt}X^I(t) = i[H_S^I(t) + H_R^I(t), X^I(t)]. \quad (4.14)$$

特に、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}b_l^I(t) &= i[H_R^I(t), b_l^I(t)], \\ &= -i\omega_l b_l^I(t), \\ b_l^I(t) &= b_l e^{-i\omega_l t} \end{aligned} \quad (4.15)$$

である。また、

$$\frac{d}{dt}b_l(t) = i[H_R(t) + H_1(t), b_l(t)] = -i\omega_l b_l(t) - ig_l^* a(t), \quad (4.16)$$

$$\frac{d}{dt}a_l(t) = i[H_S(t) + H_1(t), a_l(t)] = -i\omega_0 a(t) - iR(t). \quad (4.17)$$

(4.16) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}[b_l(t)e^{i\omega_l t}] &= -ig_l^* a(t)e^{i\omega_l t}, \\ b_l(t)e^{i\omega_l t} - b_l &= -ig_l^* \int_0^t ds a(s)e^{i\omega_l s}, \\ b_l(t) &= b_l^I(t) - ig_l^* \int_0^t ds a(s)e^{-i\omega_l(t-s)} \end{aligned} \quad (4.18)$$

と解ける。(4.18) を (4.17) に代入して、

$$\frac{d}{dt}a(t) = -i\omega_0 a(t) - \sum_l |g_l|^2 \int_0^t ds a(s)e^{-i\omega_l(t-s)} - iR^I(t) \quad (4.19)$$

を得る。ここで、

$$R^I(t) = \sum_l g_l b_l^I(t), \quad R(t) = \sum_l g_l b_l(t) \quad (4.20)$$

を用いた。(4.19) は、

$$\frac{d}{dt}[a(t)e^{i\omega_0 t}] = - \sum_l |g_l|^2 \int_0^t ds a(s)e^{-i\omega_l(t-s)}e^{i\omega_0 t} - iR^I(t)e^{i\omega_0 t}$$

と書けるから、

$$\bar{X}(t) \stackrel{\text{def}}{=} X(t)e^{i\omega_0 t} \quad X(t) = a(t), R(t), R^I(t) \quad (4.21)$$

とすると、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\bar{a}(t) &= - \sum_l |g_l|^2 \int_0^t ds \bar{a}(s)e^{-i\omega_0 s}e^{-i\omega_l(t-s)}e^{i\omega_0 t} - i\bar{R}^I(t) \\ &= - \sum_l |g_l|^2 \int_0^t du \bar{a}(t-u)e^{-i(\omega_l-\omega_0)u} - i\bar{R}^I(t) \end{aligned} \quad (4.22)$$

となる。

4.1.2 量子 Langevin 方程式への移行

今、 \sum_l を、

$$\sum_l |g_l|^2 f(\omega_l) = \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) |g(\omega)|^2 f(\omega) \quad (4.23)$$

で近似すると、(4.22) は、

$$\frac{d}{dt} \bar{a}(t) = I(t) - i\bar{R}^I(t), \quad (4.24)$$

$$\begin{aligned} I(t) &\equiv \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) |g(\omega)|^2 \int_0^t du \bar{a}(t-u) e^{-i(\omega-\omega_0)u} \\ &= \int_0^t du \bar{a}(t-u) \int_{-\omega_0}^\infty d\omega' \mathcal{D}(\omega'+\omega_0) |g(\omega'+\omega_0)|^2 e^{-i\omega'u} \end{aligned} \quad (4.25)$$

となる。今、熱浴の ω_l は ω_0 の周りに、次のように分布しているとする：

$$|g(\omega)|^2 \mathcal{D}(\omega) = \begin{cases} |g|^2 \mathcal{D}_0 & \text{for } |\omega - \omega_0| \leq \Delta\omega \\ 0 & \text{for } |\omega - \omega_0| > \Delta\omega \end{cases} \quad (4.26)$$

これは、熱浴に個性が無いことを意味する。ただし、

$$0 < \Delta\omega \ll \omega_0 \quad (4.27)$$

であるべきである¹³⁾。このとき、

$$I(t) \approx |g|^2 \mathcal{D}_0 \int_0^t du \bar{a}(t-u) \int_{-\Delta\omega}^{\Delta\omega} d\omega' e^{-i\omega'u} \quad (4.29)$$

となる。ここで、

$$\int_{-\Delta\omega}^{\Delta\omega} d\omega' e^{-i\omega'u} = 2\Delta\omega \frac{\sin(\Delta\omega u)}{\Delta\omega u} \xrightarrow{\Delta\omega u \rightarrow \infty} 2\pi\delta(u) \quad (4.30)$$

である。この近似の下で、以下で導出する Langevin 方程式の記述する時間スケールは、

$$t \gg \tau_R \quad (4.31)$$

である。(4.30) を (4.29) に代入して、

$$I(t) \approx \kappa \bar{a}(t), \quad \kappa = \pi |g|^2 \mathcal{D}_0 \quad (4.32)$$

を得る。これを (4.24) に代入すると、

$$\frac{d}{dt} \bar{a}(t) = \kappa \bar{a}(t) - i\bar{R}^I(t) \quad (4.33)$$

となる。これは、

$$\frac{d}{dt} a(t) = -i\omega_0 a(t) - \kappa a(t) - iR^I(t) \quad (4.34)$$

¹³⁾ $1/\Delta\omega$ は熱浴モード間の相関時間 τ_R の目安となる：

$$\tau_R \approx \pi/\Delta\omega. \quad (4.28)$$

を意味する。これが Senizky-Lax の Langevin 方程式である。

(4.33) の乱雑平均 $\langle \dots \rangle_R$ を取ると、

$$\frac{d}{dt} \langle \bar{a}(t) \rangle_R = -\kappa \langle \bar{a}(t) \rangle_R \quad (4.35)$$

となる。ただし、(4.20) と (4.9) から得られる

$$\langle R^I(t) \rangle_R = 0 \quad (4.36)$$

を用いた。これより、 $\langle \bar{a}(t) \rangle_R$ の緩和時間は

$$\tau = \frac{1}{\kappa} \quad (4.37)$$

である。乱雑平均を取っているので、これは巨視的な物理量の特徴的な時間スケールを与えるものと解釈できる。従って、Langevin 方程式 (4.34) の記述する時間スケールは、(4.31),(4.37) より

$$\frac{\pi}{\Delta\omega} \approx \tau_R \ll t \ll \tau = \frac{1}{\kappa} \quad (4.38)$$

であるべきである。

4.1.3 $R^I(t)$ の性質

(4.34) 右辺の $R^I(t)$ について調べる。(4.20) より、

$$\begin{aligned} [R^I(t), R^I(s)^\dagger] &= \sum_l \sum_m g_l g_m^* e^{-i\omega_l t + i\omega_m s} [b_l, b_m^\dagger] \\ &= \sum_l |g_l|^2 e^{-i\omega_l(t-s)} \end{aligned} \quad (4.39)$$

である。また、(4.10) より、

$$\begin{aligned} \langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R &= \sum_l \sum_m g_l g_m^* e^{-i\omega_l t + i\omega_m s} \langle b_m^\dagger b_l \rangle_R \\ &= \sum_l \sum_m g_l g_m^* e^{-i\omega_l t + i\omega_m s} \delta_{lm} \bar{n}_l \\ &= \sum_l |g_l|^2 \bar{n}_l e^{-i\omega_l(t-s)} \end{aligned} \quad (4.40)$$

であり、この2式より、

$$\begin{aligned} \langle R^I(t) R^I(s)^\dagger \rangle &= \langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R + \langle [R^I(t), R^I(s)^\dagger] \rangle_R \\ &= \sum_l |g_l|^2 (\bar{n}_l + 1) e^{-i\omega_l(t-s)} \end{aligned} \quad (4.41)$$

となる。(4.23),(4.26) の下で、

$$\begin{aligned} \sum_l |g_l|^2 f_l e^{-i\omega_l(t-s)} &= \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) |g(\omega)|^2 f(\omega) e^{-i\omega(t-s)} \\ &= |g|^2 \mathcal{D}_0 \int_{\omega_0 - \Delta\omega}^{\omega_0 + \Delta\omega} d\omega f(\omega) e^{-i\omega(t-s)} \\ (f_l &= 1, \bar{n}_l, \bar{n}_l + 1) \end{aligned}$$

である。さらに (4.27) より、

$$\sum_l |g_l|^2 f_l e^{-i\omega_l(t-s)} = |g|^2 \mathcal{D}_0 f(\omega_0) e^{-i\omega_0(t-s)} \int_{-\Delta\omega}^{\Delta\omega} d\omega' e^{-i\omega'(t-s)}$$

で、さらに (4.30) より、

$$\sum_l |g_l|^2 f_l e^{-i\omega_l(t-s)} = 2\kappa f(\omega_0) \delta(t-s) \quad (4.42)$$

を得る。以上の近似の下、

$$[R^I(t), R^I(s)^\dagger] = 2\kappa \delta(t-s), \quad (4.43)$$

$$\langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R = 2\kappa \bar{n} \delta(t-s) \quad \left(\bar{n} = \frac{1}{e^{\omega_0/T} - 1} \right), \quad (4.44)$$

$$\langle R^I(t) R^I(s)^\dagger \rangle_R = 2\kappa (\bar{n} + 1) \delta(t-s) \quad (4.45)$$

となる。また、(4.9) より、

$$\langle R^I(t) \rangle_R = \langle R^I(t)^\dagger \rangle_R = 0 \quad (4.46)$$

である。

(4.20) に (4.15) を代入し、近似 (4.23) をすると、

$$R^I(t) = \sum_l g_l b_l e^{-i\omega_l t} = \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) g(\omega) b(\omega) e^{-i\omega t} \quad (4.47)$$

を得る。この意味で $R^I(t)$ は $b(\omega)$ のフーリエ変換のようなものである。

4.1.4 Boltzmann 方程式の導出

$a^\dagger(t)a(t)$ の時間微分は、(4.17) より、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} [a^\dagger(t)a(t)] &= \frac{da^\dagger(t)}{dt} a(t) + a^\dagger(t) \frac{da(t)}{dt} \\ &= [i\omega_0 a^\dagger(t) + iR(t)^\dagger] a(t) + a^\dagger(t) [-i\omega_0 a(t) - iR(t)] \\ &= -ia^\dagger(t)R(t) + iR(t)^\dagger a(t) \end{aligned} \quad (4.48)$$

となる。(4.21) の記号でかくと、

$$\frac{d}{dt} [\bar{a}^\dagger(t)\bar{a}(t)] = -i\bar{a}^\dagger(t)\bar{R}(t) + i\bar{R}(t)^\dagger\bar{a}(t) \quad (4.49)$$

である。ところで、(4.18) を (4.20) に代入すると、

$$\bar{R}(t) = \bar{R}^I(t) - iI(t)$$

であり、 $I(t)$ に (4.32) を代入して、

$$\bar{R}(t) = \bar{R}^I(t) - i\kappa\bar{a}(t) \quad (4.50)$$

となるから、(4.49) は、

$$\frac{d}{dt} [\bar{a}^\dagger(t)\bar{a}(t)] = -2\kappa\bar{a}^\dagger(t)\bar{a}(t) - i\bar{a}^\dagger(t)\bar{R}^I(t) + i\bar{R}^I(t)^\dagger\bar{a}(t) \quad (4.51)$$

となる。これは、

$$\frac{d}{dt}[a^\dagger(t)a(t)] = -2\kappa a^\dagger(t)a(t) - ia^\dagger(t)R^I(t) + iR^I(t)^\dagger a(t) \quad (4.52)$$

とも書ける。この乱雑平均から

$$\frac{d}{dt}\langle a^\dagger(t)a(t) \rangle_R = -2\kappa\langle a^\dagger(t)a(t) \rangle_R - i\langle a^\dagger(t)R^I(t) \rangle_R + i\langle R^I(t)^\dagger a(t) \rangle_R \quad (4.53)$$

を得る。

(4.33) は、

$$\frac{d}{dt}[\bar{a}(t)e^{\kappa t}] = -i\bar{R}^I(t)e^{\kappa t} \quad (4.54)$$

と書きなおせる。これを解くと、

$$\begin{aligned} \bar{a}(t)e^{\kappa t} - a &= -i \int_0^t ds \bar{R}^I(s)e^{\kappa s} \\ \bar{a}(t) &= ae^{-\kappa t} - i \int_0^t ds \bar{R}^I(s)e^{-\kappa(t-s)} \\ a(t) &= ae^{-\kappa t}e^{-i\omega_0 t} - \int_0^t ds R^I(s)e^{-(\kappa-i\omega_0)(t-s)} \end{aligned} \quad (4.55)$$

となる。これに右から $R^I(t)^\dagger$ を掛けて、乱雑平均 $\langle \dots \rangle_R$ を取ると、

$$\begin{aligned} \langle a(t)R^I(t)^\dagger \rangle_R &= \langle aR^I(t)^\dagger \rangle_R e^{-\kappa t} e^{-i\omega_0 t} - i \int_0^t ds \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R e^{-(\kappa-i\omega_0)(t-s)} \\ &= 0 - i \int_0^t ds 2\kappa(\bar{n}+1)\delta(s-t)e^{-(\kappa-i\omega_0)(t-s)} \\ &= -i\kappa(\bar{n}+1) \end{aligned} \quad (4.56)$$

を得る。ただし、第2等号で a は $\langle \dots \rangle_R$ の外に出せることと (4.46)、および (4.45) を用いた。上式の†から、

$$\langle R^I(t)a(t)^\dagger \rangle_R = i\kappa(\bar{n}+1) \quad (4.57)$$

を得る。ただし、

$$\begin{aligned} \langle AB \rangle_R^\dagger &= \left(\sum_\mu \langle \mu | \rho_R AB | \mu \rangle \right)^\dagger \\ &= \sum_\mu \langle \mu | B^\dagger A^\dagger \rho_R^\dagger | \mu \rangle \\ &= \sum_{\mu, \nu} \langle \mu | B^\dagger A^\dagger | \nu \rangle \langle \nu | \rho_R^\dagger | \mu \rangle \\ &= \sum_{\mu, \nu} \langle \nu | \rho_R^\dagger | \mu \rangle \langle \mu | B^\dagger A^\dagger | \nu \rangle \\ &= \sum_\nu \langle \nu | \rho_R^\dagger B^\dagger A^\dagger | \nu \rangle \\ &= \text{Tr}_R(\rho_R B^\dagger A^\dagger) \\ &= \langle B^\dagger A^\dagger \rangle_R \end{aligned} \quad (4.58)$$

を用いた。ここで、 $\{|\mu\rangle\},\{|\nu\rangle\}$ は熱浴についての完全系である。第4等号で $\langle\nu|\rho_R^\dagger|\mu\rangle$ がc数であることを使った。(4.55)に左から $R^I(t)^\dagger$ を掛けて、乱雑平均 $\langle\cdots\rangle_R$ を取ると、

$$\begin{aligned}\langle R^I(t)^\dagger a(t)\rangle_R &= \langle R^I(t)^\dagger a\rangle_{Re^{-\kappa t}e^{-i\omega_0 t}} - i \int_0^t ds \langle R^I(t)^\dagger R^I(s)\rangle_{Re^{-(\kappa-i\omega_0)(t-s)}} \\ &= 0 - i \int_0^t ds 2\kappa\bar{n}\delta(s-t)e^{-(\kappa-i\omega_0)(t-s)} \\ &= -i\kappa\bar{n}\end{aligned}\tag{4.59}$$

を得る。これの \dagger から、

$$\langle a(t)^\dagger R^I(t)\rangle_R = i\kappa\bar{n}\tag{4.60}$$

を得る。(4.59),(4.60)を(4.53)に代入して、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\langle a^\dagger(t)a(t)\rangle_R &= -2\kappa\langle a^\dagger(t)a(t)\rangle_R + \kappa\bar{n} + \kappa\bar{n} \\ &= -2\kappa[\langle a^\dagger(t)a(t)\rangle_R - \bar{n}]\end{aligned}\tag{4.61}$$

を得る。この式の量子力学的平均

$$\langle\cdots\rangle \equiv \text{Tr}(\rho(0)\cdots)\tag{4.62}$$

を取ると¹⁴⁾、Boltzmann方程式

$$\frac{d}{dt}n(t) = -2\kappa[n(t) - \bar{n}],\tag{4.63}$$

$$n(t) \equiv \langle\langle a^\dagger(t)a(t)\rangle_R\rangle\tag{4.64}$$

を得る。

4.2 柴田・橋爪による S-H Langevin 方程式の導出

4.2.1 TC 型の運動方程式

注目系のハミルトニアンを H_S , 熱浴のハミルトニアン H_R , 相互作用を H_1 とし、

$$\hat{H} = H - \tilde{H},\tag{4.65}$$

$$H = H_0 + H_1, H_0 = H_S + H_R\tag{4.66}$$

とする。相互作用描像の演算子は、

$$X^I(t) = e^{i\hat{H}_0 t} X e^{-i\hat{H}_0 t}\tag{4.67}$$

で定義され、ハイゼンベルク描像の演算子は、

$$X(t) = \hat{V}^{-1}(t) X \hat{V}(t),\tag{4.68}$$

$$i \frac{d}{dt} \hat{V}(t) = \hat{H} \hat{V}(t)\tag{4.69}$$

¹⁴⁾ここで $\rho(0)$ は、(4.6) のものである。なお、

$$\begin{aligned}\langle\langle a^\dagger(t)a(t)\rangle_R\rangle &= \text{Tr}[\rho(0)\text{Tr}_R(\rho_R a^\dagger(t)a(t))] \\ &= \text{Tr}_{tot}[\rho_{tot}(0)a^\dagger(t)a(t)]\end{aligned}$$

である。

で定義される。運動方程式は、

$$\frac{d}{dt}A^I(t) = i[\hat{H}_0^I(t), A^I(t)], \quad (4.70)$$

$$\frac{d}{dt}A(t) = i[\hat{H}(t), A(t)] \quad (4.71)$$

である。

$\hat{U}(t)$ を、

$$\hat{V}(t) = e^{-i\hat{H}_0 t} \hat{U}(t) \quad (4.72)$$

によって定義する。この式を微分すると、

$$\begin{aligned} -i\hat{H}e^{-i\hat{H}_0 t} \hat{U}(t) &= -i\hat{H}_0 e^{-i\hat{H}_0 t} \hat{U}(t) + e^{-i\hat{H}_0 t} \frac{d}{dt} \hat{U}(t) \\ \frac{d}{dt} \hat{U}(t) &= -i\hat{H}_1^I(t) \hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.73)$$

を得る。初期条件は、 $\hat{U}(0) = 1$ である。

$$\hat{U}(t, s) = \hat{U}(t) \hat{U}^{-1}(s) \quad (4.74)$$

とすると、これは、

$$\frac{\partial}{\partial t} \hat{U}(t, s) = -i\hat{H}_1^I(t) \hat{U}(t, s) \quad (4.75)$$

を満たす。また、

$$\hat{U}(t, s) = \hat{U}(t, t') \hat{U}(t', s), \quad (4.76)$$

$$\hat{U}(t, t) = 1 \quad (4.77)$$

を満たす。これらより、

$$\hat{U}(s, t) = \hat{U}^{-1}(t, s) \quad (4.78)$$

である。

射影演算子 \mathcal{P} を

$$\mathcal{P}^2 = \mathcal{P}, \quad (4.79)$$

$$\tilde{\mathcal{P}} = \mathcal{P} \quad (4.80)$$

を満たす任意の演算子とし、

$$\mathcal{Q} \stackrel{\text{def}}{=} 1 - \mathcal{P} \quad (4.81)$$

とすると、

$$\begin{aligned} \mathcal{Q}^2 &= (1 - \mathcal{P})^2 = 1 - 2\mathcal{P} + \mathcal{P}^2 = 1 - \mathcal{P} \\ &= \mathcal{Q}, \end{aligned} \quad (4.82)$$

$$\tilde{\mathcal{Q}} = \mathcal{Q}, \quad (4.83)$$

$$\mathcal{Q}\mathcal{P} = \mathcal{P} - \mathcal{P}^2 = 0, \quad (4.84)$$

$$\mathcal{P}\mathcal{Q} = \mathcal{P} - \mathcal{P}^2 = 0 \quad (4.85)$$

が得られる。今、

$$\hat{x}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{Q}\hat{U}(t), \quad \hat{y}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{P}\hat{U}(t) \quad (4.86)$$

とする。(4.73) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\hat{U}(t) &= -i\hat{H}_1^I(t)[\mathcal{Q} + \mathcal{P}]\hat{U}(t) \\ &= -i\hat{H}_1^I(t)\hat{x}(t) - i\hat{H}_1^I(t)\hat{y}(t) \end{aligned} \quad (4.87)$$

または、(4.82),(4.80) を用いて、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\hat{U}(t) &= -i\hat{H}_1^I(t)[\mathcal{Q}^2 + \mathcal{P}^2]\hat{U}(t) \\ &= -i\hat{H}_1^I(t)\mathcal{Q}\hat{x}(t) - i\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{y}(t) \end{aligned} \quad (4.88)$$

ともかける。これに左から \mathcal{Q} を作用させて、

$$\frac{d}{dt}\hat{x}(t) = -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{x}(t) - i\hat{H}_{1,QP}^I(t)\hat{y}(t) \quad (4.89)$$

を得る。ここで、

$$\hat{H}_{1,QQ}^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{Q}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{Q}, \quad \hat{H}_{1,QP}^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{Q}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P} \quad (4.90)$$

である。(4.89) より、 $\hat{W}(t)$ を任意の演算子として、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}[\hat{W}(t)\hat{x}(t)] &= -i\hat{W}(t)[\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{x}(t) + \hat{H}_{1,QP}^I(t)\hat{y}(t)] + \frac{d\hat{W}(t)}{dt}\hat{x}(t) \\ &= \hat{W}(t)[-i\hat{H}_{1,QQ}^I(t) + \hat{W}^{-1}(t)\frac{d\hat{W}(t)}{dt}]\hat{x}(t) - i\hat{W}(t)\hat{H}_{1,QP}^I(t)\hat{y}(t) \end{aligned} \quad (4.91)$$

である。今、 $\hat{W}_{QQ}(t)$ を

$$\begin{aligned} -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t) + \hat{W}_{QQ}^{-1}(t)\frac{d\hat{W}_{QQ}(t)}{dt} &= 0, \\ \frac{d\hat{W}_{QQ}(t)}{dt} &= i\hat{W}_{QQ}(t)\hat{H}_{1,QP}^I(t) \end{aligned} \quad (4.92)$$

を満たす、初期条件

$$\hat{W}_{QQ}(0) = 1 \quad (4.93)$$

の解とする。このとき、(4.91) より、

$$\frac{d}{dt}[\hat{W}_{QQ}(t)\hat{x}(t)] = -\hat{W}_{QQ}(t)i\hat{H}_{1,QP}^I(t)\hat{y}(t) \quad (4.94)$$

を得る。これを解くと、

$$\hat{W}_{QQ}(t)\hat{x}(t) - \hat{W}_{QQ}(0)\hat{x}(0) = -i \int_0^t ds \hat{W}_{QQ}(s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\hat{y}(s)$$

であり、(4.93) と (4.86) より $\hat{W}_{QQ}(0)\hat{x}(0) = \mathcal{Q}$ である。上式を $\hat{x}(t)$ について解いて、

$$\hat{x}(t) = \hat{W}_{QQ}^{-1}(t)\mathcal{Q} - i \int_0^t ds \hat{W}_{QQ}^{-1}(t)\hat{W}_{QQ}(s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\hat{y}(s) \quad (4.95)$$

を得る。今、

$$\hat{U}_{QQ}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{W}_{QQ}^{-1}(t), \quad (4.96)$$

$$\hat{U}_{QQ}(s, t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t) \quad (4.97)$$

とする。このとき、

$$\hat{U}_{QQ}(t, t) = 1, \quad (4.98)$$

$$\hat{U}_{QQ}(t, u)\hat{U}_{QQ}(u, s) = \hat{U}_{QQ}(t, s), \quad (4.99)$$

$$\hat{U}_{QQ}(s, t) = \hat{U}_{QQ}^{-1}(t, s) \quad (4.100)$$

となる。これより、

$$\begin{aligned} \hat{W}_{QQ}^{-1}(t)\hat{W}_{QQ}(s) &= \hat{U}_{QQ}(t, 0)\hat{U}_{QQ}(0, s) \\ &= \hat{U}_{QQ}(t, s) \end{aligned} \quad (4.101)$$

である。

(4.101),(4.96) および $\hat{y}(t)$ の定義 (4.86) を使うと、(4.95) は

$$\hat{x}(t) = \hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q} - i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\hat{y}(s) \quad (4.102)$$

となる。(4.102),(4.86) の $\hat{y}(t)$ の定義を、(4.87) の右辺に代入して、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\hat{U}(t) &= -i\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q} - \int_0^t ds \hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t, s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s) \\ &\quad -i\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.103)$$

を得る。

(4.72) を (4.68) に代入し、(4.67) を用いると、

$$\begin{aligned} X(t) &= \hat{U}^{-1}(t)e^{i\hat{H}_0 t}Xe^{-i\hat{H}_0 t}\hat{U}(t) \\ &= \hat{U}^{-1}(t)X^I(t)\hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.104)$$

を得る。これに真空 $\langle\langle 1| = {}_R\langle 1| \otimes \langle 1|$ を作用させると¹⁵⁾、

$$\begin{aligned} \langle\langle 1|X(t) &= \langle\langle 1|\hat{U}^{-1}(t)X^I(t)\hat{U}(t) \\ &= \langle\langle 1|X^I(t)\hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.105)$$

となる。ここで、

$$\langle\langle 1|\hat{U}^{-1}(t) = \langle\langle 1|\hat{U}(0, t) = \langle\langle 1| \quad (4.106)$$

を用いた。これは、(4.75) に $\langle\langle 1|$ を作用させた

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial t}\langle\langle 1|\hat{U}(t, s) &= -i\langle\langle 1|\hat{H}_1^I(t)\hat{U}(t, s) \\ &= -i\langle\langle 1|e^{i\hat{H}_0 t}\hat{H}_1e^{-i\hat{H}_0 t}\hat{U}(t, s) \\ &= -i\langle\langle 1|\hat{H}_1e^{-i\hat{H}_0 t}\hat{U}(t, s) \\ &= 0 \end{aligned} \quad (4.107)$$

¹⁵⁾ ${}_R\langle 1|$ は熱浴、 $\langle 1|$ は注目系のブラ真空である。(2.10) または (3.44) からして、全系のブラ真空は常にこうかける。初期時刻で (4.6) である必要はない。

から得られる。第3, 第4等号で

$$\langle 1|\hat{H}_0 = 0, \quad \langle 1|\hat{H}_1 \quad (4.108)$$

を用いた。これは、(3.82) より従う。

A を非チルダ演算子とする。(4.105),(4.70) より、

$$\frac{d}{dt}\langle 1|A(t) = i\langle 1|[\hat{H}_0^I(t), A^I(t)]\hat{U}(t) + \langle 1|A^I(t)\frac{d}{dt}\hat{U}(t) \quad (4.109)$$

を得る¹⁶⁾。(4.103) を代入して、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\langle 1|A(t) &= i\langle 1|\{\hat{H}_0^I(t)A^I(t) - A^I(t)\hat{H}_0^I(t)\}\hat{U}(t) - i\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q} \\ &\quad - \int_0^t ds \langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s) - i\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{U}(t) \\ &= -i\langle 1|A^I(t)\left(\hat{H}_0 - \hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\right)\hat{U}(t) - i\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q} \\ &\quad - \int_0^t ds \langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s) \end{aligned} \quad (4.110)$$

となる。第2等号で $\hat{H}_0^I(t) = \hat{H}_0$ と (4.108) を用いた。これが時間畳み込み (TC) 型の運動運動方程式である。

以下では、 A を注目系の非チルダ演算子とする。

(4.110) を Langevin 方程式へ移行するために、柴田と橋爪が採用した処方箋は:

処方1: 射影演算子として、

$$\mathcal{P} = |0\rangle_{RR}\langle 1| \quad (4.111)$$

を採用する¹⁷⁾。

処方2: (4.110) の右辺の各項で、 $\hat{H}_1^I(t)$ について展開し、意味のある最低次までを取る。

処方3: 乱雑演算子に依存する右辺第2項において、相互作用描像の演算子をハイゼンベルク描像の演算子に置き換える。

¹⁶⁾ここで、

$$\frac{d}{dt}\langle 1|A(t) = \langle 1|B(t)$$

は、次の意味を持つ。(3.82) により、 $B(t)$ を非チルダ演算子 $B'(t)$ にかえ、

$$\frac{d}{dt}\langle 1|A(t) = \langle 1|B'(t)$$

としたとき、 \bullet を時間によらない演算子として、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\langle 1|A(t)|\bullet\rangle &= \langle 1|B'(t)|\bullet\rangle, \\ \frac{d}{dt}\text{Tr}_{tot}\{A(t)\bullet\} &= \text{Tr}_{tot}\{B'(t)\bullet\} \end{aligned}$$

が成立する。

¹⁷⁾ $|0\rangle_R$ は、§ 3.1 の $\rho_R|I\rangle$ または § 3.2 の $|\rho_R\rangle$ に対応する。これは、(4.6) を仮定したことに対応する。

処方1により、 $\langle\langle 1|APB$ のタイプの項は、

$$\begin{aligned}
\langle\langle 1|APB &= {}_R\langle 1| \otimes \langle 1|A|0\rangle_{RR}\langle 1|B \\
&= \langle 1|_R\langle 1|A|0\rangle_{RR}\langle 1|B \\
&= \langle 1|_R\langle 1| \left[{}_R\langle 1|A|0\rangle_{RB} \right] \\
&= \langle\langle 1|_R\langle 1|A|0\rangle_{RB} \\
&= \langle\langle 1|\langle A\rangle_{RB}
\end{aligned} \tag{4.112}$$

となる。第3項で ${}_R\langle 1|_R\langle 1|A|0\rangle_R = {}_R\langle 1|A|0\rangle_{RR}\langle 1|$ を用いた。また以下では、簡単のため、

$$\langle A\rangle_R \equiv {}_R\langle 1|A|0\rangle_R \tag{4.113}$$

とかく。これにより、(4.110) は、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_0\hat{U}(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)(1-\mathcal{P}) \\
&\quad - \int_0^t ds \langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{U}(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_0\hat{U}(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t) + i\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\rangle_R \\
&\quad - \int_0^t ds \langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)(1-\mathcal{P})\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\hat{U}(s) \\
&\quad - i\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\rangle_R\hat{U}(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_0\hat{U}(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t) + i\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\rangle_R \\
&\quad - \int_0^t ds \left(\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R - \langle\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\rangle_R\langle\hat{H}_1^I(s)\rangle_R \right) \hat{U}(s) \\
&\quad - i\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\rangle_R\hat{U}(t)
\end{aligned} \tag{4.114}$$

となる。ただし、 A を注目系の非チルダ演算子とすると、 $A^I(t)$ も注目系の非チルダ演算子だけでかけて、 ${}_R\langle 1|A^I(t) = A^I(t)_R\langle 1|$ であることを用いた。また、第2等号で

$$\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P} = \hat{U}_{QQ}(t,s)(1-\mathcal{P})\hat{H}_1^I(s)\mathcal{P}$$

を用いた。

$\hat{U}_{QQ}(t,s)$ を $\hat{H}_1^I(t)$ について展開する。まず、 $\hat{U}_{QQ}(t,s)$ の従う微分方程式を求める。(4.97),(4.96) より、

$$\begin{aligned}
\hat{U}_{QQ}(t,s) &= \hat{W}_{QQ}^{-1}(t)\hat{W}_{QQ}(s), \\
\frac{\partial}{\partial t}\hat{U}_{QQ}(t,s) &= \left[\frac{\partial}{\partial t}\hat{W}_{QQ}^{-1}(t) \right] \hat{W}_{QQ}(s)
\end{aligned} \tag{4.115}$$

である。 $\hat{W}_{QQ}(t)\hat{W}_{QQ}^{-1}(t) = 1$ を微分して、

$$0 = \left[\frac{d}{dt}\hat{W}_{QQ}(t) \right] \hat{W}_{QQ}^{-1}(t) + \hat{W}_{QQ}(t) \frac{d}{dt}\hat{W}_{QQ}^{-1}(t), \tag{4.116}$$

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\hat{W}_{QQ}^{-1}(t) &= -\hat{W}_{QQ}^{-1}(t) \left[\frac{d}{dt}\hat{W}_{QQ}(t) \right] \hat{W}_{QQ}^{-1}(t) \\
&= -i\hat{W}_{QQ}^{-1}(t)i\hat{W}_{QQ}(t)\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{W}_{QQ}^{-1}(t) \\
&= -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{W}_{QQ}^{-1}(t)
\end{aligned} \tag{4.117}$$

を得る。これを (4.115) に代入して、

$$\begin{aligned}\frac{\partial}{\partial t}\hat{U}_{QQ}(t,s) &= -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{W}_{QQ}^{-1}(t)\hat{W}_{QQ}(s) \\ &= -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\end{aligned}\quad (4.118)$$

を得る。これと初期条件 $\hat{U}_{QQ}(s,s) = 1$ より

$$\hat{U}_{QQ}(t,s) = 1 - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u)\hat{U}_{QQ}(u,s) \quad (4.119)$$

この右辺自身を右辺の $\hat{U}_{QQ}(u,s)$ に代入して、

$$\begin{aligned}\hat{U}_{QQ}(t,s) &= 1 - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u) - \int_s^t du_1 \int_s^{u_1} du_2 \hat{H}_{1,QQ}^I(u_1)\hat{H}_{1,QQ}^I(u_2)\hat{U}_{QQ}(u_2,s) \\ &= 1 - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u) - \int_s^t du_1 \int_s^{u_1} du_2 \hat{H}_{1,QQ}^I(u_1)\hat{H}_{1,QQ}^I(u_2) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3\end{aligned}\quad (4.120)$$

を得る。 $\mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3$ は $\hat{H}_1^I(t)$ について 3 次以上の項である。これより、意味のある最低次は

$$\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t) \approx \hat{H}_1^I(t), \quad (4.121)$$

$$\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_1^I(s) \approx \hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s) \quad (4.122)$$

となる。これを (4.114) に代入して、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_0\hat{U}(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) + i\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\rangle_R \\ &\quad - \int_0^t ds \left(\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R - \langle\hat{H}_1^I(t)\rangle_R\langle\hat{H}_1^I(s)\rangle_R \right)\hat{U}(s) \\ &\quad - i\langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\rangle_R\hat{U}(t)\end{aligned}\quad (4.123)$$

を得る。いま、マルチンゲールの性質

$$\langle\hat{H}_1^I(t)\rangle_R = 0 \quad (4.124)$$

を仮定すると、(4.123) は、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_0\hat{U}(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) \\ &\quad - \int_0^t ds \langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\hat{U}(s)\end{aligned}\quad (4.125)$$

となる。ところで、(4.104),(4.106) より、

$$\begin{aligned}\langle\langle 1|A^I(t) &= \langle\langle 1|\hat{U}(t)A(t)\hat{U}^{-1}(t) \\ &= \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\end{aligned}\quad (4.126)$$

であるから、(4.125) は、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\hat{H}_0\hat{U}(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) \\ &\quad - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\hat{U}(s) \\ &= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_0(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) \\ &\quad - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\hat{U}(s)\end{aligned}\quad (4.127)$$

ともかける。第2項で $H_0 = H_0^I(t)$ と (4.104) を用いた。右辺第1項は、

$$\begin{aligned}
-i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_0(t) &= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_0(t) + i\langle\langle 1|\hat{H}_0\hat{U}(t)A(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_0(t) + i\langle\langle 1|\hat{U}^{-1}(t)\hat{H}_0\hat{U}A(t) \\
&= -i\langle\langle 1|[A(t), \hat{H}_0(t)]
\end{aligned} \tag{4.128}$$

とかける（もともと、最左辺は最右辺に由来する）。ただし、(4.108) および (4.104),(4.106) を用いた。 A は注目系の演算子なので、

$$\begin{aligned}
[A(t), \hat{H}_0(t)] &= \hat{V}^{-1}(t)[A, \hat{H}_0]\hat{V}(t) \\
&= \hat{V}^{-1}(t)[A, \hat{H}_S]\hat{V}(t) \\
&= [A(t), \hat{H}_S(t)]
\end{aligned} \tag{4.129}$$

である。これを (4.128) に代入して、

$$\begin{aligned}
-i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_0(t) &= -i\langle\langle 1|[A(t), \hat{H}_S(t)] \\
&= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) + i\langle\langle 1|\hat{H}_S(t)A(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) + i\langle\langle 1|\hat{U}^{-1}(t)e^{i\hat{H}_0 t}\hat{H}_S\hat{V}(t)A(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) + i\langle\langle 1|\hat{H}_S\hat{V}(t)A(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t)
\end{aligned} \tag{4.130}$$

を得る。最後の等号で、

$$\langle 1|\hat{H}_S = \langle 1|H_S - \langle 1|\tilde{H}_S = 0 \tag{4.131}$$

を用いた。これは、(3.82) より従う。(4.128) を (4.125) に代入して、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) \\
&\quad - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\hat{U}(s)
\end{aligned} \tag{4.132}$$

を得る。

4.2.2 TCL 型の運動方程式

(4.110) は時間非畳み込み (TCL) 型に書き直すことができる。

(4.102) の第2項において、

$$\begin{aligned}
\hat{y}(s) &= \mathcal{P}\hat{U}(s) \\
&= \mathcal{P}\hat{U}(s, t)\hat{U}(t, 0) \\
&= \mathcal{P}\hat{U}(s, t)[\mathcal{P}\hat{U}(t) + \mathcal{Q}\hat{U}(t)]
\end{aligned} \tag{4.133}$$

という変形する（ここで、(4.76),(4.86) を用いた）。さらに、

$$\hat{\Sigma}(t) \equiv -i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s, t) \tag{4.134}$$

とすると、(4.102) の第 2 項は、(4.133) より

$$-i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \hat{y}(s) = \hat{\Sigma}(t) [\hat{x}(t) + \mathcal{P} \hat{U}(t)] \quad (4.135)$$

となる。これより、(4.102) は

$$\hat{x}(t) = \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} + \hat{\Sigma}(t) \hat{x}(t) + \hat{\Sigma}(t) \mathcal{P} \hat{U}(t), \quad (4.136)$$

$$\hat{x}(t) = [1 - \hat{\Sigma}]^{-1} [\hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} + \hat{\Sigma}(t) \mathcal{P} \hat{U}(t)] \quad (4.137)$$

と TCL 型になる。これを (4.87) に代入して、

$$\frac{d}{dt} \hat{U}(t) = -i \hat{H}_1^I(t) [1 - \hat{\Sigma}]^{-1} [\hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} + \hat{\Sigma}(t) \mathcal{P} \hat{U}(t)] - i \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \hat{U}(t) \quad (4.138)$$

(4.109) に (4.138) を代入して、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \langle\langle 1|A(t) &= i \langle\langle 1|[\hat{H}_0^I(t), A^I(t)] \hat{U}(t) - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) [1 - \hat{\Sigma}]^{-1} \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} \\ &\quad - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) [1 - \hat{\Sigma}]^{-1} \hat{\Sigma}(t) \mathcal{P} \hat{U}(t) - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \hat{U}(t) \\ &= -i \langle\langle 1|A^I(t) (\hat{H}_0 + \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P}) \hat{U}(t) - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) [1 - \hat{\Sigma}]^{-1} \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} \\ &\quad - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) [1 - \hat{\Sigma}]^{-1} \hat{\Sigma}(t) \mathcal{P} \hat{U}(t). \end{aligned} \quad (4.139)$$

これが TCL 型の運動運動方程式である。

これに、処方 1,2 を施す。処方 1 より (4.134) は、

$$\begin{aligned} \hat{\Sigma}(t) &= -i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \mathcal{P} \hat{U}(s, t) \\ &= -i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s) (1 - |0\rangle_{RR}\langle 1|) \hat{H}_1^I(s) (|0\rangle_{RR}\langle 1|) \hat{U}(s, t) \\ &= -i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_1^I(s) |0\rangle_{RR}\langle 1| \hat{U}(s, t) \\ &\quad + i \int_0^t ds \hat{U}_{QQ}(t, s) |0\rangle_R \langle H_1^I(s) \rangle_{RR} \langle 1| \hat{U}(s, t) \end{aligned} \quad (4.140)$$

となる。さらに (4.120) より、

$$\begin{aligned} \hat{\Sigma}(t) &= -i \int_0^t ds \hat{H}_1^I(s) |0\rangle_{RR}\langle 1| \hat{U}(s, t) \\ &\quad + i \int_0^t ds |0\rangle_R \langle H_1^I(s) \rangle_{RR} \langle 1| \hat{U}(s, t) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^2 \\ &= -i \int_0^t ds \hat{H}_1^I(s) |0\rangle_{RR}\langle 1| \hat{U}(s, t) \end{aligned} \quad (4.141)$$

となる。ただし、(4.124) を用いた。よって、

$$[1 - \hat{\Sigma}]^{-1} = 1 + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I) \quad (4.142)$$

となる。処方 2 のもとで、(4.139) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \langle\langle 1|A(t) &= -i \langle\langle 1|A^I(t) (\hat{H}_0 + \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P}) \hat{U}(t) - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} \\ &\quad - i \langle\langle 1|A^I(t) \hat{H}_1^I(t) \hat{\Sigma}(t) \mathcal{P} \hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.143)$$

となり、これは (4.110) と第 3 項のみが異なる。(4.141) より、

$$\begin{aligned} -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{\Sigma}(t)\mathcal{P} = -\int_0^t ds \langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)|0\rangle_{RR}\langle 1|\hat{U}(s,t)|0\rangle_{RR}\langle 1| \\ = -\int_0^t ds \langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\langle\hat{U}(s,t)\rangle_R \end{aligned} \quad (4.144)$$

となる。よって、(4.143) の第 3 項は、

$$\begin{aligned} -i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t)\hat{\Sigma}(t)\mathcal{P}\hat{U}(t) = -\int_0^t ds \langle\langle 1|A^I(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\langle\hat{U}(s,t)\rangle_R\hat{U}(t) \\ = -\int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\langle\hat{U}(s,t)\rangle_R\hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.145)$$

となる。第 2 項で、(4.126) を用いた。よって、(4.132) の対応物は、それと第 3 項だけが異なった、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) = -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) \\ - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\langle\hat{U}(s,t)\rangle_R\hat{U}(t) \end{aligned} \quad (4.146)$$

となる。

4.2.3 ボソン系の場合

§ 4.1.1 のモデルについて考える。すなわち、

$$H_S = \omega_0 a^\dagger a, \quad (4.147)$$

$$H_R = \sum_l \omega_l b_l^\dagger b_l, \quad (4.148)$$

$$H_1 = a^\dagger R + R^\dagger a, \quad R = \sum_l g_l b_l \quad (4.149)$$

とする。(4.149) より、

$$\hat{H}_1^I(t) = a^I(t)R^I(t)^\dagger + R^I(t)a^I(t)^\dagger - \tilde{a}^I(t)\tilde{R}^I(t)^\dagger - \tilde{R}^I(t)\tilde{a}^I(t)^\dagger \quad (4.150)$$

である。なお、

$$a^I(t) = ae^{-i\omega_0 t}, \quad \tilde{a}^I(t) = \tilde{a}e^{i\omega_0 t} \quad (4.151)$$

である。

(4.132) を評価したい。 $\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)$ は、

$$\begin{aligned} \hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s) &= [ae^{-i\omega_0 t}R^I(t)^\dagger + R^I(t)a^\dagger e^{i\omega_0 t} - \tilde{a}e^{i\omega_0 t}\tilde{R}^I(t)^\dagger - \tilde{R}^I(s)\tilde{a}^\dagger e^{-i\omega_0 t}] \\ &\quad \times [ae^{-i\omega_0 s}R^I(s)^\dagger + R^I(s)a^\dagger e^{i\omega_0 s} - \tilde{a}e^{i\omega_0 s}\tilde{R}^I(s)^\dagger - \tilde{R}^I(s)\tilde{a}^\dagger e^{-i\omega_0 s}] \\ &= e^{-i\omega_0(t-s)}[aa^\dagger R^I(t)^\dagger R^I(s) - a\tilde{a}R^I(t)^\dagger \tilde{R}^I(s)^\dagger - \tilde{a}^\dagger a^\dagger \tilde{R}^I(t)R^I(s) + \tilde{a}^\dagger \tilde{a} \tilde{R}^I(t)\tilde{R}^I(s)^\dagger] \\ &\quad + e^{i\omega_0(t-s)}[a^\dagger a R^I(t)R^I(s)^\dagger - a^\dagger \tilde{a}^\dagger R^I(t)\tilde{R}^I(s) - \tilde{a}a \tilde{R}^I(t)^\dagger R^I(s)^\dagger + \tilde{a} \tilde{a}^\dagger \tilde{R}^I(t)^\dagger \tilde{R}^I(s)] \\ &\quad + e^{-i\omega_0(t+s)}[aaR^I(t)^\dagger R^I(s)^\dagger - a\tilde{a}^\dagger R^I(t)^\dagger \tilde{R}^I(s) - \tilde{a}^\dagger a \tilde{R}^I(t)R^I(s)^\dagger + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}^\dagger \tilde{R}^I(t)\tilde{R}^I(s)] \\ &\quad + e^{i\omega_0(t+s)}[a^\dagger a^\dagger R^I(t)R^I(s) - a^\dagger \tilde{a}R^I(t)\tilde{R}^I(s)^\dagger - \tilde{a}a^\dagger \tilde{R}^I(t)^\dagger R^I(s) + \tilde{a} \tilde{a} \tilde{R}^I(t)^\dagger \tilde{R}^I(s)^\dagger] \end{aligned} \quad (4.152)$$

である。(4.46) より、

$$\langle R^I(t)R^I(s) \rangle_R = \langle R^I(t)^\dagger R^I(s)^\dagger \rangle_R = 0 \quad (4.153)$$

なので、

$$\begin{aligned} & \langle \hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s) \rangle \\ &= e^{-i\omega_0(t-s)}[aa^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R - a\tilde{a} \langle R^I(t)^\dagger \tilde{R}^I(s)^\dagger \rangle_R - \tilde{a}^\dagger a^\dagger \langle \tilde{R}^I(t)R^I(s) \rangle_R + \tilde{a}^\dagger \tilde{a} \langle \tilde{R}^I(t)\tilde{R}^I(s)^\dagger \rangle_R] \\ &+ e^{i\omega_0(t-s)}[a^\dagger a \langle R^I(t)R^I(s)^\dagger \rangle_R - a^\dagger \tilde{a}^\dagger \langle R^I(t)\tilde{R}^I(s) \rangle_R - \tilde{a}a \langle \tilde{R}^I(t)^\dagger R^I(s)^\dagger \rangle_R + \tilde{a}a^\dagger \langle \tilde{R}^I(t)^\dagger \tilde{R}^I(s) \rangle_R] \\ &= e^{-i\omega_0(t-s)}[aa^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R - a\tilde{a} \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R - \tilde{a}^\dagger a^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R + \tilde{a}^\dagger \tilde{a} \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R] \\ &+ e^{i\omega_0(t-s)}[a^\dagger a \langle R^I(t)R^I(s)^\dagger \rangle_R - a^\dagger \tilde{a}^\dagger \langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R - \tilde{a}a \langle R^I(t)R^I(s)^\dagger \rangle_R + \tilde{a}a^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R] \end{aligned} \quad (4.154)$$

となる。第2等号で、

$$\begin{aligned} {}_R\langle 1|\tilde{R}^I(t) &= {}_R\langle 1|\sum_l g_l^* \tilde{b}_l^I(t) \\ &= \sum_l g_l^* \langle 1|\tilde{b}_l e^{i\omega_l t} \\ &= \sum_l g_l^* \langle 1|b_l^\dagger e^{i\omega_l t} \\ &= {}_R\langle 1|\left[\sum_l g_l b_l e^{-i\omega_l t} \right]^\dagger \\ &= {}_R\langle 1|R^I(t)^\dagger \end{aligned} \quad (4.155)$$

などを用いた。これを(4.132)の第3項に代入して、

$$\begin{aligned} & - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle \hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s) \rangle_R \hat{U}(s) \\ &= - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t) \left(e^{-i\omega_0(t-s)}[aa^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R - a\tilde{a} \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R - \tilde{a}^\dagger a^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \right. \\ &+ \tilde{a}^\dagger \tilde{a} \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R] + e^{i\omega_0(t-s)}[a^\dagger a \langle R^I(t)R^I(s)^\dagger \rangle_R - a^\dagger \tilde{a}^\dagger \langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R \\ &\left. - \tilde{a}a \langle R^I(t)R^I(s)^\dagger \rangle_R + \tilde{a}a^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \right) \hat{U}(s). \end{aligned} \quad (4.156)$$

例えば、右辺第1項は

$$\begin{aligned} & - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)e^{-i\omega_0(t-s)}aa^\dagger \langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \hat{U}(s) \\ &= - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)e^{-i\omega_0(t-s)}aa^\dagger \hat{U}(s)\langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \\ &= - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)e^{-i\omega_0(t-s)}a^I(t)a^I(t)^\dagger \hat{U}(t)\hat{U}^{-1}(t)\hat{U}(s)\langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \\ &= - \int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)a(t)a(t)^\dagger \hat{U}^{-1}(t)\hat{U}(s)\langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \\ &= - \langle\langle 1|A(t)a(t)a^\dagger(t)\hat{U}^{-1}(t) \int_0^t ds e^{-i\omega_0(t-s)}\hat{U}(s)\langle R^I(t)^\dagger R^I(s) \rangle_R \end{aligned} \quad (4.157)$$

となる。ただし、(4.104) を用いた。ところで、(4.44),(4.45) は、

$$\langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R = 2\kappa\bar{n}\delta(t-s), \quad (4.158)$$

$$\langle R^I(t)R^I(s)^\dagger \rangle_R = 2\kappa(\bar{n}+1)\delta(t-s) \quad (4.159)$$

であった。これを使うと、(4.132) の第3項は、

$$\begin{aligned} & -\int_0^t ds \langle\langle 1|A(t)\hat{U}^{-1}(t)\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\hat{U}(s) \\ &= -\langle\langle 1|A(t)\left([a(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} - a(t)\tilde{a}(t)\kappa(\bar{n}+1) - \tilde{a}^\dagger(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} + \tilde{a}^\dagger(t)\tilde{a}(t)\kappa(\bar{n}+1)]\right. \\ & \quad \left.+ [a^\dagger(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) - a^\dagger(t)\tilde{a}^\dagger(t)\kappa\bar{n} - \tilde{a}(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) + \tilde{a}(t)\tilde{a}^\dagger(t)\kappa\bar{n}]\right) \\ &= -\langle\langle 1|A(t)a(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} + \langle\langle 1|\tilde{a}(t)A(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) + \langle\langle 1|\tilde{a}^\dagger(t)A(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} \\ & \quad - \langle\langle 1|\tilde{a}^\dagger(t)\tilde{a}(t)A(t)\kappa(\bar{n}+1) - \langle\langle 1|A(t)a^\dagger(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) + \langle\langle 1|\tilde{a}^\dagger(t)A(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} \\ & \quad + \langle\langle 1|\tilde{a}(t)A(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) - \langle\langle 1|\tilde{a}(t)\tilde{a}^\dagger(t)A(t)\kappa\bar{n} \\ &= -\langle\langle 1|A(t)a(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} + \langle\langle 1|a^\dagger(t)A(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) + \langle\langle 1|a(t)A(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} \\ & \quad - \langle\langle 1|a^\dagger(t)a(t)A(t)\kappa(\bar{n}+1) - \langle\langle 1|A(t)a^\dagger(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) + \langle\langle 1|a(t)A(t)a^\dagger(t)\kappa\bar{n} \\ & \quad + \langle\langle 1|a^\dagger(t)A(t)a(t)\kappa(\bar{n}+1) - \langle\langle 1|a(t)a^\dagger(t)A(t)\kappa\bar{n} \\ &= \langle\langle 1|\left(\kappa\bar{n}\left[-A(t)a(t)a(t)^\dagger + a(t)A(t)a(t)^\dagger + a(t)A(t)a(t)^\dagger - a(t)a(t)^\dagger A(t)\right] \right. \\ & \quad \left. + \kappa(\bar{n}+1)\left[a^\dagger(t)A(t)a(t) - a^\dagger(t)a(t)A(t) - A(t)a^\dagger(t)a(t) + a^\dagger(t)A(t)a(t)\right]\right) \\ &= \langle\langle 1|\left(\kappa\left\{a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t)\right\} + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger(t), [A(t), a(t)]]\right) \end{aligned} \quad (4.160)$$

となる。第3等号で、

$$\begin{aligned} \langle\langle 1|\tilde{a}(t) &= \langle\langle 1|\hat{U}^{-1}(t)e^{i\hat{H}_0 t}\tilde{a}\hat{V}(t) \\ &= \langle\langle 1|\tilde{a}\hat{V}(t) \\ &= \langle\langle 1|\hat{U}^{-1}(t)e^{i\hat{H}_0 t}a^\dagger\hat{V}(t) \\ &= \langle\langle 1|a^\dagger(t) \end{aligned} \quad (4.161)$$

などを用いた。よって、(4.132) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) - i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) \\ & \quad + \langle\langle 1|\left(\kappa\left\{a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t)\right\} + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger(t), [A(t), a(t)]]\right) \end{aligned} \quad (4.162)$$

となる。これの第1項を変形して、

$$\begin{aligned} -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) &= -i\langle\langle 1|A(t)\hat{H}_S(t) + i\langle\langle 1|\hat{H}_S(t)A(t) \\ &= i\langle\langle 1|[\hat{H}_S(t), A(t)] \\ &= i\langle\langle 1|[H_S(t), A(t)] \end{aligned} \quad (4.163)$$

とかける。(4.162)の第2項は、

$$\begin{aligned}
-i\langle\langle 1|A^I(t)\hat{H}_1^I(t) &= -i\langle\langle 1|A^I(t)[a^I(t)R^I(t)^\dagger + a^I(t)^\dagger R^I(t)] \\
&\quad + i\langle\langle 1|[\tilde{a}^I(t)\tilde{R}^I(t)^\dagger + \tilde{a}^I(t)^\dagger\tilde{R}^I(t)]A^I(t) \\
&= -i\langle\langle 1|A^I(t)a^I(t)R^I(t)^\dagger - i\langle\langle 1|A^I(t)a^I(t)^\dagger R^I(t) \\
&\quad + i\langle\langle 1|a^I(t)^\dagger R^I(t)A^I(t) + i\langle\langle 1|a^I(t)R^I(t)^\dagger A^I(t) \\
&= -i\langle\langle 1|R^I(t)^\dagger[A^I(t), a^I(t)] - i\langle\langle 1|[A^I(t), a^I(t)^\dagger]R^I(t)
\end{aligned} \tag{4.164}$$

であるから、(4.163),(4.164)より、(4.162)は、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= \langle\langle 1|[i[H_S(t), A(t)] - iR^I(t)^\dagger[A^I(t), a^I(t)] - i[A^I(t), a^I(t)^\dagger]R^I(t) \\
&\quad + \left(\kappa\left\{a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t)\right\} + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger(t), [A(t), a(t)]]\right)]
\end{aligned} \tag{4.165}$$

となる。処方3により、この第2項は、

$$-iR^I(t)^\dagger[A^I(t), a^I(t)] - i\langle\langle 1|[A^I(t), a^I(t)^\dagger]R^I(t) \rightarrow \sqrt{2\kappa}b_t^\dagger[A(t), a(t)] + \sqrt{2\kappa}[A(t), a(t)^\dagger]b_t \tag{4.166}$$

となる。ここで、

$$-iR^I(t) \rightarrow \sqrt{2\kappa}b_t \tag{4.167}$$

は乱雑力演算子である。(4.43)より、

$$[b_t, b_s^\dagger] = \delta(t-s) \tag{4.168}$$

である。(4.166)より、(4.169)は、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\langle\langle 1|A(t) &= \langle\langle 1|[i[H_S(t), A(t)] + \sqrt{2\kappa}b_t^\dagger[A(t), a(t)] + \sqrt{2\kappa}[A(t), a^\dagger(t)]b_t \\
&\quad + \left(\kappa\left\{a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t)\right\} + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger(t), [A(t), a(t)]]\right)]
\end{aligned} \tag{4.169}$$

となる。TCL型の(4.146)からも(4.44),(4.45)の近似の下では、同じ方程式が得られる。

4.3 $\hat{\Pi}$ の導出

ケット真空は、

$$\begin{aligned}
|0(t)\rangle\rangle &= \hat{V}(t)|0\rangle\rangle \\
&= e^{-i\hat{H}_0 t}|0_I(t)\rangle\rangle,
\end{aligned} \tag{4.170}$$

$$|0_I(t)\rangle\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \hat{U}(t)|0\rangle\rangle \tag{4.171}$$

とかける。これより、

$$\frac{d}{dt}|0_I(t)\rangle\rangle = \frac{d\hat{U}(t)}{dt}|0\rangle\rangle \tag{4.172}$$

であり、(4.103)より、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\hat{U}(t) &= -i\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q} - \int_0^t ds \hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s) \\
&\quad - i\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{U}(t)
\end{aligned} \tag{4.173}$$

でるから、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}|0_I(t)\rangle\rangle &= -i\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle - \int_0^t ds \hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}\hat{U}(s)|0\rangle\rangle \\
&\quad -i\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{U}(t)|0\rangle\rangle \\
&= -i\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle - \int_0^t ds \hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle \\
&\quad -i\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}|0_I(t)\rangle\rangle
\end{aligned} \tag{4.174}$$

となる。左から \mathcal{P} をかけて、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\mathcal{P}|0_I(t)\rangle\rangle &= -i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle - \int_0^t ds \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle \\
&\quad -i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}|0_I(t)\rangle\rangle
\end{aligned} \tag{4.175}$$

を得る。(4.120) より、右辺第 1 項は、

$$\begin{aligned}
&-i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle \\
&= -i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle - \int_0^t ds \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_{1,QQ}^I(s)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \\
&= -i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)|0\rangle\rangle + i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\mathcal{P}|0\rangle\rangle - \int_0^t ds \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_{1,QQ}^I(s)\mathcal{Q}|0\rangle\rangle + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3
\end{aligned} \tag{4.176}$$

右辺第 2 項は、

$$\begin{aligned}
&- \int_0^t ds \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{U}_{QQ}(t,s)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle \\
&= - \int_0^t ds \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_{1,QP}^I(s)\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \\
&= - \int_0^t ds \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)(1-\mathcal{P})\hat{H}_1^I(s)\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \\
&= - \int_0^t ds [\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\mathcal{P}\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle - \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{P}\hat{H}_1^I(s)\mathcal{P}\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle] + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3
\end{aligned} \tag{4.177}$$

となる。今、 \mathcal{P} として、(4.111) を選ぶ。すると、

$$\begin{aligned}
\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)|0\rangle\rangle &= |0\rangle_{RR}\langle 1|\hat{H}_1^I(t)|0\rangle\rangle \\
&= |0\rangle\rangle\langle \hat{H}_1^I(t)\rangle_R,
\end{aligned} \tag{4.178}$$

$$\begin{aligned}
\mathcal{Q}|0\rangle\rangle &= |0\rangle\rangle - |0\rangle_{RR}\langle 1|0\rangle_R \otimes |1\rangle \\
&= 0,
\end{aligned} \tag{4.179}$$

$$\begin{aligned}
\mathcal{P}\hat{X}\mathcal{P} &= |0\rangle_{RR}\langle 1|\hat{X}|0\rangle_{RR}\langle 1| \\
&= \mathcal{P}\langle \hat{X}\rangle_R
\end{aligned} \tag{4.180}$$

などが成り立つ。マルチンゲールの性質 (4.124) を仮定すると、

$$(4.176) = \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3, \tag{4.181}$$

$$(4.177) = \int_0^t ds \mathcal{P}\langle \hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \tag{4.182}$$

となる。よって、(4.175) は、

$$\frac{d}{dt}\mathcal{P}|0_I(t)\rangle\rangle = -\int_0^t ds \mathcal{P}\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R\mathcal{P}|0_I(s)\rangle\rangle + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \quad (4.183)$$

となる。

今、注目系の相互作用描像のケット真空を、

$$|0_I(t)\rangle\rangle \stackrel{\text{def}}{=} {}_R\langle 1|0_I(t)\rangle\rangle \quad (4.184)$$

で定義する¹⁸⁾と、

$$\mathcal{P}|0_I(t)\rangle\rangle = |0\rangle_R \otimes |0_I(t)\rangle \quad (4.186)$$

となるから、(4.183) は、

$$\begin{aligned} |0\rangle_R \otimes \frac{d}{dt}|0_I(t)\rangle &= -\int_0^t ds |0\rangle_{RR}\langle 1|\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R|0\rangle_R \otimes |0_I(s)\rangle \\ &= -|0\rangle_R \otimes \int_0^t ds \langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R|0_I(s)\rangle, \\ \frac{d}{dt}|0_I(t)\rangle &= -\int_0^t ds \langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle_R|0_I(s)\rangle \end{aligned} \quad (4.187)$$

となる。

今、

$$H_S = \omega_0 a^\dagger a, \quad (4.188)$$

$$H_1 = a^\dagger R + R^\dagger a \quad (4.189)$$

とし、(4.44),(4.45),(4.46) を仮定すると、(4.154) より、

$$\begin{aligned} &\langle\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\rangle \\ &= 2\delta(t-s)[a^I(t)a^I(t)^\dagger\kappa\bar{n} - a^I(t)\tilde{a}^I(s)\kappa(\bar{n}+1) - \tilde{a}^I(t)^\dagger a^I(s)^\dagger\kappa\bar{n} + \tilde{a}^I(t)^\dagger\tilde{a}^I(s)\kappa(\bar{n}+1)] \\ &+ 2\delta(t-s)[a^I(t)^\dagger a^I(s)\kappa(\bar{n}+1) - a^I(t)^\dagger\tilde{a}^I(s)^\dagger\kappa\bar{n} - \tilde{a}^I(t)a^I(s)\kappa(\bar{n}+1) + \tilde{a}^I(t)\tilde{a}^I(s)^\dagger\kappa\bar{n}] \end{aligned} \quad (4.190)$$

となる。よって、(4.187) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}|0_I(t)\rangle &= -\left(a^I(t)a^I(t)^\dagger\kappa\bar{n} - a^I(t)\tilde{a}^I(t)\kappa(\bar{n}+1) - \tilde{a}^I(t)^\dagger a^I(t)^\dagger\kappa\bar{n} + \tilde{a}^I(t)^\dagger\tilde{a}^I(t)\kappa(\bar{n}+1) \right. \\ &\quad \left. + a^I(t)^\dagger a^I(t)\kappa(\bar{n}+1) - a^I(t)^\dagger\tilde{a}^I(t)^\dagger\kappa\bar{n} - \tilde{a}^I(t)a^I(t)\kappa(\bar{n}+1) + \tilde{a}^I(t)\tilde{a}^I(t)^\dagger\kappa\bar{n}\right)|0_I(t)\rangle \\ &\equiv \hat{\Pi}^I(t)|0_I(t)\rangle \end{aligned} \quad (4.191)$$

となる。

今、

$$|0(t)\rangle\rangle \stackrel{\text{def}}{=} {}_R\langle 1|0(t)\rangle\rangle \quad (4.192)$$

¹⁸⁾これは、

$$\rho^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \text{Tr}_R[\rho_{tot}^I(t)] \quad (4.185)$$

を意味する。

とすると¹⁹⁾、(4.170)より、

$$\begin{aligned}
|0(t)\rangle &= {}_R\langle 1|e^{-i\hat{H}_0 t}|0_I(t)\rangle \\
&= {}_R\langle 1|e^{-i\hat{H}_S t}|0_I(t)\rangle \\
&= e^{-i\hat{H}_S t} {}_R\langle 1|0_I(t)\rangle \\
&= e^{-i\hat{H}_S t}|0_I(t)\rangle
\end{aligned} \tag{4.194}$$

を得る。第1等号で

$${}_R\langle 1|\hat{H}_R = 0 \tag{4.195}$$

を用いた。(4.194),(4.191)より、

$$i\frac{d}{dt}|0(t)\rangle = (\hat{H}_S + i\hat{\Pi})|0(t)\rangle, \tag{4.196}$$

$$\hat{\Pi} = e^{-i\hat{H}_S t}\hat{\Pi}^I(t)e^{i\hat{H}_S t} \tag{4.197}$$

を得る。これは(3.16),(3.17)である。(4.197)の $\hat{\Pi}$ は(3.28)すなわち、

$$\hat{\Pi} = -\kappa[(1+2\bar{n})(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) - 2(1+\bar{n})a\tilde{a} - 2\bar{n}a^\dagger \tilde{a}^\dagger] - 2\kappa\bar{n} \tag{4.198}$$

と一致する。

¹⁹⁾これは、

$$\rho(t) \stackrel{\text{def}}{=} \text{Tr}_R[\rho_{tot}(t)] \tag{4.193}$$

を意味する。

5 Stochastic NETFD

5.1 量子 Brown 運動

5.1.1 量子 Brown 運動と確率積分

今、

$$[b_t, b_s^\dagger] = \delta(t - s) \quad (5.1)$$

を満たす演算子 $b_t, b_t^\dagger (t, s \geq 0)$ を考える。 $t \geq 0$ に対して、

$$B_t \stackrel{\text{def}}{=} \int_0^t dt' b_{t'}, \quad B_t^\dagger \stackrel{\text{def}}{=} \int_0^t dt' b_{t'}^\dagger \quad (5.2)$$

を導入する。このとき、

$$\begin{aligned} [B_t, B_s^\dagger] &= \int_0^t dt_1 \int_0^s dt_2 [b_{t_1}, b_{t_2}^\dagger] \\ &= \int_0^t dt_1 \int_0^s dt_2 \delta(t_1 - t_2) \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} dt_1 \int_{-\infty}^{\infty} dt_2 \theta(t - t_1) \theta(t_1 - t) \theta(s - t_2) \theta(t_2 - s) \delta(t_1 - t_2) \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} dt_1 \theta(t - t_1) \theta(t_1 - t) \theta(s - t_1) \theta(t_1 - s) \\ &= \min(t, s) \end{aligned} \quad (5.3)$$

となる。この性質を持つ B_t, B_t^\dagger を量子 Brown 運動という。今、 \sharp を無印か \dagger とし、差分

$$\Delta B_t^\sharp = B_{t+\Delta t}^\sharp - B_t^\sharp = \int_t^{t+\Delta t} dt' b_t^\sharp \quad (5.4)$$

を考える ($\Delta t > 0$)。これを

$$\Delta B_t^\sharp = \int_t^{t+\Delta t} dB_t^\sharp, \quad dB_t^\sharp = b_t^\sharp dt \quad (5.5)$$

ともかく。このとき、

$$\begin{aligned} \Delta B_t \Delta B_t^\dagger &= B_{t+\Delta t} B_{t+\Delta t}^\dagger + B_t B_t^\dagger - B_{t+\Delta t} B_t^\dagger - B_t B_{t+\Delta t}^\dagger \\ &= [B_{t+\Delta t}^\dagger B_{t+\Delta t} + t + \Delta t] + [B_t^\dagger B_t + t] - [B_t^\dagger B_{t+\Delta t} + t] - [B_{t+\Delta t}^\dagger B_t + t] \\ &= \Delta B_t^\dagger \Delta B_t + \Delta t \end{aligned} \quad (5.6)$$

となる。第 2 等号で (5.3) を用いた。上式は、

$$[\Delta B_t, \Delta B_t^\dagger] = \Delta t \quad (5.7)$$

を意味する。

$t \geq 0$ に対する (伊藤型) 確率積分

$$I_t = \int_0^t ds [dB_s^\dagger F_s + G_s dB_s + E_s ds] \quad (5.8)$$

が well-defined だとする。このとき、

$$I_t = \int_0^t dI_s, \quad dI_s = [dB_s^\dagger F_s + G_s dB_s + E_s ds] \quad (5.9)$$

とかく。このとき、

$$I_t^{(i)} = \int_0^t dI_s, \quad dI_s = [dB_s^\dagger F_s^{(i)} + G_s^{(i)} dB_s + E_s^{(i)} ds] \quad (i = 1, 2)$$

に対して、

$$\begin{aligned} \Delta(I_t^{(1)} I_t^{(2)}) &= \left[\int_0^{t+\Delta t} \int_0^{t+\Delta t} - \int_0^t \int_0^t \right] dI_{t_1}^{(1)} dI_{t_2}^{(2)} \\ &= \left[\int_0^{t+\Delta t} \int_0^{t+\Delta t} - \int_0^{t+\Delta t} \int_0^t + \int_0^{t+\Delta t} \int_0^t - \int_0^t \int_0^t \right] dI_{t_1}^{(1)} dI_{t_2}^{(2)} \\ &= \left[\int_0^{t+\Delta t} \int_t^{t+\Delta t} + \int_t^{t+\Delta t} \int_0^t \right] dI_{t_1}^{(1)} dI_{t_2}^{(2)} \\ &= \left[\int_0^t \int_t^{t+\Delta t} + \int_t^{t+\Delta t} \int_t^{t+\Delta t} + \int_t^{t+\Delta t} \int_0^t \right] dI_{t_1}^{(1)} dI_{t_2}^{(2)} \\ &= I_t^{(1)} \Delta I_t^{(2)} + \Delta I_t^{(1)} \Delta I_t^{(2)} + \Delta I_t^{(1)} I_t^{(2)} \\ &= \Delta I_t^{(1)} I_t^{(2)} + I_t^{(1)} \Delta I_t^{(2)} + \Delta I_t^{(1)} \Delta I_t^{(2)} \end{aligned} \quad (5.10)$$

が示される。

あくまでも Δ に対する差分 $\Delta \bullet$ を扱っているのであるが、以下これを

$$\Delta \rightarrow dt, \quad \Delta \bullet \rightarrow d\bullet \quad (5.11)$$

とかく。この記法で (5.10) は、

$$d(I_t^{(1)} I_t^{(2)}) = dI_t^{(1)} I_t^{(2)} + I_t^{(1)} dI_t^{(2)} + dI_t^{(1)} dI_t^{(2)} \quad (5.12)$$

となり、(5.7) は、

$$[dB_t, dB_t^\dagger] = dt \quad (5.13)$$

となる。

5.1.2 伊藤積と Stratonovich 積

ハイゼンベルク描像の確率的 $X(t), Y(t)$ の伊藤型の確率積（伊藤積）は、

$$X(t) \cdot dY(t) \stackrel{\text{def}}{=} X(t)[Y(t+dt) - Y(t)], \quad (5.14)$$

$$dX(t) \cdot Y(t) \stackrel{\text{def}}{=} [X(t+dt) - X(t)]Y(t) \quad (5.15)$$

であり、Stratonovich 型の確率積（Stratonovich 積）は、

$$X(t) \circ dY(t) \stackrel{\text{def}}{=} \frac{X(t+dt) + X(t)}{2} [Y(t+dt) - Y(t)], \quad (5.16)$$

$$dX(t) \circ Y(t) \stackrel{\text{def}}{=} [X(t+dt) - X(t)] \frac{Y(t+dt) + Y(t)}{2} \quad (5.17)$$

で与えられる。変換公式は

$$X(t) \circ dY(t) = X(t) \cdot dY(t) + \frac{1}{2}dX(t) \cdot dY(t), \quad (5.18)$$

$$dX(t) \circ Y(t) = dX(t) \cdot Y(t) + \frac{1}{2}dX(t) \cdot dY(t), \quad (5.19)$$

$$dX(t) \equiv X(t+dt) - X(t) \quad (5.20)$$

である。シュレーディンガー描像の場合は、 (t) を $_t$ にかえれば良い。

\hat{A} をシュレーディンガー描像の注目系の演算子とすると、

$$[\hat{A}, dB_t^\sharp] = \hat{A} \cdot dB_t^\sharp - dB_t^\sharp \cdot \hat{A} = 0 \quad (\sharp = \text{無印}, \dagger, \sim, \dagger \sim) \quad (5.21)$$

である。

5.1.3 量子 Brown 運動への移行

(4.34),(4.52) は

$$da(t) = -i\omega_0 a(t)dt - \kappa a(t)dt + \sqrt{2\kappa}dB_t, \quad (5.22)$$

$$d[a^\dagger(t)a(t)] = -2\kappa a^\dagger(t)a(t)dt + \sqrt{2\kappa}a^\dagger(t)dB_t + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger a(t) \quad (5.23)$$

と書くべきものである。ここで、

$$dB_t = b_t dt, \quad (5.24)$$

$$\sqrt{2\kappa}b_t \equiv -iR^I(t) \quad (5.25)$$

は乱雑力演算子である。(4.43) より、

$$[b_t, b_s^\dagger] = \delta(t-s) \quad (5.26)$$

である。これは、(5.1) と同じである。

(5.11) の表記の下で、(4.43),(4.44),(4.45) は、

$$\langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R = (\bar{n} + 1)dt, \quad \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R = \bar{n}dt \quad (5.27)$$

とかける。

さて、(4.56),(4.56),(4.59),(4.60) は、

$$\langle a^\dagger(t) \circ dB_t \rangle_R = \sqrt{\frac{\kappa}{2}}\bar{n}dt, \quad \langle dB_t^\dagger \circ a(t) \rangle_R = \sqrt{\frac{\kappa}{2}}\bar{n}dt, \quad (5.28)$$

$$\langle dB_t \circ a^\dagger(t) \rangle_R = \sqrt{\frac{\kappa}{2}}(\bar{n} + 1)dt, \quad \langle a(t) \circ dB_t^\dagger \rangle_R = \sqrt{\frac{\kappa}{2}}(\bar{n} + 1)dt \quad (5.29)$$

と理解すべきである。よって、(5.23) は、

$$d[a^\dagger(t)a(t)] = -2\kappa a^\dagger(t)a(t)dt + \sqrt{2\kappa}a^\dagger(t) \circ dB_t + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger \circ a(t) \quad (5.30)$$

と理解すべきである。伊藤型の確率積では、時刻 t より未来の乱雑力 dB_t, dB_t^\dagger が現在の $a(t), a^\dagger(t)$ に影響を与えることはないので、

$$\langle a^\dagger(t) \cdot dB_t \rangle_R = 0, \quad \langle dB_t^\dagger(t) \cdot a(t) \rangle_R = 0 \quad (5.31)$$

である。

(4.169) も、正確には、

$$d\langle 1|A(t) = \langle 1| \left[i[H_S(t), A(t)]dt + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger[A(t), a(t)] + \sqrt{2\kappa}[A(t), a^\dagger(t)]dB_t + \left(\kappa \left\{ a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t) \right\} dt + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger(t), [A(t), a(t)]]dt \right) \right], \quad (5.32)$$

$$dB_t = b_t dt \quad (5.33)$$

と解釈すべきである。(5.32) を、

$$dA(t) = i[H_S(t), A(t)]dt + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger[A(t), a(t)] + \sqrt{2\kappa}[A(t), a^\dagger(t)]dB_t + \left(\kappa \left\{ a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t) \right\} dt + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger(t), [A(t), a(t)]]dt \right) \quad (5.34)$$

とかく。 $A = a, a^\dagger, a^\dagger a$ として、

$$da(t) = -i\omega_0 a(t)dt - \kappa a(t)dt + \sqrt{2\kappa}dB_t, \quad (5.35)$$

$$da^\dagger(t) = i\omega_0 a^\dagger(t)dt - \kappa a^\dagger(t)dt + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger, \quad (5.36)$$

$$d[a^\dagger(t)a(t)] = -2\kappa[a^\dagger(t)a(t) - \bar{n}]dt + \sqrt{2\kappa}a^\dagger(t)dB_t + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger a(t) \quad (5.37)$$

を得る。(5.35) は (5.22) に等しい。(5.35),(5.36) では、乱雑力を含む項に注目系の演算子がかかっていないので、伊藤型と Stratonovich 型で確率微分方程式は区別がない。(5.37) では、第 2 項, 第 3 項の積が伊藤型かと Stratonovich 型かが問題である。これを検証しよう。

もしも、(5.37) が Stratonovich 型の確率微分方程式ならば、

$$da^\dagger(t) \circ a(t) + a^\dagger(t) \circ da(t) = -2\kappa[a^\dagger(t)a(t) - \bar{n}]dt + \sqrt{2\kappa}a^\dagger(t) \circ dB_t + \sqrt{2\kappa}dB_t \circ^\dagger a(t) \quad (5.38)$$

となるべきである。しかし、これは、(5.35),(5.36) と矛盾する。(5.37) が伊藤型の確率微分方程式ならば、左辺は (5.10) より、

$$d[a^\dagger(t)a(t)] = da^\dagger(t) \cdot a(t) + a^\dagger(t) \cdot da(t) + da^\dagger(t) \cdot da(t) \quad (5.39)$$

である。(5.35),(5.36) を代入し、 dt のオーダーのものを残すと、

$$\begin{aligned} (5.37) \text{ の左辺} &= da^\dagger(t) \cdot a(t) + a^\dagger(t) \cdot da(t) + da^\dagger(t) \cdot da(t) \\ &= \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger a(t) + \sqrt{2\kappa}a^\dagger(t)dB_t - 2\kappa a^\dagger(t)a(t)dt + 2\kappa dB_t^\dagger dB_t \\ &\stackrel{\text{W}}{=} \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger a(t) + \sqrt{2\kappa}a^\dagger(t)dB_t - 2\kappa a^\dagger(t)a(t)dt + 2\kappa\bar{n}dt \\ &= (5.37) \text{ の右辺} \end{aligned} \quad (5.40)$$

となる。ただし、第 3 等号で (5.27) より従う、

$$2\kappa dB_t^\dagger dB_t \stackrel{\text{W}}{=} 2\bar{n}dt \quad (5.41)$$

を用いた。ここで、 $\stackrel{\text{W}}{=}$ は乱雑平均 $\langle \cdots \rangle_R = {}_R\langle 1|\cdots|0\rangle_R$ のもとで成立する式である。以上より、柴田・橋爪の方法で得られら Langevin 方程式は伊藤型であることが分かった。

5.1.4 熱的量子 Brown 運動

今、

$$b_t|0\rangle = 0 \quad (5.42)$$

により、真空 $|0\rangle$ を導入する。上式の \dagger より、

$$(0|b_t^\dagger = 0, \quad (0| = |0\rangle)^\dagger \quad (5.43)$$

を得る。これより、

$$(0|dB_t|0\rangle = 0 \quad , \quad (0|dB_t^\dagger|0\rangle = 0, \quad (5.44)$$

$$(0|dB_t dB_t|0\rangle = 0 \quad , \quad (0|dB_t^\dagger B_t^\dagger|0\rangle = 0, \quad (5.45)$$

$$(0|dB_t dB_t^\dagger|0\rangle = 0 \quad , \quad (0|dB_t^\dagger B_t|0\rangle = dt \quad (5.46)$$

を得る。

b_t, b_t^\dagger のチルダ共役 $\tilde{b}_t, \tilde{b}_t^\dagger$ を導入する。

$$|0, \tilde{0}\rangle = |0\rangle \otimes |\tilde{0}\rangle \quad (5.47)$$

とすると、

$$dB_t|0, \tilde{0}\rangle = d\tilde{B}_t|0, \tilde{0}\rangle = 0, \quad (0, \tilde{0}|dB_t^\dagger = (0, \tilde{0}|d\tilde{B}_t^\dagger \quad (5.48)$$

となる。ただし、

$$d\tilde{B}_t = \tilde{b}_t dt, \quad d\tilde{B}_t^\dagger = \tilde{b}_t^\dagger dt \quad (5.49)$$

である。

dB_t は、熱浴が § 4.1.1 の場合は、

$$\begin{aligned} dB_t &= dt \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} R^I(t) \\ &= dt \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} \sum_l g_l b_l e^{-i\omega_l t} \\ &= dt \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) g(\omega) b(\omega) e^{-i\omega t} \equiv dt b_t \end{aligned} \quad (5.50)$$

である。第3等号で (4.47) を用いた。さて、熱平衡状態では、(3.9) より、

$$b_l|0\rangle_R = e^{\omega_l/T} \tilde{b}_l^\dagger|0\rangle_R \quad (5.51)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} b_t|0\rangle_R &= \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) g(\omega) \tilde{b}^\dagger(\omega) e^{-i\omega t} e^{\omega/T} |0\rangle_R \\ &\approx \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} e^{\omega_0/T} \int_0^\infty d\omega \mathcal{D}(\omega) g(\omega) \tilde{b}^\dagger(\omega) e^{-i\omega t} |0\rangle_R \\ &= e^{\omega_0/T} \tilde{b}_t^\dagger|0\rangle_R \end{aligned} \quad (5.52)$$

となる。これより、熱浴の詳細によらず、一般に

$$dB_t|0\rangle_R = e^{\omega_0/T} d\tilde{B}_t^\dagger|0\rangle_R \quad (5.53)$$

となることが予想される（むしろこの式を $|0\rangle_R$ の定義とする）。また、ブラ真空に対する熱状態条件は、

$${}_R\langle 1|dB_t = {}_R\langle 1|d\tilde{B}_t^\dagger \quad (5.54)$$

となる。

今、

$$dC_t|0\rangle_R = d\tilde{C}_t|0\rangle_R = 0, \quad (5.55)$$

$${}_R\langle 1|dC_t^\ddagger = {}_R\langle 1|d\tilde{C}_t^\ddagger = 0 \quad (5.56)$$

および

$$[dC^\mu, d\bar{C}^\nu] = dt\delta^{\mu\nu} \quad (5.57)$$

を満たす $dC^\mu, d\bar{C}^\mu$ を考える。ただし、ダブレット

$$dC_t^{\mu=1} = dC_t, \quad dC_t^{\mu=2} = d\tilde{C}_t^\ddagger, \quad (5.58)$$

$$d\bar{C}_t^{\mu=1} = dC_t^\ddagger, \quad d\bar{C}_t^{\mu=2} = -d\tilde{C}_t \quad (5.59)$$

を導入した。 $dC^\mu, d\bar{C}^\mu$ は、熱的 Bogolibov 変換

$$dC_t = \mathcal{B}_T^{\mu\nu} dB_t^\nu, \quad d\bar{C}_t = d\bar{B}_t^\mu (\mathcal{B}_T^{-1})^{\nu\mu}, \quad (5.60)$$

$$\mathcal{B}_T = \begin{pmatrix} 1 + \bar{n} & -\bar{n} \\ -1 & 1 \end{pmatrix}, \quad \bar{n} = \frac{1}{e^{\omega_0/T} - 1} \quad (5.61)$$

でかける²⁰⁾。ただし、

$$dB_t^{\mu=1} = dB_t, \quad dB_t^{\mu=2} = d\tilde{B}_t^\dagger, \quad (5.63)$$

$$d\bar{B}_t^{\mu=1} = d\tilde{B}_t^\dagger, \quad d\bar{B}_t^{\mu=2} = -d\tilde{B}_t \quad (5.64)$$

である。(5.60) より、

$$dB_t = dC_t + \bar{n}d\tilde{C}_t, \quad dB_t^\dagger = (1 + \bar{n})dC_t^\ddagger + d\tilde{C}_t \quad (5.65)$$

である。これと (5.58),(5.59),(5.57),(5.54) より、 $\langle \cdots \rangle_R \equiv {}_R\langle 1|\cdots|0\rangle_R$ として、

$$\langle dB_t \rangle_R = 0, \langle dB_t^\dagger \rangle_R = 0, \langle d\tilde{B}_t \rangle_R = 0, \langle d\tilde{B}_t^\dagger \rangle_R = 0, \quad (5.66)$$

$$\langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R = (\bar{n} + 1)dt, \quad \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R = \bar{n}dt, \quad (5.67)$$

$$\langle d\tilde{B}_t^\dagger dB_t^\dagger \rangle_R = (\bar{n} + 1)dt, \quad \langle d\tilde{B}_t dB_t \rangle_R = \bar{n}dt \quad (5.68)$$

²⁰⁾これは、§ 2.2 で (2.88) とせず、

$$b_{22} = 1 \quad (5.62)$$

とした場合である。

を得る。これ以外の2次モーメントは0である。これを真空平均 ${}_R\langle 1 | \cdots | 0 \rangle_R$ を取ることを念頭に置いて、

$$dB_t \stackrel{w}{=} 0, dB_t^\dagger \stackrel{w}{=} 0, d\tilde{B}_t \stackrel{w}{=} 0, d\tilde{B}_t^\dagger \stackrel{w}{=} 0, \quad (5.69)$$

$$dB_t dB_t^\dagger \stackrel{w}{=} (\bar{n} + 1)dt, \quad dB_t^\dagger dB_t \stackrel{w}{=} \bar{n}dt, \quad (5.70)$$

$$d\tilde{B}_t^\dagger dB_t^\dagger \stackrel{w}{=} (\bar{n} + 1)dt, \quad d\tilde{B}_t dB_t \stackrel{w}{=} \bar{n}dt \quad (5.71)$$

とかく。

確率積分は、一般に

$$\hat{I}_t = \int_0^t d\hat{I}_s, \quad (5.72)$$

$$d\hat{I}_t = dB_t^\dagger \hat{F}_t + \hat{G}_t dB_t + d\tilde{B}_t^\dagger \hat{J}_t + \hat{K}_t d\tilde{B}_t + \hat{E}_t dt \quad (5.73)$$

の形になる。確率積分は well-defined だとする。(5.10)の一般化は、

$$d(\hat{I}_t^{(1)} \hat{I}_t^{(2)}) = d\hat{I}_t^{(1)} \hat{I}_t^{(2)} + \hat{I}_t^{(1)} d\hat{I}_t^{(2)} + d\hat{I}_t^{(1)} d\hat{I}_t^{(2)} \quad (5.74)$$

である。

5.2 量子確率微分方程式

5.2.1 伊藤型

以下では、伊藤積の \cdot は省略する。

伊藤型の量子確率 Liouville 方程式

$$d|0_f(t)\rangle = -id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}|0_f(t)\rangle \quad (5.75)$$

を考える。ここで、 $|0_f(t)\rangle$ は注目系+熱浴の有効的なケット真空である。この式の左から ${}_R\langle 1 |$ をかけると、注目系の散逸シュレーディンガー方程式

$$\frac{d}{dt}|0(t)\rangle = -i\hat{H}|0(t)\rangle, \quad (5.76)$$

$$|0(t)\rangle = {}_R\langle 1|0_f(t)\rangle, \quad (5.77)$$

$$\hat{H}dt|0(t)\rangle = {}_R\langle 1|d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}|0_f(t)\rangle \quad (5.78)$$

を得る。 \hat{H} は一般に、

$$\hat{H} = \hat{H}_S + i\hat{\Pi}, \quad (5.79)$$

$$\hat{H}_S = H_S - \tilde{H}_S, \quad (5.80)$$

$$\hat{\Pi} = \hat{\Pi}_R + \hat{\Pi}_D \quad (5.81)$$

とかける。 $\hat{\Pi}_R$ は緩和、 $\hat{\Pi}_D$ は散逸を司る部分である。 $id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}$ は、チルディアン

$$(id\hat{\mathcal{H}}_{f,t})^\sim = id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \quad (5.82)$$

である。また、確率の保存に対応して、

$$\langle\langle 1|d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} = 0 \quad (5.83)$$

である。さらに、

$$|0_f(t)\rangle \sim |0_f(t)\rangle \quad (5.84)$$

を仮定する。(5.75),(5.84) より (5.75) のチルダ共役は (5.75) 自身となる。

以下では、 $d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}$ が有効的に

$$d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} = \hat{H}dt + d\hat{M}_t \quad (5.85)$$

とできるという近似を行う。 $d\hat{M}_t$ は注目系の演算子と dB_t, dB_t^\dagger の積の線形結合と仮定する。注目系のハミルトニアンが

$$H_S = \omega_0 a^\dagger a \quad (5.86)$$

であるとき、

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t = & i[h_1 a^\dagger dB_t + h_2 a^\dagger d\tilde{B}_t^\dagger + h_3 \tilde{a} dB_t + h_4 \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger \\ & + h_1^* \tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t + h_2^* \tilde{a}^\dagger dB_t^\dagger + h_3^* a d\tilde{B}_t + h_4^* a dB_t^\dagger] \end{aligned} \quad (5.87)$$

である。ただし、(5.82) と、

$$a \rightarrow ae^{i\theta}, \quad dB_t \rightarrow dB_t e^{i\theta} \quad (5.88)$$

に対する不変性を仮定した。以下では、

$$|0_f(0)\rangle = |0\rangle_R \otimes |0(0)\rangle \quad (5.89)$$

を仮定し、

$${}_R\langle 1|d\hat{M}_t|0\rangle_R = 0 \quad (5.90)$$

となるものを考える。ただし、 $|0\rangle_R$ は、

$$dB_t|0\rangle_R = f d\tilde{B}_t^\dagger|0\rangle_R, \quad (5.91)$$

$$f = \frac{\bar{n}}{1 + \bar{n}}, \quad \bar{n} = \frac{1}{e^{\omega_0/T} - 1} \quad (5.92)$$

を満たすと仮定する。これは、 $|0\rangle_R$ が温度 T の熱平衡状態にあることを意味する。(5.52) を見よ。なお、(5.83),(5.85) と

$$\langle 1|\hat{H} = 0 \quad (5.93)$$

から、

$$\langle\langle 1|d\hat{M}_t = 0 \quad (5.94)$$

となる。

dB_t は、熱浴が § 4.1.1 の場合は、

$$\begin{aligned} dB_t &= dt \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} R^I(t) \\ &= dt \frac{1}{\sqrt{2\kappa}} \sum_l g_l b_l e^{-i\omega_l t} \end{aligned} \quad (5.95)$$

である。 $d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}$ は、シュレーディンガー描像のハミルトニアンのようなものだが、それが (5.87) のようにかける（時間のように依存する）というのである。また、 $d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}$ には熱浴のハミルトニアン H_R の情報は含まれない。(5.75) の $|0_f(t)\rangle$ が § 4.2 の $|0(t)\rangle$ と同じように時間発展することはないだろう。しかし、 A を注目系の演算子とし、

$$|0_f(t)\rangle = \hat{V}_f(t)|0_f(0)\rangle, \quad (5.96)$$

$$A(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{V}_f^{-1}(t)A\hat{V}_f(t) \quad (5.97)$$

としたとき、 $\langle\langle 1|A(t)$ の運動方程式は正しいかもしれない。ところで、(5.78) より、

$${}_R\langle 1|d\hat{M}_t|0_f(t)\rangle = 0 \quad (5.98)$$

となる。これは、

$${}_R\langle 1|d\hat{M}_t\hat{V}_f(t)|0_f(0)\rangle = {}_R\langle 1|d\hat{M}_t\hat{V}_f(t)|0\rangle_R|0(0)\rangle = 0 \quad (5.99)$$

を意味する。これは、 $s \leq t$ の B_s のみに依存する演算子 A_t に対して、

$${}_R\langle 1|dB_t^\#A_t|0\rangle_R = 0 \quad (\# = \text{無印}, \dagger, \sim, \dagger\sim) \quad (5.100)$$

となることから従う。

$\hat{V}_f(t)$ は、

$$d\hat{V}_f(t) = -id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t) \quad (5.101)$$

に従う。 $\hat{V}_f(t)\hat{V}_f^{-1}(t) = 1$ を微分すると、(5.74) より、

$$\begin{aligned} 0 &= d\hat{V}_f(t)\hat{V}_f^{-1}(t) + \hat{V}_f(t)d\hat{V}_f^{-1}(t) + d\hat{V}_f(t)d\hat{V}_f^{-1}(t), \\ d\hat{V}_f^{-1}(t) &= -[\hat{V}_f(t) + d\hat{V}_f(t)]^{-1}d\hat{V}_f(t)\hat{V}_f^{-1}(t) \end{aligned} \quad (5.102)$$

を得る。ここで、

$$\begin{aligned} [\hat{V}_f(t) + d\hat{V}_f(t)]^{-1} &= \left(\hat{V}_f(t)[1 + \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t)]\right)^{-1} \\ &= [1 + \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t)]^{-1}\hat{V}_f^{-1}(t) \\ &= [1 - \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t) + \{\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t)\}^2 - \dots]\hat{V}_f^{-1}(t) \\ &= \hat{V}_f^{-1}(t) - \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t)\hat{V}_f^{-1}(t) + \mathcal{O}(dt) \end{aligned} \quad (5.103)$$

であり、(5.101) より、

$$d\hat{V}_f(t)\hat{V}_f^{-1}(t) = -id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \quad (5.104)$$

なので、

$$\begin{aligned} d\hat{V}_f^{-1}(t) &= i\hat{V}_f^{-1}(t)[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}] \\ &= i\hat{V}_f^{-1}(t)[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_td\hat{M}_t] \\ &= i\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^-, \end{aligned} \quad (5.105)$$

$$d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- = d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_td\hat{M}_t \quad (5.106)$$

となる。

(5.97),(5.74) より、

$$\begin{aligned} dA(t) &= d\hat{V}_f^{-1}(t)A\hat{V}_f(t) + \hat{V}_f^{-1}(t)Ad\hat{V}_f(t) + d\hat{V}_f^{-1}(t)Ad\hat{V}_f(t) \\ &= d\hat{V}_f^{-1}(t)\hat{V}_f(t)A(t) + A(t)\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t) + d\hat{V}_f^{-1}(t)\hat{V}_f(t)A(t)\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{V}_f(t) \end{aligned} \quad (5.107)$$

である。(5.101),(5.106) を代入して、

$$\begin{aligned} dA(t) &= i\hat{V}_f^{-1}(t)[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_td\hat{M}_t]\hat{V}_f(t)A(t) - iA(t)\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t) \\ &\quad + \hat{V}_f^{-1}(t)[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_td\hat{M}_t]\hat{V}_f(t)A(t)\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t) \\ &= i\hat{V}_f^{-1}(t)[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_td\hat{M}_t]\hat{V}_f(t)A(t) - iA(t)\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t) \\ &\quad + \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t)A(t)\hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t) \\ &= i[d\hat{\mathcal{H}}_f(t) + id'\hat{M}(t)d'\hat{M}(t)]A(t) - iA(t)d\hat{\mathcal{H}}_f(t) + d\hat{\mathcal{H}}_f(t)A(t)d\hat{\mathcal{H}}_f(t) \\ &= i[d\hat{\mathcal{H}}_f(t), A(t)] - d'\hat{M}(t)[d'\hat{M}(t), A(t)] \end{aligned} \quad (5.108)$$

を得る。ただし、

$$d\hat{\mathcal{H}}_f(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\hat{V}_f(t) = \hat{H}(t)dt + d'\hat{M}(t), \quad (5.109)$$

$$d'\hat{M}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{M}_t\hat{V}_f(t) \quad (5.110)$$

である。(5.108) に $\langle\langle 1|$ を作用させて、

$$\begin{aligned} \langle\langle 1|dA(t) &= \langle\langle 1|i[d\hat{\mathcal{H}}_f(t), A(t)] - id'\hat{M}(t)[d'\hat{M}(t), A(t)] \\ &= i\langle\langle 1|[\hat{H}_S(t), A(t)]dt - \langle\langle 1|[\hat{\Pi}(t), A(t)]dt + i\langle\langle 1|[d'\hat{M}(t), A(t)] - i\langle\langle 1|d'\hat{M}(t)[d'\hat{M}(t), A(t)] \\ &= i\langle\langle 1|[H_S(t), A(t)]dt + \langle\langle 1|A(t)\hat{\Pi}(t)dt - i\langle\langle 1|A(t)d'\hat{M}(t) \end{aligned} \quad (5.111)$$

を得る。第 3 等号で、

$$\langle\langle 1|\hat{V}_f(t) = \langle\langle 1| \quad (5.112)$$

と (3.20) すなわち、

$$\langle 1|\hat{\Pi} = 0 \quad (5.113)$$

と (5.83) を用いた。(5.112) は、(5.101) に $\langle\langle 1|$ を作用させ、(5.83) を使えば得られる。

5.2.2 Stratonovich 型

Stratonovich 型の量子確率 Liouville 方程式を

$$d|0_f(t)\rangle = -id\hat{H}_{f,t} \circ |0_f(t)\rangle \quad (5.114)$$

とかく。 $d\hat{H}_{f,t}$ を求めよう。(5.75),(5.19) より、

$$\begin{aligned} -id\hat{H}_{f,t} \circ |0_f(t)\rangle &= -id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \cdot |0_f(t)\rangle - i\frac{1}{2}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \cdot d|0_f(t)\rangle \\ &= d|0_f(t)\rangle - i\frac{1}{2}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \cdot d|0_f(t)\rangle \\ &= (1 - i\frac{1}{2}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}) \cdot d|0_f(t)\rangle \end{aligned} \quad (5.115)$$

である。よって、 $\mathcal{O}(dt)$ までで、

$$\begin{aligned}
d|0_f(t)\rangle &= -i(1 - i\frac{1}{2}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t})^{-1} \cdot d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \circ |0_f(t)\rangle \\
&= -i\left[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + i\frac{1}{2}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\right] \circ |0_f(t)\rangle \\
&= -i\left[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + i\frac{1}{2}d\hat{M}_td\hat{M}_t\right] \circ |0_f(t)\rangle
\end{aligned} \tag{5.116}$$

となる。これより、

$$d\hat{H}_{f,t} = d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + i\frac{1}{2}d\hat{M}_td\hat{M}_t \tag{5.117}$$

$$= \hat{H}_S dt + i\left(\hat{\Pi} + \frac{1}{2}d\hat{M}_td\hat{M}_t\right) + d\hat{M}_t \tag{5.118}$$

を得る。

ところで、古典論では、Stratonovich 型の確率微分方程式は散逸項を含まない。これが量子系でも成り立つとしよう。すると、(5.118) より、

$$\hat{\Pi} + \frac{1}{2}d\hat{M}_td\hat{M}_t \stackrel{w}{=} \hat{\Pi}_R, \tag{5.119}$$

$$d\hat{M}_td\hat{M}_t \stackrel{w}{=} -2\hat{\Pi}_D \tag{5.120}$$

を得る。これは、「一般化された第 2 種揺動散逸定理」と呼ぶべきものである。

伊藤型の確率 Langevin 方程式 (5.108) は、

$$\begin{aligned}
dA(t) &= i[d\hat{\mathcal{H}}_f(t), A(t)] - id'\hat{M}(t)[d'\hat{M}(t), A(t)] \\
&= i[\hat{H}_S(t)dt + i\hat{\Pi}(t)dt, A(t)] + i[d'\hat{M}(t), A(t)] - d'\hat{M}(t)[d'\hat{M}(t), A(t)]
\end{aligned} \tag{5.121}$$

であった。ここで、

$$\begin{aligned}
[dX(t), Y(t)] &\equiv dX(t) \cdot Y(t) - Y(t) \cdot dX(t) \\
&= dX(t) \circ Y(t) - Y(t) \circ dX(t) - \frac{1}{2}[dX(t) \cdot dY(t) - dY(t) \cdot dX(t)] \\
&= [dX(t); Y(t)] - \frac{1}{2}[dX(t), dY(t)]
\end{aligned} \tag{5.122}$$

である。ただし、

$$[Z(t); W(t)] \equiv Z(t) \circ W(t) - W(t) \circ Y(t). \tag{5.123}$$

これと、(5.121) より、 $\mathcal{O}(dt)$ で

$$\begin{aligned}
[d'\hat{M}(t), A(t)] &= [d'\hat{M}(t); A(t)] - \frac{1}{2}[d'\hat{M}(t), dA(t)] \\
&= [d'\hat{M}(t); A(t)] - i\frac{1}{2}[d'\hat{M}(t), [d'\hat{M}(t), A(t)]]
\end{aligned} \tag{5.124}$$

となる。これを、(5.121) の第2項に用いて、

$$\begin{aligned}
dA(t) &= i[\hat{H}_S(t)dt + i\hat{\Pi}(t)dt, A(t)] + i[d'\hat{M}(t)^\circ, A(t)] \\
&\quad + \frac{1}{2}[d'\hat{M}(t), [d'\hat{M}(t), A(t)]] - d'\hat{M}(t)[d'\hat{M}(t), A(t)] \\
&= i[\hat{H}_S(t)dt + i\hat{\Pi}(t)dt, A(t)] + i[d'\hat{M}(t)^\circ, A(t)] - \frac{1}{2}\{d'\hat{M}(t), [d'\hat{M}(t), A(t)]\} \\
&= i[\hat{H}_S(t)dt + i\hat{\Pi}(t)dt, A(t)] + i[d'\hat{M}(t)^\circ, A(t)] - \frac{1}{2}[d'\hat{M}(t)d'\hat{M}(t), A(t)] \\
&= i[\hat{H}_S(t)dt + i\hat{\Pi}(t)dt + id'\hat{M}(t) + i\frac{1}{2}d'\hat{M}(t)d'\hat{M}(t)^\circ, A(t)] \\
&= i[d\hat{H}_f(t)^\circ, A(t)], \tag{5.125}
\end{aligned}$$

$$d\hat{H}_f(t) = \hat{H}_S(t)dt + i\left(\hat{\Pi}(t)dt + \frac{1}{2}d'\hat{M}(t)d'\hat{M}(t)\right) + d'\hat{M}(t) \tag{5.126}$$

を得る。

5.3 ボソン系の確率微分方程式

5.3.1 注目系だけで確率が保存する場合

注目系のハミルトニアンが

$$H_S = \omega_0 a^\dagger a$$

である場合を考える。このとき、(5.87) より、

$$\begin{aligned}
d\hat{M}_t &= i[h_1 a^\dagger dB_t + h_2 a^\dagger d\tilde{B}_t^\dagger + h_3 \tilde{a} dB_t + h_4 \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger \\
&\quad + h_1^* \tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t + h_2^* \tilde{a}^\dagger dB_t^\dagger + h_3^* a d\tilde{B}_t + h_4^* a dB_t^\dagger] \tag{5.127}
\end{aligned}$$

であった。(5.83) より、

$$\begin{aligned}
0 &= i\langle\langle 1|[h_1 a^\dagger dB_t + h_2 a^\dagger d\tilde{B}_t^\dagger + h_3 \tilde{a} dB_t + h_4 \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger \\
&\quad + h_1^* \tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t + h_2^* \tilde{a}^\dagger dB_t^\dagger + h_3^* a d\tilde{B}_t + h_4^* a dB_t^\dagger] \\
&= i\langle\langle 1|[h_1 a^\dagger dB_t + h_2 a^\dagger dB_t + h_3 a^\dagger dB_t + h_4 a^\dagger dB_t^\dagger \\
&\quad + h_1^* a^\dagger dB_t^\dagger + h_2^* a dB_t^\dagger + h_3^* a d\tilde{B}_t + h_4^* a dB_t^\dagger], \\
0 &= h_1 + h_2 + h_3 + h_4 \tag{5.128}
\end{aligned}$$

を得る。さらに、注目系のみで確率が保存する条件

$$\langle 1|d\hat{M}_t = 0 \tag{5.129}$$

を課すと、

$$\begin{aligned}
0 &= i\langle 1|[h_1 a^\dagger dB_t + h_2 a^\dagger d\tilde{B}_t^\dagger + h_3 a^\dagger dB_t + h_4 a^\dagger d\tilde{B}_t^\dagger \\
&\quad + h_1^* a d\tilde{B}_t + h_2^* a dB_t^\dagger + h_3^* a d\tilde{B}_t + h_4^* a dB_t^\dagger], \\
h_1 + h_3 &= 0 = h_2 + h_4 \tag{5.130}
\end{aligned}$$

を得る。(5.128) は (5.130) から得られる。(5.130) より、(5.127) は、

$$d\hat{M}_t = i(\gamma^\ddagger d\hat{W}_t + \text{t.c.}), \quad (5.131)$$

$$\gamma^\ddagger = a^\dagger - \tilde{a}, \quad (5.132)$$

$$dW_t = h_1 dB_t + h_2 d\tilde{B}_t^\dagger \quad (5.133)$$

となる。t.c. はチルダ共役である。

(5.133) より、

$$\begin{aligned} d\tilde{W}_t &= h_1^* d\tilde{B}_t + h_2 dB_t^\dagger, \\ dW_t d\tilde{W}_t &= h_1 h_1^* dB_t d\tilde{B}_t + h_1 h_2^* dB_t dB_t^\dagger + h_2 h_1^* d\tilde{B}_t^\dagger d\tilde{B}_t + h_2 h_2^* d\tilde{B}_t^\dagger dB_t^\dagger, \\ d\tilde{W}_t dW_t &= h_1^* h_1 d\tilde{B}_t dB_t + h_1^* h_2 d\tilde{B}_t dB_t^\dagger + h_2^* h_1 dB_t^\dagger dB_t + h_2^* h_2 dB_t^\dagger d\tilde{B}_t^\dagger, \\ \langle dW_t d\tilde{W}_t \rangle_R &= h_1 h_1^* \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R + h_1 h_2^* \langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R + h_2 h_1^* \langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R + h_2 h_2^* \langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R \\ &= (h_1 + h_2) [h_1^* \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R + h_2^* \langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R], \end{aligned} \quad (5.134)$$

$$\begin{aligned} \langle d\tilde{W}_t dW_t \rangle_R &= h_1^* h_1 \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R + h_1^* h_2 \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R + h_2^* h_1 \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R + h_2^* h_2 \langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R \\ &= (h_1^* + h_2^*) [h_1 \langle dB_t^\dagger dB_t \rangle_R + h_2 \langle dB_t dB_t^\dagger \rangle_R] \end{aligned} \quad (5.135)$$

となる。 $\langle dW_t d\tilde{W}_t \rangle_R = \langle d\tilde{W}_t dW_t \rangle_R$ なので、

$$\begin{aligned} (h_1 + h_2) h_1^* &= (h_1^* + h_2^*) h_1, & (h_1 + h_2) h_2^* &= (h_1^* + h_2^*) h_2, \\ h_1 h_2^* &= h_1^* h_2 \end{aligned} \quad (5.136)$$

を得る。これは、 $-\pi < \theta \leq \pi$ として、

$$h_1 = |h_1| e^{i\theta}, \quad h_2 = \pm |h_2| e^{i\theta} \quad (5.137)$$

を意味する。 $e^{i\theta}$ を dB_t に吸収されて、 $h_1 > 0$ とする。今、

$$h = |h_1 + h_2| \quad (5.138)$$

とし、 $h \neq 0$ を仮定する。このとき、

$$\mu = h_1/h, \quad \nu = h_2/h$$

とすると、

$$\mu + \nu = \text{sgn}(h_1 + h_2) \quad (5.139)$$

となる。 $\text{sgn}(h_1 + h_2) = -1$ の場合は、 dB_t の位相を反転させれば $\mu + \nu = 1$ とできる。つまり、一般に $h_1 + h_2 \neq 0$ なら、

$$\mu + \nu = 1 \quad (5.140)$$

とできる。そして、

$$dW_t = h(\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger) \quad (5.141)$$

となる。

5.3.2 微視的導出とつながるマルチンゲール

エルミート

$$d\hat{M}_t^{(H)} = (d\hat{M}_t^{(H)})^\dagger \quad (5.142)$$

でかつ、

$$d\hat{M}_t^{(H)} = dM_t^{(H)} - d\tilde{M}_t^{(H)} \quad (5.143)$$

の形でかけるマルチンゲールを考える。(5.88)に対する不変性を課すと、(5.87)で $h_2 = h_3 = 0$ とした

$$d\hat{M}_t = i[h_1 a^\dagger dB_t + h_4 \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger + h_1^* \tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t + h_4^* a dB_t^\dagger] \quad (5.144)$$

を得る。更に (5.128) から

$$h_1 + h_4 = 0 \quad (5.145)$$

となる。 h_1 の位相を dB_t に吸収されて

$$d\hat{M}_t^{(H)} = ih(a^\dagger dB_t - a dB_t^\dagger) + ih(\tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t - \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger) \quad (5.146)$$

を得る。

(5.129) を満たすマルチンゲール (5.131) を、

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(-)} &= i(\gamma^\dagger dW_t + \tilde{\gamma}^\dagger d\tilde{W}_t) \\ &= ih[a^\dagger - \tilde{a}](\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger) + ih[\tilde{a}^\dagger - a](\mu d\tilde{B}_t + \nu dB_t^\dagger) \end{aligned} \quad (5.147)$$

とかく。今、

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(+)} &\stackrel{\text{def}}{=} d\hat{M}_t^{(H)} - d\hat{M}_t^{(-)} \\ &= ih(a^\dagger dB_t - a dB_t^\dagger + \tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t - \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger) - ih(a^\dagger \mu dB_t + a^\dagger \nu d\tilde{B}_t^\dagger - \mu \tilde{a} dB_t + \nu \tilde{a} d\tilde{B}_t^\dagger \\ &\quad + \mu \tilde{a}^\dagger d\tilde{B}_t + \nu \tilde{a}^\dagger dB_t^\dagger - \mu a d\tilde{B}_t - \nu a dB_t^\dagger) \\ &= -ih(\mu a + \nu \tilde{a}^\dagger)(dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t) - ih(\mu \tilde{a} + \nu a^\dagger)(d\tilde{B}_t^\dagger - dB_t) \\ &= -i(\gamma_\nu dW_t^\dagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\dagger), \end{aligned} \quad (5.148)$$

$$\gamma_\nu \stackrel{\text{def}}{=} \mu a + \nu \tilde{a}^\dagger, \quad (5.149)$$

$$dW_t^\dagger \stackrel{\text{def}}{=} h(dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t) \quad (5.150)$$

とする。これらは交換関係

$$\begin{aligned} [\gamma_\nu, \gamma^\dagger] &= [\mu a + \nu \tilde{a}^\dagger, a^\dagger - \tilde{a}] \\ &= \mu[a, a^\dagger] + \nu[\tilde{a}^\dagger, -\tilde{a}] \\ &= \mu + \nu = 1 \end{aligned} \quad (5.151)$$

および

$$\begin{aligned} [dW_t, dW_t^\dagger] &= h^2[\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger, dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t] \\ &= h^2(\mu[dB_t, dB_t^\dagger] + \nu[d\tilde{B}_t^\dagger, -d\tilde{B}_t]) \\ &= h^2(\mu dt + \nu dt) \\ &= h^2 dt \end{aligned} \quad (5.152)$$

を満たす。

$\langle 1|$ を $d\hat{M}_t^{(H)}$ に作用させると、

$$\begin{aligned}\langle 1|d\hat{M}_t^{(H)} &= \langle 1|d\hat{M}_t^{(+)} \\ &= -i\langle 1|[a dW_t^\ddagger + a^\dagger d\tilde{W}^\ddagger]\end{aligned}\quad (5.153)$$

となる。つまり、注目系のみでは、確率は保存されない。

5.3.3 係数 h の決定

(4.198) の $\hat{\Pi}$ は、

$$\begin{aligned}\hat{\Pi} &= -\kappa[(1+2\bar{n})(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) - 2(1+\bar{n})a\tilde{a} - 2\bar{n}a^\dagger \tilde{a}^\dagger] - 2\kappa\bar{n} \\ &= \kappa(2a\tilde{a} - a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + 2\kappa\bar{n}(a\tilde{a} - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger \tilde{a}^\dagger)\end{aligned}\quad (5.154)$$

であった。 $\gamma_\nu, \gamma^\ddagger$ は、

$$\begin{pmatrix} \gamma_\nu \\ \tilde{\gamma}^\ddagger \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \mu & \nu \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ \tilde{a}^\dagger \end{pmatrix}\quad (5.155)$$

であったから、(5.154) の右辺第 2 項は、

$$2\kappa\bar{n}(a\tilde{a} - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger \tilde{a}^\dagger) = 2\kappa\bar{n}\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger\quad (5.156)$$

とかける。また、

$$\begin{aligned}\gamma^\ddagger \gamma_\nu + \tilde{\gamma}^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu &= -2\mu a\tilde{a} + 2\nu a^\dagger \tilde{a}^\dagger + (\mu - \nu)(\tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger a) \\ &= -2(1-\nu)a\tilde{a} + 2\nu a^\dagger \tilde{a}^\dagger \tilde{a}(1-2\nu)(\tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger a) \\ &= (-2a\tilde{a} + a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) - 2\nu(-a\tilde{a} - a^\dagger \tilde{a} + \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger a) \\ &= -(2a\tilde{a} - a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) - 2\nu\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger\end{aligned}\quad (5.157)$$

であるから、(5.154) の右辺第 1 項は、

$$\kappa(2a\tilde{a} - a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) = -\kappa(\gamma^\ddagger \gamma_\nu + \tilde{\gamma}^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu) + 2\kappa\nu\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger\quad (5.158)$$

とかける。よって、

$$\begin{aligned}\hat{\Pi} &= -\kappa(\gamma^\ddagger \gamma_\nu + \tilde{\gamma}^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu) + 2\kappa\nu\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger + 2\kappa\bar{n}\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger \\ &= \hat{\Pi}_R + \hat{\Pi}_D,\end{aligned}\quad (5.159)$$

$$\hat{\Pi}_R = -\kappa(\gamma^\ddagger \gamma_\nu + \tilde{\gamma}^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu),\quad (5.160)$$

$$\hat{\Pi}_D = 2\kappa(\bar{n} + \nu)\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger\quad (5.161)$$

となる²¹⁾。

²¹⁾ パラメーター ν は、コヒーレント状態を利用して密度演算子を c 数空間にマップするときの生成・消滅演算子の ordering と密接に関係している。 $\nu = 1$ が正規積 (Q 関数), $\nu = 0$ が反正規積 (P 関数), $\nu = 1/2$ が Weyl 順である (§ C.3)。なお、この ν は付録 C の s とは、 $\nu = (1+s)/\nu$ の関係にある。(C.62) を見よ。

(5.69),(5.70),(5.71) は、

$$\begin{aligned} dB_t &\stackrel{w}{=} 0, dB_t^\dagger \stackrel{w}{=} 0, d\tilde{B}_t \stackrel{w}{=} 0, d\tilde{B}_t^\dagger \stackrel{w}{=} 0 \\ dB_t dB_t^\dagger &\stackrel{w}{=} (\bar{n} + 1)dt, \quad dB_t^\dagger dB_t \stackrel{w}{=} \bar{n}dt, \\ d\tilde{B}_t^\dagger dB_t^\dagger &\stackrel{w}{=} (\bar{n} + 1)dt, \quad d\tilde{B}_t dB_t \stackrel{w}{=} \bar{n}dt \end{aligned}$$

であった。これ以外の 2 次の項は $\stackrel{w}{=} 0$ である。これと、(5.134) より、

$$dW_t d\tilde{W}_t = d\tilde{W}_t dW_t \stackrel{w}{=} h^2[\mu\bar{n} + \nu(\bar{n} + 1)]dt = h^2(\bar{n} + \nu)dt \quad (5.162)$$

である。また、

$$\begin{aligned} dW_t dW_t^\ddagger &= h^2(\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger)(dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t) \\ &= h^2(\mu dB_t dB_t^\dagger - \mu dB_t d\tilde{B}_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger dB_t^\dagger - \nu d\tilde{B}_t^\dagger d\tilde{B}_t) \\ &\stackrel{w}{=} h^2 dt \stackrel{w}{=} d\tilde{W}_t d\tilde{W}_t^\ddagger, \end{aligned} \quad (5.163)$$

$$\begin{aligned} dW_t dW_t &= h^2(\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger)(\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger) \\ &\stackrel{w}{=} 0 \stackrel{w}{=} d\tilde{W}_t d\tilde{W}_t \end{aligned} \quad (5.164)$$

であり、

$${}_R\langle 1 | dW_t^\ddagger = {}_R\langle 1 | (dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t) = 0 = {}_R\langle 1 | d\tilde{W}_t^\ddagger \quad (5.165)$$

より、

$$dW_t^\ddagger dW_t \stackrel{w}{=} 0 \stackrel{w}{=} d\tilde{W}_t^\ddagger d\tilde{W}_t, \quad (5.166)$$

$$dW_t^\ddagger d\tilde{W}_t \stackrel{w}{=} 0 \stackrel{w}{=} d\tilde{W}_t^\ddagger dW_t, \quad (5.167)$$

$$dW_t^\ddagger dW_t^\ddagger \stackrel{w}{=} 0 \stackrel{w}{=} d\tilde{W}_t^\ddagger d\tilde{W}_t^\ddagger \quad (5.168)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(-)} d\hat{M}_t^{(-)} &= i(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t) i(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t) \\ &\stackrel{w}{=} -\gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger dW_t d\tilde{W}_t \\ &\stackrel{w}{=} h^2(\bar{n} + \nu)dt \gamma^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger, \end{aligned} \quad (5.169)$$

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(-)} d\hat{M}_t^{(+)} &= i(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t) (-i)(\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger) \\ &\stackrel{w}{=} dW_t dW_t^\ddagger \gamma^\ddagger \gamma_\nu + d\tilde{W}_t d\tilde{W}_t^\ddagger \tilde{\gamma}^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu \\ &\stackrel{w}{=} h^2 dt (\gamma^\ddagger \gamma_\nu + \tilde{\gamma}^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu), \end{aligned} \quad (5.170)$$

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(+)} d\hat{M}_t^{(+)} &= (-i)^2 (\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger) (\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger) \\ &\stackrel{w}{=} 0, \end{aligned} \quad (5.171)$$

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(+)} d\hat{M}_t^{(-)} &= -i(\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger) i(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t) \\ &\stackrel{w}{=} 0 \end{aligned} \quad (5.172)$$

を得る。(5.169),(5.161) より、

$$d\hat{M}_t^{(-)} d\hat{M}_t^{(-)} \stackrel{w}{=} -\frac{h^2}{\kappa} \hat{\Pi}_D dt. \quad (5.173)$$

注目系だけで確率が保存する場合は、一般化された第2種揺動散逸定理 (5.120) が成り立つことを仮定すると、

$$h = \sqrt{2\kappa} \quad (5.174)$$

を得る。また、(5.169)-(5.172),(5.161),(5.160) より、

$$d\hat{M}_t^{(-)}d\hat{M}_t^{(H)} \stackrel{w}{=} -2\hat{\Pi}dt. \quad (5.175)$$

5.3.4 一般的なマルチンゲール

$d\hat{M}_t^{(-)}$ と $d\hat{M}_t^{(H)}$ の中間のマルチンゲール

$$d\hat{M}_t^{(\lambda)} \stackrel{\text{def}}{=} d\hat{M}_t^{(-)} + \lambda d\hat{M}_t^{(+)} \quad (0 \leq \lambda \leq 1) \quad (5.176)$$

を考える。このとき、

$$d\hat{M}_t^{(0)} = d\hat{M}_t^{(-)}, \quad (5.177)$$

$$d\hat{M}_t^{(1)} = d\hat{M}_t^{(H)} \quad (5.178)$$

である。ただし、(5.174) を仮定する。 $d\hat{M}_t^{(\lambda)}$ は、(5.87) で、

$$\begin{aligned} h_1 &= \sqrt{2\kappa}[\lambda + \mu(1 - \lambda)] \quad , \quad h_2 = \sqrt{2\kappa\nu}(1 - \lambda), \\ h_3 &= \sqrt{2\kappa\mu}[-1 + \lambda] \quad , \quad h_4 = \sqrt{2\kappa}[-\lambda + \nu(\lambda - 1)] \end{aligned} \quad (5.179)$$

としたものである。これは (5.128) を満たす。 λ は、注目系だけでの確率の保存が破れる度合いを表す。(5.169)-(5.172) より、

$$d\hat{M}_t^{(\lambda)}d\hat{M}_t^{(\lambda)} \stackrel{w}{=} -2dt(\lambda\hat{\Pi}_R + \hat{\Pi}_D) \quad (5.180)$$

を得る。(5.106),(5.118) より、

$$\begin{aligned} d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- &= d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_td\hat{M}_t \\ &\stackrel{w}{=} \hat{H}_Sdt + i[(1 - 2\lambda)\hat{\Pi}_R - \hat{\Pi}_D]dt + d\hat{M}_t, \end{aligned} \quad (5.181)$$

$$\begin{aligned} d\hat{H}_{f,t} &= d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + i\frac{1}{2}d\hat{M}_td\hat{M}_t \\ &= \hat{H}_Sdt + i\left(\hat{\Pi} + \frac{1}{2}d\hat{M}_td\hat{M}_t\right) + d\hat{M}_t \\ &\stackrel{w}{=} \hat{H}_Sdt + i(1 - \lambda)\hat{\Pi}_R + d\hat{M}_t \end{aligned} \quad (5.182)$$

を得る。

5.3.5 量子 Langevin 方程式

$$d'\hat{M}^\sharp(t) = \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{M}^\sharp(t)\hat{V}_f(t) \quad \sharp = (-), (+), (\lambda), (H) \quad (5.183)$$

であった。これより、

$$\begin{aligned}
d\hat{M}^{(-)}(t) &= \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{M}^{(-)}(t)\hat{V}_f(t) \\
&= i\hat{V}_f^{-1}(t)(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t)\hat{V}_f(t) \\
&= i(\gamma^\ddagger(t)dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger(t)d\tilde{W}_t),
\end{aligned} \tag{5.184}$$

$$\begin{aligned}
d\hat{M}^{(+)}(t) &= -i\hat{V}_f^{-1}(t)(\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger)\hat{V}_f(t) \\
&= -i\hat{V}_f^{-1}(t)(dW_t^\ddagger \gamma_\nu + d\tilde{W}_t^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu)\hat{V}_f(t) \\
&= -i[dW_t^\ddagger \gamma_\nu(t) + d\tilde{W}_t^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu(t)],
\end{aligned} \tag{5.185}$$

$$d'\hat{M}^{(\lambda)}(t) = i[\gamma^\ddagger(t)dW_t + \text{t.c.}] - i\lambda[dW_t^\ddagger \gamma_\nu(t) + \text{t.c.}] \tag{5.186}$$

となる。ただし、(5.216) を用いた。(5.154),(5.186) を (5.111) すなわち、

$$\langle\langle 1|dA(t) = i\langle\langle 1|[H_S(t), A(t)]dt + \langle\langle 1|A(t)\hat{\Pi}(t)dt - i\langle\langle 1|A(t)d'\hat{M}^{(\lambda)}(t) \tag{5.187}$$

に代入する。(5.32) は再現されるだろうか？(5.187) の第2項は、

$$\begin{aligned}
&\langle\langle 1|A(t)\hat{\Pi}(t)dt \\
&= \langle\langle 1|A(t)\kappa[2a(t)\tilde{a}(t) - a^\ddagger(t)a(t) - \tilde{a}^\ddagger(t)\tilde{a}(t) + 2\bar{n}(a(t)\tilde{a}(t) - a(t)a^\ddagger(t) - \tilde{a}^\ddagger(t)\tilde{a}(t) + a^\ddagger(t)\tilde{a}^\ddagger(t))]dt \\
&= \kappa\left[2\langle\langle 1|\tilde{a}A(t)a(t) - \langle\langle 1|A(t)a^\ddagger(t)a(t) - \langle\langle 1|\tilde{a}^\ddagger(t)\tilde{a}(t)A(t) + 2\bar{n}\langle\langle 1|\tilde{a}A(t)a(t) \right. \\
&\quad \left. - 2\bar{n}\langle\langle 1|A(t)a(t)a^\ddagger(t) - 2\bar{n}\langle\langle 1|\tilde{a}^\ddagger(t)\tilde{a}(t)A(t) + 2\bar{n}\langle\langle 1|\tilde{a}^\ddagger(t)A(t)a^\ddagger(t)\right]dt \\
&= \kappa\left[2\langle\langle 1|a^\ddagger(t)A(t)a(t) - \langle\langle 1|A(t)a^\ddagger(t)a(t) - \langle\langle 1|a^\ddagger(t)a(t)A(t) + 2\bar{n}\langle\langle 1|a^\ddagger(t)A(t)a(t) \right. \\
&\quad \left. - 2\bar{n}\langle\langle 1|A(t)a(t)a^\ddagger(t) - 2\bar{n}\langle\langle 1|a^\ddagger(t)a(t)A(t) + 2\bar{n}\langle\langle 1|a(t)A(t)a^\ddagger(t)\right]dt \\
&= \kappa\langle\langle 1|\left\{a^\ddagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\ddagger(t), A(t)]a(t)\right\}dt + 2\kappa\bar{n}\langle\langle 1|[a^\ddagger(t), [A(t), a(t)]]dt
\end{aligned} \tag{5.188}$$

となる。これは、(5.32) の第2行目である。(5.187) の第2項は、

$$\begin{aligned}
&-i\langle\langle 1|A(t)d'\hat{M}^{(\lambda)}(t) \\
&= \langle\langle 1|A(t)\left([\gamma^\ddagger(t)dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger(t)d\tilde{W}_t] - \lambda[dW_t^\ddagger \gamma_\nu(t) + d\tilde{W}_t^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu(t)]\right) \\
&= \langle\langle 1|[A(t), \gamma^\ddagger(t)]dW_t + \langle\langle 1|[A(t), \tilde{\gamma}^\ddagger(t)]d\tilde{W}_t
\end{aligned} \tag{5.189}$$

となる。ここで、

$$\langle\langle 1|\hat{V}_f^{-1}(t) = \langle\langle 1| \tag{5.190}$$

より、

$$\begin{aligned}
\langle\langle 1|\gamma^\ddagger(t) &= \langle\langle 1|\gamma^\ddagger\hat{V}_f(t) \\
&= \langle\langle 1|(a^\dagger - \tilde{a})\hat{V}_f(t) \\
&= 0
\end{aligned} \tag{5.191}$$

となることと、

$$\begin{aligned}
\langle\langle 1|A(t)dW_t^\ddagger &= \langle\langle 1|\hat{V}_f^{-1}(t)AdW_t^\ddagger\hat{V}_f(t) \\
&= \langle\langle 1|AdW_t^\ddagger\hat{V}_f(t) \\
&= \langle\langle 1|dW_t^\ddagger A\hat{V}_f(t) \\
&= \langle\langle 1|\sqrt{2\kappa}(dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t)A\hat{V}_f(t) \\
&= 0
\end{aligned} \tag{5.192}$$

を用いた。この性質のため $d\hat{M}_t^{(+)}$ からの寄与はない。(5.189) は、

$$\begin{aligned}
(5.189) &= \langle\langle 1|\hat{V}_f^{-1}(t)[A, \gamma^\ddagger]dW_t\hat{V}_f(t) + \langle\langle 1|\hat{V}_f^{-1}(t)[A, \tilde{\gamma}^\ddagger]d\tilde{W}_t\hat{V}_f(t) \\
&= \langle\langle 1|[A, \gamma^\ddagger]dW_t\hat{V}_f(t) + \langle\langle 1|[A, \tilde{\gamma}^\ddagger]d\tilde{W}_t\hat{V}_f(t) \\
&= \langle\langle 1|dW_t[A, \gamma^\ddagger]\hat{V}_f(t) + \langle\langle 1|d\tilde{W}_t[A, \tilde{\gamma}^\ddagger]\hat{V}_f(t) \\
&= {}_R\langle 1|dW_t\langle 1|[A, \gamma^\ddagger]\hat{V}_f(t) + {}_R\langle 1|d\tilde{W}_t\langle 1|[A, \tilde{\gamma}^\ddagger] \\
&= {}_R\langle 1|\sqrt{2\kappa}(\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger)\langle 1|[A, a^\dagger - \tilde{a}]\hat{V}_f(t) + {}_R\langle 1|\sqrt{2\kappa}(\mu d\tilde{B}_t + \nu dB_t^\dagger)\langle 1|[A, \tilde{a}^\dagger - a]\hat{V}_f(t) \\
&= {}_R\langle 1|\sqrt{2\kappa}dB_t\langle 1|\hat{V}_f(t) + {}_R\langle 1|\sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger\langle 1|[A, -a]\hat{V}_f(t) \\
&= \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|[A, a^\dagger]dB_t\hat{V}_f(t) + \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|dB_t^\dagger[A, -a]\hat{V}_f(t) \\
&= \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|\hat{V}_f^{-1}(t)[A, a^\dagger]dB_t\hat{V}_f(t) + \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|\hat{V}_f^{-1}(t)dB_t^\dagger[A, -a]\hat{V}_f(t) \\
&= \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|[A(t), a^\ddagger(t)]dB_t + \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|dB_t^\dagger[a(t), A(t)] \tag{5.193}
\end{aligned}$$

よって、(5.187) は、

$$\begin{aligned}
&\langle\langle 1|dA(t) \\
&= i\langle\langle 1|[H_S(t), A(t)]dt + \kappa\langle\langle 1|\left(a^\ddagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\ddagger(t), A(t)]a(t) + 2\bar{n}[a^\ddagger(t), [A(t), a(t)]]\right)dt \\
&\quad + \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|[A(t), a^\ddagger(t)]dB_t + \sqrt{2\kappa}\langle\langle 1|dB_t^\dagger[a(t), A(t)] \tag{5.194}
\end{aligned}$$

となる。これは、(5.32) である！これは ν や λ によらない。これで、§ 5.2, § 5.3 の体系は正しい（有効である）に違いないと思える。

(5.108) すなわち、

$$\begin{aligned}
dA(t) &= i[d\hat{H}_f(t), A(t)] - d'\hat{M}^{(\lambda)}(t)[d'\hat{M}^{(\lambda)}(t), A(t)] \\
&= i[\hat{H}_S(t)dt + i\hat{\Pi}(t)dt + d'\hat{M}^{(\lambda)}(t), A(t)] - d'\hat{M}^{(\lambda)}(t)[d'\hat{M}^{(\lambda)}(t), A(t)] \\
&= i[H_S(t), A(t)]dt - [\hat{\Pi}(t), A(t)]dt + i[d'\hat{M}^{(\lambda)}(t), A(t)] - d'\hat{M}^{(\lambda)}(t)[d'\hat{M}^{(\lambda)}(t), A(t)] \tag{5.195}
\end{aligned}$$

により、(5.194) よりも詳細な情報を得ることができる。上式に、 $A = a$ を代入する。

$$\begin{aligned}
i[H_S, a] &= i[\omega_0 a^\dagger a, a] = -i\omega_0 a \\
-[\hat{\Pi}, a] &= -\kappa[(2a\tilde{a} - a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + 2\bar{n}(a\tilde{a} - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger \tilde{a}^\dagger), a] \\
&= -\kappa[aa^\dagger, a] - 2\kappa\bar{n}[-aa^\dagger + a^\dagger \tilde{a}^\dagger, a] \\
&= -\kappa a + 2\kappa\bar{n}(-a + \tilde{a}^\dagger), \\
i[d\hat{M}_t^{(\lambda)}, a] &= -[\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t, a] + \lambda[dW_t^\ddagger \gamma_\nu + d\tilde{W}_t^\ddagger \tilde{\gamma}_\nu, a] \\
&= -[\gamma^\ddagger, a]dW_t - [\tilde{\gamma}^\ddagger, a]d\tilde{W}_t + \lambda dW_t^\ddagger[\gamma_\nu, a] + \lambda d\tilde{W}_t^\ddagger[\tilde{\gamma}_\nu, a] \\
&= dW_t + 0 + 0 + \lambda d\tilde{W}_t^\ddagger(-\nu) \\
&= dW_t - \lambda\nu d\tilde{W}_t^\ddagger, \\
-d\hat{M}_t^{(\lambda)}[d\hat{M}_t^{(\lambda)}, a] &= -(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t)(dW_t - \lambda\nu d\tilde{W}_t^\ddagger) \\
&\quad + \lambda(\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger)(dW_t - \lambda\nu d\tilde{W}_t^\ddagger) \tag{5.196}
\end{aligned}$$

であり、(5.162)-(5.168) より、

$$\begin{aligned}
(5.196) &\stackrel{\text{W}}{=} -\tilde{\gamma}^\ddagger dW_t d\tilde{W}_t + \lambda\nu \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t d\tilde{W}_t^\ddagger \\
&\stackrel{\text{W}}{=} 2\kappa\bar{n}(a - \tilde{a}^\dagger)dt + 2\kappa\nu(a - \tilde{a}^\dagger)dt - 2\lambda\nu\kappa(a - \tilde{a}^\dagger)dt \\
&= 2\kappa\bar{n}(a - \tilde{a}^\dagger)dt + 2\kappa\nu(1 - \lambda)(a - \tilde{a}^\dagger)dt \tag{5.197}
\end{aligned}$$

である。よって、

$$\begin{aligned} da(t) &\stackrel{w}{=} -i\omega_0 a(t)dt - \kappa a(t)dt + 2\kappa\bar{n}[-a(t) + \tilde{a}^\ddagger(t)]dt - dW_t - \lambda\nu d\tilde{W}_t^\ddagger \\ &\quad + 2\kappa\bar{n}[a(t) - \tilde{a}^\ddagger(t)]dt + 2\kappa\nu[a(t) - \tilde{a}^\ddagger(t)]dt \\ &= (-i\omega_0 - \kappa)a(t)dt + 2\kappa\nu(1 - \lambda)[a(t) - \tilde{a}^\ddagger(t)]dt + dW_t - \lambda\nu d\tilde{W}_t^\ddagger \end{aligned} \quad (5.198)$$

を得る。同様にして、

$$da^\ddagger(t) \stackrel{w}{=} (i\omega_0 - \kappa)a^\ddagger(t)dt + 2\kappa\mu(1 - \lambda)[a^\ddagger(t) - \tilde{a}(t)]dt + d\tilde{W}_t + \lambda\mu dW_t^\ddagger \quad (5.199)$$

も得られる。

$\lambda = 0$ とすると、

$$da(t) \stackrel{w}{=} (-i\omega_0 - \kappa)a(t)dt + 2\kappa\nu[a(t) - \tilde{a}^\ddagger(t)]dt + dW_t, \quad (5.200)$$

$$da^\ddagger(t) \stackrel{w}{=} (i\omega_0 - \kappa)a^\ddagger(t)dt + 2\kappa\mu[a^\ddagger(t) - \tilde{a}(t)]dt + d\tilde{W}_t \quad (5.201)$$

となり、更に $\nu = 1/2$ として、

$$da(t) \stackrel{w}{=} -i\omega_0 a(t)dt - \kappa\tilde{a}^\ddagger(t)dt + dW_t, \quad (5.202)$$

$$da^\ddagger(t) \stackrel{w}{=} i\omega_0 a^\ddagger(t)dt - \kappa\tilde{a}(t)dt + d\tilde{W}_t \quad (5.203)$$

となる。また、 $\lambda = 1$ とすると、

$$\begin{aligned} da(t) &\stackrel{w}{=} (-i\omega_0 - \kappa)a(t)dt + dW_t - \nu d\tilde{W}_t^\ddagger \\ &= (-i\omega_0 - \kappa)a(t)dt + \sqrt{2\kappa}[\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\ddagger - \nu(d\tilde{B}_t^\ddagger - dB_t)] \\ &= (-i\omega_0 - \kappa)a(t)dt + \sqrt{2\kappa}dB_t, \end{aligned} \quad (5.204)$$

$$\begin{aligned} da^\ddagger(t) &\stackrel{w}{=} (i\omega_0 - \kappa)a^\ddagger(t)dt + d\tilde{W}_t + \mu dW_t^\ddagger \\ &= (i\omega_0 - \kappa)a^\ddagger(t)dt + \sqrt{2\kappa}[\mu d\tilde{B}_t + \nu dB_t^\ddagger + \mu(dB_t^\ddagger - d\tilde{B}_t)] \\ &= (i\omega_0 - \kappa)a^\ddagger(t)dt + \sqrt{2\kappa}dB_t^\ddagger \end{aligned} \quad (5.205)$$

となる。これは ν に依らない。(5.204) は、(5.22) に一致する。また、(5.205) は、(5.22) と同様にして得られる $a(t)$ の方程式に一致する。(5.205) は (5.204) で \ddagger を取ったものである。これは、 $\lambda = 1$ はエルミートな、微視的導出とつながるマルチンゲールだったためである。

(5.194) が λ によらず、(5.32) に一致するのは、柴田・橋爪の第2処方による。また、(5.32) は § 5.1.3 で伊藤型だと結論されたが、これは (5.194) が伊藤型であることと整合している。

5.3.6 量子 Brown 運動の演算子のハイゼンベルク描像

今、

$$B^\#(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{V}_f^{-1}(t)B_t^\# \hat{V}_f(t) \quad (\# = \text{無印}, \ddagger, \sim, \ddagger\sim) \quad (5.206)$$

とする²²⁾。(5.74) より、

$$dB^\#(t) = [d\hat{V}_f^{-1}(t)]B_t^\# \hat{V}_f(t) + \hat{V}_f^{-1}(t)d[B_t^\# \hat{V}_f(t)] + [d\hat{V}_f^{-1}(t)]d[B_t^\# \hat{V}_f(t)]$$

²²⁾ $X = B, M, W$ に対して、

$$d'X^\#(t) = \hat{V}_f^{-1}(t)dX_t^\# \hat{V}_f(t) \quad (5.207)$$

とする。また、 $B^\ddagger(t), dB^\ddagger(t)$ は、本来は $B^\ddagger(t), dB^\ddagger(t)$ と書くべき量である。

であり、

$$\begin{aligned} d[B_t^\sharp \hat{V}_f(t)] &= dB_t^\sharp \hat{V}_f(t) + B_t^\sharp d\hat{V}_f(t) + dB_t^\sharp d\hat{V}_f(t) \\ &= dB_t^\sharp \hat{V}_f(t) + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) = \hat{V}_f(t)dB_t^\sharp + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) \end{aligned} \quad (5.208)$$

である。ただし、

$$B_{t+dt}^\sharp = B_t^\sharp + dB_t^\sharp \quad (5.209)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} dB^\sharp(t) &= [d\hat{V}_f^{-1}(t)]B_t^\sharp \hat{V}_f(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) \left(dB_t^\sharp \hat{V}_f(t) + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) \right) \\ &\quad + [d\hat{V}_f^{-1}(t)] \left(\hat{V}_f(t)dB_t^\sharp + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) \right) \\ &= d'B^\sharp(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) \left(\hat{V}_f(t)[d\hat{V}_f^{-1}(t)]B_t^\sharp \hat{V}_f(t) + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) \right. \\ &\quad \left. + \hat{V}_f(t)[d\hat{V}_f^{-1}(t)]\{\hat{V}_f(t)dB_t^\sharp + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t)\} \right) \end{aligned} \quad (5.210)$$

である。()の最後の項で、

$$d\hat{V}_f^{-1}(t)\{\hat{V}_f(t)dB_t^\sharp + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t)\} = d\hat{V}_f^{-1}(t)dB_t^\sharp \hat{V}_f(t) + [d\hat{V}_f^{-1}(t)]B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t)$$

である。ただし、伊藤積では、

$$[dB_t^\sharp, \hat{V}_f(t)] = 0 \quad (5.211)$$

が成り立つことを用いた。よって、

$$\begin{aligned} (5.210) &= d'B^\sharp(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) \left(\hat{V}_f(t)[d\hat{V}_f^{-1}(t)]B_{t+dt}^\sharp \hat{V}_f(t) + B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) \right. \\ &\quad \left. + \hat{V}_f(t)[d\hat{V}_f^{-1}(t)]B_{t+dt}^\sharp d\hat{V}_f(t) \right) \\ &= d'B^\sharp(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) \left(id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- B_{t+dt}^\sharp \hat{V}_f(t) - B_{t+dt}^\sharp id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \hat{V}_f(t) \right. \\ &\quad \left. + d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- B_{t+dt}^\sharp d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \hat{V}_f(t) \right) \\ &= d'B^\sharp(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) \left(id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- B_{t+dt}^\sharp - B_{t+dt}^\sharp id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \right. \\ &\quad \left. + d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- B_{t+dt}^\sharp d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \right) \hat{V}_f(t) \end{aligned} \quad (5.212)$$

となる。(5.106)より、

$$\begin{aligned} id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- B_{t+dt}^\sharp - B_{t+dt}^\sharp id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} &= i(d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_t d\hat{M}_t)B_{t+dt}^\sharp - iB_{t+dt}^\sharp id\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \\ &= i[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}, B_{t+dt}^\sharp] - d\hat{M}_t d\hat{M}_t B_{t+dt}^\sharp, \\ d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^- B_{t+dt}^\sharp d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} &= (d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} + id\hat{M}_t d\hat{M}_t)B_{t+dt}^\sharp d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \\ &= d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} B_{t+dt}^\sharp d\hat{\mathcal{H}}_{f,t} \\ &= d\hat{M}_t B_{t+dt}^\sharp d\hat{M}_t \end{aligned}$$

である。よって、

$$(5.212) = d'B^\sharp(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) \left(i[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}, B_{t+dt}^\sharp] - d\hat{M}_t d\hat{M}_t B_{t+dt}^\sharp + d\hat{M}_t B_{t+dt}^\sharp d\hat{M}_t \right) \hat{V}_f(t) \quad (5.213)$$

を得る。これと、

$$\begin{aligned}
i[d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}, B_{t+dt}^\sharp] &= i[d\hat{M}_t, B_{t+dt}^\sharp] \\
&= i[d\hat{M}_t, dB_t^\sharp], \\
d\hat{M}_t d\hat{M}_t B_{t+dt}^\sharp + d\hat{M}_t B_{t+dt}^\sharp d\hat{M}_t &= d\hat{M}_t [d\hat{M}_t, B_t^\sharp + dB_t^\sharp] \\
&= d\hat{M}_t [d\hat{M}_t, dB_t^\sharp] = \mathcal{O}(dt^{3/2})
\end{aligned}$$

より、

$$\begin{aligned}
dB^\sharp(t) &= d'B^\sharp(t) + \hat{V}_f^{-1}(t) i[d\hat{M}_t, dB_t^\sharp] \hat{V}_f(t) \\
&= d'B^\sharp(t) + i[d'\hat{M}(t), d'B^\sharp(t)] \\
&= d'B^\sharp(t) + i[d'\hat{M}(t), dB_t^\sharp(t)]
\end{aligned} \tag{5.214}$$

を得る。ただし、(5.211) より、

$$\begin{aligned}
d'B^\sharp(t) &\equiv \hat{V}_f^{-1}(t) dB_t \hat{V}_f(t) \\
&= dB_t
\end{aligned} \tag{5.215}$$

である²³⁾。よって、

$$dB^\sharp(t) = dB_t^\sharp + i[d'\hat{M}(t), dB_t^\sharp(t)] \tag{5.217}$$

となる。

(5.217) に、(5.176) を代入して、

$$\begin{aligned}
dB^\sharp(t) &= dB_t^\sharp + i[d'\hat{M}^{(-)}(t) + \lambda d'\hat{M}^{(+)}(t), d'B^\sharp(t)] \\
&= dB_t^\sharp - [\gamma^\ddagger(t) d'W(t) + \tilde{\gamma}^\ddagger(t) d'\tilde{W}(t), d'B^\sharp(t)] \\
&\quad + \lambda[\gamma_\nu(t) d'W^\ddagger(t) + \tilde{\gamma}_\nu(t) d'\tilde{W}^\ddagger(t), d'B^\sharp(t)].
\end{aligned} \tag{5.218}$$

ここで、

$$\begin{aligned}
\gamma^\ddagger &= a^\dagger - \tilde{a}, \\
\gamma_\nu &= \mu a + \nu \tilde{a}^\dagger, \\
dW_t &= \sqrt{2\kappa}(\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger),
\end{aligned} \tag{5.219}$$

$$dW_t^\ddagger = \sqrt{2\kappa}(dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t) \tag{5.220}$$

であった。よって、

$$\begin{aligned}
dB(t) &= dB_t - \sqrt{2\kappa}\gamma^\ddagger(t)[d'W(t), d'B(t)] - \sqrt{2\kappa}\tilde{\gamma}^\ddagger(t)[d'\tilde{W}(t), d'B(t)] \\
&\quad + \sqrt{2\kappa}\lambda\gamma_\nu(t)[d'W^\ddagger(t), d'B(t)] + \sqrt{2\kappa}\tilde{\gamma}_\nu(t)[d'\tilde{W}^\ddagger(t), d'B(t)] \\
&= dB_t - \sqrt{2\kappa}[\tilde{a}^\dagger(t) - a(t)](-\nu dt) + \lambda[\mu a(t) + \nu \tilde{a}^\dagger(t)](-dt) \\
&= dB_t + \sqrt{2\kappa}[(1-\lambda)\nu[\tilde{a}^\dagger(t) - a(t)] - \lambda a(t)] dt
\end{aligned} \tag{5.221}$$

²³⁾ dW_t^\ddagger は dB_t^\sharp の線形結合なので、

$$d'W^\sharp(t) = dW_t^\sharp \tag{5.216}$$

となる。

および、

$$\begin{aligned}
dB^\#(t) &= dB_t^\dagger - \sqrt{2\kappa}\gamma^\ddagger(t)[d'W(t), d'B^\#(t)] - \sqrt{2\kappa}\tilde{\gamma}^\ddagger(t)[d'\tilde{W}(t), d'B^\#(t)] \\
&\quad + \sqrt{2\kappa}\lambda\gamma_\nu(t)[d'W^\ddagger(t), d'B^\#(t)] + \sqrt{2\kappa}\tilde{\gamma}_\nu(t)[d'\tilde{W}^\ddagger(t), d'B^\#(t)] \\
&= dB_t^\dagger - \sqrt{2\kappa}[a^\dagger(t) - \tilde{a}(t)](\mu dt) + \lambda[\mu\tilde{a}(t) + \nu a^\dagger(t)](-dt) \\
&= dB_t^\dagger + \sqrt{2\kappa}[-(1-\lambda)\mu[a^\dagger(t) - \tilde{a}(t)] - \lambda a^\dagger(t)]dt
\end{aligned} \tag{5.222}$$

を得る²⁴⁾。(5.221),(5.222) と (5.219),(5.220) より、

$$\begin{aligned}
dW(t) &= dW_t + 2\kappa\mu[(1-\lambda)\nu[\tilde{a}^\dagger(t) - a(t)] - \lambda a(t)]dt \\
&\quad + 2\kappa\nu[-(1-\lambda)\mu[\tilde{a}^\dagger(t) - a(t)] - \lambda\tilde{a}^\dagger(t)]dt \\
&= dW_t - 2\kappa(\mu\lambda a(t) + \nu\lambda\tilde{a}^\dagger(t))dt \\
&= dW_t - 2\lambda\kappa\gamma_\nu(t)dt,
\end{aligned} \tag{5.223}$$

$$\begin{aligned}
dW^\ddagger(t) &= dW_t^\ddagger - 2\kappa[-(1-\lambda)\mu[a^\dagger(t) - \tilde{a}(t)] + \lambda a^\dagger(t)]dt \\
&\quad - [-(1-\lambda)\mu[\tilde{a}^\dagger(t) - a(t)] + \lambda\tilde{a}^\dagger(t)]dt \\
&= dW_t^\ddagger - 2\lambda\kappa\lambda[a^\dagger(t) - \tilde{a}(t)]dt \\
&= dW_t^\ddagger - 2\lambda\kappa\lambda\gamma^\ddagger dt
\end{aligned} \tag{5.224}$$

を得る。 $dW(t)$ は ν には陽には依らない。上の 2 式の右辺第 2 項は、系の情報を持っている。また、 $\lambda = 0$ で、その項は消える。

ところで、

$$\begin{aligned}
d\hat{M}_t^{(-)} &= i(\gamma^\ddagger dW_t + \tilde{\gamma}^\ddagger d\tilde{W}_t), \\
d\hat{M}_t^{(+)} &= -i(\gamma_\nu dW_t^\ddagger + \tilde{\gamma}_\nu d\tilde{W}_t^\ddagger), \\
d\hat{M}_t^{(\lambda)} &= d\hat{M}_t^{(-)} + \lambda d\hat{M}_t^{(+)}, \\
d'\hat{M}^\#(t) &= \hat{V}_f^{-1}(t)d\hat{M}^\#(t)\hat{V}_f(t) \quad \# = (-), (+), (\lambda), (H)
\end{aligned}$$

であった。今、

$$:\hat{M}^{(-)}(t): \stackrel{\text{def}}{=} i[\gamma^\ddagger(t)dW(t) + \tilde{\gamma}^\ddagger(t)d\tilde{W}(t)], \tag{5.225}$$

$$:\hat{M}^{(+)}(t): \stackrel{\text{def}}{=} -i[dW^\ddagger(t)\gamma_\nu(t) + d\tilde{W}^\ddagger(t)\tilde{\gamma}_\nu(t)], \tag{5.226}$$

$$:\hat{M}^{(\lambda)}(t): \stackrel{\text{def}}{=} :\hat{M}^{(-)}(t): + \lambda :\hat{M}^{(+)}(t): \tag{5.227}$$

とする。 $:\bullet:$ は注目系と熱浴 ($dB_t^\#$ の記述する系) の演算子の全体に対する正規積である。このとき、このとき、(5.223),(5.224) より、

$$\begin{aligned}
:\hat{M}^{(\lambda)}(t): &= i[\gamma^\ddagger(t)dW_t + \text{t.c.}] - i\lambda[dW_t^\ddagger\gamma_\nu(t) + \text{t.c.}] \\
&\quad + i\{\gamma^\ddagger(t)[-2\lambda\kappa\gamma_\nu(t)dt] + \text{t.c.}\} - i\lambda\{[-2\lambda\kappa\lambda\gamma^\ddagger dt]\gamma_\nu(t) + \text{t.c.}\} \\
&= i[\gamma^\ddagger(t)dW_t + \text{t.c.}] - i\lambda[dW_t^\ddagger\gamma_\nu(t) + \text{t.c.}]
\end{aligned} \tag{5.228}$$

である。(5.228),(5.186) より、

$$:\hat{M}^{(\lambda)}(t): = d'\hat{M}^{(\lambda)}(t) \tag{5.229}$$

²⁴⁾ $\nu = \mu = \frac{1}{2}$ のときのみ、 $dB^\#(t) = [dB(t)]^\dagger$ となる。

となる。しかし、

$$:d\hat{M}^{(\pm)}(t): \neq d'\hat{M}^{(\pm)}(t) \quad (5.230)$$

である²⁵⁾。

²⁵⁾もしも、

$$d\hat{M}^{(+)}(t) \stackrel{\text{def}}{=} -i[\gamma_\nu(t)dW^\ddagger(t) + \tilde{\gamma}_\nu(t)d\tilde{W}^\ddagger(t)], \quad (5.231)$$

$$d\hat{M}^{(\lambda)}(t) \stackrel{\text{def}}{=} :d\hat{M}^{(-)}(t): + \lambda d\hat{M}^{(+)}(t) \quad (5.232)$$

としたなら、

$$d\hat{M}^{(\lambda)}(t) \neq d'\hat{M}^{(\lambda)}(t) \quad (5.233)$$

である。

6 半自由粒子

6.1 $\hat{\Pi}$ の公理的導出

\hat{H} として、 $a, a^\dagger, \tilde{a}, \tilde{a}^\dagger$ に対して双線形で、変換

$$a \rightarrow ae^{i\theta}, \quad a^\dagger \rightarrow a^\dagger e^{-i\theta}, \quad \tilde{a} \rightarrow \tilde{a}e^{-i\theta}, \quad \tilde{a}^\dagger \rightarrow \tilde{a}^\dagger e^{i\theta} \quad (6.1)$$

に対して不変なもの（半自由粒子）を考える。一般には、

$$i\hat{H} = g_1(t)a^\dagger a + g_2(t)\tilde{a}^\dagger \tilde{a} + g_3(t)a\tilde{a} + g_4(t)a^\dagger \tilde{a}^\dagger + g_0(t) \quad (6.2)$$

であるが、(3.18)の要請から、

$$g_1^* \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + g_2^* a^\dagger a + g_3^* \tilde{a} a + g_4^* \tilde{a}^\dagger a^\dagger + g_0^* = g_1 a^\dagger a + g_2 \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + g_3 a \tilde{a} + g_4 a^\dagger \tilde{a}^\dagger + g_0$$

すなわち、

$$g_1^* = g_2, \quad g_3^* = g_3, \quad g_4^* = g_4, \quad g_0^* = g_0 \quad (6.3)$$

である。今、

$$g_1(t) = -c_1(t) + i\hbar\omega(t), \quad g_3(t) = -c_2(t), \quad g_4(t) = -c_3(t), \quad g_0(t) = -c_4(t) \quad (6.4)$$

とかくと、

$$\begin{aligned} \hat{H} &= -i[[-c_1(t) + i\hbar\omega(t)]a^\dagger a + [-c_1(t) - i\hbar\omega(t)]\tilde{a}^\dagger \tilde{a} - c_2(t)a\tilde{a} - c_3(t)a^\dagger \tilde{a}^\dagger - c_4(t)] \\ &= \hbar\omega(t)(a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + i\hat{\Pi}, \end{aligned} \quad (6.5)$$

$$\hat{\Pi} = c_1(t)(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + c_2(t)a\tilde{a} + c_3(t)a^\dagger \tilde{a}^\dagger + c_4(t) \quad (6.6)$$

となる。 $\omega(t)$ はくり込まれたエネルギーである。さらに、要請(3.19)より、

$$\begin{aligned} 0 &= c_1 \langle 1|a^\dagger a + c_1 \langle 1|\tilde{a}^\dagger \tilde{a} + c_2 \langle 1|a\tilde{a} + c_3 \langle 1|a^\dagger \tilde{a}^\dagger + c_4 \langle 1| \\ &= c_1 \langle 1|a^\dagger a + c_1 \langle 1|a^\dagger a + c_2 \langle 1|a^\dagger a + c_3 \langle 1|aa^\dagger + c_4 \langle 1| \\ &= (2c_1 + c_2 + c_3) \langle 1|a^\dagger a + (c_3 + c_4) \langle 1| \end{aligned} \quad (6.7)$$

すなわち、

$$2c_1 + c_2 + c_3 = 0, \quad c_3 + c_4 = 0 \quad (6.8)$$

が課される。よって、

$$\hat{\Pi} = c_1(t)(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + c_2(t)a\tilde{a} - [2c_1(t) + c_2(t)]a^\dagger \tilde{a}^\dagger + [2c_1(t) + c_2(t)] \quad (6.9)$$

となる。

ところで、 $a(t), a^\ddagger(t)$ の運動方程式は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}a(t) &= \frac{i}{\hbar}[\hat{H}(t), a(t)] \\ &= -i\omega(t)a(t) + c_1(t)/\hbar a(t) - [2c_1(t) + c_2(t)]/\hbar \tilde{a}^\ddagger(t), \end{aligned} \quad (6.10)$$

$$\frac{d}{dt}a^\ddagger(t) = i\omega(t)a^\ddagger(t) - c_1(t)/\hbar a^\ddagger(t) - c_2(t)/\hbar \tilde{a}(t) \quad (6.11)$$

となる。よって、 $\langle 1|a^\dagger(t)a(t)$ の運動方程式は、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}\langle 1|a^\dagger(t)a(t) &= \langle 1|[\frac{d}{dt}a^\dagger(t)]a(t) + \langle 1|a^\dagger(t)[\frac{d}{dt}a(t)] \\
&= \langle 1|\left(i\omega(t)a^\dagger(t) - c_1(t)/\hbar a^\dagger(t) - c_2(t)/\hbar \tilde{a}(t)\right)a(t) \\
&\quad + \langle 1|a^\dagger(t)\left(-i\omega(t)a(t) + c_1(t)/\hbar a(t) - [2c_1(t) + c_2(t)]/\hbar \tilde{a}^\dagger(t)\right) \\
&= \langle 1|\left(i\omega(t)a^\dagger(t)a(t) - c_1(t)/\hbar a^\dagger(t)a(t) - c_2(t)/\hbar a^\dagger(t)a(t) \right. \\
&\quad \left. + -i\omega(t)a^\dagger(t)a(t) + c_1(t)/\hbar a^\dagger(t)a(t) - [2c_1(t) + c_2(t)]/\hbar a(t)a^\dagger(t)\right) \\
&= -2\kappa(t)\langle 1|a^\dagger(t)a(t) + \Sigma(t)\langle 1|, \tag{6.12}
\end{aligned}$$

$$\kappa(t) = [c_1(t) + c_2(t)]/\hbar, \quad \Sigma(t) = -[2c_1(t) + c_2(t)]/\hbar \tag{6.13}$$

となる。今、

$$n(t) \stackrel{\text{def}}{=} \langle 1|a^\dagger(t)a(t)|0\rangle \tag{6.14}$$

とすると、上式より、

$$\frac{d}{dt}n(t) = -2\kappa(t)n(t) + \Sigma(t) \tag{6.15}$$

を得る。 $\kappa(t)$ はくり込まれた感受率である。

今、この方程式の定常状態が唯一

$$n(\infty) = \bar{n} = \frac{1}{e^{\hbar\omega/k_B T} - 1} \tag{6.16}$$

しかないと仮定する。すると、(6.15) より、

$$\Sigma(\infty) = 2\kappa(\infty)\bar{n} \tag{6.17}$$

となる。更に、 $\omega(t), \kappa(t), \Sigma(t)$ が時間によらず一定であるとする。このとき、(6.15) は、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}n(t) &= -2\kappa n(t) + 2\kappa\bar{n} \\
&= -2\kappa[n(t) - \bar{n}] \tag{6.18}
\end{aligned}$$

となる。これは、(4.63) と同一である。また、(6.13),(6.17) より、

$$c_1 = \hbar(-\kappa - \Sigma) = -\hbar\kappa(1 + 2\bar{n}), \quad c_2 = 2\hbar(\kappa + \Sigma) = 2\hbar\kappa(1 + \bar{n}) \tag{6.19}$$

である。これと (6.5),(6.9) より、

$$\hat{H} = \hat{H}_S + i\hat{\Pi}, \tag{6.20}$$

$$\hat{H}_S = \hbar(a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}), \tag{6.21}$$

$$\hat{\Pi} = -\hbar\kappa[(1 + 2\bar{n})(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) - 2(1 + \bar{n})a\tilde{a} - 2\bar{n}a^\dagger\tilde{a}^\dagger] - 2\hbar\kappa\bar{n} \tag{6.22}$$

を得る。この $\hat{\Pi}$ は (3.28) と一致する。

今、ダブルレット記法

$$a^{\mu=1} = a, \quad a^{\mu=2} = \tilde{a}^\dagger, \tag{6.23}$$

$$\bar{a}^{\mu=1} = a^\dagger, \quad \bar{a}^{\mu=2} = -\tilde{a} \tag{6.24}$$

を導入する。交換関係は、

$$[a^\mu, \bar{a}^\nu] = \delta^{\mu\nu} \quad (6.25)$$

で、これ以外は0である。(6.22)は、

$$\hat{H} = \hbar\omega\bar{a}^\mu a^\mu + \hbar\omega + i\hat{\Pi}, \quad \hat{\Pi} = -\hbar\kappa\bar{a}^\mu A^{\mu\nu} a^\nu + \hbar\kappa, \quad (6.26)$$

$$A^{\mu\nu} = \begin{pmatrix} 1 + 2\bar{n} & -2\bar{n} \\ 2(1 + \bar{n}) & -(1 + 2\bar{n}) \end{pmatrix} \quad (6.27)$$

とかける。半自由粒子に対するハイゼンベルグ方程式は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}a(t)^\mu &= \frac{i}{\hbar}[\hat{H}(t), a(t)^\mu] \\ &= i[\omega\bar{a}(t)^\nu a(t)^\nu + \omega - i\kappa\bar{a}(t)^\lambda A^{\lambda\nu} a(t)^\nu + i\kappa, a(t)^\mu] \\ &= -i\omega\delta^{\mu\nu} a(t)^\nu - \kappa\delta^{\mu\lambda} A^{\lambda\nu} a(t)^\nu \\ &= (-i\omega\delta^{\mu\nu} - \kappa A^{\mu\nu})a(t)^\nu, \end{aligned} \quad (6.28)$$

$$\frac{d}{dt}\bar{a}(t)^\mu = \bar{a}(t)^\nu (i\omega\delta^{\nu\mu} + \kappa A^{\nu\mu}) \quad (6.29)$$

となる。

6.2 散逸の自発的発現

今、

$$\gamma(t)^\mu = \mathcal{B}(t)^{\mu\nu} a(t)^\nu, \quad \bar{\gamma}(t)^\mu = \bar{a}(t)^\nu \mathcal{B}^{-1}(t)^{\nu\mu}, \quad (6.30)$$

$$\mathcal{B}(t)^{\mu\nu} = \begin{pmatrix} 1 + n(t) & -n(t) \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \quad (6.31)$$

によって、

$$\gamma(t) = \gamma(t)^{\mu=1}, \quad \tilde{\gamma}^\ddagger(t) = \gamma(t)^{\mu=2}, \quad (6.32)$$

$$\gamma^\ddagger(t) = \bar{\gamma}(t)^{\mu=1}, \quad -\tilde{\gamma}(t) = \bar{\gamma}(t)^{\mu=2} \quad (6.33)$$

を導入する。ただし、 $n(t)$ は、(6.18)を満たすものとする。 $\gamma(t)^\mu, \bar{\gamma}(t)^\mu$ は、交換関係

$$[\gamma(t)^\mu, \bar{\gamma}(t)^\nu] = \delta^{\mu\nu} \quad (6.34)$$

を満たし、これ以外は0である。 $\gamma^\ddagger(t)$ は、

$$\begin{aligned} \langle 1|\gamma^\ddagger(t) &= \langle 1|e^{i\hat{H}t}(a^\dagger - \tilde{a})e^{-i\hat{H}t} \\ &= \langle 1|(a^\dagger - \tilde{a})e^{-i\hat{H}t} \\ &= 0, \end{aligned} \quad (6.35)$$

$$\langle 1|\tilde{\gamma}^\ddagger(t) = 0 \quad (6.36)$$

を満たす。

$\gamma(t)^\mu$ の運動方程式は、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\gamma(t)^\mu &= \frac{d\mathcal{B}(t)^{\mu\nu}}{dt}a^\nu(t) + \mathcal{B}(t)^{\mu\nu}\frac{da^\nu(t)}{dt} \\ &= \left[\frac{d\mathcal{B}(t)}{dt}\mathcal{B}^{-1}(t)\right]^{\mu\nu}\gamma(t)^\nu + [\mathcal{B}(t)(-i\omega 1_2 - \kappa A)\mathcal{B}^{-1}(t)]^{\mu\nu}\gamma(t)^\nu\end{aligned}\quad (6.37)$$

である。第 2 等号で、(6.28) を用いた。(6.31) より、

$$\begin{aligned}\frac{d\mathcal{B}(t)}{dt} &= \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \frac{dn(t)}{dt}, \\ \frac{d\mathcal{B}(t)}{dt}\mathcal{B}^{-1}(t) &= \begin{pmatrix} 1 & -1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \frac{dn(t)}{dt} \begin{pmatrix} 1 & n(t) \\ 1 & 1+n(t) \end{pmatrix} \\ &= -\frac{dn(t)}{dt} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix} \\ &= 2\kappa[n(t) - \bar{n}] \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}\end{aligned}\quad (6.38)$$

であり、(6.27) より、

$$\begin{aligned}\mathcal{B}(t)A\mathcal{B}^{-1}(t) &= \begin{pmatrix} 1+n(t) & -n(t) \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1+2\bar{n} & -2\bar{n} \\ 2(1+\bar{n}) & -(1+2\bar{n}) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & n(t) \\ 1 & 1+n(t) \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1+n(t) & -n(t) \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & n(t) - 2\bar{n} \\ 1 & n(t) - 2\bar{n} - 1 \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} 1 & 2[n(t) - \bar{n}] \\ 0 & -1 \end{pmatrix} \\ &= \tau_3 + 2[n(t) - \bar{n}] \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}\end{aligned}\quad (6.40)$$

を得る。ただし、

$$\tau_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}\quad (6.41)$$

である。よって、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\gamma(t)^\mu &= 2\kappa[n(t) - \bar{n}] \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}^{\mu\nu} \gamma(t)^\nu + \left[-i\omega\delta^{\mu\nu} - \kappa\tau_3^{\mu\nu} - 2\kappa[n(t) - \bar{n}] \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}^{\mu\nu}\right] \gamma(t)^\nu \\ &= (-\omega\delta^{\mu\nu} - \kappa\tau_3^{\mu\nu})\gamma(t)^\nu\end{aligned}\quad (6.42)$$

となる。これを解いて、

$$\begin{aligned}\gamma(t)^\mu &= [\exp(-i\omega 1_2 - \kappa\tau_3)t]^{\mu\nu}\gamma(0)^\nu \\ &= \begin{pmatrix} e^{-i\omega t - \kappa t} & 0 \\ 0 & e^{-i\omega t + \kappa t} \end{pmatrix}^{\mu\nu} \gamma(0)^\nu,\end{aligned}\quad (6.43)$$

$$\gamma(0)^{\nu=1} = (1+n)a - n\tilde{a}^\dagger, \quad n = \langle 1|a^\dagger a|0\rangle, \quad (6.44)$$

$$\gamma(0)^{\nu=2} = \tilde{a}^\dagger - a \quad (6.45)$$

を得る。

今、初期条件として、(3.23) 即ち、

$$a|0\rangle = f\tilde{a}^\dagger|0\rangle \quad (6.46)$$

を仮定する。これより、

$$\langle 1|a\tilde{a}|0\rangle = \langle 1|afa^\dagger|0\rangle = f[\langle 1|a^\dagger a|0\rangle + \langle 1|0\rangle] = f(n+1) \quad (6.47)$$

を得るが、左辺は、

$$\langle 1|a\tilde{a}|0\rangle = \langle 1|\tilde{a}a|0\rangle = \langle 1|a^\dagger a|0\rangle = n \quad (6.48)$$

であるから、

$$\begin{aligned} n &= f(n+1), \\ f &= \frac{n}{n+1} \end{aligned} \quad (6.49)$$

これを (6.46) に代入して、

$$(1+n)a|0\rangle = n\tilde{a}^\dagger|0\rangle$$

を得る。これは、

$$[(1+n)a - n\tilde{a}^\dagger]|0\rangle = \gamma(0)|0\rangle = 0 \quad (6.50)$$

を意味する。(6.43) より、

$$\gamma(t)|0\rangle = e^{-i\omega t - \kappa t}\gamma(0)|0\rangle = 0 \quad (6.51)$$

を得る。

今、

$$\gamma_t^\mu = e^{-i\hat{H}t}\gamma(t)^\mu e^{i\hat{H}t}, \quad \tilde{\gamma}_t^\mu = e^{-i\hat{H}t}\tilde{\gamma}(t)^\mu e^{i\hat{H}t} \quad (6.52)$$

つまり、

$$\gamma_t^\mu = \mathcal{B}(t)^{\mu\nu}a^\nu, \quad \tilde{\gamma}_t^\mu = \bar{a}^\nu \mathcal{B}^{-1}(t)^{\nu\mu}, \quad (6.53)$$

$$\mathcal{B}(t)^{\mu\nu} = \begin{pmatrix} 1+n(t) & -n(t) \\ -1 & 1 \end{pmatrix} \quad (6.54)$$

によって、

$$\gamma_t = \gamma_t^{\mu=1}, \quad \tilde{\gamma}_t^\ddagger = \gamma_t^{\mu=2}, \quad (6.55)$$

$$\gamma_t^\ddagger = \tilde{\gamma}_t^{\mu=1}, \quad -\tilde{\gamma}_t = \tilde{\gamma}_t^{\mu=2} \quad (6.56)$$

を導入する。 $\gamma^\ddagger = a^\dagger - \tilde{a}$ とそのチルダ共役は時間によらない。(6.51) と (6.52) より、初期条件が (6.46) のとき、

$$\gamma_t|0(t)\rangle = 0 \quad (6.57)$$

となる。また、 \hat{H} は、 $\gamma_t^\mu, \bar{\gamma}_t^\mu$ によって、次のように書ける：

$$\begin{aligned}\hat{H} &= \hbar\omega\bar{a}^\mu a^\mu + \hbar\omega + i\hat{\Pi} \\ &= \hbar\omega\bar{\gamma}_t^\mu \gamma_t^\mu + \hbar\omega + i\hat{\Pi} \\ &= \hbar\omega(\gamma^{\ddagger}\gamma_t - \bar{\gamma}^{\ddagger}\bar{\gamma}_t) + i\hat{\Pi},\end{aligned}\tag{6.58}$$

$$\begin{aligned}\hat{\Pi} &= -\hbar\kappa\bar{a}^\mu A^{\mu\nu} a^\nu + \hbar\kappa \\ &= -\hbar\kappa\bar{\gamma}_t^\mu [\mathcal{B}(t)A\mathcal{B}^{-1}(t)]^{\mu\nu} \gamma_t^\nu + \hbar\kappa \\ &= -\hbar\kappa\bar{\gamma}_t^\mu \left[\tau_3^{\mu\nu} + 2(n(t) - \bar{n}) \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 0 & 0 \end{pmatrix}^{\mu\nu} \right] \gamma_t^\nu + \hbar\kappa \\ &= -\hbar\kappa(\gamma^{\ddagger}\gamma_t + \bar{\gamma}^{\ddagger}\bar{\gamma}_t + 2[n(t) - \bar{n}]\gamma^{\ddagger}\bar{\gamma}^{\ddagger}).\end{aligned}\tag{6.59}$$

これと (6.57) より、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}|0(t)\rangle &= \frac{1}{i\hbar}\hat{H}|0(t)\rangle \\ &= -2\kappa[n(t) - \bar{n}]\gamma^{\ddagger}\bar{\gamma}^{\ddagger}|0(t)\rangle \\ &= \frac{dn(t)}{dt}\gamma^{\ddagger}\bar{\gamma}^{\ddagger}|0(t)\rangle\end{aligned}\tag{6.60}$$

を得る。これを解くと、

$$\begin{aligned}|0(t)\rangle &= \exp\left[\int_0^t dt' \frac{dn(t')}{dt'} \gamma^{\ddagger}\bar{\gamma}^{\ddagger}\right]|0\rangle \\ &= \exp\left[[n(t) - \bar{n}]\gamma^{\ddagger}\bar{\gamma}^{\ddagger}\right]|0\rangle\end{aligned}\tag{6.61}$$

となる²⁶⁾。この表式により、「不安定真空の時間発展がサーマル・ペア $\gamma^{\ddagger}\bar{\gamma}^{\ddagger}$ の真空への凝縮により実現される」と解釈できる。この表式は、散逸の自発的発現 (spontaneous creation of dissipation) という機構の存在を予感させる。

6.3 覚え書き

(3.28) または (6.22) は、

$$\begin{aligned}\hat{\Pi} &= -\kappa[(1 + 2\bar{n})(a^\dagger a + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) - 2(1 + \bar{n})a\tilde{a} - 2\bar{n}a^\dagger \tilde{a}^\dagger] - 2\kappa\bar{n} \\ &= \kappa[-(1 + 2\bar{n})(aa^\dagger + \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + 2(1 + \bar{n})a\tilde{a} + 2\bar{n}a^\dagger \tilde{a}^\dagger] + \kappa\end{aligned}\tag{6.62}$$

であった。今、

$$S_+ \stackrel{\text{def}}{=} \tilde{a}^\dagger a^\dagger, \quad S_- \stackrel{\text{def}}{=} a\tilde{a}, \quad S_z \stackrel{\text{def}}{=} \frac{1}{2}(aa^\dagger + \tilde{a}^\dagger \tilde{a})\tag{6.63}$$

²⁶⁾半自由場で、初期条件が (6.46) のときは、これが成り立つ。

とすると、これらの交換関係は

$$\begin{aligned}
[S_-, S_+] &= [a\tilde{a}, \tilde{a}^\dagger a^\dagger] \\
&= [a\tilde{a}, \tilde{a}^\dagger]a^\dagger + \tilde{a}^\dagger[a\tilde{a}, a^\dagger] \\
&= aa^\dagger + \tilde{a}^\dagger\tilde{a} \\
&= 2S_z,
\end{aligned} \tag{6.64}$$

$$\begin{aligned}
[S_-, S_z] &= \frac{1}{2}[a\tilde{a}, aa^\dagger + \tilde{a}^\dagger\tilde{a}] \\
&= \frac{1}{2}(a[a, a^\dagger]\tilde{a} + a[\tilde{a}, \tilde{a}^\dagger]\tilde{a}) \\
&= \frac{1}{2}(a\tilde{a} + a\tilde{a}) \\
&= S_-,
\end{aligned} \tag{6.65}$$

$$[S_+, S_z] = -S_+ \tag{6.66}$$

である。最後の式は、2つ目の式の \dagger をとって、 $S_-^\dagger = S_+$ 、 $S_z^\dagger = S_z$ を用いれば得られる。(6.62)は、

$$\hat{\Pi} = \kappa[-2(1+2\bar{n})S_z + 2(1+\bar{n})S_- + 2\bar{n}S_+] + \kappa \tag{6.67}$$

となる。今、

$$S_0 \stackrel{\text{def}}{=} a^\dagger a - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} \tag{6.68}$$

とすると、半自由粒子の \hat{H} は、

$$\hat{H} = \omega S_0 + i\kappa[-2(1+2\bar{n})S_z + 2(1+\bar{n})S_- + 2\bar{n}S_+] + i\kappa \tag{6.69}$$

とかける。 S_0 は S_\pm, S_z と可換である。実際、

$$\tilde{S}_i = S_a \quad (i = \pm, z, 0) \tag{6.70}$$

より²⁷⁾、

$$[S_0, S_i] = [a^\dagger a, S_i] - [\tilde{a}^\dagger \tilde{a}, S_i] \tag{6.71}$$

であり、

$$[a^\dagger a, S_+] = a^\dagger \tilde{a}^\dagger, \quad [a^\dagger a, S_-] = -a\tilde{a}, \quad [a^\dagger a, S_z] = 0 \tag{6.72}$$

なので、

$$[S_0, S_i] = 0 \tag{6.73}$$

²⁷⁾

$$\begin{aligned}
\tilde{S}_z &= \frac{1}{2}(a^\dagger a + \tilde{a}\tilde{a}^\dagger) \\
&= \frac{1}{2}([aa^\dagger + 1] + [\tilde{a}^\dagger\tilde{a} - 1]) \\
&= S_z
\end{aligned}$$

となる。よって、時間発展の演算子は、

$$\begin{aligned} e^{-i\hat{H}t} &= e^{-i\omega S_0} e^{\hat{\Pi}t} \\ &= e^{-i\omega S_0 t} e^{\kappa t[-2(1+2\bar{n})S_z+2(1+\bar{n})S_-+2\bar{n}S_+]} e^{\kappa t} \end{aligned} \quad (6.74)$$

となる。 $e^{-i\omega S_0 t}$ という因子は何番目に来て良い。

後で示すように、

$$U(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{x(A_z S_z + A_- S_- + A_+ S_+)} \quad (6.75)$$

という演算子は、

$$U(x) = e^{f_+(x; A_z, A_-, A_+) S_+} e^{f_z(x; A_z, A_-, A_+) S_z} e^{f_-(x; A_z, A_-, A_+) S_-} \quad (6.76)$$

の形に書き換えるられる。よって、(6.74) は、

$$e^{-i\hat{H}t} = e^{-i\omega S_0 t} e^{\kappa t} e^{f_+(t) S_+} e^{f_z(t) S_z} e^{f_-(t) S_-} \quad (6.77)$$

とかける。もしも、チルダ粒子を超演算子と思うなら、

$$S_{+\bullet} = a^\dagger \bullet a, \quad (6.78)$$

$$S_{-\bullet} = a \bullet a^\dagger, \quad (6.79)$$

$$S_{z\bullet} = \frac{1}{2}(aa^\dagger \bullet + \bullet a^\dagger a) \quad (6.80)$$

であるから、

$$e^{f_+(t) S_{+\bullet}} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f_+^n(t)}{n!} (a^\dagger)^n \bullet a^n, \quad (6.81)$$

$$e^{f_-(t) S_{-\bullet}} = \sum_{m=0}^{\infty} \frac{f_-^m(t)}{m!} a^m \bullet (a^\dagger)^m, \quad (6.82)$$

$$e^{f_z(t) S_{z\bullet}} = e^{f_z(t) aa^\dagger} \bullet e^{f_z(t) a^\dagger a} \quad (6.83)$$

となる。また、

$$e^{-i\hat{H}st} \bullet = e^{-iHst} \bullet e^{iHst}, \quad \hat{H}_S = H_S - \tilde{H}_S = \omega S_0 \quad (6.84)$$

であるから、

$$\begin{aligned} \rho(t) &= e^{-i\hat{H}t} \rho(0) \\ &= e^{\kappa t} e^{iHst} e^{f_+(t) S_{+\bullet}} e^{f_z(t) aa^\dagger} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{f_-^m(t)}{m!} a^m \rho(0) (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} \\ &= e^{\kappa t} e^{iHst} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f_+^n(t)}{n!} (a^\dagger)^n e^{f_z(t) aa^\dagger} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{f_-^m(t)}{m!} a^m \rho(0) (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} a^n \end{aligned} \quad (6.85)$$

となる。今、

$$\langle A \rangle_t = \text{Tr}[\rho(t)A] \quad (6.86)$$

とかくと、(6.85) より、

$$\begin{aligned}
\langle A \rangle_t &= e^{\kappa t} \text{Tr}[e^{\kappa t} e^{iHst} \sum_{n,m=0}^{\infty} \frac{f_+^n(t)}{n!} \frac{f_-^m(t)}{m!} (a^\dagger)^n e^{f_z(t) a a^\dagger} a^m \rho(0) (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} a^n e^{-iHst} A] \\
&= \text{Tr}[\rho(0) e^{\kappa t} \sum_{n,m=0}^{\infty} \frac{f_+^n(t)}{n!} \frac{f_-^m(t)}{m!} (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} a^n e^{-iHst} A e^{iHst} (a^\dagger)^n e^{f_z(t) a a^\dagger} a^m] \\
&= \text{Tr}[\rho(0) \hat{T}(t) A], \\
\hat{T}(t) \bullet &\stackrel{\text{def}}{=} e^{\kappa t} \sum_{n,m=0}^{\infty} \frac{f_+^n(t)}{n!} \frac{f_-^m(t)}{m!} (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} a^n e^{-iHst} \bullet e^{iHst} (a^\dagger)^n e^{f_z(t) a a^\dagger} a^m \\
&= e^{\kappa t} \sum_{n,m=0}^{\infty} \frac{f_+^n(t)}{n!} \frac{f_-^m(t)}{m!} (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} a^n [e^{-i\hat{H}st} \bullet] (a^\dagger)^n e^{f_z(t) a a^\dagger} a^m \\
&= e^{\kappa t} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{f_-^m(t)}{m!} (a^\dagger)^m e^{f_z(t) a^\dagger a} [e^{f_+(t) S_-} e^{-i\hat{H}st} \bullet] e^{f_z(t) a a^\dagger} a^m \\
&= e^{\kappa t} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{f_-^m(t)}{m!} (a^\dagger)^m [e^{f_z(t) S_z} e^{f_+(t) S_-} e^{-i\hat{H}st} \bullet] a^m \\
&= e^{\kappa t} e^{f_-(t) S_+} e^{f_z(t) S_z} e^{f_+(t) S_-} e^{i\hat{H}st} \bullet \tag{6.87} \\
&= [e^{-i\hat{H}t}]^\dagger \bullet \tag{6.88} \\
&= e^{i\hat{H}^\dagger t} \bullet \tag{6.88}
\end{aligned}$$

となる。 $\hat{T}(t)A$ は、いわば超演算子法でのハイゼンベルグ描像の演算子である。この運動方程式は、

$$\frac{d}{dt} \hat{T}(t)A = i\hat{T}(t)\hat{H}^\dagger A \tag{6.89}$$

である。

$\rho^{1/2}(t)$ について考える。散逸がない場合は、(2.4) のように、 $\rho^{1/2}(t)$ の時間発展方程式を求めるのは容易だった。それは、 $\rho(t)$ が、

$$\rho(t) = U(t)\rho(0)U^\dagger(t), \quad U^\dagger(t) = U^{-1}(t) \tag{6.90}$$

の形でかけたからである。散逸がある場合、(6.85) から分かるように、これは成り立たない。

半自由粒子のように $\hat{\Pi}$ と \hat{H}_S が可換の場合は、

$$e^{-i\hat{H}t} = e^{-i\hat{H}_S t} e^{\hat{\Pi}t} \tag{6.91}$$

であるから、

$$|0^{(0)}(t)\rangle = e^{-i\hat{H}_S t} |0\rangle, \tag{6.92}$$

$$A^{(0)}(t) = e^{-\hat{\Pi}t} A e^{\hat{\Pi}t} \tag{6.93}$$

とすれば、

$$\begin{aligned}
\langle 1|A^{(0)}(t)|0^{(0)}(t)\rangle &= \langle 1|e^{-\hat{\Pi}t} A e^{\hat{\Pi}t}|0^{(0)}(t)\rangle \\
&= \langle 1|A e^{\hat{\Pi}t} e^{-i\hat{H}_S t}|0\rangle \\
&= \langle 1|A|0(t)\rangle \tag{6.94}
\end{aligned}$$

となる。つまり、真空の時間発展は、散逸がない場合と同じで、演算子の方は \hat{H} により変化する、という描像が可能である。逆に、

$$|0^{(1)}(t)\rangle = e^{\hat{H}t}|0\rangle, \quad (6.95)$$

$$A^{(1)}(t) = e^{i\hat{H}st} A e^{-i\hat{H}st} \quad (6.96)$$

としても、

$$\langle 1|A^{(1)}(t)|0^{(1)}(t)\rangle = \langle 1|A|0(t)\rangle \quad (6.97)$$

である。

6.4 $su(1,1)$ の公式

(6.76) を示そう。

$$e^{x(A_z S_z + A_- S_- + A_+ S_+)} = U(x) \equiv e^{f_+(x)S_+} F(x), \quad (6.98)$$

$$F(0) = 1, \quad f_+(0) = 0 \quad (6.99)$$

とおく。これを微分して、

$$(A_z S_z + A_- S_- + A_+ S_+) e^{f_+(x)S_+} F(x) = f'_+(x) S_+ F(x) + e^{f_+(x)S_+} F'(x)$$

$F'(x)$ について解いて、

$$F'(x) = [A_+ - f'_+(x)] S_+ F(x) + e^{-f_+(x)S_+} (A_z S_z + A_- S_-) e^{f_+(x)S_+} F(x) \quad (6.100)$$

を得る。今、

$$t_i(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{-f_+(x)S_+} S_i e^{f_+(x)S_+} \quad (6.101)$$

とすると、

$$\begin{aligned} t'_-(x) &= -e^{-f_+(x)S_+} f'_+(x) S_+ S_- e^{f_+(x)S_+} + e^{-f_+(x)S_+} S_- f'_+(x) S_+ e^{f_+(x)S_+} \\ &= f'_+(x) e^{-f_+(x)S_+} [S_-, S_+] e^{f_+(x)S_+} \\ &= f'_+(x) e^{-f_+(x)S_+} 2S_z e^{f_+(x)S_+} \\ &\equiv 2f'_+(x) t_z(x) \end{aligned} \quad (6.102)$$

である。ただし、第3等号で (6.64) を用いた。また、

$$\begin{aligned} t'_z(x) &= f'_+(x) e^{-f_+(x)S_+} [S_z, S_+] e^{f_+(x)S_+} \\ &= f'_+(x) e^{-f_+(x)S_+} S_+ e^{f_+(x)S_+} \\ &= f'_+(x) S_+ \end{aligned} \quad (6.103)$$

である。第2等号で (6.66) を用いた。ところで、

$$t_-(0) = S_-, \quad t_z(0) = S_z \quad (6.104)$$

である。(6.103) をこの初期条件の下で解くと、

$$t_z(x) = S_z + f_+(x) S_+ \quad (6.105)$$

となる。これを (6.102) に代入して

$$\begin{aligned} t'_-(x) &= 2f'(x)[S_z + f_+(x)S_+] \\ &= \frac{d}{dx}[2f_+(x)S_z + f_+^2(x)S_+] \end{aligned} \quad (6.106)$$

を得る。これを初期条件 (6.104) の下で解いて、

$$t_-(x) = S_- + 2f_+(x)S_z + f_+^2(x)S_+ \quad (6.107)$$

を得る。(6.100) は、

$$\begin{aligned} F'(x) &= [A_+ - f'_+(x)]S_+F(x) + [A_zS_z + A_zf_+(x)S_+ + A_-S_- + 2A_-f_+(x)S_z + A_-f_+^2(x)S_+]F(x) \\ &= [A_+ - f'_+(x) + A_zf_+(x) + A_-f_+^2(x)]S_+F(x) + [A_zS_z + A_-S_- + 2A_-f_+(x)S_z]F(x) \end{aligned} \quad (6.108)$$

となる。今、

$$A_+ - f'_+(x) + A_zf_+(x) + A_-f_+^2(x) = 0 \quad (6.109)$$

とすると、(6.108) は、

$$F'(x) = [A_zS_z + A_-S_- + 2A_-f_+(x)S_z]F(x) \quad (6.110)$$

となる。(6.109) を (6.99) の初期条件の下に解く。

$$\begin{aligned} \frac{1}{f'_+(x)} &= \frac{dx}{df_+} = \frac{1}{A_+ + A_zf_+(x) + A_-f_+^2(x)}, \\ x &= \int_0^{f_+(x)} \frac{df}{A_+ + A_zf + A_-f^2}. \end{aligned} \quad (6.111)$$

今、

$$A_+ + A_zf + A_-f^2 = A_-(f - \alpha)(f - \beta) \quad , \quad (6.112)$$

$$\alpha, \beta = \frac{-A_z \pm \sqrt{A_z^2 - 4A_-A_+}}{2A_-} \quad (6.113)$$

とすると、

$$\begin{aligned} \int_0^{f_+(x)} \frac{df}{A_+ + A_zf + A_-f^2} &= \frac{1}{A_-(\alpha - \beta)} \int_0^{f_+(x)} df \left(\frac{1}{f - \alpha} - \frac{1}{f - \beta} \right) \\ &= \frac{1}{A_-(\alpha - \beta)} \left(\ln \frac{f_+(x) - \alpha}{-\alpha} - \ln \frac{f_+(x) - \beta}{-\beta} \right) \\ &= \frac{1}{A_-(\alpha - \beta)} \ln \left[\frac{f_+(x) - \alpha}{f_+(x) - \beta} \cdot \frac{\beta}{\alpha} \right]. \end{aligned} \quad (6.114)$$

これと (6.111) より、

$$\begin{aligned} e^{xA_-(\alpha-\beta)} &= \frac{f_+(x) - \alpha}{f_+(x) - \beta} \cdot \frac{\beta}{\alpha}, \\ f_+(x) &= \beta \frac{e^{xA_-(\alpha-\beta)} - 1}{e^{xA_-(\alpha-\beta)} - \beta/\alpha} \end{aligned} \quad (6.115)$$

を得る。これは、次のようにも書ける：

$$\begin{aligned}
f_+(x) &= \beta \frac{e^{xA_-(\alpha-\beta)/2} - e^{-xA_-(\alpha-\beta)/2}}{e^{xA_-(\alpha-\beta)/2} - \beta/\alpha e^{-xA_-(\alpha-\beta)/2}} \\
&= \frac{2\alpha\beta}{\alpha - \beta} \frac{\sinh \frac{A_-(\alpha-\beta)x}{2}}{\cosh \frac{A_-(\alpha-\beta)x}{2} + \frac{\alpha+\beta}{\alpha-\beta} \sinh \frac{A_-(\alpha-\beta)x}{2}} \\
&= \frac{A_-\alpha\beta}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) + \frac{A_-(\alpha+\beta)}{2\phi} \sinh(\phi x)} \\
&= \frac{A_+}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)}, \tag{6.116}
\end{aligned}$$

$$\phi \stackrel{\text{def}}{=} \frac{A_-(\alpha - \beta)}{2} = \sqrt{A_z^2/4 - A_-A_+}. \tag{6.117}$$

今、

$$F(x) = e^{f_z(x)S_z}G(x), \tag{6.118}$$

$$G(0) = 1, \quad f_z(0) = 0 \tag{6.119}$$

とおく。これを微分し,(6.110)を代入すると、

$$[A_z S_z + A_- S_- + 2A_- f_+(x) S_z] e^{f_z(x)S_z} G(x) = f'_z(x) S_z e^{f_z(x)S_z} G(x) + e^{f_z(x)S_z} G'(x)$$

となり、これから、

$$G'(x) = [A_z + 2A_- f_+(x) - f'_z(x)] S_z G(x) + A_- e^{-f_z(x)S_z} S_- e^{f_z(x)S_z} G(x) \tag{6.120}$$

を得る。ここで、

$$u_-(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{-f_z(x)S_z} S_- e^{f_z(x)S_z} \tag{6.121}$$

を導入すると、

$$\begin{aligned}
u'_-(x) &= f'_z(x) e^{-f_z(x)S_z} [S_-, S_z] e^{f_z(x)S_z} \\
&= f'_z(x) e^{-f_z(x)S_z} S_- e^{f_z(x)S_z} \\
&= f'_z(x) u_-(x) \tag{6.122}
\end{aligned}$$

である。ただし、第2等号で、(6.65)を用いた。これを初期条件

$$u_-(0) = S_- \tag{6.123}$$

の下で解くと、

$$u_-(x) = e^{f_z(x)S_-}$$

すなわち、

$$e^{-f_z(x)S_z} S_- e^{f_z(x)S_z} = e^{f_z(z)S_-} \tag{6.124}$$

を得る。(6.120)は、

$$G'(x) = [A_z + 2A_- f_+(x) - f'_z(x)] S_z G(x) + A_- e^{f_z(z)S_-} S_- G(x) \tag{6.125}$$

となる。今、

$$A_z + 2A_- f_+(x) - f'_z(x) = 0 \quad (6.126)$$

とすると、(6.125)は、

$$G'(x) = A_- e^{f_z(x)} S_- G(x) \quad (6.127)$$

となる。(6.126),(6.119),(6.116)より、

$$\begin{aligned} f_z(x) &= A_z x + 2A_- \int_0^x dy f_+(y) \\ &= A_z x + \frac{1}{\phi} \int_0^x dy \frac{2A_- A_+ \sinh(\phi y)}{\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)} \\ &= \frac{1}{\phi} \int_0^x dy \left[\phi A_z + \frac{2A_- A_+ \sinh(\phi y)}{\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)} \right] \\ &= \frac{1}{\phi} \int_0^x dy \frac{2[A_- A_+ - A_z^2/4] \sinh(\phi y) + \phi A_z \cosh(\phi y)}{\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)} \\ &= \int_0^x dy \frac{-2\phi \sinh(\phi y) + A_z \cosh(\phi y)}{\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)} \\ &= -2 \int_0^x dy \frac{1}{\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)} \frac{d}{dy} [\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)] \\ &= -2 \ln[\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)] + 2 \ln[\cosh(0) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(0)] \\ &= -2 \ln[\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)] \end{aligned} \quad (6.128)$$

となる。(6.127),(6.119)より、

$$G(x) = e^{f_-(x)S_-}, \quad (6.129)$$

$$f_-(x) = A_- \int_0^x dy e^{f_z(y)} \quad (6.130)$$

であり、(6.128)より、

$$f_-(x) = A_- \int_0^x \frac{dy}{[\cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y)]^2} \quad (6.131)$$

である。今、

$$u = e^{\phi y} \quad (6.132)$$

とすると、

$$\begin{aligned} dy &= \frac{du}{\phi u}, \\ \cosh(\phi y) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi y) &= \frac{2\phi - A_z}{4\phi} u + \frac{2\phi + A_z}{4\phi} u^{-1} \end{aligned}$$

なので、

$$\begin{aligned}
f_-(x) &= A_- \int_1^{u(x)} \frac{du}{\phi u} \frac{u^2}{\left[\frac{2\phi-A_z}{4\phi}u^2 + \frac{2\phi+A_z}{4\phi}\right]^2} \\
&= A_- \int_1^{u(x)} du \frac{16\phi u}{[(2\phi - A_z)u^2 + 2\phi + A_z]^2} \\
&= A_- \int_1^{u(x)} du \frac{8\phi}{2\phi - A_z} \frac{1}{[(2\phi - A_z)u^2 + 2\phi + A_z]^2} \frac{d}{dy} [(2\phi - A_z)u^2 + 2\phi + A_z] \\
&= -A_- \frac{8\phi}{2\phi - A_z} \frac{1}{(2\phi - A_z)u^2 + 2\phi + A_z} \Big|_1^{u(x)} \\
&= -A_- \frac{8\phi}{2\phi - A_z} \left(\frac{1}{(2\phi - A_z)u^2(x) + 2\phi + A_z} - \frac{1}{4\phi} \right) \\
&= -A_- \frac{8\phi}{2\phi - A_z} \frac{4\phi - (2\phi - A_z)u^2(x) - 2\phi - A_z}{[(2\phi - A_z)u^2(x) + 2\phi + A_z] \cdot 4\phi} \\
&= \frac{2A_-}{2\phi - A_z} \frac{(2\phi - A_z)u^2(x) - 2\phi + A_z}{(2\phi - A_z)u^2(x) + 2\phi + A_z} \\
&= \frac{2A_-}{2\phi - A_z} \frac{(2\phi - A_z)e^{\phi x} - (2\phi - A_z)e^{-\phi x}}{(2\phi - A_z)e^{\phi x} + (2\phi + A_z)e^{-\phi x}} \\
&= 2A_- \frac{\sinh(\phi x)}{2\phi \cosh(\phi x) - A_z \sinh(\phi x)} \\
&= \frac{A_-}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)} \tag{6.133}
\end{aligned}$$

となる。まとめると、

$$e^{x(A_z S_z + A_- S_- + A_+ S_+)} = e^{f_+(x)S_+} e^{f_z(x)S_z} e^{f_-(x)S_-}, \tag{6.134}$$

$$f_+(x) = \frac{A_+}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)}, \tag{6.135}$$

$$f_z(x) = -2 \ln \left[\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x) \right], \tag{6.136}$$

$$f_-(x) = \frac{A_-}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)}, \tag{6.137}$$

$$\phi = \sqrt{A_z^2/4 - A_- A_+} \tag{6.138}$$

である。

(6.77) の $f_i(t)$ を求める。この場合、

$$A_z = -2\kappa(1 + 2\bar{n}), \quad A_- = 2\kappa(1 + \bar{n}), \quad A_+ = 2\kappa\bar{n}, \quad x = t \tag{6.139}$$

とすればよい。このとき、

$$\begin{aligned}
\phi &= \sqrt{A_z^2/4 - A_- A_+} \\
&= \kappa \sqrt{(1 + 2\bar{n})^2 - 4(1 + \bar{n})\bar{n}} \\
&= \kappa \tag{6.140}
\end{aligned}$$

であり、

$$f_+(t) = 2\bar{n} \frac{\sinh(\kappa t)}{\cosh(\kappa t) + (1 + 2\bar{n}) \sinh(\kappa t)}, \quad (6.141)$$

$$f_z(t) = -2 \ln[\cosh(\kappa t) + (1 + 2\bar{n}) \sinh(\kappa t)], \quad (6.142)$$

$$f_-(t) = 2(1 + \bar{n}) \frac{\sinh(\kappa t)}{\cosh(\kappa t) + (1 + 2\bar{n}) \sinh(\kappa t)} \quad (6.143)$$

となる。 $\kappa t \gg 1$ で、

$$f_+(t) \rightarrow \frac{\bar{n}}{1 + \bar{n}}, \quad f_-(t) \rightarrow 1, \quad f_z(t) \rightarrow -2\kappa t - 2 \ln[1 + \bar{n}] \quad (\kappa t \gg 1) \quad (6.144)$$

となる。また、 $\kappa t \ll 1$ で、

$$f_+(t) \rightarrow 2\bar{n}\kappa t, \quad f_-(t) \rightarrow 2(1 + \bar{n})\kappa t, \quad f_z(t) \rightarrow -2(1 + 2\bar{n})\kappa t \quad (\kappa t \ll 1) \quad (6.145)$$

である。

6.5 状態の時間発展

初期状態として、

$$|0\rangle = \sum_{n,m=0}^{\infty} p_{nm} |n, m\rangle \quad (6.146)$$

を考える。ここで、 $|n, m\rangle$ は $|n\rangle$ を個数状態として

$$|n, m\rangle = |n\rangle \otimes |m\rangle^{\sim} \quad (6.147)$$

で与えられる。(6.77) より、

$$e^{-i\hat{H}t}|0\rangle = e^{-i\omega S_0 t} e^{\hat{\Pi}t}|0\rangle = e^{-i\omega S_0 t} e^{\kappa t} e^{f_+(t)S_+} e^{f_z(t)S_z} e^{f_-(t)S_-}|0\rangle \quad (6.148)$$

である。ここで、

$$\begin{aligned} e^{f_-(t)S_-}|n, m\rangle &= \sum_{n,m=0}^{\infty} p_{nm} e^{f_-(t)a\bar{a}} |n, m\rangle \\ &= \sum_{n,m=0}^{\infty} p_{nm} \sum_{l=0}^{\min(n,m)} \frac{f_-^l(t)}{l!} \sqrt{\frac{n!m!}{(n-l)!(m-l)!}} |n-l, m-l\rangle, \quad (6.149) \\ e^{f_z(t)S_z} e^{f_-(t)S_-}|n, m\rangle &= \sum_{l=0}^{\min(n,m)} \frac{f_-^l(t)}{l!} \sqrt{\frac{n!m!}{(n-l)!(m-l)!}} e^{f_z(t)\frac{aa^\dagger + \bar{a}^\dagger \bar{a}}{2}} |n-l, m-l\rangle \\ &= \sum_{l=0}^{\min(n,m)} \frac{f_-^l(t)}{l!} \sqrt{\frac{n!m!}{(n-l)!(m-l)!}} e^{f_z(t)\frac{n-l+m-l+1}{2}} |n-l, m-l\rangle \quad (6.150) \end{aligned}$$

であり、従って、

$$\begin{aligned} &e^{f_+(t)S_+} e^{f_z(t)S_z} e^{f_-(t)S_-}|n, m\rangle \\ &= e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{l=0}^{\min(n,m)} \frac{f_-^l(t)}{l!} \sqrt{\frac{n!m!}{(n-l)!(m-l)!}} e^{f_z(t)[\frac{n+m}{2}-l]} e^{f_+(t)a^\dagger \bar{a}^\dagger} |n-l, m-l\rangle \\ &= e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{l=0}^{\min(n,m)} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{f_-^l(t) f_+^k(t)}{l!k!} \frac{\sqrt{n!m!(n-l+k)!(m-l+k)!}}{(n-l)!(m-l)!} e^{f_z(t)[\frac{n+m}{2}-l]} |n-l+k, m-l+k\rangle \quad (6.151) \end{aligned}$$

となるので、

$$e^{\hat{H}t}|0\rangle = e^{\kappa t} e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{n,m=0}^{\infty} p_{nm} \sum_{l=0}^{\min(n,m)} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{f_-^l(t) f_+^k(t)}{l!k!} \\ \times \frac{\sqrt{n!m!(n-l+k)!(m-l+k)!}}{(n-l)!(m-l)!} e^{f_z(t)[\frac{n+m}{2}-l]} |n-l+k, m-l+k\rangle \quad (6.152)$$

となる。

今、

$$p_{mn}(t) = \langle 1||n\rangle \langle m||0(t)\rangle \quad (6.153)$$

とする。(6.97),(6.152) より、

$$p_{mn}(t) = \langle 1|e^{i\hat{H}st}|n\rangle \langle m|e^{-i\hat{H}st}|0^{(1)}(t)\rangle, \quad (6.154)$$

$$|0^{(1)}(t)\rangle = e^{\kappa t} e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{s,u=0}^{\infty} p_{su} \sum_{l=0}^{\min(s,u)} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{f_-^l(t) f_+^k(t)}{l!k!} \\ \times \frac{\sqrt{s!u!(s-l+k)!(u-l+k)!}}{(s-l)!(u-l)!} e^{f_z(t)[\frac{s+u}{2}-l]} |s-l+k, u-l+k\rangle \quad (6.155)$$

であり、

$$e^{i\hat{H}st}|n\rangle \langle m|e^{-i\hat{H}st} = e^{i\omega nt}|n\rangle \langle m|e^{-i\omega mt}, \quad (6.156)$$

$$\langle 1||n\rangle \langle m||s-l+k, u-l+k\rangle = \langle m|n-l+k\rangle \cdot \langle u-l+k|n\rangle \\ = \delta_{m,s-l+k} \delta_{u-l+k,n} \quad (6.157)$$

なので、

$$p_{mn}(t) = e^{i\omega(n-m)t} e^{\kappa t} e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{s,u=0}^{\infty} p_{su} \sum_{l=0}^{\min(s,u)} \sum_{k=0}^{\infty} \frac{f_-^l(t) f_+^k(t)}{l!k!} \\ \times \frac{\sqrt{s!u!m!n!}}{(s-l)!(u-l)!} e^{f_z(t)[\frac{s+u}{2}-l]} \delta_{m,s-l+k} \delta_{u-l+k,n} \quad (6.158)$$

となる。 $\delta_{m,s-l+k} \delta_{u-l+k,n}$ より、

$$k-l = n-u = m-s \quad (6.159)$$

である。よって、

$$s = u + n - m, \quad u \geq n - m. \quad (6.160)$$

また、(6.159) より、

$$k = l + n - u \geq 0. \quad (6.161)$$

今、

$$\chi[A] = \begin{cases} 1 & A \text{ が真} \\ 0 & A \text{ が偽} \end{cases} \quad (6.162)$$

とすると、(6.158) は、

$$p_{mn}(t) = e^{i\omega(n-m)t} e^{\kappa t} e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{u=\max(0, n-m)}^{\infty} p_{u+n-m, u} \sum_{l=0}^{\min(u+n-m, u)} \frac{f_-^l(t) f_+^{l+n-u}(t)}{l!(l+n-u)!} \chi[l+n-u \geq 0] \\ \times \frac{\sqrt{(u+n-m)!u!m!n!}}{(u+n-m-l)!(u-l)!} e^{f_z(t)[\frac{n-m}{2}+u-l]} \quad (6.163)$$

となる。

今、 $\kappa t \rightarrow \infty$ とする。(6.144) は、

$$f_+(t) \rightarrow \frac{\bar{n}}{1+\bar{n}}, \quad f_-(t) \rightarrow 1, \quad f_z(t) \rightarrow -2\kappa t - 2\ln[1+\bar{n}] \quad (\kappa t \gg 1) \quad (6.164)$$

であった。よって、

$$e^{\kappa t} e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \rightarrow \frac{1}{1+\bar{n}}, \quad e^{f_z(t)[\frac{n-m}{2}+u-l]} \rightarrow \delta_{\frac{n-m}{2}+u-l, 0} \quad (6.165)$$

となる。 $p_{mn} = p_{mn}^*$ より、 $n \geq m$ として良い。このとき、

$$\max(0, n-m) = n-m, \quad \min(u+n-m, u) = u \quad (6.166)$$

となる。また、(6.165) の第 2 式より、

$$l = u + \frac{n-m}{2} \quad (6.167)$$

だが、これは、

$$n = m \quad (6.168)$$

でないと $l \leq \min(u+n-m, u) = u$ と両立しない。よって、

$$p_{mn}(\infty) = \delta_{mn} p_{nn}(\infty), \quad (6.169) \\ p_{nm}(\infty) = \frac{1}{1+\bar{n}} \sum_{u=0}^{\infty} p_{u,u} \frac{f_-^u(\infty) f_+^{u+n-u}(\infty)}{u!(u+n-u)!} \chi[u+n-u \geq 0] \frac{\sqrt{(u+0)!u!n!n!}}{(u+0-u)!(u-u)!} \\ = \frac{1}{1+\bar{n}} \sum_{u=0}^{\infty} p_{u,u} \frac{1^u \left[\frac{\bar{n}}{1+\bar{n}}\right]^n}{u!n!} u!n! \\ = \frac{1}{1+\bar{n}} \left[\frac{\bar{n}}{1+\bar{n}}\right]^n \sum_{u=0}^{\infty} p_{u,u} \\ = \frac{1}{1+\bar{n}} \left[\frac{\bar{n}}{1+\bar{n}}\right]^n \quad (6.170)$$

を得る。最後の等号で、

$$\langle 1|0 \rangle = \sum_{u=0}^{\infty} p_{u,u} = 1 \quad (6.171)$$

を用いた。なお、

$$\langle 1|0(t=\infty) \rangle = \sum_{n=0}^{\infty} p_{nn}(\infty) \\ = \frac{1}{1+\bar{n}} \sum_{n=0}^{\infty} \left[\frac{\bar{n}}{1+\bar{n}}\right]^n \\ = \frac{1}{1+\bar{n}} \frac{1}{1-\frac{\bar{n}}{1+\bar{n}}} \\ = 1 \quad (6.172)$$

である。ところで、

$$\bar{n} = \frac{1}{e^{\omega/T} - 1}, \quad \frac{1}{1 + \bar{n}} = \frac{e^{\omega/T} - 1}{e^{\omega/T}} = 1 - e^{-\omega/T}, \quad \frac{\bar{n}}{1 + \bar{n}} = e^{-\omega/T} \quad (6.173)$$

であるから、(6.169),(6.170)は、

$$\rho(\infty) = \frac{e^{-H_S/T}}{\text{Tr}[e^{-H_S/T}]} \quad (H_S = \omega a^\dagger a) \quad (6.174)$$

つまり、熱平衡状態を意味する。

7 超演算子法による再考

7.1 § 4.2 の再考

7.1.1 式変形の一般的手法

§ 4.2 を超演算子法で再考する。以下では、 $\tilde{a}, \tilde{a}^\dagger$ は、(3.29) を満たす超演算子とする。このとき、

$$\hat{H}_a = H_a - \tilde{H}_a \quad (a = S, R, 0, 1, \text{無印}) \quad (7.1)$$

とする²⁸⁾ と、

$$\hat{H}_a \bullet = [H_a, \bullet] \quad (7.2)$$

である。ただし、

$$H = H_0 + H_1, \quad (7.3)$$

$$H_0 = H_S + H_R \quad (7.4)$$

であった。演算子 $e^{i\hat{H}_a s} X$ を s で微分すると、

$$\begin{aligned} \frac{d}{ds} e^{i\hat{H}_a s} X &= -i\hat{H}_a e^{i\hat{H}_a s} X \\ &= i[H_a, e^{-i\hat{H}_a s} X] \end{aligned} \quad (7.5)$$

となる。これより、

$$e^{i\hat{H}_a s} X = e^{iH_a s} X^{-iH_a s} \quad (7.6)$$

を得る。特に、相互作用描像、ハイゼンベルグ描像の演算子は、

$$X^I(t) = e^{i\hat{H}_0 t} X, \quad X(t) = e^{i\hat{H} t} X \quad (7.7)$$

と書ける。今、超演算子

$$\hat{H}_a^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} e^{i\hat{H}_0 t} \hat{H}_a e^{-i\hat{H}_0 t}, \quad (7.8)$$

$$\hat{H}_a(t) \stackrel{\text{def}}{=} e^{i\hat{H} t} \hat{H}_a e^{-i\hat{H} t} \quad (7.9)$$

を導入する。このとき、(7.7) より、

$$\begin{aligned} \hat{H}_a^I(t) X^I(t) &= e^{i\hat{H}_0 t} \hat{H}_a e^{-i\hat{H}_0 t} e^{i\hat{H}_0 t} X \\ &= e^{i\hat{H}_0 t} \hat{H}_a X \\ &= e^{i\hat{H}_0 t} [H_a, X] \\ &= [H_a^I(t), X^I(t)], \end{aligned} \quad (7.10)$$

$$\hat{H}_a(t) X(t) = [H_a(t), X(t)] \quad (7.11)$$

となる。

超演算子 $\hat{W}(t)$ を、

$$e^{i\hat{H} t} = \hat{W}(t) e^{i\hat{H}_0 t} \quad (7.12)$$

²⁸⁾ § 4.2 では、 H_1 は時間に陽に依存しても良い定式化をしたが、ここでは H_1 は時間に陽に依存しないとする。

で導入する²⁹⁾。この式を微分して、

$$\begin{aligned}
\hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t}i\hat{H} &= \frac{d\hat{W}(t)}{dt}e^{i\hat{H}_0 t} + \hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t}i\hat{H}_0, \\
\hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t}i\hat{H}_1 &= \frac{d\hat{W}(t)}{dt}e^{i\hat{H}_0 t}, \\
\frac{d\hat{W}(t)}{dt}e^{i\hat{H}_0 t} &= \hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t}i\hat{H}_1 \\
&= \hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t}i\hat{H}_1e^{-i\hat{H}_0 t}e^{i\hat{H}_0 t} \\
&= \hat{W}(t)i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0 t}, \\
\frac{d\hat{W}(t)}{dt} &= \hat{W}(t)i\hat{H}_1^I(t)
\end{aligned} \tag{7.14}$$

を得る。

ここで、射影演算子 \mathcal{P} を、

$$\mathcal{P}^2 = \mathcal{P}, \quad [\mathcal{P}(\bullet)]^\dagger = \mathcal{P}(\bullet^\dagger) \tag{7.15}$$

を満たすものとして導入する。2つ目の性質を $\mathcal{P}^\dagger = \mathcal{P}$ とかく。また、

$$\mathcal{Q} = 1 - \mathcal{P} \tag{7.16}$$

とすると、

$$\mathcal{Q}^2 = \mathcal{Q}, \tag{7.17}$$

$$\mathcal{Q}^\dagger = \mathcal{Q}, \tag{7.18}$$

$$\mathcal{P}\mathcal{Q} = \mathcal{Q}\mathcal{P} = 0 \tag{7.19}$$

となる。今、

$$\hat{\xi}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{W}(t)\mathcal{Q}, \quad \hat{\eta}(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{W}(t)\mathcal{P} \tag{7.20}$$

とする。(7.14) は、

$$\begin{aligned}
\frac{d\hat{W}(t)}{dt} &= \hat{W}(t)(\mathcal{Q} + \mathcal{P})i\hat{H}_1^I(t) \\
&= \hat{\xi}(t)i\hat{H}_1^I(t) + \hat{\eta}(t)i\hat{H}_1^I(t)
\end{aligned} \tag{7.21}$$

または、

$$\begin{aligned}
\frac{d\hat{W}(t)}{dt} &= \hat{W}(t)(\mathcal{Q}^2 + \mathcal{P}^2)i\hat{H}_1^I(t) \\
&= \hat{\xi}(t)i\mathcal{Q}\hat{H}_1^I(t) + \hat{\eta}(t)i\mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)
\end{aligned} \tag{7.22}$$

とかける。これに右から \mathcal{Q} を作用させて (\mathcal{Q} にこの式の両辺を作用させて)、

$$\frac{d\hat{\xi}(t)}{dt} = \hat{\xi}(t)i\hat{H}_{1,Q}^I(t) + \hat{\eta}(t)i\hat{H}_{1,PQ}^I(t) \tag{7.23}$$

²⁹⁾両辺を X に作用させると、

$$\begin{aligned}
e^{i\hat{H}t}X &= \hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t}X \\
X(t) &= \hat{W}(t)X^I(t)
\end{aligned} \tag{7.13}$$

となる。

を得る。ただし、

$$\hat{H}_{1,QQ}^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{Q}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{Q}, \quad \hat{H}_{1,PQ}^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\mathcal{Q} \quad (7.24)$$

である。ここで、 $\hat{U}_{QQ}(t)$ を、

$$\frac{d}{dt}\hat{U}_{QQ}(t) = -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t), \quad (7.25)$$

$$\hat{U}_{QQ}(0) = 1 \quad (7.26)$$

で導入する。(7.23) より、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}[\hat{\xi}(t)\hat{U}_{QQ}(t)] &= [\hat{\xi}(t)i\hat{H}_{1,QQ}^I(t) + \hat{\eta}(t)i\hat{H}_{1,PQ}^I(t)]\hat{U}_{QQ}(t) - \hat{\xi}(t)i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t) \\ &= i\hat{\eta}(t)\hat{H}_{1,PQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t) \end{aligned} \quad (7.27)$$

となる。これより、

$$\begin{aligned} \hat{\xi}(t)\hat{U}_{QQ}(t) &= \mathcal{Q} + i \int_0^t ds \hat{\eta}(s)\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s), \\ \hat{\xi}(t) &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}^{-1}(t) + i \int_0^t ds \hat{\eta}(s)\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t) \end{aligned} \quad (7.28)$$

を得る。ただし、(7.20),(7.26) と (7.12) より、 $\hat{W}(0) = 1$ であることを用いた。なお、 $\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)$ は、超演算子 $\hat{U}_{QQ}(t)$ の逆 (逆超演算子) であり、

$$\hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\bullet = \bullet \quad (7.29)$$

を持たす。

今、 $\hat{W}_{QQ}(t)$ を、

$$\hat{W}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}(t)\bullet = \bullet \quad (7.30)$$

で導入する。(7.29) を微分して、

$$\begin{aligned} 0 &= \frac{d\hat{U}_{QQ}(t)}{dt}\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\bullet + \hat{U}_{QQ}(t)\frac{d\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)}{dt}\bullet, \\ \frac{d\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)}{dt}\bullet &= -\hat{W}_{QQ}(t)\frac{d\hat{U}_{QQ}(t)}{dt}\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\bullet \\ &= i\hat{W}_{QQ}(t)\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\bullet \\ &= i\hat{W}_{QQ}(t)\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\bullet \end{aligned} \quad (7.31)$$

を得る。また、(7.29) を微分すると、

$$0 = \frac{d\hat{W}_{QQ}(t)}{dt}\hat{U}_{QQ}(t)\bullet + \hat{W}_{QQ}(t)\frac{d\hat{U}_{QQ}(t)}{dt}\bullet \quad (7.32)$$

となる。 $\bullet = \hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\bullet'$ とすると、

$$\begin{aligned} 0 &= \frac{d\hat{W}_{QQ}(t)}{dt}\bullet' + \hat{W}_{QQ}(t)\frac{d\hat{U}_{QQ}(t)}{dt}\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\bullet', \\ \frac{d\hat{W}_{QQ}(t)}{dt}\bullet' &= i\hat{W}_{QQ}(t)\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\bullet' \end{aligned} \quad (7.33)$$

を得る。(7.31),(7.33)より、 $\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)$ と $\hat{W}_{QQ}(t)$ は同じ方程式を満たし、初期条件は、(7.26)より、

$$\hat{U}_{QQ}^{-1}(0) = 1 = \hat{W}_{QQ}(0) \quad (7.34)$$

と同じである。よって、 $\hat{W}_{QQ}(t) = \hat{U}_{QQ}^{-1}(t)$ で、

$$\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\hat{U}_{QQ}(t) \bullet = \bullet \quad (7.35)$$

となる。今、

$$\hat{U}_{QQ}(s, t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t) \quad (7.36)$$

とすると、

$$\begin{aligned} \hat{U}_{QQ}(t, t) &= 1, \\ \hat{U}_{QQ}(t, u)\hat{U}_{QQ}(u, s) &= \hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(u)\hat{U}_{QQ}(u)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) \\ &= \hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) \\ &= \hat{U}_{QQ}(t, s) \end{aligned} \quad (7.37)$$

$$\hat{U}_{QQ}(t, u)\hat{U}_{QQ}(u, s) = \hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(u)\hat{U}_{QQ}(u)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) = \hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) = \hat{U}_{QQ}(t, s) \quad (7.38)$$

となり、

$$\hat{U}_{QQ}(t, s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t, s) = 1 \quad (7.39)$$

で $\hat{U}_{QQ}^{-1}(t, s)$ を導入すると、(7.38),(7.37)より、

$$\hat{U}_{QQ}^{-1}(t, s) = \hat{U}_{QQ}(s, t) \quad (7.40)$$

を得る。これと、(7.36)より、

$$\hat{U}_{QQ}^{-1}(t, s) = \hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)$$

であるから、

$$\begin{aligned} \hat{U}_{QQ}^{-1}(t, s)\hat{U}_{QQ}(t, s) &= \hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\hat{U}_{QQ}(t, s) \\ &= \hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(t)\hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) \\ &= \hat{U}_{QQ}(s)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) \\ &= 1 \end{aligned} \quad (7.41)$$

となる。

上の記号で(7.28)は、

$$\hat{\xi}(t) = \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t) + i \int_0^t ds \hat{\eta}(s)\hat{H}_{1, PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t) \quad (7.42)$$

とかける。これを(7.21)に代入して、(7.20)の $\hat{\eta}(t)$ の定義を使うと、

$$\begin{aligned} \frac{d\hat{W}(t)}{dt} &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)i\hat{H}_1^I(t) - \int_0^t ds \hat{W}(s)\mathcal{P}\hat{H}_{1, PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t)\hat{H}_1^I(t) \\ &\quad + \hat{W}(t)\mathcal{P}i\hat{H}_1^I(t) \end{aligned} \quad (7.43)$$

を得る。

(7.13) より、

$$\begin{aligned} X(t) &= \hat{W}(t)X^I(t) \\ &= \hat{W}(t)e^{i\hat{H}_0 t} X \end{aligned} \quad (7.44)$$

である。これを微分し、(7.43) を代入すると、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}X(t) &= \frac{d\hat{W}(t)}{dt}e^{i\hat{H}_0 t}X + \hat{W}(t)i\hat{H}_0e^{i\hat{H}_0 t}X \\ &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0 t}X - \int_0^t ds \hat{W}(s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t)\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0 t}X \\ &\quad + \hat{W}(t)\mathcal{P}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0 t}X + \hat{W}(t)i\hat{H}_0e^{i\hat{H}_0 t}X \\ &= \hat{W}(t)i[\hat{H}_0 + \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)]e^{i\hat{H}_0 t}X + \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0 t}X \\ &\quad - \int_0^t ds \hat{W}(s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t)\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0 t}X \end{aligned} \quad (7.45)$$

を得る。これは、TC 型の方程式である。

TCL 型の方程式は、次のように得られる。今、

$$\hat{W}(s, t) = \hat{W}^{-1}(s)\hat{W}(t) \quad (7.47)$$

とすると、

$$\begin{aligned} \hat{W}(t, u)\hat{W}(u, s) &= \hat{W}^{-1}(t)\hat{W}(u)\hat{W}^{-1}(u)\hat{W}(s) \\ &= \hat{W}^{-1}(t)\hat{W}(s) \\ &= \hat{W}(t, s) \end{aligned} \quad (7.48)$$

となる。ただし、

$$\hat{W}(t)\hat{W}^{-1}(t) = \hat{W}(t)\hat{W}^{-1}(t) = 1$$

である。(7.42) の第 2 項において、

$$\begin{aligned} \hat{\eta}(s) &= \hat{W}(0, s)\mathcal{P} \\ &= \hat{W}(0, t)\hat{W}(t, s)\mathcal{P} \\ &= \hat{W}(t)(\mathcal{Q} + \mathcal{P})\hat{W}(t, s)\mathcal{P} \\ &= (\hat{\xi}(t) + \hat{W}(t)\mathcal{P})\hat{W}(t, s)\mathcal{P} \end{aligned} \quad (7.49)$$

である。これより、(7.42) の第 2 項は、

$$\begin{aligned} &i \int_0^t ds \hat{\eta}(s)\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t) \\ &= i(\hat{\xi}(t) + \hat{W}(t)\mathcal{P}) \int_0^t ds \hat{W}(t, s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t) \\ &= \hat{\xi}(t)\hat{S}(t) + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t), \end{aligned} \quad (7.50)$$

$$\hat{S}(t) \stackrel{\text{def}}{=} i \int_0^t ds \hat{W}(t, s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t) \quad (7.51)$$

となる。よって、(7.42) は、

$$\begin{aligned}\hat{\xi}(t) &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t) + \hat{\xi}(t)\hat{S}(t) + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t), \\ \hat{\xi}(t)[1 - \hat{S}(t)] &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t) + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t), \\ \hat{\xi}(t) &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1} + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}\end{aligned}\quad (7.52)$$

となる。これを (7.21) に代入して、

$$\begin{aligned}\frac{d\hat{W}(t)}{dt} &= \hat{\xi}(t)i\hat{H}_1^I(t) + \hat{\eta}(t)i\hat{H}_1^I(t) \\ &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}i\hat{H}_1^I(t) + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}i\hat{H}_1^I(t) \\ &\quad + \hat{W}(t)\mathcal{P}i\hat{H}_1^I(t)\end{aligned}\quad (7.53)$$

を得る。これを (7.45) に代入して、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}X(t) &= \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X \\ &\quad + \hat{W}(t)\mathcal{P}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X + \hat{W}(t)i\hat{H}_0e^{i\hat{H}_0t}X \\ &= \hat{W}(t)i[\hat{H}_0 + \mathcal{P}i\hat{H}_1^I(t)]e^{i\hat{H}_0t}X + \mathcal{Q}\hat{U}_{QQ}(0, t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X \\ &\quad + \hat{W}(t)\mathcal{P}\hat{S}(t)[1 - \hat{S}(t)]^{-1}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X\end{aligned}\quad (7.54)$$

を得る。これが TCL 型の方程式である。

7.1.2 確率化の処方

Langevin 方程式へ移行するために、柴田と橋爪が採用した処方箋は:

処方 1 : 射影演算子として、

$$\mathcal{P}\bullet = \text{Tr}_R(\rho_R\bullet)\quad (7.55)$$

を採用する。

処方 2 : 右辺の各項で、 $\hat{H}_1^I(t)$ について展開し、意味のある最低次までを取る。

処方 3 : 乱雑演算子に依存する右辺第 2 項において、相互作用描像の演算子をハイゼンベルク描像の演算子に置き換える。

(7.36), (7.25) より、

$$\begin{aligned}\frac{\partial}{\partial t}\hat{U}_{QQ}(t, s) &= \left[\frac{\partial}{\partial t}\hat{U}_{QQ}(t)\right]\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) \\ &= -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t)\hat{U}_{QQ}^{-1}(s) \\ &= -i\hat{H}_{1,QQ}^I(t)\hat{U}_{QQ}(t, s)\end{aligned}\quad (7.56)$$

を得る。これと初期条件 $\hat{U}_{QQ}(s, s) = 1$ より

$$\hat{U}_{QQ}(t, s)\bullet = \bullet - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u)\hat{U}_{QQ}(u, s)\bullet\quad (7.57)$$

この右辺自身を右辺の $\hat{U}_{QQ}(u, s)\bullet$ に代入して、

$$\begin{aligned}\hat{U}_{QQ}(t, s)\bullet &= \bullet - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u)\bullet - \int_s^t du_1 \int_s^{u_1} du_2 \hat{H}_{1,QQ}^I(u_1)\hat{H}_{1,QQ}^I(u_2)\hat{U}_{QQ}(u_2, s)\bullet \\ &= \bullet - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u)\bullet - \int_s^t du_1 \int_s^{u_1} du_2 \hat{H}_{1,QQ}^I(u_1)\hat{H}_{1,QQ}^I(u_2)\bullet + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3\bullet, \\ \hat{U}_{QQ}(t, s) &= 1 - i \int_s^t du \hat{H}_{1,QQ}^I(u) - \int_s^t du_1 \int_s^{u_1} du_2 \hat{H}_{1,QQ}^I(u_1)\hat{H}_{1,QQ}^I(u_2) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3\end{aligned}\quad (7.58)$$

を得る。 $\mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3$ は $\hat{H}_1^I(t)$ について 3 次以上の項である。(7.46) にこれを代入する。これより、意味のある最低次は

$$\hat{U}_{QQ}(0, t)\hat{H}_1^I(t) \approx \hat{H}_1^I(t), \quad (7.59)$$

$$\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{U}_{QQ}(s, t)\hat{H}_1^I(t) \approx \hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{H}_1^I(t) \quad (7.60)$$

となる。よって、(7.46) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}X(t) &= \hat{W}(t)i[\hat{H}_0 + \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)]e^{i\hat{H}_0t}X + \mathcal{Q}i\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X \\ &\quad - \int_0^t ds \hat{W}(s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}X \end{aligned} \quad (7.61)$$

となる。以下では、 A を注目系の演算子とする。このとき、

$$e^{i\hat{H}_0t}A = e^{i\hat{H}_st}A = A^I(t) \quad (7.62)$$

であるから、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}A(t) &= \hat{W}(t)i[\hat{H}_0 + \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)]A^I(t) + \mathcal{Q}i\hat{H}_1^I(t)A^I(t) \\ &\quad - \int_0^t ds \hat{W}(s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{H}_1^I(t)A^I(t) \end{aligned} \quad (7.63)$$

となる。

(7.55) を代入すると、

$$\begin{aligned} \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)A^I(t) &= \text{Tr}_R(\rho_R\hat{H}_1^I(t)A^I(t)) \\ &= \text{Tr}_R(\rho_R[H_1^I(t), A^I(t)]) \\ &= \langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R, \end{aligned} \quad (7.64)$$

$$\langle \cdots \rangle_R \equiv \text{Tr}_R(\rho_R \cdots) \quad (7.65)$$

となる。ただし、(7.10) を用いた。また、

$$\begin{aligned} \mathcal{Q}i\hat{H}_1^I(t)A^I(t) &= \mathcal{Q}i[H_1^I(t), A^I(t)] \\ &= i[H_1^I(t), A^I(t)] - i\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R, \end{aligned} \quad (7.66)$$

$$\begin{aligned} \mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{H}_1^I(t)A^I(t) &= \mathcal{P}\hat{H}_1^I(s)\mathcal{Q}[H_1^I(t), A^I(t)] \\ &= \mathcal{P}\hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)] - \mathcal{P}\hat{H}_1^I(s)\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R \\ &= \langle \hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R - \langle \hat{H}_1^I(s)\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R \rangle \end{aligned} \quad (7.67)$$

である。これを (7.63) に代入すると、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}A(t) &= \hat{W}(t)i\hat{H}_0A^I(t) + \hat{W}(t)i\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R + i[H_1^I(t), A^I(t)] - i\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R \\ &\quad - \int_0^t ds \hat{W}(s)[\langle \hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R - \langle \hat{H}_1^I(s)\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R \rangle] \end{aligned} \quad (7.68)$$

となる。

今、 H_1 として、

$$H_1 = \sum_{\alpha} R_{\alpha} a_{\alpha} + \text{h.c.} \quad (7.69)$$

の形を仮定する。ただし、 R_{α} は熱浴の、 a_{α} は注目系の自由度である。このとき、

$$H_1^I(t) = \sum_{\alpha} R_{\alpha}^I(t) a_{\alpha}^I(t) + \text{h.c.}, \quad (7.70)$$

$$[H_1^I(t), A^I(t)] = \sum_{\alpha} \{R_{\alpha}^I(t)[a_{\alpha}^I(t), A^I(t)] + R_{\alpha}^I(t)^{\dagger}[a_{\alpha}^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]\}, \quad (7.71)$$

$$\langle [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R = \sum_{\alpha} \{ \langle R_{\alpha}^I(t) \rangle_R [a_{\alpha}^I(t), A^I(t)] + \langle R_{\alpha}^I(t)^{\dagger} \rangle_R [a_{\alpha}^I(t)^{\dagger}, A^I(t)] \} \quad (7.72)$$

となる。今、

$$\langle R_{\alpha}^I(t) \rangle_R = 0 = \langle R_{\alpha}^I(t)^{\dagger} \rangle_R \quad (7.73)$$

を仮定する。これは、(4.124) に相当する。このとき、(7.68) は、

$$\frac{d}{dt} A(t) = \hat{W}(t) i \hat{H}_0 A^I(t) + i [H_1^I(t), A^I(t)] - \int_0^t ds \hat{W}(s) \langle \hat{H}_1^I(s) [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R \quad (7.74)$$

となる。ところで、この第1項は、

$$\begin{aligned} \hat{W}(t) i \hat{H}_0 A^I(t) &= i \hat{W}(t) [H_0^I(t), A^I(t)] \\ &= i [H_0(t), A(t)] \\ &= i [H_S(t), A(t)] \end{aligned} \quad (7.75)$$

である。ただし、 $H_0 = H_0^I(t)$ と (7.13) を用いた。よって、上式は、

$$\frac{d}{dt} A(t) = i [H_S(t), A(t)] + i [H_1^I(t), A^I(t)] - \int_0^t ds \hat{W}(s) \langle \hat{H}_1^I(s) [H_1^I(t), A^I(t)] \rangle_R \quad (7.76)$$

となる。

TCL 型の場合も同様である。(7.58),(7.51) より、

$$\hat{S}(t) = i \int_0^t ds \hat{W}(t, s) \mathcal{P} \hat{H}_{1,PQ}^I(s) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^2 \quad (7.77)$$

および、

$$[1 - \hat{S}(t)]^{-1} = 1 + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I) \quad (7.78)$$

を得る。処方2のもとで、(7.54) は、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} A(t) &= \hat{W}(t) i [\hat{H}_0 + \mathcal{P} i \hat{H}_1^I(t)] e^{i \hat{H}_0 t} A + \mathcal{Q} \hat{U}_{QQ}(0, t) i \hat{H}_1^I(t) e^{i \hat{H}_0 t} A \\ &\quad + \hat{W}(t) \mathcal{P} \hat{S}(t) i \hat{H}_1^I(t) e^{i \hat{H}_0 t} A \\ &= \hat{W}(t) i [\hat{H}_0 + \mathcal{P} i \hat{H}_1^I(t)] e^{i \hat{H}_0 t} A + \mathcal{Q} \hat{U}_{QQ}(0, t) i \hat{H}_1^I(t) e^{i \hat{H}_0 t} A \\ &\quad - \hat{W}(t) \mathcal{P} \int_0^t ds \hat{W}(t, s) \mathcal{P} \hat{H}_{1,PQ}^I(s) \hat{H}_1^I(t) e^{i \hat{H}_0 t} A \end{aligned} \quad (7.79)$$

となる。これは、(7.54) と第3項のみが異なる。(7.67),(7.73) より、上式の第3項は、

$$\begin{aligned}
& -\hat{W}(t)\mathcal{P} \int_0^t ds \hat{W}(t,s)\mathcal{P}\hat{H}_{1,PQ}^I(s)\hat{H}_1^I(t)e^{i\hat{H}_0t}A \\
& = -\hat{W}(t)\mathcal{P} \int_0^t ds \hat{W}(t,s)\langle\hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)]\rangle_R \\
& = -\hat{W}(t) \int_0^t ds \langle\hat{W}(t,s)\langle\hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)]\rangle_R\rangle_R
\end{aligned} \tag{7.80}$$

となる。よって、(7.76) の対応物は、それと第3項だけが異なった、

$$\frac{d}{dt}A(t) = i[H_S(t), A(t)] + i[H_1^I(t), A^I(t)] - \hat{W}(t) \int_0^t ds \langle\hat{W}(t,s)\langle\hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)]\rangle_R\rangle_R \tag{7.81}$$

である。

7.1.3 ボソン系の場合

計算を進める。(7.8) より、

$$\begin{aligned}
\hat{H}_1^I(s)[H_1^I(t), A^I(t)] & = e^{i\hat{H}_0s}\hat{H}_1e^{-i\hat{H}_0s}[H_1^I(t), A^I(t)] \\
& = e^{i\hat{H}_0s}[H_1, [H_1^I(t-s), A^I(t-s)]] \\
& = [H_1^I(s), [H_1^I(t), A^I(t)]]
\end{aligned} \tag{7.82}$$

である。(7.71) より、

$$\begin{aligned}
[H_1^I(s), [H_1^I(t), A^I(t)]] & = \sum_{\alpha} \{ [H_1^I(s), R_{\alpha}^I(t)[a_{\alpha}^I(t), A^I(t)]] + [H_1^I(s), R_{\alpha}^I(t)^{\dagger}[a_{\alpha}^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]] \} \\
& = \sum_{\alpha,\beta} \{ [R_{\beta}^I(s)a_{\beta}^I(s) + R_{\beta}^I(s)^{\dagger}a_{\beta}^I(s)^{\dagger}, R_{\alpha}^I(t)[a_{\alpha}^I(t), A^I(t)]] \\
& \quad + [R_{\beta}^I(s)a_{\beta}^I(s) + R_{\beta}^I(s)^{\dagger}a_{\beta}^I(s)^{\dagger}, R_{\alpha}^I(t)^{\dagger}[a_{\alpha}^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]] \}
\end{aligned} \tag{7.83}$$

となる。

今、§ 4.1.1 のモデルについて考える。すなわち、

$$H_S = \omega_0 a^{\dagger}a, \tag{7.84}$$

$$H_R = \sum_l \omega_l b_l^{\dagger}b_l, \tag{7.85}$$

$$H_1 = a^{\dagger}R + R^{\dagger}a, \quad R = \sum_l g_l b_l \tag{7.86}$$

とする。このとき、

$$\begin{aligned}
& [H_1^I(s), [H_1^I(t), A^I(t)]] \\
& = [R^I(s)a^I(s)^{\dagger} + R^I(s)^{\dagger}a^I(s), R^I(t)[a^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]] \\
& \quad + [R^I(s)a^I(s)^{\dagger} + R^I(s)^{\dagger}a^I(s), R^I(t)^{\dagger}[a^I(t), A^I(t)]] \\
& = R^I(s)R^I(t)[a^I(s)^{\dagger}, [a^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]] + [R^I(s), R^I(t)][a^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]a^I(s)^{\dagger} \\
& \quad + R^I(s)^{\dagger}R^I(t)[a^I(s), [a^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]] + [R^I(s)^{\dagger}, R^I(t)][a^I(t)^{\dagger}, A^I(t)]a^I(s) \\
& \quad + R^I(s)R^I(t)^{\dagger}[a^I(s)^{\dagger}, [a^I(t), A^I(t)]] + [R^I(s), R^I(t)^{\dagger}][a^I(t), A^I(t)]a^I(s)^{\dagger} \\
& \quad + R^I(s)^{\dagger}R^I(t)^{\dagger}[a^I(s), [a^I(t), A^I(t)]] + [R^I(s)^{\dagger}, R^I(t)^{\dagger}][a^I(t), A^I(t)]a^I(s)
\end{aligned} \tag{7.87}$$

である。NETFD のときは、これに相当する計算は (4.152) で、この計算より簡単だった。上式より、

$$\begin{aligned}
& \langle [H_1^I(s), [H_1^I(t), A^I(t)]] \rangle_R \\
&= \langle R^I(s)R^I(t) \rangle_R [a^I(s)^\dagger, [a^I(t)^\dagger, A^I(t)]] + \langle [R^I(s), R^I(t)] \rangle_R [a^I(t)^\dagger, A^I(t)] a^I(s)^\dagger \\
&\quad + \langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R [a^I(s), [a^I(t)^\dagger, A^I(t)]] + \langle [R^I(s)^\dagger, R^I(t)] \rangle_R [a^I(t)^\dagger, A^I(t)] a^I(s) \\
&\quad + \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R [a^I(s)^\dagger, [a^I(t), A^I(t)]] + \langle [R^I(s), R^I(t)^\dagger] \rangle_R [a^I(t), A^I(t)] a^I(s)^\dagger \\
&\quad + \langle R^I(s)^\dagger R^I(t)^\dagger \rangle_R [a^I(s), [a^I(t), A^I(t)]] + \langle [R^I(s)^\dagger, R^I(t)^\dagger] \rangle_R [a^I(t), A^I(t)] a^I(s) \\
&= \langle R^I(s)^\dagger R^I(t) \rangle_R [a^I(s), [a^I(t)^\dagger, A^I(t)]] + \langle [R^I(s)^\dagger, R^I(t)] \rangle_R [a^I(t)^\dagger, A^I(t)] a^I(s) \\
&\quad + \langle R^I(s)R^I(t)^\dagger \rangle_R [a^I(s)^\dagger, [a^I(t), A^I(t)]] + \langle [R^I(s), R^I(t)^\dagger] \rangle_R [a^I(t), A^I(t)] a^I(s)^\dagger \quad (7.88)
\end{aligned}$$

を得る。これと (4.43),(4.44),(4.45) より、(7.76) は、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}A(t) &= i[H_S(t), A(t)] - iR^I(t)^\dagger[A^I(t), a^I(t)] - i[A^I(t), a^I(t)^\dagger]R^I(t) \\
&\quad + \kappa \left\{ a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t) \right\} + 2\kappa\bar{n} [a^\dagger(t), [A(t), a(t)]] \quad (7.89)
\end{aligned}$$

となる。これは、(4.165) で $\langle\langle 1|$ を取ったものである。処方 3 により、この第 2 項は、

$$-iR^I(t)^\dagger[A^I(t), a^I(t)] - i\langle\langle 1|[A^I(t), a^I(t)^\dagger]R^I(t) \rightarrow \sqrt{2\kappa}b_t^\dagger[A(t), a(t)] + \sqrt{2\kappa}[A(t), a(t)^\dagger]b_t \quad (7.90)$$

となる。ここで、

$$-iR^I(t) \rightarrow \sqrt{2\kappa}b_t \quad (7.91)$$

は乱雑力演算子である。最終的に、

$$\begin{aligned}
\frac{d}{dt}A(t) &= i[H_S(t), A(t)] + \sqrt{2\kappa}b_t^\dagger[A(t), a(t)] + \sqrt{2\kappa}[A(t), a^\dagger(t)]b_t \\
&\quad + \kappa \left\{ a^\dagger(t)[A(t), a(t)] + [a^\dagger(t), A(t)]a(t) \right\} + 2\kappa\bar{n} [a^\dagger(t), [A(t), a(t)]] \quad (7.92)
\end{aligned}$$

を得る。TCL 型の (7.81) から (4.44),(4.45) の近似の下では、同じ方程式が得られる。

7.2 § 4.3 の再考

Liouville-von Neumann 方程式は、

$$\frac{d}{dt}\rho_{tot}(t) = -i[H, \rho_{tot}(t)] = -i\hat{H}\rho_{tot}(t) \quad (7.93)$$

である。初期値は、

$$\rho_{tot}(0) = \rho_R\rho(0) \quad (7.94)$$

を仮定する。(7.93) は、

$$\rho_{tot}(t) = e^{-i\hat{H}t}\rho_{tot}(0) \quad (7.95)$$

と解ける。今、 $\hat{U}(t)$ を、

$$e^{-i\hat{H}t} = e^{-i\hat{H}_0t}\hat{U}(t) \quad (7.96)$$

で定義する。これと (7.95) より、

$$\rho_{tot}(t) = e^{-i\hat{H}_0 t} \rho_{tot}^I(t), \quad (7.97)$$

$$\rho_{tot}^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{U}(t) \rho_{tot}(0) \quad (7.98)$$

となる。(7.96) を微分して、

$$\begin{aligned} -i\hat{H}e^{-i\hat{H}_0 t} \hat{U}(t) &= -i\hat{H}_0 e^{-i\hat{H}_0 t} \hat{U}(t) + e^{-i\hat{H}_0 t} \frac{d\hat{U}(t)}{dt}, \\ -i\hat{H}_1 e^{-i\hat{H}_0 t} \hat{U}(t) &= e^{-i\hat{H}_0 t} \frac{d\hat{U}(t)}{dt}, \end{aligned} \quad (7.99)$$

$$\frac{d\hat{U}(t)}{dt} = -i\hat{H}_1^I(t) \hat{U}(t) \quad (7.100)$$

を得る。(4.73) から (4.103) までと同様にして、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \hat{U}(t) &= -i\hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} - \int_0^t ds \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \mathcal{P} \hat{U}(s) \\ &\quad - i\hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \hat{U}(t) \end{aligned} \quad (7.101)$$

を得る。ここで、 \mathcal{P} は (7.15) を満たす。両辺を $\rho_{tot}(0)$ に作用させると、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \rho_{tot}^I(t) &= -i\hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} \rho_{tot}^I(0) - \int_0^t ds \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s) \\ &\quad - i\hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(t) \end{aligned} \quad (7.102)$$

となる。これに \mathcal{P} を作用させて、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \mathcal{P} \rho_{tot}^I(t) &= -i\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} \rho_{tot}(0) - \int_0^t ds \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s) \\ &\quad - i\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(t) \end{aligned} \quad (7.103)$$

を得る。(7.58) を代入する。右辺第1項は、

$$\begin{aligned} &-i\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t) \mathcal{Q} \rho_{tot}(0) \\ &= -i\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \mathcal{Q} \rho_{tot}(0) - \int_0^t ds \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{H}_{1,QQ}^I(s) \mathcal{Q} \rho_{tot}(0) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \\ &= -i\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \rho_{tot}(0) + i\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \rho_{tot}(0) - \int_0^t ds \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{H}_{1,QQ}^I(s) \mathcal{Q} \rho_{tot}(0) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \end{aligned} \quad (7.104)$$

右辺第2項は、

$$\begin{aligned} &- \int_0^t ds \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{U}_{QQ}(t, s) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s) \\ &= - \int_0^t ds \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{H}_{1,QP}^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \\ &= - \int_0^t ds \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) (1 - \mathcal{P}) \hat{H}_1^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s) + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \\ &= - \int_0^t ds [\mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \hat{H}_1^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s) - \mathcal{P} \hat{H}_1^I(t) \mathcal{P} \hat{H}_1^I(s) \mathcal{P} \rho_{tot}^I(s)] + \mathcal{O}(\hat{H}_1^I)^3 \end{aligned} \quad (7.105)$$

となる。

今、 \mathcal{P} として、

$$\mathcal{P}\bullet = \rho_R \text{Tr}_R(\bullet) \quad (7.106)$$

を選ぶ。また、(7.69),(7.73) すなわち、

$$H_1 = R_\alpha a_\alpha + R_\alpha^\dagger a_\alpha^\dagger, \quad \langle R_\alpha^I(t) \rangle_R = 0 = \langle R_\alpha^I(t)^\dagger \rangle_R \quad (7.107)$$

を仮定する (α については和を取るものとする)。このとき、

$$\begin{aligned} \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\rho_{tot}(0) &= \mathcal{P}e^{-i\hat{H}_0 t}\hat{H}_1 e^{-i\hat{H}_0 t}\rho_{tot}(0) \\ &= \mathcal{P}[H_1^I(t), \rho_{tot}(0)] \\ &= \rho_R \text{Tr}_R([H_1^I(t), \rho_{tot}(0)]) \\ &= \rho_R \text{Tr}_R([R_\alpha^I(t)a_\alpha^I(t) + R_\alpha^I(t)^\dagger a_\alpha^I(t)^\dagger, \rho_R \rho(0)]) \end{aligned} \quad (7.108)$$

である。ここで、

$$\begin{aligned} [R_\alpha^I(t)a_\alpha^I(t) + R_\alpha^I(t)^\dagger a_\alpha^I(t)^\dagger, \rho_R \rho(0)] &= [R_\alpha^I(t), \rho_R]\rho(0)a_\alpha^I(t) + R_\alpha^I(t)\rho_R[a_\alpha^I(t), \rho(0)] \\ &\quad + [R_\alpha^I(t)^\dagger, \rho_R]\rho(0)a_\alpha^I(t)^\dagger + R_\alpha^I(t)^\dagger \rho_R[a_\alpha^I(t)^\dagger, \rho(0)] \end{aligned}$$

なので、

$$\begin{aligned} (7.108) &= \rho_R \left(\text{Tr}_R([R_\alpha^I(t), \rho_R])\rho(0)a_\alpha^I(t) + \langle R_\alpha^I(t) \rangle_R [a_\alpha^I(t), \rho(0)] \right. \\ &\quad \left. + \text{Tr}_R([R_\alpha^I(t)^\dagger, \rho_R])\rho(0)a_\alpha^I(t)^\dagger + \langle R_\alpha^I(t)^\dagger \rangle_R [a_\alpha^I(t)^\dagger, \rho(0)] \right) \\ &= 0 \end{aligned} \quad (7.109)$$

となる。また、

$$\begin{aligned} \mathcal{Q}\rho_{tot}(0) &= \rho_R \rho(0) - \rho_R \text{Tr}_R(\rho_R)\rho(0) \\ &= 0, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \mathcal{P}\rho_{tot}^I(s) &= \rho_R \text{Tr}_R(\rho_{tot}^I(s)) \\ &= \rho_R \rho^I(s), \end{aligned} \quad (7.110)$$

$$\rho^I(t) \stackrel{\text{def}}{=} \text{Tr}_R(\rho_{tot}^I(t)) \quad (7.111)$$

であり、

$$\begin{aligned} \mathcal{P}\hat{H}_1^I(s)\mathcal{P}\rho_{tot}^I(s) &= \mathcal{P}[H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)] \\ &= \rho_R \text{Tr}_R[H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)] \\ &= \rho_R \left(\text{Tr}_R([R_\alpha^I(s), \rho_R])\rho^I(s)a_\alpha^I(s) + \langle R_\alpha^I(s) \rangle_R [a_\alpha^I(s), \rho^I(s)] \right. \\ &\quad \left. + \text{Tr}_R([R_\alpha^I(s)^\dagger, \rho_R])\rho^I(s)a_\alpha^I(s)^\dagger + \langle R_\alpha^I(s)^\dagger \rangle_R [a_\alpha^I(s)^\dagger, \rho^I(s)] \right) \\ &= 0, \end{aligned} \quad (7.112)$$

$$\begin{aligned} \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)\hat{H}_1^I(s)\mathcal{P}\rho_{tot}^I(s) &= \mathcal{P}\hat{H}_1^I(t)[H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)] \\ &= \mathcal{P}[H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] \\ &= \rho_R \text{Tr}_R[H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] \end{aligned} \quad (7.113)$$

となる。以上より、(7.103) は、

$$\begin{aligned}\rho_R \frac{d}{dt} \rho^I(s) &= -\rho_R \int_0^t ds \operatorname{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]], \\ \frac{d}{dt} \rho^I(s) &= -\int_0^t ds \operatorname{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]]\end{aligned}\quad (7.114)$$

となる。

今、

$$\rho(t) \stackrel{\text{def}}{=} \operatorname{Tr}_R [\rho_{\text{tot}}(t)] \quad (7.115)$$

とする。(7.95) より、

$$\begin{aligned}\rho(t) &= \operatorname{Tr}_R [e^{-i\hat{H}_0 t} \rho_{\text{tot}}^I(t)] \\ &= \operatorname{Tr}_R [e^{-iH_0 t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_0 t}] \\ &= \operatorname{Tr}_R [e^{-iH_R t} e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t} e^{iH_R t}]\end{aligned}\quad (7.116)$$

である。 $|n\rangle$ を熱浴系の完全系とすると、

$$\begin{aligned}\operatorname{Tr}_R [e^{-iH_R t} e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t} e^{iH_R t}] &= \sum_n \langle n | e^{-iH_R t} e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t} e^{iH_R t} | n \rangle \\ &= \sum_{n,m} \langle n | e^{-iH_R t} e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t} | m \rangle \langle m | e^{iH_R t} | n \rangle \\ &= \sum_{n,m} \langle m | e^{iH_R t} | n \rangle \langle n | e^{-iH_R t} e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t} | m \rangle \\ &= \sum_m \langle m | e^{iH_R t} e^{-iH_R t} e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t} | m \rangle \\ &= \operatorname{Tr}_R [e^{-iH_S t} \rho_{\text{tot}}^I(t) e^{iH_S t}] \\ &= e^{-iH_S t} \operatorname{Tr}_R [\rho_{\text{tot}}^I(t)] e^{iH_S t} \\ &= e^{-iH_S t} \rho^I(t) e^{iH_S t}\end{aligned}\quad (7.117)$$

となるから、

$$\rho(t) = e^{-iH_S t} \rho^I(t) e^{iH_S t} \quad (7.118)$$

を得る。これと(7.114) から、

$$\begin{aligned}i \frac{d}{dt} \rho(t) &= [H_S, \rho(t)] + i e^{-iH_S t} \frac{d\rho^I(t)}{dt} e^{iH_S t} \\ &= [H_S, \rho(t)] - i \int_0^t ds e^{-iH_S t} \operatorname{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] e^{iH_S t}\end{aligned}\quad (7.119)$$

となる。

(7.107) を

$$H_1 = R_\mu a_\mu, \quad \langle R_\mu^I(t) \rangle_R = 0 \quad (7.120)$$

とかくと、

$$[H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)] = [R_\mu^I(s), \rho_R] \rho^I(s) a_\mu^I(s) + R_\mu^I(s) \rho_R [a_\mu^I(s), \rho^I(s)] \quad (7.121)$$

であり、

$$\begin{aligned}
& [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] \\
&= [R_\nu^I(t) a_\nu^I(t), [R_\mu^I(s), \rho_R] \rho^I(s) a_\mu^I(s)] + [R_\nu^I(t) a_\nu^I(t), R_\mu^I(s) \rho_R [a_\mu^I(s), \rho^I(s)]] \\
&= R_\nu^I(t) [R_\mu^I(t), \rho_R] [a_\nu^I(t), \rho^I(s) a_\mu^I(s)] + [R_\nu^I(t), [R_\mu^I(s), \rho_R]] \rho^I(s) a_\mu^I(s) a_\nu^I(t) \\
&\quad + R_\nu^I(t) R_\mu^I(t) \rho_R [a_\nu^I(t), [a_\mu^I(s), \rho^I(s)]] + [R_\nu^I(t), R_\mu^I(s) \rho_R] [a_\mu^I(s), \rho^I(s)] a_\nu^I(t) \quad (7.122)
\end{aligned}$$

なので³⁰⁾、(7.119)の第2項の $\text{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]]$ は、

$$\begin{aligned}
& \text{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] \\
&= \text{Tr}_R (R_\nu^I(t) [R_\mu^I(s), \rho_R]) [a_\nu^I(t), \rho^I(s) a_\mu^I(s)] + \langle R_\nu^I(t) R_\mu^I(s) \rangle_R [a_\nu^I(t), [a_\mu^I(s), \rho^I(s)]] \\
&= \langle [R_\nu^I(t), R_\mu^I(s)] \rangle_R [a_\nu^I(t), \rho^I(s) a_\mu^I(s)] + \langle R_\nu^I(t) R_\mu^I(s) \rangle_R [a_\nu^I(t), [a_\mu^I(s), \rho^I(s)]] \quad (7.123)
\end{aligned}$$

である。

特に、ボソン系の場合は、(7.86)より、

$$(R_{\mu=1}, a_{\mu=1}) = (R, a^\dagger), \quad (R_{\mu=2}, a_{\mu=2}) = (R^\dagger, a) \quad (7.124)$$

であり、(4.43),(4.44),(4.45)より、

$$\langle [R_\nu^I(t), R_\mu^I(s)] \rangle_R = \begin{pmatrix} 0 & 2\kappa \\ -2\kappa & 0 \end{pmatrix}_{\nu\mu} \delta(t-s), \quad (7.125)$$

$$\langle R_\nu^I(t) R_\mu^I(s) \rangle_R = \begin{pmatrix} 0 & 2\kappa(\bar{n}+1) \\ 2\kappa\bar{n} & 0 \end{pmatrix}_{\nu\mu} \delta(t-s) \quad (7.126)$$

となる。よって、

$$\begin{aligned}
& \text{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] \\
&= 2\kappa \delta(t-s) \left([a^I(t)^\dagger, \rho^I(t) a^I(t)] - [a^I(t), \rho^I(t) a^I(t)^\dagger] \right. \\
&\quad \left. + (\bar{n}+1) [a^I(t)^\dagger, [a^I(t), \rho^I(t)]] + \bar{n} [a^I(t), [a^I(t)^\dagger, \rho^I(t)]] \right) \quad (7.127)
\end{aligned}$$

となり、

$$\begin{aligned}
& - \int_0^t ds e^{-iHs t} \text{Tr}_R [H_1^I(t), [H_1^I(s), \rho_R \rho^I(s)]] \\
&= -\kappa \left([a^I(t)^\dagger, \rho^I(t) a^I(t)] - [a^I(t), \rho^I(t) a^I(t)^\dagger] \right. \\
&\quad \left. + (\bar{n}+1) [a^I(t)^\dagger, [a^I(t), \rho^I(t)]] + \bar{n} [a^I(t), [a^I(t)^\dagger, \rho^I(t)]] \right) \\
&= \Pi^I(t) \rho^I(t) \quad (7.128)
\end{aligned}$$

³⁰⁾

$$\rho_R \rightarrow 1, \quad \rho^I(s) \rightarrow A^I(s), \quad s \leftrightarrow t$$

の置き換えで、

$$[H_1^I(s), [H_1^I(t), A^I(t)]] = R_\nu^I(s) R_\mu^I(t) [a_\nu^I(s), [a_\mu^I(t), A^I(t)]] + [R_\nu^I(s), R_\mu^I(t)] [a_\mu^I(t), A^I(t)] a_\nu^I(s)$$

を得る。

を得る。ただし、

$$\Pi^I(t)\bullet = \kappa([a^I(t)\bullet, a^I(t)^\dagger] + [a^I(t), \bullet a^I(t)^\dagger]) + 2\kappa\bar{n}[a^I(t), [\bullet, a^I(t)^\dagger]] \quad (7.129)$$

である。(7.128)を(7.119)に代入して、

$$\begin{aligned} i\frac{d}{dt}\rho(t) &= [H_S, \rho(t)] + ie^{-iH_S t}[\Pi^I(t)\rho^I(t)]e^{iH_S t} \\ &= [H_S, \rho(t)] + i[\Pi\rho(t)], \end{aligned} \quad (7.130)$$

$$\Pi\bullet = \kappa([a(t)\bullet, a(t)^\dagger] + [a(t), \bullet a(t)^\dagger]) + 2\kappa\bar{n}[a(t), [\bullet, a(t)^\dagger]] \quad (7.131)$$

を得る。ただし、(7.118)を用いた。

7.3 NETFD との対応

今、 A を任意の演算子とし、超演算子 $\hat{A}(t, s)$ を、

$$\hat{A}(t, s) \stackrel{\text{def}}{=} e^{i\hat{H}_a t} A e^{-i\hat{H}_a s} \quad (a = S, R, 0, 1, \text{無印}) \quad (7.132)$$

で定義する。演算子 $\hat{A}(t, s)X$ について考える(X は任意の演算子)。(7.6)より、

$$e^{i\hat{H}_a s} X = e^{iH_a s} X^{-iH_a s} \equiv X^{(a)}(-s) \quad (7.133)$$

である。 $\hat{A}(t, s)X = e^{i\hat{H}_a t} A X(-s)$ を t で微分すると、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial t} e^{i\hat{H}_a t} A X^{(a)}(-s) &= i\hat{H}_a e^{i\hat{H}_a t} A X^{(a)}(-s) \\ &= i[H_a, e^{i\hat{H}_a t} A X^{(a)}(-s)] \end{aligned} \quad (7.134)$$

となる。これより、

$$\begin{aligned} \hat{A}(t, s)X &= e^{iH_a t} A X^{(a)}(-s) e^{-iH_a t} \\ &= e^{iH_a t} A e^{-iH_a s} X^{iH_a s} e^{-iH_a t} \\ &= e^{iH_a t} A e^{-iH_a t} e^{iH_a(t-s)} X e^{-iH_a(t-s)} \\ &= A^{(a)}(t) X^{(a)}(t-s) \end{aligned} \quad (7.135)$$

を得る。特に、 $t = s$ とすると、

$$\hat{A}(t, t)X = A^{(a)}(t)X \quad (7.136)$$

であるから、超演算子として、

$$e^{i\hat{H}_a t} A e^{-i\hat{H}_a t}(\bullet) = e^{iH_a t} A e^{-iH_a t} \cdot \bullet \quad (7.137)$$

となる。 $e^{i\hat{H}_a t} A e^{-i\hat{H}_a t}$ は、NETFDでの A の a -描像($a = 0$ なら相互作用, $a = \text{無印}$ ならハイゼンベルグ)である。(7.132)のタイプの超演算子は、上式の意味で、通常の a -描像の演算子と一致する。

NETFDでは、チルダ演算子や射影子 \mathcal{P} は、ブラ真空またはケット真空に作用する演算子と思える。しかし、超演算子法では、これらはその右にあるすべての演算子に作用する超演算子である。このため、NETFDの方が扱いが楽である。また、§ 4.2と§ 4.3で \mathcal{P} は $|1\rangle_{RR}\langle 1|$ で共通であったが、超演算子法ではそれぞれの場合で \mathcal{P} が異なる。

(7.130)の形式解は

$$\rho(t) = e^{-\hat{H}t} \rho(0), \quad \hat{H} = H_S - \tilde{H}_S + i\hat{\Pi} \quad (7.138)$$

である。しかし、この表式からはほとんど情報を引き出せない。NETFDではハイゼンベルグ方程式を解くことで情報を引き出せるが、超演算子法ではこれは可能だろうか? 上式の \hat{H} に対しては、(7.137)は成り立たない。

7.4 § 5.3 の再考

半自由粒子の場合は、(6.89) より、

$$\frac{d}{dt}\hat{T}(t)A = i\hat{T}(t)\hat{H}^\dagger A \quad (7.139)$$

となる。ここで、 $\hat{T}(t)A$ は、

$$\text{Tr}[\rho(t)A] = \text{Tr}[\rho(0)\hat{T}(t)A] \quad (7.140)$$

で定義される、超演算子形式での A のハイゼンベルグ描像である。

(7.139) を受けて、(5.75) すなわち、

$$d\rho_f(t) = -id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}\rho_f(t) \quad (7.141)$$

に対して、 A のハイゼンベルグ方程式は、

$$d\hat{T}_f(t)A = i\hat{T}_f(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^\dagger A \quad (7.142)$$

であると仮定する。この式の右辺で、

$$id\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^\dagger A = i\hat{H}_S A dt + \hat{\Pi}^\dagger A dt + id\hat{M}_t^\dagger A \quad (7.143)$$

である。ボソン系では、

$$\hat{\Pi} = \kappa(a\tilde{a} - a^\dagger a) + \kappa(a\tilde{a} - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + 2\kappa\bar{n}(a\tilde{a} - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a^\dagger \tilde{a}^\dagger), \quad (7.144)$$

$$\hat{\Pi}^\dagger = \kappa(a^\dagger \tilde{a}^\dagger - a^\dagger a) + \kappa(a^\dagger \tilde{a}^\dagger - \tilde{a}^\dagger \tilde{a}) + 2\kappa\bar{n}(a^\dagger \tilde{a}^\dagger - aa^\dagger - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} + a\tilde{a}), \quad (7.145)$$

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(\lambda)} &= i\sqrt{2\kappa}[a^\dagger - \tilde{a}](\mu dB_t + \nu d\tilde{B}_t^\dagger) + i\sqrt{2\kappa}[\tilde{a}^\dagger - a](\mu d\tilde{B}_t + \nu dB_t^\dagger) \\ &\quad - i\lambda\sqrt{2\kappa}(\mu a + \nu \tilde{a}^\dagger)(dB_t^\dagger - d\tilde{B}_t) - i\sqrt{2\kappa}(\mu \tilde{a} + \nu a^\dagger)(d\tilde{B}_t^\dagger - dB_t), \end{aligned} \quad (7.146)$$

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(\lambda)\dagger} &= -i\sqrt{2\kappa}[a - \tilde{a}^\dagger](\mu dB_t^\dagger + \nu d\tilde{B}_t) - i\sqrt{2\kappa}[\tilde{a} - a^\dagger](\mu d\tilde{B}_t^\dagger + \nu dB_t) \\ &\quad + i\lambda\sqrt{2\kappa}(\mu a^\dagger + \nu \tilde{a})(dB_t - d\tilde{B}_t^\dagger) + i\sqrt{2\kappa}(\mu \tilde{a}^\dagger + \nu a)(d\tilde{B}_t - dB_t^\dagger) \end{aligned} \quad (7.147)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} \hat{\Pi}^\dagger A &= \kappa(a^\dagger \tilde{a}^\dagger A - a^\dagger a A + a^\dagger \tilde{a}^\dagger A - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} A) \\ &\quad + 2\kappa\bar{n}(a^\dagger \tilde{a}^\dagger A - aa^\dagger A - \tilde{a}^\dagger \tilde{a} A + a\tilde{a} A) \\ &= \kappa(a^\dagger A a - a^\dagger a A + a^\dagger A a - A a^\dagger a) \\ &\quad + 2\kappa\bar{n}(a^\dagger A a - aa^\dagger A - A a^\dagger a + a A a^\dagger) \\ &= \kappa\{a^\dagger[A, a] + [a^\dagger, A]a\} + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger, [A, a]], \end{aligned} \quad (7.148)$$

$$\hat{T}_f(t)\hat{\Pi}^\dagger A dt = \hat{T}_f(t)\left(\{a^\dagger[A, a] + [a^\dagger, A]a\} + 2\kappa\bar{n}[a^\dagger, [A, a]]\right) dt \quad (7.149)$$

となる³¹⁾。これは、(5.194) の右辺第 2 項に対応する。

³¹⁾ $\hat{T}_f(t)A = \hat{A}(t)$ とかく。一般には、

$$\hat{T}_f(t)AB \neq \hat{A}(t)\hat{B}(t) \quad (7.150)$$

である。ただし、 $A = a, a^\dagger$ の場合、 $\hat{T}_f(t)\hat{\Pi}^\dagger A$ が a, a^\dagger の 1 次なので、 $\hat{T}_f(t)AB = \hat{A}(t)\hat{B}(t)$ を仮定して計算しても問題ない。

A を $A \otimes 1$ と思うと、例えば

$$\begin{aligned} [a - \tilde{a}^\dagger](\mu dB_t^\dagger + \nu d\tilde{B}_t)A &= [a - \tilde{a}^\dagger]A \otimes (\mu dB_t^\dagger + \nu d\tilde{B}_t)1 \\ &= (aA - Aa) \otimes (\mu dB_t^\dagger 1 + \nu 1 dB_t^\dagger) \\ &= [a, A]dB_t \end{aligned} \quad (7.151)$$

となる。また、

$$d\hat{M}_t^\dagger A = 0 \quad (7.152)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} d\hat{M}_t^{(\lambda)\dagger} A &= -i\sqrt{2\kappa}[a - \tilde{a}^\dagger]AdB_t - i\sqrt{2\kappa}[\tilde{a} - a^\dagger]AdB_t^\dagger \\ &= -i\sqrt{2\kappa}[a, A]dB_t - i\sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger[A, a^\dagger], \end{aligned} \quad (7.153)$$

$$\hat{T}_f(t)id\hat{M}_t^\dagger A = \hat{T}_f(t)\left(\sqrt{2\kappa}[a, A]dB_t + \sqrt{2\kappa}dB_t^\dagger[A, a^\dagger]\right) \quad (7.154)$$

となる。これは、(5.194) の第 2 行で dB_t, dB_t^\dagger を入れ換えたものに対応する。

$\sum_\alpha c_\alpha a_\alpha R_\alpha$ のタイプの演算子 (a_α は注目系, R_α は熱浴系の演算子で、 c_α は c 数) に対して、

$$\left(\sum_\alpha c_\alpha a_\alpha R_\alpha\right)^\dagger = \sum_\alpha c_\alpha^* a_\alpha^\dagger R_\alpha \quad (7.155)$$

という演算を導入する。また、 $a_\alpha^\dagger = a_\alpha^\dagger$ とする。このとき、

$$d\hat{T}_f(t)A = i\hat{T}_f(t)d\hat{\mathcal{H}}_{f,t}^\dagger A \quad (7.156)$$

は、(5.194),(5.32) を再現する。また、

$$d\hat{T}_f(t)A = i\hat{T}_f(t)[i\hat{H}_S dt + \hat{\Pi}^\dagger dt + id\hat{M}_t]A \quad (7.157)$$

も同じ方程式を再現する。

7.5 Adjoint Equation

Liouville 空間 \mathcal{L} を考える。(3.2) と違い、ここでは、 $\langle\langle \bullet |$ を、

$$\begin{aligned} \langle\langle \bullet | &= \sum_{n,m} \langle n | \bullet | m \rangle^* \langle\langle nm | \\ &= \sum_{n,m} \langle m | \bullet^\dagger | n \rangle \langle\langle nm | \end{aligned} \quad (7.158)$$

とする。このとき、

$$\begin{aligned} \langle\langle A | B \rangle\rangle &= \sum_{n,m} \sum_{n',m'} \langle m | A^\dagger | n \rangle \langle n' | B | m' \rangle \langle\langle nm | n' m' \rangle\rangle \\ &= \sum_{n,m} \langle m | A^\dagger | n \rangle \langle n | B | m \rangle \\ &= \sum_m \langle m | A^\dagger B | m \rangle \\ &= \text{Tr}(A^\dagger B) \end{aligned} \quad (7.159)$$

である。今、

$$\langle\langle i|j\rangle\rangle = \delta_{ij}, \quad (7.160)$$

$$\sum_i |i\rangle\rangle\langle\langle i| = 1 \quad (7.161)$$

を満たす \mathcal{L} の基底 $\{|i\rangle\rangle\}_{i=1}^{\infty}$ を考える。ここで、1 は \mathcal{L} の元に作用する超演算子としての 1 である。第 2 式は、任意の演算子 A に対して、

$$|A\rangle\rangle = \sum_i \langle\langle i|A\rangle\rangle \cdot |i\rangle\rangle \quad (7.162)$$

を意味する。(3.37) の意味で、

$$|i\rangle\rangle \longleftrightarrow \check{e}_i \quad (7.163)$$

とすると、

$$\text{Tr}[\check{e}_i^\dagger \check{e}_j] = \delta_{ij}, \quad (7.164)$$

$$A = \sum_i A_i \check{e}_i, \quad A_i = \text{Tr}[\check{e}_i^\dagger A] \quad (7.165)$$

である。今、

$$A\check{e}_i = \sum_j A_{ij} \check{e}_j \quad (7.166)$$

とかくと、(7.165) より、

$$A_{ij} = \text{Tr}[\check{e}_j A \check{e}_i] \quad (7.167)$$

である。

(7.165) より、

$$\check{e}_i^\dagger = d_{ij} \check{e}_j, \quad d_{ij} = \text{Tr}[\check{e}_j^\dagger \check{e}_i^\dagger] \quad (7.168)$$

とかける (アインシュタインの記法を使う。)。 $[\check{e}_i^\dagger]^\dagger = \check{e}_i$ より、 d_{ij} はユニタリ行列である。また、

$$\check{e}_i \check{e}_j = \eta_{ij}^k \check{e}_k \quad (7.169)$$

とかける。(7.165) の † より、

$$A = (A^\dagger)^\dagger = A_i^* \check{e}_i^\dagger$$

なので、任意の演算子は

$$A = A_i^* \check{e}_i^\dagger, \quad A_i^* = \text{Tr}[A \check{e}_i] \quad (7.170)$$

の形でかける。これは、

$$\langle\langle \check{e}_i^\dagger | \check{e}_j^\dagger \rangle\rangle = \delta_{ij}, \quad \sum_i |\check{e}_i^\dagger\rangle\rangle\langle\langle \check{e}_i^\dagger| = 1 \quad (7.171)$$

を意味する。

今、

$$\rho(t) = \hat{V}(t)\rho(0) \quad (7.172)$$

で $\hat{V}(t)$ を定義し、

$$\check{e}_i(t) \stackrel{\text{def}}{=} \hat{V}(t)\check{e}_i \quad (7.173)$$

とする。このとき、

$$\rho(0) = \rho_i\check{e}_i \quad (7.174)$$

なら、

$$\rho(t) = \rho_i\check{e}_i(t) \quad (7.175)$$

である。今、

$$\text{Tr}[\check{e}_i(t)A] = \text{Tr}[\check{e}_i\hat{A}(t)] \quad (7.176)$$

で $\hat{A}(t)$ を定義し、 $A_i(t)$ を

$$\hat{A}(t) = A_i(t)\check{e}_i^\dagger \quad (7.177)$$

で定義する。(7.164),(7.177) より、

$$A_i(t) = \text{Tr}[\hat{A}(t)\check{e}_i] = \text{Tr}[\check{e}_i(t)A] \quad (7.178)$$

である。よって、

$$\hat{A}(t) = \text{Tr}[\check{e}_i(t)A]\check{e}_i^\dagger \quad (7.179)$$

となる。明らかに、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\check{e}_i(t) &= -i\hat{H}\check{e}_i(t) \\ &= -i[H_S, \check{e}_i(t)] + \hat{\Pi}\check{e}_i(t) \end{aligned} \quad (7.180)$$

である。今、

$$\hat{\Pi}\bullet = \sum_{\alpha} \mathcal{A}_{\alpha}\bullet\mathcal{B}_{\alpha} \quad (7.181)$$

とかく。ただし、 $\rho(t)$ のエルミート性から、

$$[\hat{\Pi}\bullet]^\dagger = \sum_{\alpha} \mathcal{B}_{\alpha}^\dagger\bullet^\dagger\mathcal{A}_{\alpha}^\dagger = \sum_{\alpha} \mathcal{A}_{\alpha}\bullet^\dagger\mathcal{B}_{\alpha} \quad (7.182)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\hat{A}(t) &= \text{Tr}\left[\left\{-i[H_S, \check{e}_i(t)] + \sum_{\alpha} \mathcal{A}_{\alpha}\check{e}_i(t)\mathcal{B}_{\alpha}\right\}A\right]\check{e}_i^\dagger \\ &= \text{Tr}\left[-iH_S\check{e}_i(t)A + \check{e}_i(t)H_SA + i\sum_{\alpha} \mathcal{A}_{\alpha}\check{e}_i(t)\mathcal{B}_{\alpha}A\right]\check{e}_i^\dagger \\ &= \text{Tr}\left[\check{e}_i(t)\left\{-iAH_S + iH_SA + \sum_{\alpha} \mathcal{B}_{\alpha}A\mathcal{A}_{\alpha}\right\}\right]\check{e}_i^\dagger \\ &= \left[i[H_S, A] + \sum_{\alpha} \mathcal{B}_{\alpha}A\mathcal{A}_{\alpha}\right]'(t) \end{aligned} \quad (7.183)$$

を得る。ところで、(7.182) より、

$$\sum_{\alpha} \mathcal{B}_{\alpha} A A_{\alpha} = \sum_{\alpha} \mathcal{A}_{\alpha}^{\dagger} A \mathcal{B}_{\alpha}^{\dagger} \quad (7.184)$$

である。よって、

$$\hat{\Pi}^{\dagger} \bullet \stackrel{\text{def}}{=} \sum_{\alpha} \mathcal{A}_{\alpha}^{\dagger} \bullet \mathcal{B}_{\alpha}^{\dagger} \quad (7.185)$$

とすると、

$$\frac{d}{dt} \dot{A}(t) = [i \hat{H}_S A + \hat{\Pi}^{\dagger} A]'(t) \quad (7.186)$$

となる。これは、散逸がある Liouville-von Neumann 方程式の Adjoint Equation ³²⁾ である。任意の演算子 A, B を

$$A = A_i \check{e}_i, \quad B = B_i \check{e}_i \quad (7.187)$$

とかくと、

$$\begin{aligned} AB &= A_i B_j \check{e}_i \check{e}_j \\ &= A_i B_j \eta_{ij}^k \check{e}_k, \end{aligned} \quad (7.188)$$

$$\begin{aligned} (AB)'(t) &= A_i B_j \eta_{ij}^k \dot{\check{e}}_k(t) \\ &= A_i B_j \eta_{ij}^k \varepsilon_{km}(t) \dot{\check{e}}_m \end{aligned} \quad (7.189)$$

である。 $\dot{\check{e}}_i(t)$ を、

$$\dot{\check{e}}_i(t) = \varepsilon_{ij}(t) \dot{\check{e}}_j \quad (7.190)$$

とかくと、

$$\begin{aligned} \dot{A}(t) \dot{B}(t) &= A_i B_j \dot{\check{e}}_i(t) \dot{\check{e}}_j(t) \\ &= A_i B_j \varepsilon_{ik}(t) \varepsilon_{jl}(t) \dot{\check{e}}_k \dot{\check{e}}_l \\ &= A_i B_j \varepsilon_{ik}(t) \varepsilon_{jl}(t) \eta_{kl}^m \dot{\check{e}}_m \end{aligned} \quad (7.191)$$

である。よって、

$$\begin{aligned} \dot{A}(t) \dot{B}(t) - (AB)'(t) &= A_i B_j [\varepsilon_{ik}(t) \eta_{kl}^m \varepsilon_{jl}(t) - \eta_{ij}^k \varepsilon_{km}(t)] \dot{\check{e}}_m \\ &\equiv A_i B_j \Delta_{ij}^m(t) \dot{\check{e}}_m \end{aligned} \quad (7.192)$$

である。

今、 $\dot{\check{e}}_i$ として、

$$\dot{\check{e}}_{nm} = |n\rangle \langle m| \quad (7.193)$$

をとる。 $\{|n\rangle\}$ は規格直交完全系である。このとき、

$$\begin{aligned} \dot{\check{e}}_{nm} \dot{\check{e}}_{kl} &= |n\rangle \langle m| k\rangle \langle l| \\ &= \delta_{mk} |n\rangle \langle l| \\ &= \delta_n^a \delta_l^b \delta_{mk} |a\rangle \langle b| \end{aligned} \quad (7.194)$$

³²⁾ C.W.Gardiner, "Quantum Noise" (Springer-Verlag, 1991)

であるから、

$$\eta_{nm,kl}^{ab} = \delta_n^a \delta_l^b \delta_{mk} \quad (7.195)$$

となる。よって、 $\Delta_{ij}^m(t)$ に対応するのは、

$$\begin{aligned} \Delta_{nm,kl}^{ab}(t) &= \varepsilon_{nm,vu}(t) \eta_{vu,cd}^{ab} \varepsilon_{kl,cd}(t) - \eta_{nm,kl}^{cd} \varepsilon_{cd,ab}(t) \\ &= \varepsilon_{nm,vu}(t) \delta_v^a \delta_d^b \delta_{uc} \varepsilon_{kl,cd}(t) - \delta_n^c \delta_l^b \delta_{mk} \varepsilon_{cd,ab}(t) \\ &= \varepsilon_{nm,ac}(t) \varepsilon_{kl,cb}(t) - \delta_{mk} \varepsilon_{nl,ab}(t) \end{aligned} \quad (7.196)$$

である。

ボソン系について考える。 $\{|n\rangle\}$ を個数状態とする。(7.180) より、

$$\frac{d}{dt} \check{e}_{nm}(t) = -i[H_S, \check{e}_{nm}(t)] + \hat{\Pi} \check{e}_{nm}(t) \quad (7.197)$$

である。この解は、(6.163) で $p_{su} = \delta_{sn} \delta_{um}$ としたもの

$$\begin{aligned} p_{ab}^{(nm)}(t) &= e^{i\omega(b-a)t} e^{\kappa t} e^{\frac{1}{2}f_z(t)} \sum_{u=\max(0,b-a)}^{\infty} \delta_{u+b-a,n} \delta_{u,m} \sum_{l=0}^{\min(u+b-a,u)} \frac{f_-^l(t) f_+^{l+b-u}(t)}{l!(l+b-u)!} \chi[l+b-u \geq 0] \\ &\quad \times \frac{\sqrt{(u+b-a)!u!a!b!}}{(u+b-a-l)!(u-l)!} e^{f_z(t)[\frac{b-a}{2}+u-l]} \end{aligned} \quad (7.198)$$

を用いて、

$$\check{e}_{nm}(t) = \sum_{a,b=0}^{\infty} p_{ab}^{(nm)}(t) \check{e}_{ab} \quad (7.199)$$

とかける。(7.179) は、

$$\begin{aligned} \dot{A}(t) &= \text{Tr}[\check{e}_i(t) A] \check{e}_i^\dagger \\ &= A_j \text{Tr}[\check{e}_i(t) \check{e}_j] \check{e}_i^\dagger \end{aligned} \quad (7.200)$$

であった。よって、

$$\begin{aligned} \dot{A}(t) &= A_{nm} \text{Tr}[\check{e}_{cd}(t) \check{e}_{nm}] \check{e}_{cd}^\dagger \\ &= p_{vu}^{(cd)}(t) A_{nm} \text{Tr}[\check{e}_{vu} \check{e}_{nm}] \check{e}_{cd}^\dagger \\ &= p_{vu}^{(cd)}(t) A_{nm} \text{Tr}[\check{e}_{uv}^\dagger \check{e}_{nm}] \check{e}_{dc} \\ &= p_{mn}^{(cd)}(t) A_{nm} \check{e}_{dc} \\ &= \dot{A}_{dc}(t) \check{e}_{dc}, \end{aligned} \quad (7.201)$$

$$\dot{A}_{dc}(t) = \sum_{n,m=0}^{\infty} p_{mn}^{(cd)}(t) A_{nm} \quad (7.202)$$

となる。特に、

$$p_{mn}^{(cd)}(\infty) = \bar{p}_n \delta_{nm}, \quad \bar{p}_n = [1 - e^{-\omega/T}] e^{-n\omega/T} \quad (7.203)$$

より、

$$\dot{A}_{dc}(\infty) = \sum_{n=0}^{\infty} \bar{p}_n A_{nn} \equiv \bar{A} \quad (7.204)$$

である。右辺は成分 (d, c) によらず、 A の熱平均である。

7.6 Gardiner の方法

(7.98),(7.100) より、

$$\frac{d}{dt}\rho_{tot}^I(t) = -i\hat{H}_1^I(t)\rho_{tot}^I(t) \quad (7.205)$$

である。 \hat{H}_1 として、

$$\hat{H}_1^I(t) = R_\mu^I(t)a_\mu^I(t) \quad (7.206)$$

をとり、

$$R_\mu^I(t) = igb_t^\mu(t) \quad (7.207)$$

とすると、 $b_t^\mu(t)$ が量子 Brown 運動である。Gardiner³³⁾ は、

$$d\rho_{tot}^I(t) = g[dB_t^\mu a_\mu^I(t); \rho_{tot}^I(t)] \quad (7.208)$$

を解析している。

³³⁾ *Phys. Rev. A* **46**,4363(1992)

8 非同値真空

8.1 量子力学と場の量子論との相違

8.1.1 量子力学と場の量子論との相違

正準交換関係

$$[a_i, a_j^\dagger] = \delta_{ij}, \quad [b_i, b_j^\dagger] = \delta_{ij} \quad (8.1)$$

を満たす N 組の生成演算子 $\{a_i^\dagger, b_i^\dagger\}_{i=1}^N$ と消滅演算子 $\{a_i, b_i\}_{i=1}^N$ を考える。この他の交換関係は 0 である。Bogoliubov 変換

$$a_i(\theta) = \cosh \theta_i a_i - \sinh \theta_i b_i^\dagger, \quad (8.2)$$

$$a_i^\dagger(\theta) = \cosh \theta_i a_i^\dagger - \sinh \theta_i b_i, \quad (8.3)$$

$$b_i(\theta) = \cosh \theta_i b_i - \sinh \theta_i a_i^\dagger, \quad (8.4)$$

$$b_i^\dagger(\theta) = \cosh \theta_i b_i^\dagger - \sinh \theta_i a_i \quad (8.5)$$

を考える。§ 2.3 で $\tilde{a}_i, \tilde{a}_i^\dagger$ を b_i, b_i^\dagger と読み替えれば、そのまま § 2.3 の公式が使える。上の変換は、ユニタリー変換

$$a_i(\theta) = U(\theta) a_i U^\dagger(\theta), \quad b_i(\theta) = U(\theta) b_i U^\dagger(\theta) \quad (8.6)$$

である。ただし、

$$U(\theta) = \exp\left(\sum_{i=1}^N \theta_i (b_i^\dagger a_i^\dagger - a_i b_i)\right) \quad (8.7)$$

はユニタリー演算子である。

真空 $|0\rangle$ を

$$a_i|0\rangle = b_i|0\rangle = 0 \quad (8.8)$$

で定義する。新しい真空を

$$|0(\theta)\rangle \stackrel{\text{def}}{=} U(\theta)|0\rangle \quad (8.9)$$

で定義すると、

$$a_i(\theta)|0(\theta)\rangle = b_i(\theta)|0(\theta)\rangle = 0 \quad (8.10)$$

となる。(8.9) より、 $|0(\theta)\rangle$ が新しい真空であるように見えるが、以下で示すようにそれは正しくない。(2.130) より、

$$\begin{aligned} |0(\theta)\rangle &= \exp\left(\sum_{i=1}^N a_i^\dagger b_i^\dagger \tanh \theta_i\right) \exp\left(-\sum_{i=1}^N [a_i a_i^\dagger + b_i^\dagger b_i] \ln \cosh \theta_i\right) |0\rangle \\ &= \exp\left(-\sum_{i=1}^N \ln \cosh \theta_i\right) \exp\left(\sum_{i=1}^N \tanh \theta_i a_i^\dagger b_i^\dagger\right) |0\rangle \end{aligned} \quad (8.11)$$

$$\begin{aligned} &= \exp\left(-\sum_{i=1}^N \ln \cosh \theta_i\right) \prod_{i=1}^N \sum_{n_i=0}^{\infty} (\tanh \theta_i)^{n_i} |n_i\rangle_i |n_i\rangle_i \\ &= \exp\left(-\sum_{i=1}^N \ln \cosh \theta_i\right) \left(\prod_{i=1}^N \sum_{n_i=0}^{\infty}\right) \left(\prod_{i=1}^N (\tanh \theta_j)^{n_j}\right) |\{n_i\}, \{n_i\}\rangle \end{aligned} \quad (8.12)$$

である。ただし、

$$|\{n_i\}, \{m_i\}\rangle = \prod_{i=1}^N |n_i\rangle_i |m_i\rangle_i, \quad (8.13)$$

$$|n_i\rangle_i |m_i\rangle_i = \frac{1}{\sqrt{n_i! m_i!}} (a_i^\dagger)^{n_i} (b_i^\dagger)^{m_i} |0\rangle_i, \quad (8.14)$$

$$a_i |0\rangle_i = b_i |0\rangle_i = 0, \quad |0\rangle = \prod_{i=1}^N |0\rangle_i \quad (8.15)$$

である。この基底によって張られる、規格化可能なベクトルの全体を $|0\rangle$ 上の Fock 空間と言い、 $\mathcal{H}(a, b)$ と書く。(8.12) の最後の式より、 $|0(\theta)\rangle$ が $\mathcal{H}(a, b)$ の基底で展開されることが分かる。従って、 $|0(\theta)\rangle$ は真空ではなく、真空 $|0\rangle$ 上の Fock 空間 $\mathcal{H}(a, b)$ に属する 1 つの状態ベクトルである。

今、ベクトル空間 $\mathcal{H}(a, b)$ を別の基底

$$|\{n_i\}, \{m_i\} : \theta\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \left[\prod_{i=1}^N \frac{1}{\sqrt{n_i! m_i!}} (a_i^\dagger(\theta))^{n_i} (b_i^\dagger(\theta))^{m_i} \right] |0(\theta)\rangle \quad n_i, m_i = 0, 1, 2, \dots \quad (8.16)$$

で表示することを考える。よって、(8.16) で張られる、規格化可能な任意のベクトルは $\mathcal{H}(a, b)$ に属する。逆に、 $\mathcal{H}(a, b)$ の任意の元は基底 (8.16) で展開できることが分かる³⁴⁾。量子力学には、真空（および Fock 空間）は 1 種類しかないのである（同値定理）。

しかし、 $N \rightarrow \infty$ の時は、この限りではない。(8.12) で

$$-\sum_{i=1}^{\infty} \ln \cosh \theta_i = -\infty \quad (8.17)$$

のときは、 $|0(\theta)\rangle$ は $\mathcal{H}(a, b)$ に属さない。

上では、 a_i, b_i という 2 種類の粒子を考えたが、 $a_i^{(old)}$ だけが合った時に、

$$a_i = a_{2i}^{(old)}, \quad b_i = a_{2i+1}^{(old)} \quad (8.18)$$

によって a_i, b_i を導入することができる。 $a_i^{(old)}$ の張る Fock 空間 $\mathcal{H}(a^{(old)}) = \mathcal{H}(a, b)$ と

$$a_{2i}^{(old)}(\theta) = a_i(\theta), \quad a_{2i+1}^{(old)}(\theta) = b_i(\theta) \quad (8.19)$$

の張る Fock 空間 $\mathcal{H}(a^{(old)}(\theta))$ は非同値である。つまり、無限次元では、(2.10) を $\mathcal{H}(a^{(old)})$ の基底で展開するか、 $\mathcal{H}(a^{(old)}(\theta))$ の基底で展開するかが問題となる。(2.12) が成立しないからである。しかし、自由度が加算無限の場合は、 N を有限にしておき、最後に $N \rightarrow \infty$ とすれば、ほとんど問題ない。自由度が連続無限の時は、次の小節で議論するように、より深刻な問題が起こる。

なお、(2.131) は、

$$|0(\beta)\rangle = \exp\left(-\frac{1}{2} \sum_i \ln[1 + n_i(\beta)]\right) \exp\left(\sum_i \sqrt{\frac{n_i(\beta)}{1 + n_i(\beta)}} a_i^\dagger \tilde{a}_i^\dagger\right) |0\rangle \quad (8.20)$$

であった。ここで、

$$\sum_i \ln[1 + n_i(\beta)] = \sum_i \ln\left(1 + \frac{1}{e^{\omega_i/T} - 1}\right) \quad (8.21)$$

³⁴⁾これは、量子力学では、物理量の期待値は表示（基底）によらないことに対応する。

であり、 ω_Λ を十分大きくとると、

$$\sum_{\omega_i > \omega_\Lambda} \ln \left(1 + \frac{1}{e^{\omega_i/T} - 1} \right) \approx \sum_{\omega_i > \omega_\Lambda} \frac{1}{e^{\omega_i/T} - 1} \quad (8.22)$$

である。今、

$$\sum_i f(\omega_i) = \int d\omega D(\omega) f(\omega) \quad (8.23)$$

と近似すると、

$$\int_{\omega_\Lambda}^{\infty} d\omega D(\omega) \frac{1}{e^{\omega/T} - 1} < \infty \quad (8.24)$$

ならば、 $|0(\beta)\rangle$ は $|0\rangle$ と同値な真空である。この条件は $D(\omega)$ が ω^a のような関数なら満たされる。つまり、一般に $|0(\beta)\rangle$ は $|0\rangle$ と同値な真空である。

8.1.2 場の量子論と非同値真空

連続変数 μ でラベルされた、非可算無限自由度を持つ生成演算子 $a^\dagger(\mu)$, $b^\dagger(\mu)$ と消滅演算子 $a(\mu)$, $b(\mu)$ を考える。これらは正準交換関係

$$[a(\mu), a^\dagger(\mu')] = \delta(\mu - \mu'), \quad [b(\mu), b^\dagger(\mu')] = \delta(\mu - \mu') \quad (8.25)$$

を満たす。この他の交換関係は 0 である。また、真空 $|0\rangle$ を

$$a(\mu)|0\rangle = 0, \quad b(\mu)|0\rangle = 0 \quad (8.26)$$

によって導入する。 $|0\rangle$ の上の Fock 空間を $\mathcal{H}[a, b]$ とする。 $\mathcal{H}[a, b]$ は、 $|0\rangle$ に $a^\dagger(\mu)$, $b^\dagger(\mu)$ をくり返し作用させて得られる基底ベクトルによって張られる、規格化可能なベクトルの集合である。

ここで、新たな演算子

$$a_\theta(\mu) = U[\theta]a(\mu)U^\dagger[\theta], \quad b_\theta(\mu) = U[\theta]b(\mu)U^\dagger[\theta] \quad (8.27)$$

をユニタリー演算子

$$U[\theta] = \exp\left(\int d\mu \theta(\mu) [b^\dagger(\mu)a^\dagger(\mu) - a(\mu)b(\mu)]\right) \quad (8.28)$$

により導入する。ただし、 $\theta(\mu)$ は任意の滑らかな実 c 数関数である。前節と同様の計算により

$$a_\theta(\mu) = a(\mu) \cosh \theta(\mu) - b^\dagger(\mu) \sinh \theta(\mu), \quad (8.29)$$

$$b_\theta(\mu) = b(\mu) \cosh \theta(\mu) - a^\dagger(\mu) \sinh \theta(\mu) \quad (8.30)$$

を得る。この変換は Bogoliubov 変換と呼ばれる。

(8.27) より得られる

$$a(\mu) = U^\dagger[\theta]a_\theta(\mu)U[\theta], \quad b(\mu) = U^\dagger[\theta]b_\theta(\mu)U[\theta] \quad (8.31)$$

を (8.26) に代入すると、

$$U^\dagger[\theta]a_\theta(\mu)U[\theta]|0\rangle = 0, \quad U^\dagger[\theta]b_\theta(\mu)U[\theta]|0\rangle = 0 \quad (8.32)$$

となる。ここで、状態

$$|0[\theta]\rangle \stackrel{\text{def}}{=} U[\theta]|0\rangle \quad (8.33)$$

を定義すると、この式は、

$$a_\theta(\mu)|0[\theta]\rangle = 0, \quad b_\theta(\mu)|0[\theta]\rangle = 0 \quad (8.34)$$

となる。

(8.28) を (8.33) に代入して、

$$\begin{aligned} |0[\theta]\rangle &= \exp\left(\int d\mu \tanh \theta(\mu) a^\dagger(\mu) b^\dagger(\mu)\right) \\ &\quad \times \exp\left(-\int d\mu \ln \cosh \theta(\mu) [a(\mu) a^\dagger(\mu) + b^\dagger(\mu) b(\mu)]\right) |0\rangle \\ &= \exp\left(-\delta(\mu' = 0) \int d\mu \ln \cosh \theta(\mu)\right) \exp\left(\int d\mu \tanh \theta(\mu) a^\dagger(\mu) b^\dagger(\mu)\right) |0\rangle \end{aligned} \quad (8.35)$$

を得る。ただし、第1等号でを用い $U[\theta]$ を $a(\mu)$, $a^\dagger(\mu)$ および $b(\mu)$, $b^\dagger(\mu)$ の正規積に近い形に書き直し、(8.26) を用いた。第2等号では、正準交換関係 (8.25) を用いた。(8.35) の最後の式は、 $|0[\theta]\rangle$ を $\mathcal{H}[a, b]$ の元で展開した表式であるが、

$$-\delta(\mu' = 0) \int d\mu \ln \cosh \theta(\mu) = -\infty \quad (8.36)$$

より、その展開係数は0である。これは $|0[\theta]\rangle$ が $\mathcal{H}[a, b]$ には属していないことを意味する。したがって、 $|0[\theta]\rangle$ は $|0\rangle$ とは異なる新たな真空である ($|0\rangle$ とはユニタリー非同値な真空である)。これは、真空が1個しかない量子力学の場合との本質的な違いである。滑らかな関数 $\theta(\mu)$ は非可算無限個存在するので、非可算無限種類の真空が存在する。

§ 5.1.4 のように連続無限自由度の b_t を扱う時は、このような問題が生じる。つまり、温度の異なる真空³⁵⁾ は非同値である。

(8.35) の表式は係数が0となり、数学的には意味がない。数学的な解析は、数学的に意味のある Bogoliubov 変換 (8.29), (8.30) や (8.34) を基礎に置くべきである。

有限自由度の場合は、Fock 空間は全て同値なので、Tr をどんな基底で計算してもよかった。非同値の真空が存在する場合、Tr をどの基底で計算するかが問題である。カノニカル集団は $e^{-\beta H} / \text{Tr}[e^{-\beta H}]$ で記述されるが、場の量子論ではこれは well-defined でない (H のほとんどの固有値は $\pm\infty$ らしい)。量子系をはじめから自由度無限大にして扱う C^* 代数では、KMS 条件が出发点となる。第2章で、熱平均と TFD の真空期待値の同等性を証明したが、場の理論では証明はできない。むしろ、熱平均を TFD の真空期待値で定義する。なお、TFD を非平衡へ拡張するとき、以下に述べるダイナミカル・マップの扱いに注意しなくてはならない (観測粒子と、Fock 空間を構成する準粒子は同一でない。)

8.2 ダイナミカル・マップ

8.2.1 波束の導入と Fock 空間の連続集合

$a^\dagger(\mu)|0\rangle$ という状態のノルムは発散する：

$$\begin{aligned} \|a^\dagger(\mu)|0\rangle\|^2 &= \langle 0|a(\mu)a^\dagger(\mu)|0\rangle \\ &= \langle 0|[a(\mu), a^\dagger(\mu)]|0\rangle \\ &= \delta(\mu = 0) = \infty. \end{aligned} \quad (8.37)$$

³⁵⁾ユニタリー表現 ($\alpha = 1/2$) のケット真空である。 $\alpha \neq 1/2$ の場合にもこの小節の議論を拡張できる。

これは交換関係が δ 関数を含んでいるために起こる。この交換関係は、2乗可積分関数によってならさないと意味を持たない。つまり、 $a(\mu)$ 上の Fock 空間 $\mathcal{H}[a]$ に作用するのは、 $a(\mu)$ ではなく、

$$a_f = \int d\mu f(\mu)a(\mu) \quad (8.38)$$

である。ただし、 $f(\mu)$ は 2乗可積分な c 数関数

$$\int d\mu |f(\mu)|^2 < \infty \quad (8.39)$$

である。

$\{f_i(\mu)\}_{i=1}^\infty$ を、ある 2乗可積分の規格直交完全系とする：

$$\langle f_i, f_j \rangle = \delta_{ij}, \quad \langle A, B \rangle \stackrel{\text{def}}{=} \int d\mu A^*(\mu)B(\mu). \quad (8.40)$$

このとき、任意の 2乗可積分関数 $f(\mu)$ は $\{f_i(\mu)\}_{i=1}^\infty$ によって

$$f(\mu) = \sum_i c_i f_i(\mu), \quad c_i = \langle f_i, f \rangle \quad (8.41)$$

と展開される。場の量子論で扱う自由度は、可算無限個なのである。(8.38) は、

$$\begin{aligned} a_f &= \int d^3k \sum_i c_i f_i(\mu)a(\mu) \\ &= \sum_i c_i a_i \end{aligned} \quad (8.42)$$

と書ける。ただし、

$$a_i \stackrel{\text{def}}{=} \int d\mu f_i(\mu)a(\mu) \quad (8.43)$$

である。 a_i, a_i^\dagger は、交換関係

$$\begin{aligned} [a_i, a_j^\dagger] &= \int d^3k d^3k' [a(\mu), a^\dagger(\mu')] f_i(\mu) f_j^*(\mu') \\ &= \int d^3k d^3k' \delta(\mu - \mu') f_i(\mu) f_j^*(\mu') \\ &= \int d^3k f_i(\mu) f_j^*(\mu) \\ &= \langle f_j, f_i \rangle \\ &= \delta_{ji} = \delta_{ij} \end{aligned} \quad (8.44)$$

を満たす。

$\{a_i\}_{i=1}^\infty$ の個数状態

$$|n_1, n_2, \dots\rangle \stackrel{\text{def}}{=} \left[\prod_{i=1}^\infty \frac{1}{\sqrt{n_i!}} (a_i^\dagger)^{n_i} \right] |0\rangle \quad (8.45)$$

を考える。ただし、 $|0\rangle$ は

$$a_i |0\rangle = 0 \quad (8.46)$$

を満たす。ここで、個数状態の集合 $\{|n_1, n_2, \dots\rangle\}$ のフェルミオン部分集合

$$\{|n_1, n_2, \dots\rangle \mid n_i = 0, 1\} \quad (8.47)$$

を考える。この元は、

$$|n_1, n_2, \dots\rangle \longleftrightarrow 0.n_1n_2\dots \text{ (2進数)} \quad (8.48)$$

のように2進数 $0.n_1n_2\dots$ と1対1に対応する。よって、フェルミオン部分集合の濃度は、0から1の間の実数全体の濃度に等しい。よって、フェルミオン部分集合は連続集合である（非可算無限個の状態を含む）。個数状態の全体 $\{|n_1, n_2, \dots\rangle\}$ は、その部分集合が連続集合なので、連続集合である。

量子論では基底ベクトル $\{|i\rangle\}$ の重ね合わせの状態

$$| \rangle = \sum_i c_i |i\rangle \quad (8.49)$$

は、状態 $|i\rangle$ が確率 $|c_i|^2$ で観測される状態と解釈される。この確率解釈が可能のためには、あらゆる物理的状態空間は可算個の基底ベクトルで張られなくてはならない（分離可能性）。これは、個数状態の全体が、物理的状態空間の基底としては大きすぎることを意味している。そこで、0集合と呼ばれる

$$\{|n_1, n_2, \dots\rangle \mid \sum_i n_i < \infty\} \quad (8.50)$$

を考える。これは可算集合であり、真空 $|0\rangle$ を含んでいる。現実には有限個の粒子状態に興味があるので、0集合上に構成された状態空間を考えればよい。この状態空間は Fock 空間と呼ばれる。

0集合の選び方の自由度は、非可算無限個存在する。なぜなら、消滅演算子と真空の選び方が無数に存在するからである。真空の選択に非可算無限の自由度があるのは、個数状態の全体は連続集合なのに対して、Fock 空間の基底ベクトルは可算個であることに由来する。連続集合から可算部分集合を抽出する自由度は、非可算無限個ある。

8.2.2 準粒子とダイナミカルマップ

多数の異なる相の出現は、ハイゼンベルグ場の運動を、異なる Fock 空間で記述することに対応する。例えば、あるハミルトニアンで記述される同じ金属が、常伝導相と超伝導相を持つとする。金属の中での電子の運動は上向き、下向きスピンを待つ電子の消滅演算子によって記述されるが、常伝導相でのそれ $a_\uparrow(\mathbf{k})$, $a_\downarrow(\mathbf{k})$ と超伝導相でのそれ $\alpha_\uparrow(\mathbf{k})$, $\alpha_\downarrow(\mathbf{k})$ とは異なる。常伝導状態は、 $a_\uparrow(\mathbf{k})$, $a_\downarrow(\mathbf{k})$ で定義される真空 $|0\rangle$ の上に作られた Fock 空間で記述される。一方、超伝導状態は、 $\alpha_\uparrow(\mathbf{k})$, $\alpha_\downarrow(\mathbf{k})$ で定義される真空 $|0\rangle$ の上に作られる Fock 空間で記述される。超伝導相の真空 $|0\rangle$ は、常伝導相の真空 $|0\rangle$ に Cooper 対が凝縮したものと解釈される（(8.33) の $a(\mu)$, $b(\mu)$ を、フェルミオンの $a_\uparrow(\mathbf{k})$, $a_\downarrow(\mathbf{k})$ に置き換えた式から、この解釈が得られる）。

各 Fock 空間は、それぞれの真空への粒子凝縮の形によって区別され、異なる 0 集合を抽出している。Fock 空間が $a(\mu)$ に対する 0 集合上に作られているとき、 $a^\dagger(\mu)$ により生成される粒子を準粒子と言う。ハイゼンベルグ場の漸近場（無限遠で観測にかかる場）は準粒子として選ぶことができる。しかし、漸近場が存在しない場合にも準粒子の概念は有用である。

いかなる演算子も、ある準粒子の真空の上の Fock 空間への作用として定義される。そこで、ハイゼンベルグ場 $\psi(x)$ は、準粒子場 $\varphi(x)$ または、準粒子の生成・消滅演算子 $a(\mu)$, $a^\dagger(\mu)$ によって、

$$\psi(x) = \psi[x|\varphi] \quad (8.51)$$

$$= \psi[x|a(\mathbf{k}), a^\dagger(\mathbf{k})] \quad (8.52)$$

のように表わされる。ここで、 $\psi[x|\bullet]$ は $\psi(x)$ を準粒子場 \bullet で展開した表式を表わし、 \bullet が異なれば関数形も異なる。このように、ハイゼンベルグ場を準粒子場で表わしたものをダイナミカルマップと言う。

A 不確定性関係

ユニタリー表現では、ケット真空 (2.16), ブラ真空 (2.17) は、

$$|0\rangle = \rho^{1/2}|I\rangle, \quad (\text{A.1})$$

$$\langle 1| = \langle I|\rho^{1/2} = |0\rangle^\dagger \quad (\text{A.2})$$

となる。(2.20) より

$$\langle \dots \rangle = \text{Tr}(\rho \dots) = \langle 1|\dots|0\rangle \quad (\text{A.3})$$

である。エルミート演算子 A, B に対して、

$$\check{A} \stackrel{\text{def}}{=} A - \langle A \rangle, \quad \check{B} \stackrel{\text{def}}{=} B - \langle B \rangle \quad (\text{A.4})$$

を定義する。また、 λ を実パラメーターとして、

$$|\lambda\rangle \stackrel{\text{def}}{=} (\check{A} + \lambda\langle \check{A}\check{B} \rangle^* \check{B})|0\rangle \quad (\text{A.5})$$

とする。このとき、

$$\begin{aligned} \langle \lambda| &= |\lambda\rangle^\dagger \\ &= \langle 1|(\check{A} + \lambda\check{B}\langle \check{A}\check{B} \rangle) \end{aligned} \quad (\text{A.6})$$

であり、(A.3) より

$$\begin{aligned} \langle \lambda|\lambda \rangle &= \langle \check{A}^2 \rangle + \lambda\langle \check{A}\check{B} \rangle^* \langle \check{A}\check{B} \rangle + \lambda\langle \check{A}\check{B} \rangle \langle \check{A}\check{B} \rangle^* + \lambda^2 |\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2 \langle \check{B}^2 \rangle \\ &= \langle \check{A}^2 \rangle + 2\lambda |\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2 + \lambda^2 |\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2 \langle \check{B}^2 \rangle \end{aligned} \quad (\text{A.7})$$

$$= \langle \check{B}^2 \rangle |\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2 \left(\lambda + \frac{1}{\langle \check{B}^2 \rangle} \right)^2 - \frac{|\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2}{\langle \check{B}^2 \rangle} + \langle \check{A}^2 \rangle \quad (\text{A.8})$$

となる。 $\langle \lambda|\lambda \rangle \geq 0$ であるから上式で $\lambda = -\langle \check{B}^2 \rangle^{-1}$ とすることで、

$$0 \leq -\frac{|\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2}{\langle \check{B}^2 \rangle} + \langle \check{A}^2 \rangle$$

すなわち、

$$\langle \check{A}^2 \rangle \langle \check{B}^2 \rangle \geq |\langle \check{A}\check{B} \rangle|^2 \quad (\text{A.9})$$

を得る。

今、

$$\Delta A \stackrel{\text{def}}{=} \sqrt{\langle \check{A}^2 \rangle - \langle A \rangle^2} = \sqrt{\langle \check{A}^2 \rangle}, \quad (\text{A.10})$$

$$\Delta B \stackrel{\text{def}}{=} \sqrt{\langle \check{B}^2 \rangle - \langle B \rangle^2} = \sqrt{\langle \check{B}^2 \rangle}, \quad (\text{A.11})$$

$$V_{AB} \stackrel{\text{def}}{=} \langle \check{A}\check{B} \rangle - \langle A \rangle \langle B \rangle = \langle \check{A}\check{B} \rangle \quad (\text{A.12})$$

とすると、(A.9) は

$$\Delta A \Delta B \geq |V_{AB}| \quad (\text{A.13})$$

となる。 $V_{AB} = \langle \check{A}\check{B} \rangle$ を変形すると、

$$\begin{aligned} V_{AB} &= \frac{\langle \check{A}\check{B} \rangle + \langle \check{B}\check{A} \rangle}{2} + \frac{\langle [\check{A}, \check{B}] \rangle}{2} \\ &= \frac{\langle \check{A}\check{B} \rangle + \langle \check{B}\check{A} \rangle}{2} + \frac{\langle [A, B] \rangle}{2} \end{aligned} \quad (\text{A.14})$$

となり、この式の†から

$$V_{AB}^* = \frac{\langle \check{A}\check{B} \rangle + \langle \check{B}\check{A} \rangle}{2} - \frac{\langle [A, B] \rangle}{2} \quad (\text{A.15})$$

を得る。上2式より、

$$\text{Re}V_{AB} = \frac{\langle \check{A}\check{B} \rangle + \langle \check{B}\check{A} \rangle}{2}, \quad \text{Im} = \frac{\langle [A, B] \rangle}{2i} \quad (\text{A.16})$$

がわかる。よって、

$$|V_{AB}| = \left[\left(\frac{\langle \check{A}\check{B} \rangle + \langle \check{B}\check{A} \rangle}{2} \right)^2 + \left(\frac{\langle [A, B] \rangle}{2i} \right)^2 \right]^{1/2} \quad (\text{A.17})$$

$$\geq \frac{1}{2} \left| \frac{\langle [A, B] \rangle}{i} \right| \quad (\text{A.18})$$

となる。これを (A.13) に代入して、不確定性関係

$$\Delta A \Delta B \geq \frac{1}{2} \left| \frac{\langle [A, B] \rangle}{i} \right| \quad (\text{A.19})$$

を得る。特に、

$$[A, B] = i\hbar \quad (\text{A.20})$$

のときは、

$$\Delta A \Delta B \geq \frac{\hbar}{2} \quad (\text{A.21})$$

となる。

B 森公式

考えている系の演算子の組 $\{A_i\}_{i=1}^n$ を考える。考えている系のハット・ハミルトニアンを \hat{H} とする。これは、

$$\langle 1 | \hat{H} = 0 \quad (\text{B.1})$$

を満たす。ハイゼンベルグ描像

$$A_i(t) = e^{i\hat{H}t} A_i e^{-i\hat{H}t} \quad (\text{B.2})$$

で考える。運動方程式は、

$$\frac{d}{dt} A_i(t) = i[\hat{H}(t), A_i(t)] \quad (\text{B.3})$$

である。

射影演算子 \mathcal{P} を、

$$\mathcal{P} \stackrel{\text{def}}{=} A_i^\dagger |0\rangle \mathcal{A}^{ij} \langle 1 | A_j, \quad (\text{B.4})$$

$$\mathcal{A}^{ij} \mathcal{A}_{jk} = \delta_k^i, \quad \mathcal{A}_{ij} \mathcal{A}^{jk} = \delta_i^k, \quad (\text{B.5})$$

$$\mathcal{A}_{ij} \stackrel{\text{def}}{=} \langle 1 | A_i A_j^\dagger |0\rangle \quad (\text{B.6})$$

で定義する³⁶⁾。このとき、

$$\begin{aligned} \mathcal{P}^2 &= A_i^\dagger |0\rangle \mathcal{A}^{ij} \langle 1 | A_j A_l^\dagger |0\rangle \mathcal{A}^{lm} \langle 1 | A_m \\ &= A_i^\dagger |0\rangle \mathcal{A}^{ij} \mathcal{A}_{jl} \mathcal{A}^{lm} \langle 1 | A_m \\ &= A_i^\dagger |0\rangle \delta_l^i \mathcal{A}^{lm} \langle 1 | A_m \\ &= A_i^\dagger |0\rangle \mathcal{A}^{im} \langle 1 | A_m \\ &= \mathcal{P} \end{aligned} \quad (\text{B.7})$$

となる。また、

$$\mathcal{Q} \stackrel{\text{def}}{=} 1 - \mathcal{P} \quad (\text{B.8})$$

とする。次の公式が成り立つ：

$$\begin{aligned} \mathcal{Q} A_i^\dagger |0\rangle &= A_i^\dagger |0\rangle - \langle 1 | \bullet \mathcal{P} A_i^\dagger |0\rangle \\ &= A_i^\dagger |0\rangle - A_l^\dagger |0\rangle \mathcal{A}^{lj} \langle 1 | A_j A_i^\dagger |0\rangle \\ &= A_i^\dagger |0\rangle - A_l^\dagger |0\rangle \delta_i^l \\ &= 0. \end{aligned} \quad (\text{B.9})$$

(B.3) に $\langle 1 |$ を作用させて、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt} \langle 1 | A_i(t) &= i \langle 1 | (\hat{H}(t) A_i(t) - A_i(t) \hat{H}(t)) \\ &= i \langle 1 | e^{i\hat{H}t} \hat{H} A_i e^{-i\hat{H}t} - i \langle 1 | e^{i\hat{H}t} A_i \hat{H} e^{-i\hat{H}t} \\ &= i \langle 1 | \hat{H} A_i e^{-i\hat{H}t} - i \langle 1 | A_i \hat{H} e^{-i\hat{H}t} \\ &= \langle 1 | \dot{A}_i e^{-i\hat{H}t} \\ &= \langle 1 | \dot{A}_i \mathcal{P} e^{-i\hat{H}t} + \langle 1 | \dot{A}_i \mathcal{Q} e^{-i\hat{H}t} \end{aligned} \quad (\text{B.10})$$

³⁶⁾ i, j, \dots について、アインシュタインの記法を使う。

を得る。ここで、

$$\dot{A}_i = i[\hat{H}, A_i] \quad (\text{B.11})$$

である。

$$\begin{aligned} \langle 1|\dot{A}_i\mathcal{P} &= \langle 1|\dot{A}_i A_i^\dagger|0\rangle\mathcal{A}^{lj}\langle 1|A_j \\ &= \Omega_i^j\langle 1|A_j, \end{aligned} \quad (\text{B.12})$$

$$\Omega_i^j \stackrel{\text{def}}{=} \langle 1|\dot{A}_i A_i^\dagger|0\rangle\mathcal{A}^{lj}, \quad (\text{B.13})$$

$$\begin{aligned} \langle 1|\dot{A}_i\mathcal{Q} &= \langle 1|\dot{A}_i - \Omega_i^j\langle 1|A_j \\ &= \langle 1|F_i, \end{aligned} \quad (\text{B.14})$$

$$F_i \stackrel{\text{def}}{=} \dot{A}_i - \Omega_i^j A_j \quad (\text{B.15})$$

であるから、

$$\begin{aligned} (\text{B.10}) &= \Omega_i^j\langle 1|A_j e^{-i\hat{H}t} + \langle 1|F_i e^{-i\hat{H}t} \\ &= \Omega_i^j\langle 1|e^{i\hat{H}t} A_j e^{-i\hat{H}t} + \langle 1|e^{i\hat{H}t} F_i e^{-i\hat{H}t} \\ &= \Omega_i^j\langle 1|A_j(t) + \langle 1|F_i(t), \end{aligned} \quad (\text{B.16})$$

$$\begin{aligned} F_i(t) &= e^{-i\hat{H}t} F_i e^{-i\hat{H}t} \\ &= e^{-i\hat{H}t} (\dot{A}_i - \Omega_i^j A_j) e^{-i\hat{H}t} \\ &= \dot{A}_i(t) - \Omega_i^j A_j(t) \end{aligned} \quad (\text{B.17})$$

つまり、

$$\frac{d}{dt}\langle 1|A_i(t) = \Omega_i^j\langle 1|A_j(t) + \langle 1|F_i(t) \quad (\text{B.18})$$

となる。

今、

$$R_i(t) = e^{i\hat{H}Qt} F_i e^{-i\hat{H}Qt} \quad (\text{B.19})$$

とすると、

$$\frac{d}{dt}R_i(t) = i\hat{H}QR_i(t) - iR_i(t)\hat{H}Q, \quad (\text{B.20})$$

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}\langle 1|R_i(t)A_j^\dagger|0\rangle &= i\langle 1|\hat{H}QR_i(t)A_j^\dagger|0\rangle - i\langle 1|R_i(t)\hat{H}QA_j^\dagger|0\rangle \\ &= 0 \end{aligned} \quad (\text{B.21})$$

となる。ただし、(B.9)と(B.1)を用いた。また、

$$\begin{aligned} \langle 1|R_i(0)A_j^\dagger|0\rangle &= \langle 1|F_i A_j^\dagger|0\rangle \\ &= \langle 1|\dot{A}_i A_j^\dagger|0\rangle - \Omega_i^k\langle 1|A_k A_j^\dagger|0\rangle \\ &= \langle 1|\dot{A}_i A_j^\dagger|0\rangle - \langle 1|\dot{A}_i A_l^\dagger|0\rangle\mathcal{A}^{lk} \cdot \mathcal{A}_{kj} \\ &= \langle 1|\dot{A}_i A_j^\dagger|0\rangle - \langle 1|\dot{A}_i A_l^\dagger|0\rangle\delta_j^l \\ &= 0 \end{aligned} \quad (\text{B.22})$$

である。よって、

$$\langle 1|R_i(t)A_j^\dagger|0\rangle = \langle 1|R_i(0)A_j^\dagger|0\rangle = 0 \quad (\text{B.23})$$

を得る。

次の量を考える：

$$\hat{W}(t) = e^{-i\hat{H}Qt}. \quad (\text{B.24})$$

これを s で微分して、

$$\frac{d}{dt}\hat{W}(t) = -\hat{W}(t)i\hat{H}Q \quad (\text{B.25})$$

を得る。よって、

$$\begin{aligned} \frac{d}{dt}[\hat{W}(t)e^{i\hat{H}t}] &= \frac{d}{dt}[\hat{W}(t)]e^{i\hat{H}t} + \hat{W}(t)\frac{d}{dt}e^{i\hat{H}t} \\ &= -\hat{W}(t)i\hat{H}Qe^{i\hat{H}t} + \hat{W}(t)i\hat{H}e^{i\hat{H}t} \\ &= \hat{W}(t)i\hat{H}\mathcal{P}e^{i\hat{H}t}, \end{aligned} \quad (\text{B.26})$$

$$\begin{aligned} \hat{W}(t)e^{i\hat{H}t} &= 1 + \int_0^t du \hat{W}(u)i\hat{H}\mathcal{P}e^{i\hat{H}u}, \\ \hat{W}(t) &= e^{-i\hat{H}t} + \int_0^t du \hat{W}(u)i\hat{H}\mathcal{P}e^{i\hat{H}(u-t)} \\ &= e^{-i\hat{H}t} + \int_0^t ds \hat{W}(t-s)i\hat{H}\mathcal{P}e^{-i\hat{H}s} \end{aligned} \quad (\text{B.27})$$

となる。ところで、

$$\begin{aligned} \langle 1|R_i(t) &= \langle 1|e^{i\hat{H}Qt}F_i e^{-i\hat{H}Qt} \\ &= \langle 1|F_i\hat{W}(t) \end{aligned} \quad (\text{B.28})$$

であるから、(B.27) を代入して、

$$\begin{aligned} \langle 1|R_i(t) &= \langle 1|F_i e^{-i\hat{H}t} + \langle 1| \int_0^t ds F_i e^{-i\hat{H}Q(t-s)} i\hat{H}\mathcal{P}e^{-i\hat{H}s} \\ &= \langle 1|e^{i\hat{H}t}F_i e^{-i\hat{H}t} + \int_0^t ds \langle 1|e^{i\hat{H}Q(t-s)}F_i e^{-i\hat{H}Q(t-s)} i\hat{H}\mathcal{P}e^{-i\hat{H}s} \\ &= \langle 1|F_i(t) + \int_0^t ds \langle 1|R_i(t-s) i\hat{H}\mathcal{P}e^{-i\hat{H}s} \\ &= \langle 1|F_i(t) + \int_0^t ds \langle 1|R_i(t-s) i\hat{H}A_l^\dagger|0\rangle \mathcal{A}^{lj} \langle 1|A_j e^{-i\hat{H}s} \\ &= \langle 1|F_i(t) + \int_0^t ds \Gamma_i^j(t-s) \langle 1|A_j(s), \end{aligned} \quad (\text{B.29})$$

$$\Gamma_i^j(t) \stackrel{\text{def}}{=} \langle 1|R_i(t) i\hat{H}A_l^\dagger|0\rangle \mathcal{A}^{lj} \quad (\text{B.30})$$

を得る。

(B.29) を (B.18) に代入して、森公式

$$\frac{d}{dt}\langle 1|A_i(t) = \Omega_i^j \langle 1|A_j(t) - \int_0^t ds \Gamma_i^j(t-s) \langle 1|A_j(s) + \langle 1|R_i(t) \quad (\text{B.31})$$

を得る。右辺第3項が、ランダム力のようにも見える。

(B.31) に $A_j^\dagger|0\rangle$ を作用させて、

$$\begin{aligned}\frac{d}{dt}\langle 1|A_i(t)A_j^\dagger|0\rangle &= \Omega_i^j\langle 1|A_j(t)A_j^\dagger|0\rangle - \int_0^t ds \Gamma_i^j(t-s)\langle 1|A_j(s)A_j^\dagger|0\rangle + \langle 1|R_i(t)A_j^\dagger|0\rangle \\ &= \Omega_i^j\langle 1|A_j(t)A_j^\dagger|0\rangle - \int_0^t ds \Gamma_i^j(t-s)\langle 1|A_j(s)A_j^\dagger|0\rangle\end{aligned}\quad (\text{B.32})$$

を得る。ただし、(B.23) を用いた。今、

$$\Xi_i^k(t) \stackrel{\text{def}}{=} \langle 1|A_i(t)A_j^\dagger|0\rangle \mathcal{A}^{jk} \quad (\text{B.33})$$

とすると、上式より、

$$\frac{d}{dt}\Xi_i^k(t) = \Omega_i^j\Xi_j^k(t) - \int_0^t ds \Gamma_i^j(t-s)\Xi_j^k(s) \quad (\text{B.34})$$

を得る。(B.13),(B.33) より、

$$\Omega_i^k = \left. \frac{d}{dt}\Xi_i^k(t) \right|_{t=0} \quad (\text{B.35})$$

である。

なお、

$$\hat{H}|0\rangle = 0, \quad \hat{H}^\dagger = \hat{H} \quad (\text{B.36})$$

の時は、

$$\begin{aligned}\Gamma_i^j(t) &= \langle 1|R_i(t)i\hat{H}A_l^\dagger|0\rangle \mathcal{A}^{lj} \\ &= \langle 1|R_i(t)R_l^\dagger(0)|0\rangle \mathcal{A}^{lj}\end{aligned}\quad (\text{B.37})$$

である。実際、このとき、

$$\begin{aligned}\langle 1|R_i(t)R_l^\dagger(0)|0\rangle &= \langle 1|R_i(t)F_l^\dagger|0\rangle \\ &= \langle 1|R_i(t)\dot{A}_l^\dagger|0\rangle - \Omega_l^j\langle 1|R_i(t)A_j^\dagger|0\rangle \\ &= \langle 1|R_i(t)\dot{A}_l^\dagger|0\rangle \\ &= \langle 1|R_i(t)(i\hat{H}A_l - iA_l\hat{H})^\dagger|0\rangle \\ &= \langle 1|R_i(t)i\hat{H}A_l^\dagger|0\rangle - \langle 1|R_i(t)iA_l^\dagger\hat{H}|0\rangle \\ &= \langle 1|R_i(t)i\hat{H}A_l^\dagger|0\rangle\end{aligned}\quad (\text{B.38})$$

となる。

C c数空間へのマップ

a, a^\dagger を

$$[a, a^\dagger] = 1, \quad [a, a] = 0 = [a^\dagger, a^\dagger] \quad (\text{C.1})$$

を満たす生成・消滅演算子とする。さらに、

$$D(\alpha) \stackrel{\text{def}}{=} \exp(\alpha a^\dagger - \alpha^* a), \quad (\text{C.2})$$

$$D(\alpha, s) \stackrel{\text{def}}{=} D(\alpha) \exp\left(\frac{1}{2}s|\alpha|^2\right), \quad (\text{C.3})$$

$$\Delta_s(z) \stackrel{\text{def}}{=} \int \frac{d^2\alpha}{\pi} D(\alpha, s) \exp(-\alpha z^* + \alpha^* z) \quad (\text{C.4})$$

とする³⁷⁾。 a, a^\dagger で記述される系の状態を ρ とすると、

$$\rho_s(z) \stackrel{\text{def}}{=} \text{Tr}[\rho \Delta_{-s}(z)] \quad (\text{C.6})$$

は、 ρ と同じ情報を持つ。つまり、

$$\rho = \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_s(z) \Delta_s(z) \quad (\text{C.7})$$

となる。一般に、 a, a^\dagger の任意関数 A に対して、

$$A = \int \frac{d^2z}{\pi} A_s(z) \Delta_s(z), \quad (\text{C.8})$$

$$A_s(z) = \text{Tr}[A \Delta_{-s}(z)] \quad (\text{C.9})$$

となる。これを示そう。

C.1 コヒーレント状態

公式

$$e^{A+B} = e^{-\frac{1}{2}[A,B]} e^A e^B \quad \text{for} \quad [A, [A, B]] = [B, [A, B]] = 0 \quad (\text{C.10})$$

より（これは付録 E で示す）、

$$D(\alpha) = e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} e^{\alpha a^\dagger} e^{-\alpha^* a} = e^{\frac{1}{2}|\alpha|^2} e^{-\alpha^* a} e^{\alpha a^\dagger} \quad (\text{C.11})$$

である。また、

$$\begin{aligned} D(\alpha)D(\beta) &= e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} e^{\alpha a^\dagger} e^{-\alpha^* a} \cdot e^{-\frac{1}{2}|\beta|^2} e^{\beta a^\dagger} e^{-\beta^* a} \\ &= e^{-\frac{1}{2}(|\alpha|^2+|\beta|^2)} e^{\alpha a^\dagger} e^{-\alpha^* a} e^{\beta a^\dagger} e^{-\beta^* a} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2}|\alpha|^2 - \frac{1}{2}|\beta|^2 - \alpha^* \beta\right) e^{\alpha a^\dagger} e^{\beta a^\dagger} e^{-\alpha^* a} e^{-\beta^* a} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2}|\alpha + \beta|^2 - \frac{1}{2}\alpha^* \beta + \frac{1}{2}\alpha \beta^*\right) e^{(\alpha+\beta)a^\dagger} e^{-(\alpha+\beta)^* a} \\ &= D(\alpha + \beta) e^{\frac{1}{2}(\alpha\beta^* - \alpha^*\beta)}, \end{aligned} \quad (\text{C.12})$$

$$\begin{aligned} D^\dagger(\alpha) &= \exp[(\alpha a^\dagger - \alpha^* a)^\dagger] \\ &= D(-\alpha) \end{aligned} \quad (\text{C.13})$$

³⁷⁾ $\alpha = x + iy = r e^{i\theta}$ とすると、

$$\int d^2\alpha \cdots \equiv \int_{-\infty}^{\infty} dx \int_{-\infty}^{\infty} dy \cdots = \int_0^{\infty} dr \int_0^{2\pi} d\theta r \cdots \quad (\text{C.5})$$

である。

である。

今、コヒーレント状態

$$|\alpha\rangle = D(\alpha)|0\rangle \quad (a|0\rangle = 0, \langle 0|0\rangle = 1) \quad (\text{C.14})$$

を定義すると、(C.11) より、

$$\begin{aligned} |\alpha\rangle &= e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\alpha^n}{n!} (a^\dagger)^n |0\rangle \\ &= e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\alpha^n}{\sqrt{n!}} |n\rangle \end{aligned} \quad (\text{C.15})$$

となる。また、

$$\begin{aligned} a|\alpha\rangle &= e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\alpha^n}{\sqrt{n!}} \sqrt{n} |n-1\rangle \\ &= \alpha e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\alpha^n}{\sqrt{n!}} |n\rangle \\ &= \alpha|\alpha\rangle \end{aligned} \quad (\text{C.16})$$

である。また、(C.12),(C.13),(C.11) より、

$$\begin{aligned} \langle\alpha|\beta\rangle &= \langle 0|D(-\alpha)D(\beta)|0\rangle \\ &= \langle 0|D(-\alpha+\beta)|0\rangle e^{\frac{1}{2}(-\alpha\beta^*+\alpha^*\beta)} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2}|\alpha-\beta|^2\right) \langle 0|e^{(-\alpha+\beta)a^\dagger} e^{-(\alpha+\beta)^*a}|0\rangle e^{\frac{1}{2}(-\alpha\beta^*+\alpha^*\beta)} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2}|\alpha|^2 - \frac{1}{2}|\beta|^2 + \alpha^*\beta\right) \end{aligned} \quad (\text{C.17})$$

となる。なお、(C.15) より、

$$\begin{aligned} \int \frac{d^2\alpha}{\pi} |\alpha\rangle\langle\alpha| &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} e^{-|\alpha|^2} \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{\alpha^n}{\sqrt{n!}} \frac{\alpha^{*m}}{\sqrt{m!}} |n\rangle\langle m| \\ &= \frac{1}{\pi} \int_0^\infty dr \int_0^{2\pi} d\theta r e^{-r^2} \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} \frac{r^n}{\sqrt{n!}} \frac{r^m}{\sqrt{m!}} e^{i\theta(n-m)} |n\rangle\langle m| \\ &= 2 \int_0^\infty dr r e^{-r^2} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{r^{2n}}{n!} |n\rangle\langle n| \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} |n\rangle\langle n| \\ &= 1 \end{aligned} \quad (\text{C.18})$$

である。ただし、(C.5) を用いた。上 2 式より、 $\{|\alpha\rangle\}$ は規格非直交 (過剰) 完全系である。

C.2 対応関係

今、演算子 A に対して、

$$A' = \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \text{Tr}[AD^\dagger(\alpha)]D(\alpha) \quad (\text{C.19})$$

とする。ところで、 $\{|\alpha\rangle\}$ は完全系なので、

$$\text{Tr}(\cdots) = \int \frac{d^2z}{\pi} \langle z | \cdots | z \rangle \quad (\text{C.20})$$

である。よって、

$$\begin{aligned} \text{Tr}[AD^\dagger(\alpha)] &= \int \frac{d^2z}{\pi} \langle z | AD^\dagger(\alpha) | z \rangle \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \langle w | D^\dagger(\alpha) | z \rangle \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \langle 0 | D(-w) D(-\alpha) D(z) | 0 \rangle \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \langle 0 | D(-w) D(-\alpha + z) | 0 \rangle e^{\frac{1}{2}(-\alpha z^* + \alpha^* z)} \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \langle 0 | D(-\alpha + z - w) | 0 \rangle \\ &\quad \times \exp \left[-w \frac{1}{2}(-\alpha + z)^* + w^* \frac{1}{2}(-\alpha + z) \right] e^{\frac{1}{2}(-\alpha z^* + \alpha^* z)} \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \\ &\quad \times \exp \frac{1}{2} \left[-|-\alpha + z - w|^2 - (-\alpha + z)w^* + (-\alpha + z)^*w - \alpha z^* + \alpha^* z \right] \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \exp \left[-\frac{1}{2}(|\alpha|^2 + |z|^2 + |w|^2) + zw^* + z\alpha^* - \alpha w^* \right] \quad (\text{C.21}) \end{aligned}$$

となる³⁸⁾。ただし、(C.12),(C.13)を使った。(C.21),(C.19),(C.22)より、

$$\begin{aligned} \langle \beta | A' | \gamma \rangle &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \text{Tr}[AD^\dagger(\alpha)] \langle \beta | D(\alpha) | \gamma \rangle \\ &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \text{Tr}[AD^\dagger(\alpha)] \exp \left[-\frac{1}{2}(|\alpha|^2 + |\beta|^2 + |\gamma|^2) + \gamma\beta^* - \gamma\alpha^* + \beta\alpha^* \right] \\ &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \exp \left[-\frac{1}{2}(|\alpha|^2 + |z|^2 + |w|^2) + zw^* + z\alpha^* - \alpha w^* \right] \\ &\quad \times \exp \left[-\frac{1}{2}(|\alpha|^2 + |\beta|^2 + |\gamma|^2) + \gamma\beta^* - \gamma\alpha^* + \beta\alpha^* \right] \\ &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z | A | w \rangle \exp \left[-|\alpha|^2 + \alpha^*(z - \gamma) + \alpha(\beta^* - w^*) \right] \\ &\quad \times \exp \left[-\frac{1}{2}(|z|^2 + |w|^2) + zw^* - \frac{1}{2}(|\beta|^2 + |\gamma|^2) + \gamma\beta^* \right]. \quad (\text{C.23}) \end{aligned}$$

今、

$$\alpha = a + ib, \quad z - \gamma = A, \quad \beta^* - w^* = B \quad (\text{C.24})$$

³⁸⁾この計算より、

$$\langle w | D(-\alpha) | z \rangle = \exp \frac{1}{2} \left[-|-\alpha + z - w|^2 - (-\alpha + z)w^* + (-\alpha + z)^*w - \alpha z^* + \alpha^* z \right] \quad (\text{C.22})$$

とかくと、

$$\begin{aligned}
& -|\alpha|^2 + \alpha^*(z - \gamma) + \alpha(\beta^* - w^*) \\
= & -a^2 - b^2 + (a - ib)A + (a + ib)B \\
= & -a(a - A - B) - b(b + iA - iB) \\
= & -(a - [A + B]/2)^2 + (A + B)^2/4 - (b + i[A - B]/2) + i^2(A - B)^2/4 \\
= & -(a - [A + B]/2)^2 - (b + i[A - B]/2) + AB
\end{aligned} \tag{C.25}$$

である。よって、

$$\begin{aligned}
& \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \exp[-|\alpha|^2 + \alpha^*(z - \gamma) + \alpha(\beta^* - w^*)] \\
= & \frac{1}{\pi} (\sqrt{\pi})^2 \exp[AB] \\
= & \exp[(z - \gamma)(\beta^* - w^*)] \\
= & \exp[\beta^*z - zw^* - \gamma\beta^* + w^*\gamma]
\end{aligned} \tag{C.26}$$

となる。従って、

$$\begin{aligned}
(C.23) = & \int \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle z|A|w\rangle \exp\left[-\frac{1}{2}(|z|^2 + |w|^2) + \beta^*z - \frac{1}{2}(|\beta|^2 + |\gamma|^2) + w^*\gamma\right] \\
= & \int \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \langle \beta|z\rangle \langle z|A|w\rangle \langle w|\gamma\rangle \\
= & \langle \beta|A|\gamma\rangle
\end{aligned} \tag{C.27}$$

を得る。これが任意の $|\beta\rangle, |\gamma\rangle$ について成り立つので、

$$A' = A \tag{C.28}$$

である。つまり、(C.19) は、

$$A = \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \text{Tr}[AD^\dagger(\alpha)]D(\alpha) \tag{C.29}$$

となる。

今、

$$\alpha = a + ib, \quad z = x + iy \tag{C.30}$$

とすると、

$$\begin{aligned}
\alpha z^* - \alpha^* z &= (a + ib)(x - iy) - (a - ib)(x + iy) \\
&= 2i(-ay + bx)
\end{aligned} \tag{C.31}$$

であるから、

$$\begin{aligned}
\int \frac{d^2z}{\pi} e^{\alpha z^* - \alpha^* z} &= \int \frac{dx dy}{\pi} e^{2i(-ay + bx)} \\
&= \pi \delta(-a) \delta(b) \\
&= \pi \delta(a) \delta(b) \equiv \pi \delta^2(\alpha)
\end{aligned} \tag{C.32}$$

となる。これを用いて、(C.4) を逆フーリエ変換して、

$$D(\alpha, s) = D(\alpha) \exp\left(\frac{1}{2}s|\alpha|^2\right) = \int \frac{d^2z}{\pi} \Delta_s(z) e^{\alpha z^* - \alpha^* z},$$

$$D(\alpha) = \exp\left(-\frac{1}{2}s|\alpha|^2\right) \int \frac{d^2z}{\pi} \Delta_s(z) e^{\alpha z^* - \alpha^* z}, \quad (\text{C.33})$$

$$D^\dagger(\alpha) = \exp\left(\frac{1}{2}s|\alpha|^2\right) \int \frac{d^2z}{\pi} \Delta_{-s}(z) e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \quad (\text{C.34})$$

を得る。第2式と第3式では、 s が -1 倍違う。これを (C.29) に代入して、

$$\begin{aligned} A &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \text{Tr} \left[\exp\left(\frac{1}{2}s|\alpha|^2\right) \int \frac{d^2z}{\pi} \Delta_{-s}(z) e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \right] \\ &\quad \times \exp\left(-\frac{1}{2}s|\alpha|^2\right) \int \frac{d^2w}{\pi} \Delta_s(w) e^{\alpha w^* - \alpha^* w} \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \text{Tr} [A \Delta_{-s}(z)] \Delta_s(w) \int \frac{d^2\alpha}{\pi} e^{\alpha(w-z)^* - \alpha^*(w-z)} \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} \text{Tr} [A \Delta_{-s}(z)] \Delta_s(w) \pi \delta(w-z) \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \text{Tr} [A \Delta_{-s}(z)] \Delta_s(z) \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} A_s(z) \Delta_s(z). \end{aligned} \quad (\text{C.35})$$

第3等号で (C.32) を、第5等号で (C.9) を用いた。上式は、(C.8) である。

A, B を a, a^\dagger の関数とする。(C.7) より、

$$A \rho B = \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_s(z) A \Delta_s(z) B \quad (\text{C.36})$$

である。また、(C.4) より、

$$A \Delta_s(z) B = \int \frac{d^2\alpha}{\pi} A D(\alpha, s) B e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \quad (\text{C.37})$$

である。 $A \Delta_s(z) B$ が、

$$A \Delta_s(z) B = f_s^{AB}(z, z^*; \frac{\partial}{\partial z}, \frac{\partial}{\partial z^*}) \Delta_s(z) \quad (\text{C.38})$$

の形にかけるので、(C.36) より、

$$\begin{aligned} A \rho B &= \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_s(z) [f_s^{AB}(z, z^*; \frac{\partial}{\partial z}, \frac{\partial}{\partial z^*}) \Delta_s(z)] \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} [f_s'^{AB}(z, z^*; \frac{\partial}{\partial z}, \frac{\partial}{\partial z^*}) \rho_s(z)] \Delta_s(z) \end{aligned} \quad (\text{C.39})$$

となる。 $f_s'^{AB}$ は部分積分を実行して、微分を $\rho_s(z)$ に移したときの関数形である。上式は、

$$(A \rho B)_s(z) = f_s'^{AB}(z, z^*; \frac{\partial}{\partial z}, \frac{\partial}{\partial z^*}) \rho_s(z) \quad (\text{C.40})$$

を意味する。これによって、 $\rho(t)$ についての、散逸がある場合の（なくても良いが）Liouville 方程式は、

$$\frac{\partial}{\partial t} \rho_s(z, t) = F_s(z, z^*; \frac{\partial}{\partial z}, \frac{\partial}{\partial z^*}) \rho_s(z, t) \quad (\text{C.41})$$

のタイプの方程式となる。これを解けば、(C.7)によって、 $\rho(t)$ がわかる。

$f_s'^{AB}$ を求めよう。(C.11)より、

$$\begin{aligned} D(\alpha, s) &= e^{\frac{1}{2}(s-1)|\alpha|^2} e^{\alpha a^\dagger} e^{-\alpha^* a} \\ &= e^{\frac{1}{2}(s+1)|\alpha|^2} e^{-\alpha^* a} e^{\alpha a^\dagger} \end{aligned} \quad (\text{C.42})$$

であるから、

$$\frac{\partial}{\partial \alpha} D(\alpha, s) = \left[\frac{1}{2}(s-1)\alpha^* + a^\dagger \right] D(\alpha, s) = D(\alpha, s) \left[\frac{1}{2}(s+1)\alpha^* + a^\dagger \right], \quad (\text{C.43})$$

$$\frac{\partial}{\partial \alpha^*} D(\alpha, s) = D(\alpha, s) \left[\frac{1}{2}(s-1)\alpha - a \right] = \left[\frac{1}{2}(s+1)\alpha - a \right] D(\alpha, s) \quad (\text{C.44})$$

であり、これより、

$$aD(\alpha, s) = \left[\frac{1}{2}(s+1)\alpha - \frac{\partial}{\partial \alpha^*} \right] D(\alpha, s), \quad (\text{C.45})$$

$$a^\dagger D(\alpha, s) = \left[-\frac{1}{2}(s-1)\alpha + \frac{\partial}{\partial \alpha} \right] D(\alpha, s), \quad (\text{C.46})$$

$$D(\alpha, s)a = \left[\frac{1}{2}(s-1)\alpha^* - \frac{\partial}{\partial \alpha^*} \right] D(\alpha, s), \quad (\text{C.47})$$

$$D(\alpha, s)a^\dagger = \left[-\frac{1}{2}(s+1)\alpha^* + \frac{\partial}{\partial \alpha} \right] D(\alpha, s) \quad (\text{C.48})$$

を得る。これと(C.37)より、

$$\begin{aligned} a\Delta_s(z) &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} aD(\alpha, s) e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \\ &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \left[\frac{1}{2}(s+1)\alpha D(\alpha, s) - \frac{\partial}{\partial \alpha^*} D(\alpha, s) \right] e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \\ &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \left[-\frac{1}{2}(s+1)D(\alpha, s) \frac{\partial}{\partial z^*} e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} + D(\alpha, s) \frac{\partial}{\partial \alpha^*} e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \right] \\ &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \left[-\frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} + z \right] D(\alpha, s) e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \\ &= \left[z - \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \Delta_s(z) \end{aligned} \quad (\text{C.49})$$

同様に、

$$a^\dagger \Delta_s(z) = \left[z^* - \frac{1}{2}(s-1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \Delta_s(z), \quad (\text{C.50})$$

$$\Delta_s(z)a = \left[z - \frac{1}{2}(s-1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \Delta_s(z), \quad (\text{C.51})$$

$$\Delta_s(z)a^\dagger = \left[z^* - \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \Delta_s(z) \quad (\text{C.52})$$

を得る。(C.36)より、

$$\begin{aligned} a\rho &= \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_s(z) \left[z - \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \Delta_s(z) \\ &= \int \frac{d^2z}{\pi} \left\{ \left[z + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \rho_s(z) \right\} \Delta_s(z) \end{aligned} \quad (\text{C.53})$$

つまり、

$$(a\rho)_s(z) = \left[z + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \rho_s(z) \quad (\text{C.54})$$

である。同様に、

$$(\rho a)_s(z) = \left[z + \frac{1}{2}(s-1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \rho_s(z), \quad (\text{C.55})$$

$$(a^\dagger \rho)_s(z) = \left[z^* + \frac{1}{2}(s-1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \rho_s(z), \quad (\text{C.56})$$

$$(\rho a^\dagger)_s(z) = \left[z^* + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \rho_s(z) \quad (\text{C.57})$$

を得る。また、

$$(a^2 \rho)_s(z) = \left[z + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right]^2 \rho_s(z), \quad (\text{C.58})$$

$$\begin{aligned} (a \rho a^\dagger)_s(z) &= \left[z^* + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \left(\left[z + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \rho_s(z) \right) \\ &= \left[z + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \left(\left[z^* + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \rho_s(z) \right), \end{aligned} \quad (\text{C.59})$$

$$(a^\dagger a \rho)_s(z) = \left[z^* + \frac{1}{2}(s-1) \frac{\partial}{\partial z} \right] \left(\left[z + \frac{1}{2}(s+1) \frac{\partial}{\partial z^*} \right] \rho_s(z) \right) \quad (\text{C.60})$$

などである。

Π が (3.15) のときの (3.14) は、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial t} \rho_s(z, t) &= \left[-i\omega \left(\frac{\partial}{\partial z^*} z^* - \text{c.c.} \right) + \kappa \left(\frac{\partial}{\partial z^*} z^* + \text{c.c.} \right) \right. \\ &\quad \left. + 2\kappa(\bar{n} + \nu) \frac{\partial^2}{\partial z^* \partial z} \right] \rho_s(z, t), \end{aligned} \quad (\text{C.61})$$

$$\nu = \frac{1+s}{2} \quad (\text{C.62})$$

となる。

C.3 諸公式

(C.22), (C.32) より、

$$\begin{aligned} \text{Tr}[D(\alpha)] &= \int \frac{d^2 z}{\pi} \langle z | D(z) | z \rangle \\ &= e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} \int \frac{d^2 z}{\pi} e^{\alpha z^* - \alpha^* z} \\ &= e^{-\frac{1}{2}|\alpha|^2} \pi \delta^2(\alpha) \\ &= \pi \delta^2(\alpha) \end{aligned} \quad (\text{C.63})$$

である。これと、(C.12) より、

$$\begin{aligned} \text{Tr}[D(\alpha)D(\beta)] &= \text{Tr}[D(\alpha + \beta)] e^{\frac{1}{2}(\alpha\beta^* - \alpha^*\beta)} \\ &= \pi \delta^2(\alpha + \beta) e^{\frac{1}{2}(\alpha\beta^* - \alpha^*\beta)} \\ &= \pi \delta^2(\alpha + \beta) \end{aligned} \quad (\text{C.64})$$

を得る。これと、(C.4) より、

$$\begin{aligned}
\text{Tr}[\Delta_s(z)\Delta_{-s}(w)] &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \int \frac{d^2\beta}{\pi} \text{Tr}[D(\alpha)D(\beta)] e^{\frac{1}{2}s|\alpha|^2} e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} e^{-s\frac{1}{2}|\beta|^2} e^{-\beta w^* + \beta^* w} \\
&= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} \int \frac{d^2\beta}{\pi} \pi \delta^2(\alpha) e^{\frac{1}{2}s|\alpha|^2} e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} e^{-s\frac{1}{2}|\beta|^2} e^{-\beta w^* + \beta^* w} \\
&= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} e^{-\alpha(z-w)^* + \alpha^*(z-w)} \\
&= \pi \delta^2(z-w).
\end{aligned} \tag{C.65}$$

これと、(C.35) より、

$$\begin{aligned}
\text{Tr}[AB] &= \int \frac{d^2z}{\pi} \int \frac{d^2w}{\pi} A_s(z) B_{-s}(w) \text{Tr}[\Delta_s(z)\Delta_{-s}(w)] \\
&= \int \frac{d^2z}{\pi} A_s(z) B_{-s}(z) = \int \frac{d^2z}{\pi} A_{-s}(z) B_s(z)
\end{aligned} \tag{C.66}$$

を得る。特に、 $B = \rho$ として、

$$\langle A \rangle \equiv \text{Tr}[\rho A] = \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_s(z) A_{-s}(z) = \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_{-s}(z) A_s(z) \tag{C.67}$$

を得る。

(C.4) より、

$$\begin{aligned}
z^{*n} z^m \Delta_{-s}(z) &= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} D(\alpha, -s) z^{*n} z^m e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \\
&= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} D(\alpha, -s) (-1)^n \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} e^{-\alpha z^* + \alpha^* z} \\
&= \int \frac{d^2\alpha}{\pi} [(-1)^m \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} D(\alpha, -s)] e^{-\alpha z^* + \alpha^* z}.
\end{aligned} \tag{C.68}$$

両辺を z で積分し、(C.32) を用いて、

$$\int \frac{d^2z}{\pi} z^{*n} z^m \Delta_{-s}(z) = \{(a^\dagger)^n a^m\}_s, \tag{C.69}$$

$$\{(a^\dagger)^n a^m\}_s \stackrel{\text{def}}{=} (-1)^m \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} D(\alpha, -s) \Big|_{\alpha=0} \tag{C.70}$$

を得る。(C.35) より、これは、

$$\{ \{(a^\dagger)^n a^m\}_s \}_{-s}(z) = z^{*n} z^m \tag{C.71}$$

を意味する。これと (C.67) より、

$$\langle \{(a^\dagger)^n a^m\}_s \rangle = \int \frac{d^2z}{\pi} \rho_s(z) z^{*n} z^m \tag{C.72}$$

を得る。

ところで、(C.11) より、

$$\begin{aligned}
D(\alpha, -s) &= D(\alpha) e^{-\frac{1}{2}s|\alpha|^2} \\
&= e^{-\frac{1-s}{2}|\alpha|^2} e^{\alpha a^\dagger} e^{-\alpha^* a} = e^{\frac{1-s}{2}} e^{-\alpha^* a} e^{\alpha a^\dagger}
\end{aligned} \tag{C.73}$$

であるから、

$$\begin{aligned}\{(a^\dagger)^n a^m\}_1 &= (-1)^m \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} e^{-\alpha^* a} e^{\alpha a^\dagger} \Big|_{\alpha=0} \\ &= a^m (a^\dagger)^n,\end{aligned}\tag{C.74}$$

$$\begin{aligned}\{(a^\dagger)^n a^m\}_{-1} &= (-1)^m \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} e^{\alpha a^\dagger} e^{-\alpha^* a} \Big|_{\alpha=0} \\ &= (a^\dagger)^n a^m\end{aligned}\tag{C.75}$$

である。よって、

$$\langle (a^\dagger)^n a^m \rangle = \int \frac{d^2 z}{\pi} \rho_{-1}(z) z^{*n} z^m,\tag{C.76}$$

$$\langle a^m (a^\dagger)^n \rangle = \int \frac{d^2 z}{\pi} \rho_1(z) z^{*n} z^m\tag{C.77}$$

である。 $\rho_{-1}(z)$ を P 関数, $\rho_1(z)$ を Q 関数という。また、

$$\begin{aligned}\{(a^\dagger)^n a^m\}_0 &= (-1)^m \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} e^{\alpha a^\dagger - \alpha^* a} \Big|_{\alpha=0} \\ &= \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} (-1)^m \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} (\alpha a^\dagger - \alpha^* a)^k \Big|_{\alpha=0} \\ &= \frac{(-1)^m}{(n+m)!} \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} (\alpha a^\dagger - \alpha^* a)^{n+m} \Big|_{\alpha=0} \\ &= \frac{1}{(n+m)!} \frac{\partial^{n+m}}{\partial \alpha^n \partial \alpha^{*m}} (\alpha a^\dagger + \alpha^* a)^{n+m} \Big|_{\alpha=0}\end{aligned}\tag{C.78}$$

である。例えば、

$$\{a^\dagger a\}_0 = \frac{a^\dagger a + a a^\dagger}{2}\tag{C.79}$$

であり、 $\{(a^\dagger)^n a^m\}_0$ は、 a, a^\dagger について対称である。これは weyl 順序と呼ばれる。また、 $\rho_0(z)$ を Wigner 関数という。

(C.54) から (C.57) は、

$$\rho \rightarrow F = (\text{任意の演算子})\tag{C.80}$$

としても成り立つ。いま、 $s = 1$ とすると、(C.72),(C.54) より、

$$\begin{aligned}([a^\dagger]^n)_1(z) &= (z^*)^n,\tag{C.81} \\ (a^m [a^\dagger]^n)_1(z) &= \left[z + \frac{\partial}{\partial z^*} \right]^m (z^*)^n\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}&= \sum_{r=0}^m {}_m C_r z^{m-r} \frac{\partial^r}{\partial z^{*r}} z^{*n} \\ &= \sum_{r=0}^{\min(n,m)} {}_m C_r z^{m-r} \frac{n!}{(n-r)!} z^{*(n-r)} \\ &= \sum_{r=0}^{\min(n,m)} \frac{m!n!}{r!(m-r)!(n-r)!} z^{m-r} z^{*(n-r)}\end{aligned}\tag{C.82}$$

である。また、(C.55) より、

$$(Fa^n)_1(z) = z^n F_1(z) \quad (\text{C.83})$$

なので、

$$z^{m-r} z^{*(n-r)} = ([a^\dagger]^{n-r} a^{m-r})_1(s) \quad (\text{C.84})$$

である。(C.82),(C.84) より、

$$a^m [a^\dagger]^n = \sum_{r=0}^{\min(n,m)} \frac{m!n!}{r!(m-r)!(n-r)!} [a^\dagger]^{n-r} a^{m-r} \quad (\text{C.85})$$

を得る。

D Bogoliubov 変換

D.1 (8.6),(8.27) の導出

(8.6),(8.27) は

$$\alpha(\theta) = e^{iG(\theta)} \alpha e^{-iG(\theta)} \quad (\text{D.1})$$

の形に書ける。ただし,

$$\alpha = a_i, b_i, a(\mu), b(\mu), \quad (\text{D.2})$$

$$\alpha(\theta) = a_i(\theta), b_i(\theta), a_\theta(\mu), b_\theta(\mu) \quad (\text{D.3})$$

であり,

$$iG(\theta) = \sum_{i=1}^N \theta_i (b_i^\dagger a_i^\dagger - a_i b_i), \quad \int d\mu \theta(\mu) [b^\dagger(\mu) a^\dagger(\mu) - a(\mu) b(\mu)] \quad (\text{D.4})$$

である。(D.1) の θ を $x\theta$ に置き換えたものを x で微分すると,

$$\frac{d}{dx} \alpha(x\theta) = e^{iG(x\theta)} [iG(\theta), \alpha] e^{-iG(x\theta)} \quad (\text{D.5})$$

を得る。 $\alpha = a_i, b_i$ の場合, $[iG(\theta), \alpha]$ は

$$\begin{aligned} \left[\sum_{j=1}^N \theta_j (b_j^\dagger a_j^\dagger - a_j b_j), a_i \right] &= \sum_{j=1}^N \theta_j b_j^\dagger [a_j^\dagger, a_i] \\ &= \sum_{j=1}^N \theta_j b_j^\dagger (-\delta_{ij}) \\ &= -\theta_i b_i^\dagger, \end{aligned} \quad (\text{D.6})$$

$$\begin{aligned} \left[\sum_{j=1}^N \theta_j (b_j^\dagger a_j^\dagger - a_j b_j), b_i \right] &= \sum_{j=1}^N \theta_j b_j^\dagger [b_j^\dagger, b_i] a_j^\dagger \\ &= \sum_{j=1}^N \theta_j (-\delta_{ij}) a_j^\dagger \\ &= -\theta_i a_i^\dagger \end{aligned} \quad (\text{D.7})$$

となる。ただし, 正準交換関係を用いた。この2式を(D.5)に代入して,

$$\frac{d}{dx} a_i(x\theta) = -\theta_i b_i^\dagger(x\theta), \quad (\text{D.8})$$

$$\frac{d}{dx} b_i(x\theta) = -\theta_i a_i^\dagger(x\theta) \quad (\text{D.9})$$

を得る。 $\alpha = a(\mu)$, $b(\mu)$ の場合, $[iG(\theta), \alpha]$ は

$$\begin{aligned} \left[\int d\mu' \theta(\mu') [b^\dagger(\mu') a^\dagger(\mu') - a(\mu') b(\mu')], a(\mu) \right] &= \int d\mu' \theta(\mu') b^\dagger(\mu') [a^\dagger(\mu'), a(\mu)] \\ &= \int d\mu' \theta(\mu') b^\dagger(\mu') [-\delta(\mu - \mu')] \\ &= -\theta(\mu) b^\dagger(\mu), \end{aligned} \quad (\text{D.10})$$

$$\begin{aligned} \left[\int d\mu' \theta(\mu') [b^\dagger(\mu') a^\dagger(\mu') - a(\mu') b(\mu')], b(\mu) \right] &= \int d\mu' \theta(\mu') [b^\dagger(\mu'), b(\mu)] a^\dagger(\mu') \\ &= \int d\mu' \theta(\mu') [-\delta(\mu - \mu')] a^\dagger(\mu') \\ &= -\theta(\mu) a^\dagger(\mu) \end{aligned} \quad (\text{D.11})$$

となる。ただし, 交換関係 (8.25) を用いた。この 2 式を (D.5) に代入して,

$$\frac{d}{dx} a_{x\theta}(\mu) = -\theta(\mu) b_{x\theta}^\dagger(\mu), \quad (\text{D.12})$$

$$\frac{d}{dx} b_{x\theta}(\mu) = -\theta(\mu) a_{x\theta}^\dagger(\mu) \quad (\text{D.13})$$

を得る。

今,

$$a = a_i, a(\mu), \quad b = b_i, b(\mu), \quad (\text{D.14})$$

$$a(\theta) = a_i(\theta), a_\theta(\mu), \quad b(\theta) = b_i(\theta), b_\theta(\mu), \quad (\text{D.15})$$

$$\theta = \theta_i, \theta(\mu) \quad (\text{D.16})$$

とすると, (D.8), (D.9) および (D.12), (D.13) は, まとめて

$$\frac{d}{dx} a(x\theta) = -\theta b^\dagger(x\theta), \quad (\text{D.17})$$

$$\frac{d}{dx} b(x\theta) = -\theta a^\dagger(x\theta) \quad (\text{D.18})$$

と書ける。この 2 式の \dagger より

$$\frac{d}{dx} a^\dagger(x\theta) = -\theta b(x\theta), \quad (\text{D.19})$$

$$\frac{d}{dx} b^\dagger(x\theta) = -\theta a(x\theta) \quad (\text{D.20})$$

を得る。これらを初期条件

$$a^\dagger(0) = a^\dagger, \quad b^\dagger(0) = b^\dagger, \quad a(0) = a, \quad b(0) = b \quad (\text{D.21})$$

の下で解く。(D.17), (D.20) は,

$$\frac{d}{dx} \begin{pmatrix} a(x\theta) \\ b^\dagger(x\theta) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & -\theta \\ -\theta & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a(x\theta) \\ b^\dagger(x\theta) \end{pmatrix} \quad (\text{D.22})$$

と書ける。(D.18), (D.19)はこの式の \dagger に対応する。この式を $x = 0$ から $x = 1$ まで積分し、初期条件(D.21)を用いると、

$$\begin{aligned}
\begin{pmatrix} a(\theta) \\ b^\dagger(\theta) \end{pmatrix} &= \exp \begin{pmatrix} 0 & -\theta \\ -\theta & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b^\dagger \end{pmatrix} \\
&= \left[\sum_{n=0}^{\infty} \frac{\theta^{2n}}{(2n)!} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} - \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\theta^{2n+1}}{(2n+1)!} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \right] \begin{pmatrix} a \\ b^\dagger \end{pmatrix} \\
&= \cosh \theta \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b^\dagger \end{pmatrix} - \sinh \theta \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b^\dagger \end{pmatrix} \\
&= \begin{pmatrix} a \cosh \theta - b^\dagger \sinh \theta \\ b^\dagger \cosh \theta - a \sinh \theta \end{pmatrix} \tag{D.23}
\end{aligned}$$

を得る。この第1成分が(8.2)または(8.29)であり、第2成分の \dagger が(8.4)または(8.30)である。

D.2 (2.130), (8.12)の導出

今、

$$U(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{x(b^\dagger a^\dagger - ab)} = e^{x(S_+ - S_-)} \tag{D.24}$$

を導入する。§ 6.4の議論が、 $\tilde{a} \rightarrow b$ の読み返でそのまま成り立つ。(6.134)すなわち、

$$e^{x(A_z S_z + A_- S_- + A_+ S_+)} = e^{f_+(x) S_+} e^{f_z(x) S_z} e^{f_-(x) S_-} \tag{D.25}$$

$$f_+(x) = \frac{A_+}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)}, \tag{D.26}$$

$$f_z(x) = -2 \ln \left[\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x) \right], \tag{D.27}$$

$$f_-(x) = \frac{A_-}{\phi} \frac{\sinh(\phi x)}{\cosh(\phi x) - \frac{A_z}{2\phi} \sinh(\phi x)}, \tag{D.28}$$

$$\phi = \sqrt{A_z^2/4 - A_- A_+} \tag{D.29}$$

で、

$$A_z = 0, \quad A_+ = 1, \quad A_- = -1 \tag{D.30}$$

として、

$$e^{x(S_+ - S_-)} = e^{S_+ \tanh x} e^{-2S_z \ln \cosh x} e^{-S_- \tanh x} \tag{D.31}$$

を得る。この式は、

$$U(z) = e^{\theta(b^\dagger a^\dagger - ab)} = e^{a^\dagger b^\dagger \tanh \theta} e^{-(aa^\dagger + b^\dagger b) \ln \cosh \theta} e^{-ab \tanh \theta} \tag{D.32}$$

を意味する。

ユニタリー演算子(8.7)は、(D.32)と $[b_i, b_j^\dagger] = \delta_{ij}$ より、

$$e^{\sum_i \theta_i (b_i^\dagger a_i^\dagger - a_i b_i)} = e^{\sum_i a_i^\dagger b_i^\dagger \tanh \theta_i} e^{-\sum_i (a_i a_i^\dagger + b_i^\dagger b_i) \ln \cosh \theta_i} e^{-\sum_i a_i b_i \tanh \theta_i} \tag{D.33}$$

となる。また、ユニタリー演算子 (8.28) については、(D.33) とのアナロジーから

$$\begin{aligned}
& \exp\left(\int d\mu \theta(\mu)[b^\dagger(\mu)a^\dagger(\mu) - a(\mu)b(\mu)]\right) \\
&= \exp\left(\int d\mu a^\dagger(\mu)b^\dagger(\mu) \tanh \theta(\mu)\right) \exp\left(-\int d\mu [a(\mu)a^\dagger(\mu) + b^\dagger(\mu)b(\mu)] \ln \cosh \theta(\mu)\right) \\
&\times \exp\left(-\int d\mu a(\mu)b(\mu) \tanh \theta(\mu)\right) \tag{D.34}
\end{aligned}$$

となることが分かる。

E Campbell-Hausdorff の公式 (C.10) の導出

$U(x)$ を

$$e^{x(A+B)} = U(x)e^{xB} \quad (\text{E.1})$$

で定義する。ただし、 x は実数パラメーターである。これを x で微分すると、

$$e^{x(A+B)}(A+B) = U'(x)e^{xB} + U(x)e^{xB}B \quad (\text{E.2})$$

となる。ここで、

$$' \equiv \frac{d}{dx}$$

である。(E.2) に (E.1) を代入して、

$$\begin{aligned} U(x)e^{xB}(A+B) &= U'(x)e^{xB} + U(x)e^{xB}B, \\ U(x)e^{xB}A &= U'(x)e^{xB}, \\ U'(x) &= U(x)e^{xB}Ae^{-xB} \\ &\equiv U(x)f(x) \end{aligned} \quad (\text{E.3})$$

を得る。ただし、

$$f(x) \stackrel{\text{def}}{=} e^{xB}Ae^{-xB} \quad (\text{E.4})$$

である。(E.3) を積分して

$$U(x) = U(0) + \int_0^x dy_1 U(y_1)f(y_1) \quad (\text{E.5})$$

を得る。(E.1) より

$$U(0) = 1 \quad (\text{E.6})$$

である。(E.5) の右辺の $U(y_1)$ に (E.5) の右辺全体を代入し、この操作を繰り返して、

$$\begin{aligned} U(x) &= 1 + \int_0^x dy_1 U(y_1)f(y_1) \\ &= 1 + \int_0^x dy_1 f(y_1) + \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 U(y_2)f(y_2)f(y_1) \\ &= 1 + \int_0^x dy_1 f(y_1) + \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 f(y_2)f(y_1) + \cdots \\ &= 1 + \sum_{n=1}^{\infty} \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 \cdots \int_0^{y_{n-1}} dy_n f(y_n)f(y_{n-1}) \cdots f(y_1) \end{aligned} \quad (\text{E.7})$$

を得る。

$f(x)$ を求める。(E.4) を x で微分して、

$$\begin{aligned} f'(x) &= e^{xB}BAe^{-xB} - e^{xB}ABe^{-xB} \\ &= e^{xB}[B, A]e^{-xB} \end{aligned} \quad (\text{E.8})$$

を得る。さらに、 x で微分して、

$$\begin{aligned} f''(x) &= e^{xB} B[B, A]e^{-xB} - e^{xB} [B, A] B e^{-xB} \\ &= e^{xB} [B, [B, A]] e^{-xB} \end{aligned} \quad (\text{E.9})$$

となる。もし、

$$[B, [B, A]] = 0 \quad (\text{E.10})$$

であるなら、

$$f''(x) = 0 \quad (\text{E.11})$$

となる。また、(E.4)、(E.8) より、

$$f(0) = A, \quad (\text{E.12})$$

$$f'(0) = [B, A] \quad (\text{E.13})$$

である。この初期条件の下で (E.11) を解いて、

$$f(x) = A - [A, B]x \quad \text{for } [B, [B, A]] = 0 \quad (\text{E.14})$$

を得る。これは、

$$f(x) = \frac{dg(x)}{dx}, \quad (\text{E.15})$$

$$g(x) = Ax - \frac{1}{2}[A, B]x^2 \quad (\text{E.16})$$

とも書ける。 $g(0)$ は、

$$g(0) = 0 \quad (\text{E.17})$$

である。(E.15) を (E.7) に代入して、

$$\begin{aligned} U(x) &= 1 + \sum_{n=1}^{\infty} \int_0^x dy_1 \cdots \int_0^{y_{n-1}} dy_n \frac{dg(y_n)}{dy_n} \cdots \frac{dg(y_1)}{dy_1} \\ &= 1 + \int_0^x dy_1 \frac{dg(y_1)}{dy_1} + \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 \frac{dg(y_2)}{dy_2} \frac{dg(y_1)}{dy_1} + \cdots \\ &= 1 + g(x) + \int_0^x g(y_1) \frac{dg(y_1)}{dy_1} + \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 g(y_2) \frac{dg(y_2)}{dy_2} \frac{dg(y_1)}{dy_1} + \cdots \end{aligned} \quad (\text{E.18})$$

を得る。

今、 a 、 b を、互いに可換

$$[a, b] = 0 \quad (\text{E.19})$$

な演算子として、

$$h(x) = \alpha(x)a + \beta(x)b \quad (\text{E.20})$$

を定義する。(E.19)のために,

$$h^n(x) = \sum_{r=0}^n {}_n C_r \alpha^r(x) \beta^{n-r}(x) a^r b^{n-r} \quad (\text{E.21})$$

となる。このとき,

$$\frac{d}{dx} h^n(x) = n h^{n-1}(x) \frac{dh(x)}{dx} = n \frac{dh(x)}{dx} h^{n-1}(x) \quad (\text{E.22})$$

となることは, c 数関数のときと同様に示せる。今,

$$a = A, \quad b = [A, B] \quad (\text{E.23})$$

選ぶと, もしも,

$$[A, [A, B]] = 0 \quad (\text{E.24})$$

であるなら, (E.19) が成立し, したがって (E.22) が成り立つ。よって, (E.24) のとき,

$$\begin{aligned} g(y_1) \frac{dg(y_1)}{dy_1} &= \frac{d}{dy_1} \left[\frac{1}{2} g^2(y_1) \right], \\ \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 g(y_2) \frac{dg(y_2)}{dy_2} \frac{dg(y_1)}{dy_1} &= \int_0^x dy_1 \int_0^{y_1} dy_2 \frac{d}{dy_2} \left[\frac{1}{2} g^2(y_2) \right] \frac{dg(y_1)}{dy_1} \\ &= \int_0^x dy_1 \frac{1}{2} g^2(y_1) \frac{dg(y_1)}{dy_1} \\ &= \frac{1}{3!} g^3(x) \end{aligned} \quad (\text{E.25})$$

などが成立し, したがって (E.18) は,

$$\begin{aligned} U(x) &= 1 + g(x) + \frac{1}{2!} g^2(x) + \frac{1}{3!} g^3(x) + \cdots \\ &= \exp(g(x)) \end{aligned} \quad (\text{E.26})$$

となる。これを (E.1) に代入して,

$$\begin{aligned} e^{x(A+B)} &= \exp\left(Ax - \frac{1}{2}[A, B]x^2\right) e^{xB} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2}[A, B]x^2\right) e^{xA} e^{xB} \end{aligned} \quad (\text{E.27})$$

を得る。ただし, 第 2 等号で再び (E.24) を用いた。この式で $x = 1$ として,

$$e^{A+B} = e^{-\frac{1}{2}[A, B]} e^A e^B \quad \text{for } [A, [A, B]] = [B, [A, B]] = 0 \quad (\text{E.28})$$

を得る。